

The pL^AT_EX 2_ε Sources

Ken Nakano & Japanese T_EX Development Community

2017/10/28 Patch level 1

Contents

a	plvers.dtx	1
1	バージョンの設定	1
1.1	パッチファイルのロード	1
1.2	起動時に表示するバナー	2
1.3	ハイフネーション関連	3
1.4	latexrelease パッケージへの対応	4
b	plfonts.dtx	6
2	概要	6
2.1	DOCSTRIP プログラムのためのオプション	6
3	コード	7
3.1	準備	7
3.1.1	和文フォント属性	7
3.1.2	長さ変数	8
3.1.3	一時コマンド	8
3.1.4	フォントリスト	9
3.1.5	支柱	10
3.2	コマンド	12
3.3	合成文字	33
3.4	デフォルト設定ファイルの読み込み	36

4	デフォルト設定ファイル	37
4.1	イタリック補正と <code>\xkanjiskip</code>	37
4.2	テキストフォント	39
4.3	プリロードフォント	40
4.4	組版パラメータ	41
5	フォント定義ファイル	42
c	<code>plcore.dtx</code>	44
6	概要	44
7	コード	44
7.1	プリアンブルコマンド	44
7.2	改ページ	45
7.3	改行	46
7.4	オブジェクトの出力順序	48
7.5	トンボ	54
7.6	脚注マクロ	61
7.7	相互参照	65
7.8	疑似タイプ入力	66
7.9	tabbing 環境	67
7.10	用語集の出力	68
7.11	時分を示すカウンタ	68
7.12	tabular 環境	69
8	2013 年以降の新しい <code>pTeX</code> 対応	71
9	<code>e-pTeX</code> での <code>FAM256</code> パッチの利用	73
d	<code>plext.dtx</code>	76
10	概要	76
11	組方向オプションについて	76

12 コード	77
12.1 表組環境	77
12.2 フロートとキャプションの出力位置	82
12.3 段落ボックス環境	86
12.4 作図環境	93
12.5 連数字／漢数字／傍点／下線	94
12.6 参照番号	97
 e pl209.dtx	 98
13 DOCSTRIP 用モジュール	98
14 2.09 互換マクロ	98
15 スタイルファイル	100
 f kinsoku.dtx	 102
16 禁則	102
16.1 半角文字に対する禁則	102
16.2 全角文字に対する禁則	103
17 文字間のスペース	104
17.1 ある英字と前後の漢字の間の制御	104
17.2 ある漢字と前後の英字の間の制御	107
 g jclasses.dtx	 109
18 オプションスイッチ	109
19 オプションの宣言	110
19.1 用紙オプション	111
19.2 サイズオプション	111
19.3 横置きオプション	112
19.4 トンボオプション	112
19.5 面付けオプション	112
19.6 組方向オプション	113

19.7 両面、片面オプション	113
19.8 二段組オプション	113
19.9 表題ページオプション	113
19.10 右左起こしオプション	113
19.11 数式のオプション	113
19.12 参考文献のオプション	114
19.13 日本語ファミリー宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字	114
19.14 ドラフトオプション	115
19.15 オプションの実行	115
20 フォント	115
21 レイアウト	119
21.1 用紙サイズの決定	119
21.2 段落の形	119
21.3 ページレイアウト	120
21.3.1 縦方向のスペース	120
21.3.2 本文領域	121
21.3.3 マージン	126
21.4 脚注	130
21.5 フロート	130
21.5.1 フロートパラメータ	130
21.5.2 フロートオブジェクトの上限値	132
22 改ページ（日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ）	133
23 ページスタイル	135
23.1 マークについて	135
23.2 plain ページスタイル	136
23.3 jpl@in ページスタイル	136
23.4 headnombre ページスタイル	136
23.5 footnombre ページスタイル	137
23.6 headings スタイル	137
23.7 bothstyle スタイル	138
23.8 myheading スタイル	139

24 文書コマンド	140
24.1 表題	140
24.2 概要	145
24.3 章見出し	146
24.3.1 マークコマンド	146
24.3.2 カウンタの定義	146
24.3.3 前付け、本文、後付け	147
24.3.4 ボックスの組み立て	148
24.3.5 part レベル	149
24.3.6 chapter レベル	152
24.3.7 下位レベルの見出し	154
24.3.8 付録	154
24.4 リスト環境	155
24.4.1 enumerate 環境	158
24.4.2 itemize 環境	159
24.4.3 description 環境	160
24.4.4 verse 環境	160
24.4.5 quotation 環境	160
24.4.6 quote 環境	161
24.5 フロート	161
24.5.1 figure 環境	161
24.5.2 table 環境	162
24.6 キャプション	163
24.7 コマンドパラメータの設定	163
24.7.1 array と tabular 環境	163
24.7.2 tabbing 環境	164
24.7.3 minipage 環境	164
24.7.4 framebox 環境	164
24.7.5 equation と eqnarray 環境	164
25 フォントコマンド	164
26 相互参照	166
26.1 目次	166
26.1.1 本文目次	168
26.1.2 図目次と表目次	170
26.2 参考文献	171

26.3 索引	172
26.4 脚注	173
27 今日の日付	173
28 初期設定	174
h jltxdoc.dtx	176
変更履歴	179
索 引	189

File a plvers.dtx

1 バージョンの設定

まず、このディストリビューションでの pL^AT_EX 2_ε の日付とバージョン番号を定義します。また、pL^AT_EX 2_ε が起動されたときに表示される文字列の設定もします。

このバージョンの pL^AT_EX 2_ε は、次のバージョンの L^AT_EX¹をもとにしています。

```
1 < *2ekernel >
2 %\def\fmtname{LaTeX2e}
3 %\edef\fmtversion
4 < /2ekernel >
5 < latexrelease >\edef\latexreleaseversion
6 < platexrelease >\edef\p@known@latexreleaseversion
7 < *2ekernel | latexrelease | platexrelease >
8   {2017/04/15}
9 < /2ekernel | latexrelease | platexrelease >

\fmtname pLATEX 2ε のフォーマットファイル名とバージョンです。
\fmtversion 10 < *plcore >
\ppatch@level 11 \def\fmtname{pLaTeX2e}
12 \def\fmtversion
13 < /plcore >
14 < platexrelease >\edef\platexreleaseversion
15 < *plcore | platexrelease >
16   {2017/10/28}
17 < /plcore | platexrelease >
18 < *plcore >
19 \def\ppatch@level{1}
20 < /plcore >
```

1.1 パッチファイルのロード

次の部分は、pL^AT_EX 2_ε のパッチファイルをロードするためのコードです。バグを修正するためのパッチを配布するかもしれません。

パッチファイルをロードするコードはコメントアウトしました。

```
21 < *plfinal >
22 %\IfFileExists{plpatch.ltx}
23 % {\typeout{*****~J%
24 %      * Applying patch file plpatch.ltx *~J%
25 %      *****}
26 % \def\fmtversion@topatch{unknown}
```

¹L^AT_EX authors: Johannes Braams, David Carlisle, Alan Jeffrey, Leslie Lamport, Frank Mittelbach, Chris Rowley, Rainer Schöpf


```

70      \everyjob{\noexpand\typeout{%
71        \pfmtname\space<\pfmtversion>-pre\ppatch@level\space
72        (based on \expandafter\parse@@BANNER\platexBANNER)}}%
73      \fi\fi
74    }
75 \expandafter
76 \endgroup \platexTMP

```

pL^AT_EX は、独自のハイフネーション・パターンを定義していません。T_EX Live の標準的インストールでは、代わりに L^AT_EX が読み込んでいる Babel パッケージのものが適用されるはずですから、起動時の文字列にも `hyphen.cfg` のバージョンを反映します (Babel パッケージの `hyphen.cfg` でない場合は、何も表示されず空行になるはずです)。

```

77 \begingroup
78   \def\parse@@BANNER\typeout#1\typeout#2#3\relax{#2}
79   \edef\platexTMP{%
80     \the\everyjob\noexpand\typeout{\expandafter\parse@@BANNER\platexBANNER}}%
81   }
82   \everyjob=\expandafter{\platexTMP}%
83   \edef\platexTMP{%
84     \noexpand\let\noexpand\platexBANNER=\noexpand\@undefined
85     \noexpand\everyjob={\the\everyjob}}%
86   }
87   \expandafter
88 \endgroup \platexTMP
89 \plfinal)

```

1.3 ハイフネーション関連

`\l@nohyphenation` L^AT_EX 2_ε 2017-04-15 で、`\verb` の途中でハイフネーションが起きないようにする修正が入りました。この修正には `\l@nohyphenation` が定義済みでなければなりませんが、通常は Babel の定義ファイルによって提供されています。L^AT_EX 2_ε は特殊な状況も想定して `lATEX` で対策しているようですので、pL^AT_EX 2_ε も念のため `plfinal` で対策します (参考 : latex2e svn r1405)。

```

90 \ifx\l@nohyphenation \@undefined
91 \ifx\l@nohyphenation \@undefined
92 \newlanguage\l@nohyphenation
93 \fi

```

`\document@default@language` L^AT_EX 2_ε 2017-04-15 で導入されたパラメータです。更新タイミングのずれの可能性を考慮し、pL^AT_EX 2_ε でも準備しておきます。verbatim 環境の途中で改ページが起きた場合にヘッダでハイフネーションが抑制されないように、`\@outputpage` で `\language` をリセットするときに使われます (参考 : latex2e svn r1407)。

```

94 \ifx\document@default@language \@undefined

```

```

95 \let\document@default@language\m@ne
96 \fi
97 \</plfinal>

```

1.4 latexrelease パッケージへの対応

最後に、latexrelease パッケージへの対応です。

```

\plIncludeInRelease
98 \<*plcore | platexrelease>
99 \def\plIncludeInRelease#1{\kernel@ifnextchar[%
100   {\@plIncludeInRelease{#1}}
101   {\@plIncludeInRelease{#1}[#1]}}
102 \def\@plIncludeInRelease#1[#2]{\@plIncludeInRelease{#2}}
103 \def\@plIncludeInRelease#1#2#3{%
104   \toks@{[#1] #3}%
105   \expandafter\ifx\csname\string#2+\@currname+IIR\endcsname\relax
106     \ifnum\expandafter\@parse@version#1//00\@nil
107       >\expandafter\@parse@version\pfmtversion//00\@nil
108       \GenericInfo{}\{Skipping: \the\toks@\}%
109       \expandafter\expandafter\expandafter\@gobble@plIncludeInRelease
110     \else
111       \GenericInfo{}\{Applying: \the\toks@\}%
112       \expandafter\let\csname\string#2+\@currname+IIR\endcsname\@empty
113     \fi
114   \else
115     \GenericInfo{}\{Already applied: \the\toks@\}%
116     \expandafter\@gobble@plIncludeInRelease
117   \fi
118 }
119 \long\def\@gobble@plIncludeInRelease#1\plEndIncludeInRelease{}
120 \let\plEndIncludeInRelease\relax
121 \</plcore | platexrelease>

```

L^AT_EX 2_ε が提供する latexrelease パッケージが読み込まれていて、かつ pL^AT_EX 2_ε が提供する platexrelease パッケージが読み込まれていない場合は、警告を出します。

```

122 \<*plfinal>
123 \AtBeginDocument{%
124   \@ifpackageloaded{latexrelease}{%
125     \@ifpackageloaded{platexrelease}{}%
126     \@latex@warning@no@line{%
127       Package latexrelease is loaded.\MessageBreak
128       Some patches in pLATEX 2ε core may be overwritten.\MessageBreak
129       Consider using platexrelease.\MessageBreak
130       See latex.pdf for detail}%
131   }%

```

132 }{}%
133 }
134 </plfinal>

File b

plfonts.dtx

2 概要

ここでは、和文書体を NFSS2 のインターフェイスで選択するためのコマンドやマクロについて説明をしています。また、フォント定義ファイルや初期設定ファイルなどの説明もしています。新しいフォント選択コマンドの使い方については、`fntguide.tex` や `usrguide.tex` を参照してください。

第 2 節 この節です。このファイルの概要と DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示しています。

第 3 節 実際のコードの部分です。

第 4 節 プリロードフォントやエラーフォントなどの初期設定について説明をしています。

第 5 節 フォント定義ファイルについて説明をしています。

2.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション

DOCSTRIP プログラムのためのオプションを次に示します。

オプション	意味
plcore	<code>plfonts.ltx</code> を生成します。
trace	<code>ptrace.sty</code> を生成します。
JY1mc	横組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JY1gt	横組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
JT1mc	縦組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JT1gt	縦組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
pldefs	<code>pldefs.ltx</code> を生成します。次の 4 つのオプションを付加することで、プリロードするフォントを選択することができます。デフォルトは 10pt です。
xpt	10pt プリロード
xipt	11pt プリロード
xiipt	12pt プリロード
ori	<code>plfonts.tex</code> に似たプリロード

3 コード

この節で、具体的に NFSS2 を拡張するコマンドやマクロの定義を行なっています。

3.1 準備

NFSS2 を拡張するための準備です。和文フォントの属性を格納するオブジェクトや長さ変数、属性を切替える際の判断材料として使うリストなどを定義しています。

ptrace パッケージは L^AT_EX の tracefnt パッケージに依存します。

```
1 \trace
2 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
3 \ProvidesPackage{ptrace}
4 [2017/08/05 v1.6h Standard pLaTeX package (font tracing)]
5 \RequirePackageWithOptions{tracefnt}
6 \traced
```

3.1.1 和文フォント属性

ここでは、和文フォントの属性を格納するためのオブジェクトについて説明をしています。

`\k@encoding` 和文エンコードを示すオブジェクトです。`\ck@encoding` は、最後に選択された和文エンコード名を示しています。`\cy@encoding` と `\ct@encoding` はそれぞれ、最後に選択された、横組用と縦組用の和文エンコード名を示しています。

```
\ct@encoding 7 \plcore
8 \let\k@encoding\@empty
9 \let\ck@encoding\@empty
10 \def\cy@encoding{JY1}
11 \def\ct@encoding{JT1}
```

`\k@family` 和文書体のファミリーを示すオブジェクトです。

```
12 \let\k@family\@empty
```

`\k@series` 和文書体のシリーズを示すオブジェクトです。

```
13 \let\k@series\@empty
```

`\k@shape` 和文書体のシェイプを示すオブジェクトです。

```
14 \let\k@shape\@empty
```

`\curr@kfontshape` 現在の和文フォント名を示すオブジェクトです。

```
15 \def\curr@kfontshape{\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape}
```

`\rel@fontshape` 関連付けされたフォント名を示すオブジェクトです。

```
16 \def\rel@fontshape{\f@encoding/\f@family/\f@series/\f@shape}
```

3.1.2 長さ変数

ここでは、和文フォントの幅や高さなどを格納する変数について説明をしています。

頭文字が大文字の変数は、ノーマルサイズの書体の大きさを、基準値となります。これらは、`jart10.clo` などの補助クラスファイルで設定されます。

小文字だけからなる変数は、フォントが変更されたときに (`\selectfont` 内で) 更新されます。

`\Cht` `\Cht` は基準となる和文フォントの文字の高さを示します。`\cht` は現在の和文フォントの文字の高さを示します。なお、この“高さ”はベースラインより上の長さです。

```
17 \newdimen\Cht
18 \newdimen\cht
```

`\Cdp` `\Cdp` は基準となる和文フォントの文字の深さを示します。`\cdp` は現在の和文フォントの文字の深さを示します。なお、この“深さ”はベースラインより下の長さです。

```
19 \newdimen\Cdp
20 \newdimen\cdp
```

`\Cwd` `\Cwd` は基準となる和文フォントの文字の幅を示します。`\cwd` は現在の和文フォントの文字の幅を示します。

```
21 \newdimen\Cwd
22 \newdimen\cwd
```

`\Cvs` `\Cvs` は基準となる行送りを示します。ノーマルサイズの `\baselineskip` と同値です。`\cvs` は現在の行送りを示します。

```
23 \newdimen\Cvs
24 \newdimen\cvs
```

`\Chs` `\Chs` は基準となる字送りを示します。`\Cwd` と同値です。`\chs` は現在の字送りを示します。

```
25 \newdimen\Chs
26 \newdimen\chs
```

`\cHT` `\cHT` は、現在のフォントの高さに深さを加えた長さを示します。`\set@fontsize` コマンド (実際は `\size@update`) で更新されます。

```
27 \newdimen\cHT
```

3.1.3 一時コマンド

`\afont` $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 内部の `\do@subst@correction` マクロでは、`\fontname\font` で返される外部フォント名を用いて、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ フォント名を定義しています。したがって、`\font` をそのまま使うと、和文フォント名に欧文の外部フォントが登録されたり、縦組フォ

ント名に横組用の外部フォントが割り付けられたりしますので、`\jfont` か `\tfont` を用いるようにします。`\afont` は、`\font` コマンドの保存用です。

```
28 \let\afont\font
```

3.1.4 フォントリスト

ここでは、フォントのエンコードやファミリの名前を登録するリストについて説明をしています。

pLaTeX 2_ε の NFSS2 では、一つのコマンドで和文か欧文のいずれか、あるいは両方を変更するため、コマンドに指定された引数は何を示すのかを判断しなくてはなりません。この判断材料として、リストを用います。

このときの具体的な判断手順については、エンコード選択コマンドやファミリ選択コマンドなどの定義を参照してください。

`\inlist@` 次のコマンドは、エンコードやファミリのリスト内に第二引数で指定された文字列があるかどうかを調べるマクロです。

```
29 \def\inlist@#1#2{%
30   \def\in@@##1<#1>##2##3\in@@{%
31     \ifx\in@@#2\in@false\else\in@true\fi}%
32   \in@@#2<#1>\in@\in@@}
```

`\enc@elt` `\enc@elt` と `\fam@elt` は、登録されているエンコードに対して、なんらかの処理を逐次的に行ないたいときに使用することができます。

```
33 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}
34 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}
```

`\fenc@list` `\fenc@list` には、`\DeclareFontEncoding` コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。

`\kenc@list` `\kyenc@list` には、`\DeclareYokoKanjiEncoding` コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。`\ktenc@list` には、`\DeclareTateKanjiEncoding` コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにエンコードの登録をするように `\DeclareFontEncoding` を再定義する前に、欧文エンコードが宣言されるため、リストに登録されないからです。

```
35 \def\fenc@list{\enc@elt<OML>\enc@elt<T1>\enc@elt<OT1>\enc@elt<OMS>%
36               \enc@elt<OMX>\enc@elt<TS1>\enc@elt<U>}
37 \let\kenc@list\@empty
38 \let\kyenc@list\@empty
39 \let\ktenc@list\@empty
```

`\kfam@list` `\kfam@list` には、`\DeclareKanjiFamily` コマンドで宣言されたファミリ名が格納されていきます。

`\notkfam@list`

`\notffam@list` File b: plfonts.dtx Date: 2017/09/24 Version v1.6i

`\ffam@list` には、`\DeclareFontFamily` コマンドで宣言されたファミリー名が格納されていきます。

`\notkfam@list` には、和文ファミリーではないと推測されたファミリー名が格納されていきます。このリストは `\fontfamily` コマンドで作成されます。

`\notffam@list` には欧文ファミリーではないと推測されたファミリー名が格納されていきます。このリストは `\fontfamily` コマンドで作成されます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにファミリーの登録をするように、`\DeclareFontFamily` が再定義される前に、このコマンドが使用されるため、リストに登録されないからです。

```
40 \def\kfam@list{\fam@elt<mc>\fam@elt<gt>}
41 \def\ffam@list{\fam@elt<cmr>\fam@elt<cmss>\fam@elt<cmtt>%
42             \fam@elt<cmm>\fam@elt<cmsy>\fam@elt<cmex>}
```

つぎの二つのリストの初期値として、上記の値を用います。これらのファミリー名は、和文でないこと、欧文でないことがはっきりしています。

```
43 \let\notkfam@list\ffam@list
44 \let\notffam@list\kfam@list
```

3.1.5 支柱

行間の調整などに用いる支柱です。支柱のもととなるボックスの大きさは、フォントサイズが変更されるたびに、`\set@fontsize` コマンドによって変化します。

フォントサイズが変更されたときに、`\set@fontsize` コマンドで更新されます。

従来、横組ボックス用の支柱は `\strutbox` で、高さ と 深さが 7 対 3 となっていました。これは `pLATEX` 単体では問題になりませんでしたが、海外製の `LATEX` パッケージを縦組で使用した場合に、意図しない幅や高さが取得されることがありました。この不都合を回避するため、コミュニティ版 `pLATEX` では次の方法をとります。

- `\ystrutbox` (新設): 高さ と 深さが 7 対 3 の横組ボックス用の支柱
- `\tstrutbox`: 高さ と 深さが 5 対 5 の縦組ボックス用の支柱
- `\zstrutbox`: 高さ と 深さが 7 対 3 の縦組ボックス用の支柱
- `\strutbox` (仕様変更): 縦横のディレクションに応じて `\tstrutbox` または `\ystrutbox` に展開されるマクロ

すなわち、従来の `pLATEX` における `\strutbox` と同じ挙動を示すのが、新設された `\ystrutbox` ということになります。

<code>\tstrutbox</code>	<code>\tstrutbox</code> は高さ と 深さが 5 対 5、 <code>\zstrutbox</code> は高さ と 深さが 7 対 3 の支柱ボックスとなります。これらは縦組ボックスの行間の調整などに使います。
<code>\zstrutbox</code>	


```

45 \newbox\tstrutbox
46 \newbox\zstrutbox

```

`\ystrutbox` `\ystrutbox` は高さ と 深さが 7 対 3 の横組ボックス用の支柱です。

```

47 </plcore>
48 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\ystrutbox}
49 <latexrelease>          {Add \ystrutbox}%
50 <*plcore | latexrelease>
51 \newbox\ystrutbox
52 </plcore | latexrelease>
53 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
54 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\ystrutbox}
55 <latexrelease>          {Add \ystrutbox}%
56 <latexrelease>\let\ystrutbox\@undefined
57 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\strutbox` `\strutbox` は縦横両対応です。

```

58 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\strutbox}
59 <latexrelease>          {Add \strutbox}%
60 <*plcore | latexrelease>
61 \def\strutbox{\iftdir\tstrutbox\else\ystrutbox\fi}
62 </plcore | latexrelease>
63 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
64 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\strutbox}
65 <latexrelease>          {Add \strutbox}%
66 <latexrelease>\newbox\strutbox % emulation purpose only
67 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\strut` ディレクションに応じて `\ystrutbox` と `\tstrutbox` を使い分けます。元々このマクロは `ltplain.dtx` で定義されています。

```

68 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\strut}
69 <latexrelease>          {Use \ystrutbox}%
70 <*plcore | latexrelease>
71 \def\strut{\relax
72   \iftdir
73     \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi
74   \else
75     \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
76   \fi}
77 </plcore | latexrelease>
78 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
79 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\strut}
80 <latexrelease>          {Use \ystrutbox}%
81 <latexrelease>\def\strut{\relax
82   \iftdir
83     \ifmmode\copy\strutbox\else\unhcopy\strutbox\fi
84   \else
85     \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi

```

```

86 <latexrelease> \fi}
87 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
88 <*plcore>

\tsstrut
\zstrut 89 \def\tsstrut{\relax\hbox{\tate
90 \ifmmode\copy\tsstrutbox\else\unhcopy\tsstrutbox\fi}}
91 \def\zstrut{\relax\hbox{\tate
92 \ifmmode\copy\zstrutbox\else\unhcopy\zstrutbox\fi}}

\ysstrut
93 </plcore>
94 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\ysstrut}
95 <latexrelease> {Add \ysstrut}%
96 <*plcore | latexrelease>
97 \def\ysstrut{\relax\hbox{\yoko
98 \ifmmode\copy\ysstrutbox\else\unhcopy\ysstrutbox\fi}}
99 </plcore | latexrelease>
100 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
101 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\ysstrut}
102 <latexrelease> {Add \ysstrut}%
103 <latexrelease>\let\ysstrut\@undefined
104 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
105 <*plcore>

```

3.2 コマンド

次のコマンドの定義をしています。

コマンド	意味
<code>\Declare{Font YokoKanji TateKanji}Encoding</code>	エンコードの宣言
<code>\Declare{Yoko Tate}KanjiEncodingDefaults</code>	デフォルトの和文エンコードの宣言
<code>\Declare{Font Kanji}Family</code>	ファミリの宣言
<code>\DeclareKanjiSubstitution</code>	和文の代用フォントの宣言
<code>\DeclareErrorKanjiFont</code>	和文のエラーフォントの宣言
<code>\DeclareFixedFont</code>	フォントの名前の宣言
<code>\reDeclareMathAlphabet</code>	和欧文を同時に切り替えるコマンド宣言
<code>\{Declare Set}RelationFont</code>	従属書体の宣言
<code>\userelfont</code>	欧文書体を従属書体にする
<code>\selectfont</code>	フォントを切り替える
<code>\set@fontsize</code>	フォントサイズの変更
<code>\adjustbaseline</code>	ベースラインシフト量の設定
<code>\{font roman kanji}encoding</code>	エンコードの指定
<code>\{font roman kanji}family</code>	ファミリの指定
<code>\{font roman kanji}series</code>	シリーズの指定
<code>\{font roman kanji}shape</code>	シェイプの指定
<code>\use{font roman kanji}</code>	書体の切り替え
<code>\normalfont</code>	デフォルト値の設定に切り替える
<code>\mcfamily,\gtfamily</code>	和文書体を明朝体、ゴシック体にする
<code>\textunderscore</code>	テキストモードでの下線マクロ

`\DeclareFontEncoding` 欧文エンコードを宣言するためのコマンドです。l^{tf}ssbas.dtx で定義されている
`\DeclareFontEncoding@` ものを、`\fenc@list` を作るように再定義をしています。

```

106 \def\DeclareFontEncoding{%
107   \begingroup
108   \nfss@catcodes
109   \expandafter\endgroup
110   \DeclareFontEncoding@}
111 %
112 \def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{%
113   \expandafter
114   \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
115     \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
116     \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
117                   {\default@family}{\default@series}%
118                   {\default@shape}}%
119     \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd
120     \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
121     \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
122   \else

```

```

123     \@font@info{Redeclaring font encoding #1}%
124 \fi
125 \global\@namedef{T@#1}{#2}%
126 \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}%
127 \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
128 }

```

```

\DeclareKanjiEncoding 和文エンコードの宣言をするコマンドです。
\DeclareYokoKanjiEncoding 129 \def\DeclareKanjiEncoding#1{%
\DeclareYokoKanjiEncoding@ 130 \@latex@warning{%
\DeclareYokoKanjiEncoding@ 131 The \string\DeclareKanjiEncoding\space is obsoleted command. Please use
\DeclareTateKanjiEncoding 132 \MessageBreak
\DeclareTateKanjiEncoding 133 the \string\DeclareTateKanjiEncoding\space for ‘Tate-kumi’ encoding, and
\DeclareTateKanjiEncoding@ 134 \MessageBreak
\DeclareTateKanjiEncoding@ 135 the \string\DeclareYokoKanjiEncoding\space for ‘Yoko-kumi’ encoding.
136 \MessageBreak
137 I treat the ‘#1’ encoding as ‘Yoko-kumi’..}
138 \DeclareYokoKanjiEncoding{#1}%
139 }
140 \def\DeclareYokoKanjiEncoding{%
141 \begingroup
142 \nfss@catcodes
143 \expandafter\endgroup
144 \DeclareYokoKanjiEncoding@}
145 %
146 \def\DeclareYokoKanjiEncoding@#1#2#3{%
147 \expandafter
148 \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
149 \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
150 \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
151 {\default@k@family}{\default@k@series}%
152 {\default@k@shape}}%
153 \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
154 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
155 \xdef\kyenc@list{\kyenc@list\enc@elt<#1>}%
156 \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}%
157 \else
158 \@font@info{Redeclaring KANJI (yoko) font encoding #1}%
159 \fi
160 \global\@namedef{T@#1}{#2}%
161 \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
162 }
163 %
164 \def\DeclareTateKanjiEncoding{%
165 \begingroup
166 \nfss@catcodes
167 \expandafter\endgroup
168 \DeclareTateKanjiEncoding@}
169 %
170 \def\DeclareTateKanjiEncoding@#1#2#3{%

```

```

171 \expandafter
172 \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
173 \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
174 \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
175             {\default@k@family}{\default@k@series}%
176             {\default@k@shape}}%
177 \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
178 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
179 \xdef\ktenc@list{\ktenc@list\enc@elt<#1>%
180 \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>%
181 \else
182 \font@info{Redeclaring KANJI (tate) font encoding #1}%
183 \fi
184 \global\@namedef{T@#1}{#2}%
185 \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
186 }
187 %
188 \@onlypreamble\DeclareKanjiEncoding
189 \@onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding
190 \@onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding@
191 \@onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding
192 \@onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding@

```

`\DeclareKanjiEncodingDefaults` 和文エンコードのデフォルト値を宣言するコマンドです。

```

193 \def\DeclareKanjiEncodingDefaults#1#2{%
194 \ifx\relax#1\else
195 \ifx\default@KT\@empty\else
196 \font@info{Overwriting KANJI encoding scheme text defaults}%
197 \fi
198 \gdef\default@KT{#1}%
199 \fi
200 \ifx\relax#2\else
201 \ifx\default@KM\@empty\else
202 \font@info{Overwriting KANJI encoding scheme math defaults}%
203 \fi
204 \gdef\default@KM{#2}%
205 \fi}
206 \let\default@KT\@empty
207 \let\default@KM\@empty
208 \@onlypreamble\DeclareKanjiEncodingDefaults

```

`\DeclareFontFamily` 欧文ファミリを宣言するためのコマンドです。`\ffam@list` を作るように再定義をします。

```

209 \def\DeclareFontFamily#1#2#3{%
210 \@ifundefined{T@#1}%
211 {\@latex@error{Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha}%
212 {\edef\tmp@item{#2}}%
213 \expandafter\expandafter\expandafter
214 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%

```

```

215 \ifin@ \else
216 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
217 \xdef\ffam@list{\ffam@list\fam@elt<#2>}%
218 \fi
219 \def\reserved@a{#3}%
220 \global
221 \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
222 \ifx \reserved@a\@empty
223 \@empty
224 \else \reserved@a
225 \fi
226 }%
227 }

```

`\DeclareKanjiFamily` 和文ファミリを宣言するためのコマンドです。

```

228 \def\DeclareKanjiFamily#1#2#3{%
229 \@ifundefined{T@#1}%
230 {\@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha}%
231 {\edef\tmp@item{#2}%
232 \expandafter\expandafter\expandafter
233 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%
234 \ifin@ \else
235 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
236 \xdef\kfam@list{\kfam@list\fam@elt<#2>}%
237 \fi
238 \def\reserved@a{#3}%
239 \global
240 \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
241 \ifx \reserved@a\@empty
242 \@empty
243 \else \reserved@a
244 \fi
245 }%
246 }

```

`\DeclareKanjiSubstitution` 目的の和文フォントが見つからなかったときに使うフォントの宣言をするコマンドで
`\DeclareErrorKanjiFont` す。それぞれ、`\DeclareFontSubstitution` と `\DeclareErrorFont` に対応します。

```

247 \def\DeclareKanjiSubstitution#1#2#3#4{%
248 \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
249 \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha
250 \else
251 \begingroup
252 \def\reserved@a{#1}%
253 \toks@{}%
254 \def\cdp@elt##1##2##3##4{%
255 \def\reserved@b{##1}%
256 \ifx\reserved@a\reserved@b
257 \addto@hook\toks@{\cdp@elt{#1}{#2}{#3}{#4}}%
258 \else

```

```

259         \addto@hook\toks@{\c@p@elt{##1}{##2}{##3}{##4}}%
260         \fi}%
261         \c@p@list
262         \xdef\c@p@list{\the\toks@}%
263     \endgroup
264     \global\@namedef{D@#1}{\def\default@family{#2}%
265                             \def\default@series{#3}%
266                             \def\default@shape{#4}}%
267     \fi}
268 %
269 \def\DeclareErrorKanjiFont#1#2#3#4#5{%
270     \xdef\error@kfontshape{%
271         \noexpand\expandafter\noexpand\split@name\noexpand\string
272         \expandafter\noexpand\csname#1/#2/#3/#4/#5\endcsname
273         \noexpand\@nil}%
274     \gdef\default@k@family{#2}%
275     \gdef\default@k@series{#3}%
276     \gdef\default@k@shape{#4}%
277     \global\let\k@family\default@k@family
278     \global\let\k@series\default@k@series
279     \global\let\k@shape\default@k@shape
280     \gdef\font@size{#5}%
281     \gdef\font@baselineskip{#5pt}}
282 %
283 \@onlypreamble\DeclareKanjiSubstitution
284 \@onlypreamble\DeclareErrorKanjiFont

```

`\DeclareFixedFont` フォント名を宣言するコマンドです。

```

285 \def\DeclareFixedFont#1#2#3#4#5#6{%
286     \begingroup
287     \let\afont\font
288     \math@fontsfalse
289     \every@math@size{}%
290     \fontsize{#6}\z@
291     \edef\tmp@item{{#2}}%
292     \expandafter\expandafter\expandafter
293     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
294     \ifin@
295         \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
296         \let\font\jfont
297     \else
298         \expandafter\expandafter\expandafter
299         \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
300         \ifin@
301             \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
302             \let\font\tfont
303         \else
304             \useroman{#2}{#3}{#4}{#5}%
305             \let\font\afont

```

```

306         \fi
307     \fi
308     \global\expandafter\let\expandafter#1\the\font
309     \let\font\afont
310 \endgroup
311 }

```

\reDeclareMathAlphabet 数式モード内で、数式文字用の和欧文フォントを同時に切り替えるコマンドです。

pL^AT_EX 2_ε には、本来の動作モードと 2.09 互換モードの二つがあり、両モードで数式文字を変更するコマンドや動作が異なります。本来の動作モードでは、`\mathrm{...}` のように `\math??` に引数を指定して使います。このときは引数にだけ影響します。2.09 互換モードでは、`\rm` のような二文字コマンドを使います。このコマンドには引数を取らず、書体はグルーピングの範囲で反映されます。二文字コマンドは、ネイティブモードでも使えるようになっていて、動作も 2.09 互換モードのコマンドと同じです。

しかし、内部的には `\math??` という一つのコマンドがすべての動作を受け持ち、`\math??` コマンドや `\??` コマンドから呼び出された状態に応じて、動作を変えています。したがって、欧文フォントと和文フォントの両方を一度に変更する、数式文字変更コマンドを作るとき、それぞれの状態に合った動作で動くようにフォント切り替えコマンドを実行させる必要があります。

使い方

```
usage: \reDeclareMathAlphabet{\mathAA}{\mathBB}{\mathCC}
```

欧文・和文両用の数式文字変更コマンド `\mathAA` を (再) 定義します。欧文用のコマンド `\mathBB` と、和文用の `\mathCC` を (p)L^AT_EX 標準の方法で定義しておいた後、上のように記述します。なお、`{\mathBB}{\mathCC}` の部分については `{\@mathBB}{\@mathCC}` のように @ をつけた記述をしてもかまいません (互換性のため)。上のような命令を発行すると、`\mathAA` が、欧文に対しては `\mathBB`、和文に対しては `\mathCC` の意味を持つようになります。通常は、`\reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}` のように AA=BB として用います。また、`\mathrm` は L^AT_EX kernel において標準のコマンドとして既に定義されているので、この場合は `\mathrm` の再定義となります。native mode での `\rm` のような two letter command (old font command) に対しても同様なことが引き起こります。つまり、数式モードにおいて、新たな `\rm` は、L^AT_EX original の `\rm` と `\mc` (正確に言えば `\mathrm` と `\mathmc` であるが) の意味を合わせ持つようになります。

補足

- `\mathAA` を再定義する他の命令 (`\DeclareSymbolFontAlphabet` を用いるパツ

ページの使用等) との衝突を避けるためには、`\AtBeginDocument` を併用するなどして展開位置の制御を行ってください。

- テキストモード時のエラー表示用に `\mathBB` のみを用いることを除いて、`\mathBB` と `\mathCC` の順は実際には意味を持ちません。和文、欧文の順に定義しても問題はありません。
- 第 2,3 引き数には `{\@mathBB}{\@mathCC}` のように `@` をつけた記述も行えます。ただし、形式は統一してください。判断は第 2 引き数で行っているため、`{\@mathBB}{\mathCC}` のような記述ではうまく動作しません。また、`\makeatletter` な状態で `{\@mathBB }{\@mathCC }` のような `@` と余分なスペースをつけた場合には無限ループを引き起こすことがあります。このような記述は避けるようにして下さい。
- `\reDeclareMathAlphabet` を実行する際には、`\mathBB`, `\mathCC` が定義されている必要はありません。実際に `\mathAA` を用いる際にはこれらの `\mathBB`, `\mathCC` が (p)LaTeX 標準の方法で定義されている必要があります。
- 他の部分で `\mathAA` を全く定義しない場合を除き、`\mathAA` は `\reDeclareMathAlphabet` を実行する以前で (p)LaTeX 標準の方法で定義されている必要があります (`\mathrm` や `\mathbf` の標準的なコマンドは、LaTeX kernel で既に定義されています)。 `\DeclareMathAlphabet` の場合には、`\reDeclareMathAlphabet` よりも前で 1 度 `\mathAA` を定義してあれば、`\reDeclareMathAlphabet` の後ろで再度 `\DeclareMathAlphabet` を用いて `\mathAA` の内部の定義内容を変更することには問題ありません。 `\DeclareSymbolFontAlphabet` の場合、再定義においても `\mathAA` が直接定義されるので、`\mathAA` に対する最後の `\DeclareSymbolFontAlphabet` のさらに後で `\reDeclareMathAlphabet` を実行しなければ有効とはなりません。
- `\documentstyle` の互換モードの場合、`\rm` 等の two letter command (old font command) は、`\reDeclareMathAlphabet` とは関連することのない別個のコマンドとして定義されます。従って、この場合には `\reDeclareMathAlphabet` を用いても `\rm` 等は数式モードにおいて欧文・和文両用のものとはなりません。

```
312 \def\reDeclareMathAlphabet#1#2#3{%
313   \edef#1{\noexpand\protect\expandafter\noexpand\csname%
314     \expandafter@gobble\string#1\space\space\endcsname}%
315   \edef\@tempa{\expandafter@gobble\string#2}%
316   \edef\@tempb{\expandafter@gobble\string#3}%
317   \edef\@tempc{\string @\expandafter@gobbletwo\string#2}%
318   \ifx\@tempc\@tempa%
319     \edef\@tempa{\expandafter@gobbletwo\string#2}%

```

```

320 \edef\@tempb{\expandafter\@gobbletwo\string#3}%
321 \fi
322 \expandafter\edef\csname\expandafter\@gobble\string#1\space\space\endcsname%
323 {\noexpand\DualLang@mathalph@bet%
324 {\expandafter\noexpand\csname\@tempa\space\endcsname}%
325 {\expandafter\noexpand\csname\@tempb\space\endcsname}%
326 }%
327 }
328 \onlypreamble\reDeclareMathAlphabet
329 \def\DualLang@mathalph@bet#1#2{%
330 \relax\ifmmode
331 \ifx\math@bgroup\bgroup% 2e normal style (\mathrm{...})
332 \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
333 \else
334 \ifx\math@bgroup\relax% 2e two letter style (\rm->\mathrm)
335 \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldstyle
336 \else
337 \ifx\math@bgroup\@empty% 2.09 oldlfont style ({\mathrm ...})
338 \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldlfont
339 \else% panic! assume 2e normal style
340 \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
341 \fi
342 \fi
343 \fi
344 \else
345 \let\DualLang@Mfontsw\@firstoftwo
346 \fi
347 \DualLang@Mfontsw{#1}{#2}%
348 }
349 \def\DLMfontsw@standard#1#2#3{#1{#2{#3}}\egroup}
350 \def\DLMfontsw@oldstyle#1#2{#1\relax\@fontswitch\relax{#2}}
351 \def\DLMfontsw@oldlfont#1#2{#1\relax#2\relax}

```

`\DeclareRelationFont` 和文書体に対する従属書体を宣言するコマンドです。従属書体とは、ある和文書体とペアになる欧文書体のことです。主に多書体パッケージ `skfonts` を用いるための仕組みです。

`\DeclareRelationFont` コマンドの最初の 4 つの引数の組が和文書体の属性、その後の 4 つの引数の組が従属書体の属性です。

```

\DeclareRelationFont{JY1}{mc}{m}{n}{OT1}{cmr}{m}{n}
\DeclareRelationFont{JY1}{gt}{m}{n}{OT1}{cmr}{bx}{n}

```

上記の例は、明朝体の従属書体としてコンピュータモダンローマン、ゴシック体の従属書体としてコンピュータモダンボールドを宣言しています。カレント和文書体が `\JY1/mc/m/n` となると、自動的に欧文書体が `\OT1/cmr/m/n` になります。また、和文書体が `\JY1/gt/m/n` になったときは、欧文書体が `\OT1/cmr/bx/n` になります。

和文書体のシェイプ指定を省略するとエンコード／ファミリ／シリーズの組合せ

で従属書体が使われます。このときは、`\selectfont` が呼び出された時点でのシェイプ (`\f@shape`) の値が使われます。

`\DeclareRelationFont` の設定値はグローバルに有効です。`\SetRelationFont` の設定値はローカルに有効です。フォント定義ファイルで宣言をする場合は、`\DeclareRelationFont` を使ってください。

```
352 \def\all@shape{all}%
353 \def\DeclareRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
354   \def\rel@shape{#4}%
355   \ifx\rel@shape\@empty
356     \global
357     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
358       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
359       \romanseries{#7}}%
360   \else
361     \global
362     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
363       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
364       \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
365   \fi
366 }
367 \def\SetRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
368   \def\rel@shape{#4}%
369   \ifx\rel@shape\@empty
370     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
371       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
372       \romanseries{#7}}%
373   \else
374     \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
375       \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
376       \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
377   \fi
378 }
```

`\if@knjcmd` `\if@knjcmd` は欧文書体を従属書体にするかどうかのフラグです。このフラグが真になると、欧文書体に従属書体が使われます。このフラグは `\userelfont` コマンドによって、真となります。そして `\selectfont` 実行後には偽に初期化されます。

```
379 \newif\if@knjcmd
380 \def\userelfont{\@knjcmdtrue}
```

`\selectfont` `\selectfont` のオリジナルからの変更部分は、次の3点です。

- 和文書体を変更する部分
- 従属書体に変更する部分
- 和欧文のベースラインを調整する部分

`\selectfont` コマンドは、まず、和文フォントを切り替えます。

```
381 </plcore>
382 <*plcore | trace>
383 \DeclareRobustCommand\selectfont{%
384   \let\tmp@error@fontshape\error@fontshape
385   \let\error@fontshape\error@kfontshape
386   \edef\tmp@item{\k@encoding}%
387   \expandafter\expandafter\expandafter
388   \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
389   \ifin@
390     \let\cy@encoding\k@encoding
391     \edef\ct@encoding{\csname t@enc@\k@encoding\endcsname}%
392   \else
393     \expandafter\expandafter\expandafter
394     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
395     \ifin@
396       \let\ct@encoding\k@encoding
397       \edef\cy@encoding{\csname y@enc@\k@encoding\endcsname}%
398     \else
399       \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘\k@encoding’ unknown}\@eha
400     \fi
401   \fi
402   \let\font\tfont
403   \let\k@encoding\ct@encoding
404   \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
405   \pickup@font
406   \font@name
407   \let\font\jfont
408   \let\k@encoding\cy@encoding
409   \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
410   \pickup@font
411   \font@name
412   \expandafter\def\expandafter\k@encoding\tmp@item
413   \kenc@update
414   \let\error@fontshape\tmp@error@fontshape
```

次に、`\if@knjcmd` が真の場合、欧文書体を現在の和文書体に関連付けされたフォントに変えます。このフラグは `\userelfont` コマンドによって真となります。このフラグはここで再び、偽に設定されます。

```
415 \if@knjcmd \@knjcmdfalse
416   \expandafter\ifx
417   \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname\relax
418   \expandafter\ifx
419   \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname\relax
420   \else
421     \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname
422   \fi
423 \else
424   \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname
```

```

425 \fi
426 \fi

```

そして、欧文フォントを切り替えます。

```

427 \let\font\afont
428 \xdef\font@name{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
429 \pickup@font
430 \font@name
431 <trace> \ifnum \tracingfonts>\tw@
432 <trace> \font@info{Roman:Switching to \font@name}\fi
433 \enc@update

```

最後に、サイズが変更されていれば、ベースラインの調整などを行ないます。英語版の `\selectfont` では最初に行なっていますが、 $\mathrm{pL}^{\mathrm{E}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X} 2_{\epsilon}$ ではベースラインシフトの調整をするために、書体を確定しなければならないため、一番最後に行ないます

```

434 \ifx\f@linespread\baselinestretch \else
435 \set@fontsize\baselinestretch\f@size\f@baselineskip
436 \fi
437 \size@update}
438 </plcore | trace>
439 <*plcore>

```

`\KanjiEncodingPair` 和文の縦横のエンコーディングはそれぞれ対にして扱うため、セット化します

```

440 \def\KanjiEncodingPair#1#2{\@namedef{t@enc@#1}{#2}\@namedef{y@enc@#2}{#1}}
441 \KanjiEncodingPair{JY1}{JT1}

```

`\set@fontsize` `\fontsize` コマンドの内部形式です。ベースラインの設定と、支柱の設定を行ないます。

```

442 </plcore>
443 <latexrelease | trace> \plIncludeInRelease{2017/04/08}{\set@fontsize}
444 <latexrelease | trace> \Construct \ystrutbox}%
445 <*plcore | latexrelease | trace>
446 \def\set@fontsize#1#2#3{%
447 \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
448 \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
449 \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
450 \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
451 \edef\f@linespread{#1}%
452 \let\baselinestretch\f@linespread
453 \def\size@update{%
454 \baselineskip\f@baselineskip\relax
455 \baselineskip\f@linespread\baselineskip
456 \normalbaselineskip\baselineskip

```

ここで、ベースラインシフトの調整と支柱を組み立てます。

```

457 \adjustbaseline
458 \setbox\ystrutbox\hbox{\yoko
459 \vrule\@width\z@

```

```

460          \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
461      \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
462          \vrule\@width\z@
463          \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
464      \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
465          \vrule\@width\z@
466          \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%

```

フォントサイズとベースラインに関する診断情報を出力します。

```

467 <*trace>
468     \ifnum \tracingfonts>\tw@
469     \ifx\f@linespread\@empty
470         \let\reserved@a\@empty
471     \else
472         \def\reserved@a{\f@linespread x}%
473     \fi
474     \@font@info{Changing size to\space
475         \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
476     \aftergroup\type@restoreinfo
477     \fi
478 </trace>
479     \let\size@update\relax}}
480 </plcore | platexrelease | trace>
481 <platexrelease | trace>\plEndIncludeInRelease
482 <platexrelease | trace>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\set@fontsize}
483 <platexrelease | trace>          {Construct \ystrutbox}%
484 <platexrelease | trace>\def\set@fontsize#1#2#3{%
485 <platexrelease | trace>    \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
486 <platexrelease | trace>    \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
487 <platexrelease | trace>    \@defaultunits\@tempkipa#3pt\relax\@nnil
488 <platexrelease | trace>    \edef\f@baselineskip{\the\@tempkipa}%
489 <platexrelease | trace>    \edef\f@linespread{#1}%
490 <platexrelease | trace>    \let\baselinestretch\f@linespread
491 <platexrelease | trace>    \def\size@update{%
492 <platexrelease | trace>        \baselineskip\f@baselineskip\relax
493 <platexrelease | trace>        \baselineskip\f@linespread\baselineskip
494 <platexrelease | trace>        \normalbaselineskip\baselineskip
495 <platexrelease | trace>        \adjustbaseline
496 <platexrelease | trace>        \setbox\strutbox\hbox{\yoko
497 <platexrelease | trace>            \vrule\@width\z@
498 <platexrelease | trace>            \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
499 <platexrelease | trace>        \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
500 <platexrelease | trace>            \vrule\@width\z@
501 <platexrelease | trace>            \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
502 <platexrelease | trace>        \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
503 <platexrelease | trace>            \vrule\@width\z@
504 <platexrelease | trace>            \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
505 <*trace>
506 <platexrelease | trace>    \ifnum \tracingfonts>\tw@
507 <platexrelease | trace>    \ifx\f@linespread\@empty

```

```

508 <platexrelease | trace>      \let\reserved@a\@empty
509 <platexrelease | trace>      \else
510 <platexrelease | trace>      \def\reserved@a{\f@linespread x}%
511 <platexrelease | trace>      \fi
512 <platexrelease | trace>      \@font@info{Changing size to\space
513 <platexrelease | trace>      \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
514 <platexrelease | trace>      \aftergroup\type@restoreinfo
515 <platexrelease | trace>      \fi
516 </trace>
517 <platexrelease | trace>      \let\size@update\relax}}
518 <platexrelease | trace>\plEndIncludeInRelease
519 <*plcore>

```

`\adjustbaseline` 現在の和文フォントの空白（EUC コード 0xA1A1）の中央に現在の欧文フォントの“/”の中央がくるようにベースラインシフトを設定します。

当初はまずベースラインシフト量をゼロにしていたましたが、`\tbaselineshift`を連続して変更した後に鉤括弧類を使うと余計なアキがでる問題が起こるため、`\tbaselineshift`をゼロクリアする処理を削除しました。

しかし、それではベースラインシフトを調整済みの欧文ボックスと比較してしまうため、計算した値が大きくなってしまいます。そこで、このボックスの中でゼロにするようにしました。また、“/”と比較していたのを“M”にしました。

全角空白（EUC コード 0xA1A1）は JFM で特殊なタイプに分類される可能性があるため、和文書体の基準を「漢」（JIS コード 0x3441）へ変更しました。

```

520 \newbox\adjust@box
521 \newdimen\adjust@dimen

522 </plcore>
523 <platexrelease | trace>\plIncludeInRelease{2017/07/29}{\adjustbaseline}
524 <platexrelease | trace>      {Change zenkaku reference}%
525 <*plcore | platexrelease | trace>
526 \def\adjustbaseline{%

```

和文フォントの基準値を設定します。

```

527 \setbox\adjust@box\hbox{\char\jis"3441}%
528 \cht\ht\adjust@box
529 \cdp\dp\adjust@box
530 \cwg\wd\adjust@box
531 \cvs\normalbaselineskip
532 \chs\cwg
533 \cHT\cht \advance\cHT\cdp

```

基準となる欧文フォントの文字を含んだボックスを作成し、ベースラインシフト量の計算を行ないます。計算式は次のとおりです。

$$\text{ベースラインシフト量} = \{(\text{漢の深さ}) - (\text{M の深さ})\}$$

$$-\frac{(\text{漢の高さ} + \text{深さ}) - (\text{Mの高さ} + \text{深さ})}{2}$$

```

534 \iftdir
535 \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
536 \adjust@dimen\ht\adjust@box
537 \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
538 \advance\adjust@dimen-\cHT
539 \divide\adjust@dimen\tw@
540 \advance\adjust@dimen\cdp
541 \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
542 \tbaselineshift\adjust@dimen
543 <trace> \ifnum \tracingfonts>\tw@
544 <trace> \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}%
545 <trace> \fi
546 \fi}
547 </plcore | platexrelease | trace>
548 <platexrelease | trace>\plEndIncludeInRelease
549 <platexrelease | trace>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\adjustbaseline}
550 <platexrelease | trace> {Change zenkaku reference}%
551 <platexrelease | trace>\def\adjustbaseline{%
552 <platexrelease | trace> \setbox\adjust@box\hbox{\char\eut"A1A1}%
553 <platexrelease | trace> \cht\ht\adjust@box
554 <platexrelease | trace> \cdp\dp\adjust@box
555 <platexrelease | trace> \cud\wd\adjust@box
556 <platexrelease | trace> \cvs\normalbaselineskip
557 <platexrelease | trace> \chs\cud
558 <platexrelease | trace> \cHT\cht \advance\cHT\cdp
559 <platexrelease | trace> \iftdir
560 <platexrelease | trace> \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
561 <platexrelease | trace> \adjust@dimen\ht\adjust@box
562 <platexrelease | trace> \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
563 <platexrelease | trace> \advance\adjust@dimen-\cHT
564 <platexrelease | trace> \divide\adjust@dimen\tw@
565 <platexrelease | trace> \advance\adjust@dimen\cdp
566 <platexrelease | trace> \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
567 <platexrelease | trace> \tbaselineshift\adjust@dimen
568 <*trace>
569 <platexrelease | trace> \ifnum \tracingfonts>\tw@
570 <platexrelease | trace> \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}
571 <platexrelease | trace> \fi
572 </trace>
573 <platexrelease | trace> \fi}
574 <platexrelease | trace>\plEndIncludeInRelease
575 <*plcore>

```

`\romanencoding` 書体のエンコードを指定するコマンドです。`\fontencoding` コマンドは和欧文のど
`\kanjiencoding` ちらかに影響します。`\DeclareKanjiEncoding` で指定されたエンコードは和文エ
`\fontencoding`

ンコードとして、`\DeclareFontEncoding` で指定されたエンコードは欧文エンコードとして認識されます。

`\kanjiencoding` と `\romanencoding` は与えられた引数が、エンコードとして登録されているかどうかだけを確認し、それが和文か欧文かのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、`\kanjiencoding` に欧文エンコードを指定したり、逆に `\romanencoding` に和文エンコードを指定した場合はエラーとなります。

```
576 \DeclareRobustCommand\romanencoding[1]{%
577   \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
578     \@latex@error{Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha
579   \else
580     \edef\f@encoding{#1}%
581     \ifx\cf@encoding\f@encoding
582       \let\enc@update\relax
583     \else
584       \let\enc@update\@enc@update
585     \fi
586   \fi
587 }
588 \DeclareRobustCommand\kanjiencoding[1]{%
589   \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
590     \@latex@error{KANJI Encoding scheme ‘#1’ unknown}\@eha
591   \else
592     \edef\k@encoding{#1}%
593     \ifx\ck@encoding\k@encoding
594       \let\kenc@update\relax
595     \else
596       \let\kenc@update\@kenc@update
597     \fi
598   \fi
599 }
600 \DeclareRobustCommand\fontencoding[1]{%
601   \edef\tmp@item{#1}%
602   \expandafter\expandafter\expandafter
603   \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
604   \ifin@ \kanjiencoding{#1}\else\romanencoding{#1}\fi}
```

`\@kenc@update` `\kanjiencoding` コマンドのコードからもわかるように、`\ck@encoding` と `\k@encoding` が異なる場合、`\kenc@update` コマンドは `\@kenc@update` コマンドと等しくなります。

`\@kenc@update` コマンドは、そのエンコードでのデフォルト値を設定するためのコマンドです。欧文用の `\@enc@update` コマンドでは、606 行目と 607 行目のような代入もしていますが、和文用にはコメントにしてあります。これらは `\DeclareTextCommand` や `\ProvideTextCommand` などでエンコードごとに設定されるコマンドを使うための仕組みです。しかし、和文エンコードに依存するような

コマンドやマクロを作成することは、現時点では、ないと思います。

```
605 \def\@kenc@update{%
606 % \expandafter\let\csname\ck@encoding -cmd\endcsname\@changed@kcmd
607 % \expandafter\let\csname\k@encoding-cmd\endcsname\@current@cmd
608 \default@KT
609 \csname T@\k@encoding\endcsname
610 \csname D@\k@encoding\endcsname
611 \let\kenc@update\relax
612 \let\ck@encoding\k@encoding
613 \edef\tmp@item{\k@encoding}%
614 \expandafter\expandafter\expandafter
615 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
616 \ifin@ \let\cy@encoding\k@encoding
617 \else
618 \expandafter\expandafter\expandafter
619 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
620 \ifin@ \let\ct@encoding\k@encoding
621 \else
622 \latex@error{KANJI Encoding scheme '\k@encoding' unknown}\@eha
623 \fi
624 \fi
625 }
626 \let\kenc@update\relax
```

\@changed@kcmd \@changed@cmd の和文エンコーディングバージョン。

```
627 \def\@changed@kcmd#1#2{%
628 \ifx\protect\@typeset@protect
629 \inmathwarn#1%
630 \expandafter\ifx\csname\ck@encoding\string#1\endcsname\relax
631 \expandafter\ifx\csname ?\string#1\endcsname\relax
632 \expandafter\def\csname ?\string#1\endcsname{%
633 \TextSymbolUnavailable#1%
634 }%
635 \fi
636 \global\expandafter\let
637 \csname\cf@encoding \string#1\expandafter\endcsname
638 \csname ?\string#1\endcsname
639 \fi
640 \csname\ck@encoding\string#1%
641 \expandafter\endcsname
642 \else
643 \noexpand#1%
644 \fi}
```

\@notkfam \fontfamily コマンド内で使用するフラグです。@notkfam フラグは和文ファミリ
\@notffam でなかったことを、@notffam フラグは欧文ファミリでなかったことを示します。

```
645 \newif\if@notkfam
646 \newif\if@notffam
```

647 \newif\if@tempswz

\romanfamily 書体のファミリを指定するコマンドです。

\kanjifamily \kanjifamily と \romanfamily は与えられた引数が、和文あるいは欧文のファミリとして正しいかのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、\kanjifamily に欧文ファミリを指定したり、逆に \romanfamily に和文ファミリを指定した場合は、エラーとなり、代用フォントかエラーフォントが使われます。

648 \DeclareRobustCommand\romanfamily[1]{\edef\f@family{#1}}

649 \DeclareRobustCommand\kanjifamily[1]{\edef\k@family{#1}}

\fontfamily は、指定された値によって、和文ファミリか欧文ファミリ、あるいは両方のファミリを切り替えます。和欧文ともに無効なファミリ名が指定された場合は、和欧文ともに代替書体が使用されます。

引数が \rmfamily のような名前与えられる可能性があるため、まず、これを展開したものを作ります。

また、和文ファミリと欧文ファミリのそれぞれになかったことを示すフラグを偽にセットします。

650 \DeclareRobustCommand\fontfamily[1]{%

651 \edef\tmp@item{#1}}%

652 \@notkfamfalse

653 \@notffamfalse

次に、この引数が \kfam@list に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、\k@family にその値を入れます。

654 \expandafter\expandafter\expandafter

655 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%

656 \ifin@ \edef\k@family{#1}%

そうでないときは、\notkfam@list に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、この引数は和文ファミリではありませんので、\@notkfam フラグを真にして、欧文ファミリのルーチンに移ります。

このとき、\efam@list を調べるのではないことに注意してください。efam@list を調べ、これにないファミリを和文ファミリであるとする、たとえば、欧文ナールファミリが定義されているけれども、和文ナールファミリが未定義の場合、\fontfamily{nar} という指定は、nar が \efam@list にだけ、登録されているため、和文書体をナールにすることができません。

逆に、\kfam@list に登録されていないからといって、\k@family に nar を設定すると、cmr のようなファミリも \k@family に設定される可能性があります。したがって、「欧文でない」を明示的に示す \notkfam@list を見る必要があります。

657 \else

658 \expandafter\expandafter\expandafter

659 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notkfam@list}%

```
660 \ifin@ \@notkfamtrue
```

\notkfam@list に登録されていない場合は、フォント定義ファイルが存在するかどうかを調べます。ファイルが存在する場合は、\k@family を変更します。ファイルが存在しない場合は、\notkfam@list に登録します。

\kenc@list に登録されているエンコードと、指定された和文ファミリの組合せのフォント定義ファイルが存在する場合は、\k@family に指定された値を入れます。

```
661 \else
662   \@tempzwzfalse
663   \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
664   \message{(I search kanjifont definition file:)}%
665   \def\enc@elt<##1>{\message{.}}%
666   \edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
667   \reserved@a{\@tempzwztrue}{\relax}%
668   \kenc@list
669   \message{)}%
670   \if@tempzwz
671     \edef\k@family{#1}%
```

つぎの部分が実行されるのは、和文ファミリとして認識できなかった場合です。この場合は、\@notkfam フラグを真にして、\notkfam@list に登録します。

```
672 \else
673   \@notkfamtrue
674   \xdef\notkfam@list{\notkfam@list\fam@elt<#1>}%
675 \fi
```

\kfam@list と \notkfam@list に登録されているかどうかを調べた \ifin@ を閉じます。

```
676 \fi\fi
```

欧文ファミリの場合も、和文ファミリと同様の方法で確認をします。

```
677 \expandafter\expandafter\expandafter
678 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%
679 \ifin@ \edef\f@family{#1}\else
680   \expandafter\expandafter\expandafter
681   \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notffam@list}%
682   \ifin@ \@notffamtrue \else
683     \@tempzwzfalse
684     \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
685     \message{(I search font definition file:)}%
686     \def\enc@elt<##1>{\message{.}}%
687     \edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
688     \reserved@a{\@tempzwztrue}{\relax}%
689     \fenc@list
690     \message{)}%
691     \if@tempzwz
692       \edef\f@family{#1}%
693   \else
```

```

694      \notffamtrue
695      \xdef\notffam@list{\notffam@list\fam@elt<#1>}%
696      \fi
697      \fi\fi

```

最後に、指定された文字列が、和文ファミリと欧文ファミリのいずれか、あるいは両方として認識されたかどうかを確認します。

どちらとも認識されていない場合は、ファミリの指定ミスですので、代用フォントを使うために、故意に指定された文字列をファミリに入れます。

```

698      \if@notkfam\if@notffam
699          \edef\k@family{#1}\edef\f@family{#1}%
700          \fi\fi}

```

\romanseries 書体のシリーズを指定するコマンドです。**\fontseries** コマンドは和欧文の両方に影響します。

```

\fontseries 701 \DeclareRobustCommand\romanseries[1]{\edef\f@series{#1}}
702 \DeclareRobustCommand\kanjiseriess[1]{\edef\k@series{#1}}
703 \DeclareRobustCommand\fontseries[1]{\kanjiseriess{#1}\romanseriess{#1}}

```

\romanshape 書体のシェイプを指定するコマンドです。**\fontshape** コマンドは和欧文の両方に影響します。

```

\fontshape 704 \DeclareRobustCommand\romanshape[1]{\edef\f@shape{#1}}
705 \DeclareRobustCommand\kanjishape[1]{\edef\k@shape{#1}}
706 \DeclareRobustCommand\fontshape[1]{\kanjishape{#1}\romanshape{#1}}

```

\usekanji 書体属性を一度に指定するコマンドです。和文書体には **\usekanji** を、欧文書体には **\useroman** を指定してください。

\usefont **\usefont** コマンドは、第一引数で指定されるエンコードによって、和文または欧文フォントを切り替えます。

```

707 \def\usekanji#1#2#3#4{%
708     \kanjiencoding{#1}\kanjifamily{#2}\kanjiseriess{#3}\kanjishape{#4}%
709     \selectfont\ignorespaces}
710 \def\useroman#1#2#3#4{%
711     \romanencoding{#1}\romanfamily{#2}\romanseriess{#3}\romanshape{#4}%
712     \selectfont\ignorespaces}
713 \def\usefont#1#2#3#4{%
714     \edef\tmp@item{#1}%
715     \expandafter\expandafter\expandafter
716     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
717     \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
718     \else\useroman{#1}{#2}{#3}{#4}%
719     \fi}

```

\normalfont 書体をデフォルト値にするコマンドです。和文書体もデフォルト値になるように再定義しています。ただし高速化のため、**\usekanji** と **\useroman** を展開し、**\selectfont** を一度しか呼び出さないようにしています。

```

720 \DeclareRobustCommand\normalfont{%
721     \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
722     \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
723     \kanjiserries{\kanjiserriesdefault}%
724     \kanjishape{\kanjishapedefault}%
725     \romanencoding{\encodingdefault}%
726     \romanfamily{\familydefault}%
727     \romanseries{\seriesdefault}%
728     \romanshape{\shapedefault}%
729     \selectfont\ignorespaces}
730 \adjustbaseline
731 \let\reset@font\normalfont

```

`\mcfamily` 和文書体を明朝体にする `\mcfamily` とゴシック体にする `\gtfamily` を定義します。
`\gtfamily` これらは、`\rmfamily` などに対応します。`\mathmc` と `\mathgt` は数式内で用いるときのコマンド名です。

```

732 \DeclareRobustCommand\mcfamily
733     {\not@math@alphabet\mcfamily\mathmc
734     \kanjifamily\mcdefault\selectfont}
735 \DeclareRobustCommand\gtfamily
736     {\not@math@alphabet\gtfamily\mathgt
737     \kanjifamily\gtdefault\selectfont}

```

`\romanprocess@table` 文書の先頭で、和文デフォルトフォントの変更が反映されないのを修正します。

```

\kanjiprocess@table 738 \let\romanprocess@table\process@table
\process@table      739 \def\kanjiprocess@table{%
740     \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
741     \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
742     \kanjiserries{\kanjiserriesdefault}%
743     \kanjishape{\kanjishapedefault}%
744 }
745 \def\process@table{%
746     \romanprocess@table
747     \kanjiprocess@table
748 }
749 \@onlypreamble\romanprocess@table
750 \@onlypreamble\kanjiprocess@table

```

`\textunderscore` このコマンドはテキストモードで指定された `_` の内部コマンドです。縦組での位置を調整するように再定義をします。もとは `ltoutenc.dtx` で定義されています。

なお、`_` を数式モードで使うと `\mathunderscore` が実行されます。

コミュニティ版では縦数式ディレクションでベースライン補正量が変わったのを直しました。あわせて横ディレクションでもベースライン補正に追随するようにしています。

```

751 \</plcore>
752 \<platexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\textunderscore}

```

```

753 <latexrelease> {Baseline shift for \textunderscore}%
754 <*plcore | latexrelease>
755 \DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
756   \leavevmode\kern.06em
757   \raise-\iftdir\ifmdir\ybaselineshift
758     \else\tbaselineshift\fi
759     \else\ybaselineshift\fi
760   \vbox{\hrule\@width.3em}}
761 </plcore | latexrelease>
762 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
763 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\textunderscore}
764 <latexrelease> {Baseline shift for \textunderscore}%
765 <latexrelease>\DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
766   \leavevmode\kern.06em
767   \iftdir\raise-\tbaselineshift\fi
768   \vbox{\hrule\@width.3em}}
769 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
770 <*plcore>

```

3.3 合成文字

LaTeX 2_ε のカーネルのコードをそのまま使うと、pTeX のベースライン補正量がゼロでないときに合成文字がおかしくなっていたため、対策します。

`\g@tlastchart@` T_EX Live 2015 で追加された `\lastnodechar` を利用して、「直前の文字」の符号位置を得るコードです。`\lastnodechar` が未定義の場合は `-1` が返ります。

```

771 </plcore>
772 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\g@tlastchart@}
773 <latexrelease> {Added \g@tlastchart@}%
774 <*plcore | latexrelease>
775 \def\g@tlastchart@#1{#1\ifx\lastnodechar\undefined\m@ne\else\lastnodechar\fi}
776 </plcore | latexrelease>
777 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
778 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\g@tlastchart@}
779 <latexrelease> {Added \g@tlastchart@}%
780 <latexrelease>\let\g@tlastchart@\undefined
781 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\pltx@isletter` 第一引数のマクロ (`#1`) の置換テキストが、カテゴリコード 11 か 12 の文字トークン 1 文字であった場合に第二引数の内容に展開され、そうでない場合は第三引数の内容に展開されます。

```

782 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\pltx@isletter}
783 <latexrelease> {Added \pltx@isletter}%
784 <*plcore | latexrelease>
785 \def\pltx@mark{\pltx@mark@}
786 \let\pltx@scanstop\relax
787 \long\def\pltx@cond#1\fi{%

```

```

788 #1\expandafter\@firstoftwo\else\expandafter\@secondoftwo\fi}
789 \long\def\pltx@isletter#1{%
790   \expandafter\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop}
791 \long\def\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop{%
792   \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi{\@firstoftwo}%
793   {\pltx@isletter@ii\pltx@scanstop#1\pltx@scanstop}{#1\pltx@mark}}
794 \long\def\pltx@isletter@ii#1\pltx@scanstop#1{%
795   \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi%
796   {\pltx@isletter@iii}{\pltx@isletter@iv}}
797 \long\def\pltx@isletter@iii#1\pltx@mark{\@secondoftwo}
798 \long\def\pltx@isletter@iv#1#2#3\pltx@mark{%
799   \pltx@cond\ifx\pltx@mark#3\pltx@mark\fi%
800   \pltx@cond{\ifnum0\ifcat A\noexpand#21\fi\ifcat=\noexpand#21\fi>z@}\fi
801   {\@firstoftwo}{\@secondoftwo}%
802   }{\@secondoftwo}}
803 </plcore | latexrelease>
804 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
805 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@isletter}
806 <latexrelease>           {Added \pltx@isletter}%
807 <latexrelease>\let\pltx@isletter\@undefined
808 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@text@composite` 合成文字の内部命令です。v1.6a で誤って L^AT_EX の定義を上書きしてしまいましたが、v1.6c で外しました。

```

809 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\@text@composite}
810 <latexrelease>           {Wrong fix for non-zero baselineshift}%
811 <latexrelease>\def\@text@composite#1#2#3\@text@composite{%
812 <latexrelease>   \expandafter\@text@composite@x
813 <latexrelease>     \csname\string#1-\string#2\endcsname}
814 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
815 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@text@composite}
816 <latexrelease>           {Wrong fix for non-zero baselineshift}%
817 <latexrelease>\def\@text@composite#1#2#3{%
818 <latexrelease>   \begingroup
819 <latexrelease>     \setbox\z@=\hbox\bgroup%
820 <latexrelease>     \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
821 <latexrelease>     \expandafter\@text@composite@x
822 <latexrelease>     \csname\string#1-\string#2\endcsname}
823 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
824 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@text@composite}
825 <latexrelease>           {Wrong fix for non-zero baselineshift}%
826 <latexrelease>\def\@text@composite#1#2#3\@text@composite{%
827 <latexrelease>   \expandafter\@text@composite@x
828 <latexrelease>     \csname\string#1-\string#2\endcsname}
829 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@text@composite@x` 合成文字の内部命令です。`\g@tlastchart@`と `\pltx@isletter` を使います。

```

830 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/07/01}{\@text@composite@x}
831 <latexrelease>           {Fix for non-zero baselineshift}%

```



```

832 <platexrelease>\def\@text@composite@x#1{%
833 <platexrelease>  \ifx#1\relax
834 <platexrelease>    \expandafter\@secondoftwo
835 <platexrelease>  \else
836 <platexrelease>    \expandafter\@firstoftwo
837 <platexrelease>  \fi
838 <platexrelease>  #1}
839 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
840 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\@text@composite@x}
841 <platexrelease>    {Fix for non-zero baselineshift}%
842 <platexrelease>\def\@text@composite@x#1#2{%
843 <platexrelease>  \ifx#1\relax
844 <platexrelease>    #2%
845 <platexrelease>  \else\pltx@isletter{#1}{#1}{%
846 <platexrelease>    \begingroup
847 <platexrelease>    \setbox\z@\hbox\bgroup%
848 <platexrelease>    \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
849 <platexrelease>    #1%
850 <platexrelease>    \g@tlastchart@\@tempcntb
851 <platexrelease>    \xdef\pltx@composite@temp{\noexpand\@tempcntb=\the\@tempcntb\relax}%
852 <platexrelease>    \aftergroup\pltx@composite@temp
853 <platexrelease>  \egroup
854 <platexrelease>  \ifnum\@tempcntb<\z@
855 <platexrelease>    \@tempdima=\iftdir
856 <platexrelease>      \ifmdir
857 <platexrelease>        \ifmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
858 <platexrelease>      \else
859 <platexrelease>        \tbaselineshift
860 <platexrelease>      \fi
861 <platexrelease>    \else
862 <platexrelease>      \ybaselineshift
863 <platexrelease>    \fi
864 <platexrelease>    \@tempcntb=\@cclvi
865 <platexrelease>  \else\@tempdima=\z@
866 <platexrelease>  \fi
867 <platexrelease>  \ifnum\@tempcntb<\@cclvi
868 <platexrelease>    \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
869 <platexrelease>      \ifodd\xspcode\@tempcntb\else\leavevmode\hbox{}\fi
870 <platexrelease>    \fi\fi
871 <platexrelease>    \begingroup\mathsurround\z@{%
872 <platexrelease>      \ifx\textbaselineshiftfactor\@undefined\else
873 <platexrelease>        \textbaselineshiftfactor\z@\fi
874 <platexrelease>      \box\z@
875 <platexrelease>    $\endgroup%
876 <platexrelease>    \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
877 <platexrelease>      \ifnum\xspcode\@tempcntb<2\hbox{}\fi
878 <platexrelease>    \fi\fi
879 <platexrelease>  \else
880 <platexrelease>    \ifdim\@tempdima=\z@{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@#1}%
881 <platexrelease>    \else\lower\@tempdima\box\z@\fi

```

```

882 <latexrelease> \fi
883 <latexrelease> \endgroup}%
884 <latexrelease> \fi
885 <latexrelease>}
886 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
887 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@text@composite@x}
888 <latexrelease> {Fix for non-zero baselineshift}%
889 <latexrelease>\def\@text@composite@x#1#2{%
890 <latexrelease> \ifx#1\relax
891 <latexrelease> \expandafter\@secondoftwo
892 <latexrelease> \else
893 <latexrelease> \expandafter\@firstoftwo
894 <latexrelease> \fi
895 <latexrelease> #1#2\egroup
896 <latexrelease> \leavevmode
897 <latexrelease> \expandafter\lower
898 <latexrelease> \iftdir
899 <latexrelease> \ifmdir
900 <latexrelease> \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
901 <latexrelease> \else
902 <latexrelease> \tbaselineshift
903 <latexrelease> \fi
904 <latexrelease> \else
905 <latexrelease> \ybaselineshift
906 <latexrelease> \fi
907 <latexrelease> \box\z@
908 <latexrelease> \endgroup}
909 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
910 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@text@composite@x}
911 <latexrelease> {Fix for non-zero baselineshift}%
912 <latexrelease>\def\@text@composite@x#1{%
913 <latexrelease> \ifx#1\relax
914 <latexrelease> \expandafter\@secondoftwo
915 <latexrelease> \else
916 <latexrelease> \expandafter\@firstoftwo
917 <latexrelease> \fi
918 <latexrelease> #1}
919 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
920 <*plcore>

```

3.4 デフォルト設定ファイルの読み込み

最後に、デフォルト設定ファイルである、`pldefs.ltx` を読み込みます。このファイルについての詳細は、第4節を参照してください。T_EX の入力ファイル検索パスに設定されているディレクトリに `pldefs.cfg` ファイルがある場合は、そのファイルを使います。

```

921 \InputIfFileExists{pldefs.cfg}
922 {\typeout{*****~J%

```

```

923          * Local config file pldefs.cfg used^^J%
924          ****}%
925      {\input{pldefs.ltx}}
926 \</plcore>

```

4 デフォルト設定ファイル

ここでは、フォーマットファイルに読み込まれるデフォルト値を設定しています。この節での内容は `pldefs.ltx` に出力されます。このファイルの内容を `plcore.ltx` に含めてもよいのですが、デフォルトの設定を参照しやすいように、別ファイルにしています。 `pldefs.ltx` は `plcore.ltx` から読み込まれます。

プリロードサイズは、DOCSTRIP プログラムのオプションで変更することができます。これ以外の設定を変更したい場合は、`pldefs.ltx` を直接、修正するのではなく、このファイルを `pldefs.cfg` という名前でコピーをして、そのファイルに対して修正を加えるようにしてください。

```

927 \<pldefs>
928 \ProvidesFile{pldefs.ltx}
929     [2017/08/05 v1.6h pLaTeX Kernel (Default settings)]
930 \</pldefs>

```

4.1 イタリック補正と `\xkanjiskip`

`\check@nocorr@` 「あ `\texttt{abc}` い」としたとき、書体の変更を指定された欧文の左側に和欧文間スペースが入らないのを修正します。

コミュニティ版の修正: $\mathrm{pT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のバージョン p3.1.11 以前は、イタリック補正（以下 `\` と記す）と `\xkanjiskip` の挿入が衝突²し

1. 「欧文文字 \rightarrow `\`」の場合には `\` を無視する（つまり後に `\xkanjiskip` 挿入可能）
2. 「和文文字 \rightarrow `\`」の場合にはこの後に `\xkanjiskip` は挿入できない

という挙動になっていました。p3.2（2010 年）の修正で

- `\xkanjiskip` 挿入時にはいかなる場合も `\` を無視する

という挙動に変更されました。 $\mathrm{pL}_{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルの `\check@nocorr@` の修正は、p3.1.11 以前の 2. への対処でしたが、これは「`\texttt{...}`」の左への `\` 挿入」を無効化しているので、`\textit{f}\textup{a}` で本来入るべきイタリック補正が入りませんで

²和文のイタリック補正用 `kern` が、通常の explicit な (`\kern` による) `kern` と同じ扱いを受けていたため。

した。p3.2以降ではpTeXの\xkanjiskip対策が不要になっていますので、コミュニティ版では削除しました。

```

931 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\check@nocorr@}
932 <latexrelease>          {Italic correction before \textt...}%
933 <latexrelease>\def \check@nocorr@ #1#2\nocorr#3\@nil {%
934 <latexrelease>  \let \check@ic1 \maybe@ic
935 <latexrelease>  \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
936 <latexrelease>  \def \reserved@a {\nocorr}%
937 <latexrelease>  \def \reserved@b {#1}%
938 <latexrelease>  \def \reserved@c {#3}%
939 <latexrelease>  \ifx \reserved@a \reserved@b
940 <latexrelease>    \ifx \reserved@c \@empty
941 <latexrelease>      \let \check@ic1 \@empty
942 <latexrelease>    \else
943 <latexrelease>      \let \check@ic1 \@empty
944 <latexrelease>      \let \check@icr \@empty
945 <latexrelease>    \fi
946 <latexrelease>  \else
947 <latexrelease>    \ifx \reserved@c \@empty
948 <latexrelease>      \else
949 <latexrelease>        \let \check@icr \@empty
950 <latexrelease>      \fi
951 <latexrelease>    \fi
952 <latexrelease>}
953 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
954 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\check@nocorr@}
955 <latexrelease>          {Italic correction before \textt...}%
956 <latexrelease>\def \check@nocorr@ #1#2\nocorr#3\@nil {%
957 <latexrelease>  \let \check@ic1 \relax % changed from \maybe@ic
958 <latexrelease>  \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
959 <latexrelease>  \def \reserved@a {\nocorr}%
960 <latexrelease>  \def \reserved@b {#1}%
961 <latexrelease>  \def \reserved@c {#3}%
962 <latexrelease>  \ifx \reserved@a \reserved@b
963 <latexrelease>    \ifx \reserved@c \@empty
964 <latexrelease>      \let \check@ic1 \@empty
965 <latexrelease>    \else
966 <latexrelease>      \let \check@ic1 \@empty
967 <latexrelease>      \let \check@icr \@empty
968 <latexrelease>    \fi
969 <latexrelease>  \else
970 <latexrelease>    \ifx \reserved@c \@empty
971 <latexrelease>      \else
972 <latexrelease>        \let \check@icr \@empty
973 <latexrelease>      \fi
974 <latexrelease>    \fi
975 <latexrelease>}
976 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

4.2 テキストフォント

テキストフォントのための属性やエラー書体などの宣言です。

縦横エンコード共通：

```
977 <*pldefs>
978 \DeclareKanjiEncodingDefaults{}{}
979 \DeclareErrorKanjiFont{JY1}{mc}{m}{n}{10}
```

横組エンコード：

```
980 \DeclareYokoKanjiEncoding{JY1}{}{}
981 \DeclareKanjiSubstitution{JY1}{mc}{m}{n}
```

縦組エンコード：

```
982 \DeclareTateKanjiEncoding{JT1}{}{}
983 \DeclareKanjiSubstitution{JT1}{mc}{m}{n}
```

フォント属性のデフォルト値：

```
984 \newcommand\mcdefault{mc}
985 \newcommand\gtdefault{gt}
986 \newcommand\kanjiencodingdefault{JY1}
987 \newcommand\kanjifamilydefault{\mcdefault}
988 \newcommand\kanjiseriessdefault{\mddefault}
989 \newcommand\kanjishapedefault{\updefault}
```

和文エンコードの指定：

```
990 \kanjiencoding{JY1}
```

フォント定義：これらの具体的な内容は第5節を参照してください。

```
991 \input{jj1mc.fd}
992 \input{jj1gt.fd}
993 \input{jt1mc.fd}
994 \input{jt1gt.fd}
```

フォントを有効にする

```
995 \fontencoding{JT1}\selectfont
996 \fontencoding{JY1}\selectfont
```

`\textmc` テキストファミリを切り替えるためのコマンドです。ltfntcmd.dtx で定義されて
`\textgt` いる `\textrm` などに対応します。

```
997 \DeclareTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
998 \DeclareTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
```

`\em` 従来は `\em`, `\emph` で和文フォントの切り替えは行っていませんでしたが、和文フォ
`\emph` ントも `\gtfamily` に切り替えるようにしました。L^AT_EX <2015/01/01>で追加され
`\eminnershape` た `\eminnershape` も取り入れ、強調コマンドを入れ子にする場合の書体を自由に
再定義できるようになりました。

```
999 </pldefs>
1000 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\eminnershape}{\eminnershape}%
```

```

1001 <*pldefs | latexrelease>
1002 \DeclareRobustCommand\em
1003     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1004         \eminnershapes \else \gtfamily \itshape \fi}%
1005 \def\eminnershapes{\mcfamily \upshape}%
1006 </pldefs | latexrelease>
1007 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
1008 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2015/01/01}{\eminnershapes}{\eminnershapes}%
1009 <latexrelease>\DeclareRobustCommand\em
1010 <latexrelease>     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1011 <latexrelease>         \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
1012 <latexrelease>\def\eminnershapes{\upshape}% defined by LaTeX, but not used by pLaTeX
1013 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
1014 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\eminnershapes}{\eminnershapes}%
1015 <latexrelease>\DeclareRobustCommand\em
1016 <latexrelease>     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1017 <latexrelease>         \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
1018 <latexrelease>\let\eminnershapes\undefined
1019 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
1020 <*pldefs>

```

4.3 プリロードフォント

あらかじめフォーマットファイルにロードされるフォントの宣言です。DOCSTRIP プログラムのオプションでロードされるフォントのサイズを変更することができます。

latex.ins では xpt を指定しています。

```

1021 <*xpt>
1022 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
1023 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
1024 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
1025 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
1026 </xpt>
1027 <*xipt>
1028 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}
1029 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
1030 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}
1031 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
1032 </xipt>
1033 <*xipt>
1034 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1035 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1036 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1037 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1038 </xipt>
1039 <*ori>
1040 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}
1041     {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1042 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}

```

```

1043      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1044 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}
1045      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1046 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}
1047      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1048 \</ori>

```

4.4 組版パラメータ

禁則パラメータや文字間へ挿入するスペースの設定などです。実際の各文字への禁則パラメータおよびスペースの挿入の許可設定などは、`kinsoku.tex`で行なっています。具体的な設定については、`kinsoku.dtx`を参照してください。

```

1049 \InputIfFileExists{kinsoku.tex}%
1050 {\message{Loading kinsoku patterns for japanese.}}
1051 {\errhelp{The configuration for kinsoku is incorrectly installed.^^J%
1052           If you don't understand this error message you need
1053           to seek^^Jexpert advice.}%
1054 \errmessage{OOPS! I can't find any kinsoku patterns for japanese^^J%
1055             \space Think of getting some or the
1056             platex2e setup will never succeed}\@@end}

```

組版パラメータの設定をします。`\kanjiskip`は、漢字と漢字の間に挿入されるグルーです。`\noautospaceing`で、挿入を中止することができます。デフォルトは`\autospaceing`です。

```

1057 \kanjiskip=0pt plus .4pt minus .5pt
1058 \autospaceing

```

`\xkanjiskip`は、和欧文間に自動的に挿入されるグルーです。`\noautoxspaceing`で、挿入を中止することができます。デフォルトは`\autoxspaceing`です。

```

1059 \xkanjiskip=.25zw plus1pt minus1pt
1060 \autoxspaceing

```

`\jcharwidowpenalty`は、パラグラフに対する禁則です。パラグラフの最後の行が1文字だけにならないように調整するために使われます。

```

1061 \jcharwidowpenalty=500

```

\< 最後に、`\inhibitglue`の簡略形を定義します。このコマンドは、和文フォントのメトリック情報から、自動的に挿入されるグルーの挿入を禁止します。

2014年の`pTeX`の`\inhibitglue`のバグ修正に伴い、`\inhibitglue`が垂直モードでは効かなくなりました。`LaTeX`では垂直モードと水平モードの区別が隠されていますので、`pLaTeX`の追加命令である`\<`は段落頭でも効くように修正します。

`\DeclareRobustCommand`を使うと`\protect`の影響で前方の文字に対する`\inhibitglue`が効かなくなるので、`eTeX`の`\protected`が必要です。

```

1062 \</pldefs>
1063 \<pltexrelease>\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\<}

```

```

1064 <latexrelease>                {\inhibitglue in vertical mode}%
1065 <*pldefs | latexrelease>
1066 \ifx\protected\@undefined
1067 \def\<\inhibitglue}
1068 \else
1069 \protected\def\<\ifvmode\leavevmode\fi\inhibitglue}
1070 \fi
1071 </pldefs | latexrelease>
1072 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
1073 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}\<}
1074 <latexrelease>                {\inhibitglue in vertical mode}%
1075 <latexrelease>\def\<\inhibitglue}
1076 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
1077 <*pldefs>

```

ここまでが、pldefs.ltx の内容です。

```
1078 </pldefs>
```

5 フォント定義ファイル

ここでは、フォント定義ファイルの設定をしています。フォント定義ファイルは、 \LaTeX のフォント属性を \TeX フォントに置き換えるためのファイルです。記述方法についての詳細は、fntguide.tex を参照してください。

欧文書体の設定については、cmfonts.fdd や slides.fdd などを参照してください。skfonts.fdd には、写研代用書体を使うためのパッケージとフォント定義が記述されています。

```

1079 <JY1mc>\ProvidesFile{jy1mc.fd}
1080 <JY1gt>\ProvidesFile{jy1gt.fd}
1081 <JT1mc>\ProvidesFile{jt1mc.fd}
1082 <JT1gt>\ProvidesFile{jt1gt.fd}
1083 <JY1mc, JY1gt, JT1mc, JT1gt> [1997/01/24 v1.3 KANJI font defines]

```

横組用、縦組用ともに、明朝体のシリーズ **bx** がゴシック体となるように宣言しています。

```

1084 <*JY1mc>
1085 \DeclareKanjiFamily{JY1}{mc}{}
1086 \DeclareRelationFont{JY1}{mc}{m}{\OT1}{cmr}{m}{}
1087 \DeclareRelationFont{JY1}{mc}{bx}{\OT1}{cmr}{bx}{}
1088 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<5> <6> <7> <8> <9> <10> sgen*min
1089     <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> min10
1090     <-> min10
1091     }{}
1092 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
1093 </JY1mc>
1094 <*JT1mc>
1095 \DeclareKanjiFamily{JT1}{mc}{}

```



```

1096 \DeclareRelationFont{JT1}{mc}{m}{OT1}{cmr}{m}{}
1097 \DeclareRelationFont{JT1}{mc}{bx}{OT1}{cmr}{bx}{}
1098 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<5> <6> <7> <8> <9> <10> sgen*tmin
1099     <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> tmin10
1100     <-> tmin10
1101     }{}
1102 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
1103 </JTlmc>
1104 <*JYlgt>
1105 \DeclareKanjiFamily{JY1}{gt}{}
1106 \DeclareRelationFont{JY1}{gt}{m}{OT1}{cmr}{bx}{}
1107 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<5> <6> <7> <8> <9> <10> sgen*goth
1108     <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> goth10
1109     <-> goth10
1110     }{}
1111 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
1112 </JYlgt>
1113 <*JTlgt>
1114 \DeclareKanjiFamily{JT1}{gt}{}
1115 \DeclareRelationFont{JT1}{gt}{m}{OT1}{cmr}{bx}{}
1116 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<5> <6> <7> <8> <9> <10> sgen*tgoth
1117     <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> tgoth10
1118     <-> tgoth10
1119     }{}
1120 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
1121 </JTlgt>

```

File c

plcore.dtx

6 概要

このファイルでは、つぎの機能の拡張や修正を行っています。詳細は、それぞれの項目の説明を参照してください。

- プリアンブルコマンド
- 改ページ
- 改行
- オブジェクトの出力順序
- トンボ
- 脚注マクロ
- 相互参照
- 疑似タイプ入力
- tabbing 環境
- 用語集の出力
- 時分を示すカウンタ

7 コード

このファイルの内容は、pLaTeX 2_ε のコア部分です。

```
1 \<plcore>
```

7.1 プリアンブルコマンド

文書ファイルが必要とするフォーマットファイルの指定をするコマンドを拡張子、pLaTeX 2_ε フォーマットファイルも認識するようにします。

<code>\NeedsTeXFormat</code>	<code>\NeedsTeXFormats</code> に “pLaTeX2e” を指定すると、“LaTeX2e” フォーマットを必要
<code>\@needsPformat</code>	とする英語版のクラスファイルやパッケージファイルなどが使えなくなってしまう
<code>\@needsPf@rmat</code>	ために再定義します。このコマンドは <code>ltclass.dtx</code> で定義されています。

```

2 \def\NeedsTeXFormat#1{%
3   \def\reserved@a{#1}%
4   \ifx\reserved@a\pfmtname
5     \expandafter\@needsPformat
6   \else
7     \ifx\reserved@a\fmtname
8       \expandafter\expandafter\expandafter\@needsformat
9     \else
10      \@latex@error{This file needs format '\reserved@a'%
11        \MessageBreak but this is '\pfmtname'}{%
12        The current input file will not be processed
13        further,\MessageBreak
14        because it was written for some other flavor of
15        TeX.\MessageBreak\@ehd}%
16      \endinput
17    \fi
18  \fi}
19 %
20 \def\@needsPformat{\@ifnextchar[\@needsPf@rmat{}}
21 %
22 \def\@needsPf@rmat[#1]{%
23   \@ifl@t@r\pfmtversion{#1}{}%
24   {\@latex@warning@no@line
25     {You have requested release '#1' of pLaTeX,\MessageBreak
26       but only release '\pfmtversion' is available}}}%
27 %
28 \@onlypreamble\@needsPformat
29 \@onlypreamble\@needsPf@rmat

```

`\documentstyle` `\documentclass` の代わりに `\documentstyle` が使われると、 \LaTeX 2.09 互換モードに入ります。このとき、オリジナルの \LaTeX では `latex209.def` を読み込みますが、 \pLaTeX 2 ϵ では `pl209.def` を読み込みます。このコマンドは `ltclass.dtx` で定義されています。

```

30 \def\documentstyle{%
31   \makeatletter\input{pl209.def}\makeatother
32   \documentclass}

```

7.2 改ページ

縦組のとき、改ページ後の内容が偶数ページ（右ページ）からはじまるようにします。横組のときには、奇数ページ（右ページ）からはじまります。

`\cleardoublepage` このコマンドによって出力される、白ページのページスタイルを *empty* にし、ヘッダとフッタが入らないようにしています。`ltoutput.dtx` の定義を、縦組、横組に合わせて、定義しなおしたものです。

```

33 \def\cleardoublepage{\clearpage\if@twoside

```

```

34 \ifodd\c@page
35   \iftkdir
36     \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
37     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
38   \fi
39 \else
40   \ifykdir
41     \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
42     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
43   \fi
44 \fi\fi}

```

7.3 改行

`\@gnewline` 日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の行頭禁則処理は、禁則対象文字の直前に、`\prebreakpenalty` で指定されたペナルティの値を挿入することで行なっています。ところが、改行コマンドは負のペナルティの値を挿入することで改行を行ないます。そのために、禁則ペナルティの値が 10000 の文字の直後では、ペナルティの値が相殺され、改行することができません。

```

あいうえお \\
! かきくけこ

```

したがって、`\newline` マクロに `\mbox{}` を入れることによって、`\newline` マクロのペナルティ-10000 と行頭文字のペナルティ10000 が加算されないようにします。`\\` は `\newline` マクロを呼び出しています。

なお、`\newline` マクロは `ltspace.dtx` で定義されています。

$\mathrm{L}_{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ <1996/12/01>で改行マクロが変更され、`\\` が `\newline` を呼び出さなくなったため、変更された改行マクロに対応しました。`\null` の挿入位置は同じです。`ltspace.dtx` の定義を上記に合わせて、定義しなおしました。

日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティによる補足：アスキーによる $\mathrm{pL}_{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ では、行頭禁則文字の直前で `\\` による強制改行を行えるようにするという目的で `\null` を `\@gnewline` マクロ内に挿入していました。しかし、これでは `\\par` と書いた場合に Underfull 警告が出なくなっています (`tests/newline_par.tex` を `latex` と `platex` で処理してみてください)。

もし `\null` の代わりに `\hskip\z@` を挿入すれば、 $\mathrm{L}_{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ と同様に Underfull 警告を出すことができます。ただし、`\null` を挿入した場合と異なり、強制改行後の行頭に JFM グルーが入らなくなります。これはむしろ、奥村さんの `jsclasses` で行頭を天ツキに直しているのと同じですが、 $\mathrm{pL}_{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ としては挙動が変化してしまいますので、現時点では `\null` → `\hskip\z@` への変更を見送っています。

```

45 \def\@gnewline #1{%
46   \ifvmode

```

```

47 \nolnerr
48 \else
49 \unskip \reserved@a {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
50 \ignorespaces
51 \fi}
52 \plcore)

```

`\no@lnbk` 日本語 $T_{E}X$ 開発コミュニティによる追加: さらに、`\linebreak` についても同様の対処をします。L^AT_EX の定義のままではマクロによるペナルティ-10000 と行頭文字のペナルティ10000 が加算されてしまうため、`\hskip\z@relax` を入れておきます。なお、`\linebreak` を発行して行分割が起きた場合、新しい行頭の JFM グルーは消えるという従来の pL^AT_EX の挙動も維持しています。

前回の `\hskip\z@relax` の追加では、`\nolinebreak` の場合に `\kanjiskip` や `\xkanjiskip` が入らない問題が起きてしまいました。そこで、`\penalty\z@relax` に変更しました。これは、明示的な `\penalty` プリミティブ同士の合算は行われないうことを利用しています。

```

53 \plincludeinrelease{2017/07/29}{\no@lnbk}
54 \plcore {Break before prebreakpenalty}%
55 \def\no@lnbk #1[#2]{%
56 \ifvmode
57 \nolnerr
58 \else
59 \@tempskipa\lastskip
60 \unskip
61 \penalty #1\@getpen{#2}%
62 \penalty\z@relax %% added (2017/08/25)
63 \ifdim\@tempskipa>\z@
64 \hskip\@tempskipa
65 \ignorespaces
66 \fi
67 \fi}
68 \plcore \plcore | platexrelease)
69 \plendincludeinrelease
70 \plincludeinrelease{2017/05/05}{\no@lnbk}
71 \plcore {Break before prebreakpenalty}%
72 \def\no@lnbk #1[#2]{%
73 \ifvmode
74 \nolnerr
75 \else
76 \@tempskipa\lastskip
77 \unskip
78 \penalty #1\@getpen{#2}%
79 \hskip\z@relax %% added (2017/05/03)
80 \ifdim\@tempskipa>\z@
81 \hskip\@tempskipa
82 \ignorespaces
83 \fi}

```

```

84 <platexrelease> \fi
85 <platexrelease> \fi}
86 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
87 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@no@lnbk}
88 <platexrelease> {Break before prebreakpenalty}%
89 <platexrelease>\def\@no@lnbk #1[#2]{%
90 <platexrelease> \ifvmode
91 <platexrelease> \@nolnerr
92 <platexrelease> \else
93 <platexrelease> \@tempskipa\lastskip
94 <platexrelease> \unskip
95 <platexrelease> \penalty #1\@getpen{#2}%
96 <platexrelease> \ifdim\@tempskipa>\z@
97 <platexrelease> \hskip\@tempskipa
98 <platexrelease> \ignorespaces
99 <platexrelease> \fi
100 <platexrelease> \fi}
101 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

なお、 \LaTeX 用の命令である `\` と `\linebreak` には上記のような禁則文字への対策を入っていますが、plain \TeX 互換のシンプルな命令である `\break` や `\nobreak` には、対策を行いません。

7.4 オブジェクトの出力順序

オリジナルの \LaTeX は、トップフロート、本文、脚注、ボトムフロートの順番で出力しますが、日本語組版では、トップフロート、本文、ボトムフロート、脚注という順番の方が一般的ですので、このような順番になるよう修正をします。

したがって、文書ファイルによっては \LaTeX の組版結果と異なる場合がありますので、注意をしてください。

2014 年に \LaTeX に `fltrace` パッケージが追加されましたので、その $\text{p}\text{\LaTeX}$ 版として `pfltrace` パッケージを追加します。この `pfltrace` パッケージは \LaTeX の `fltrace` パッケージに依存します。

```

102 <*fltrace>
103 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
104 \ProvidesPackage{pfltrace}
105 [2016/05/20 v1.2e Standard pLaTeX package (float tracing)]
106 \RequirePackageWithOptions{fltrace}
107 </fltrace>

```

`\@makecol` このマクロが組み立てる部分の中心となります。ltoutput.dtx で定義されているものです。

```

108 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@makecol}{\@makecol}%
109 <*plcore | platexrelease>
110 \gdef\@makecol{%

```

```

111 \setbox\@outputbox\box\@cclv%
112 \let\@elt\relax % added on LaTeX (ltoutput.dtx 2003/12/16 v1.2k)
113 \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
114 \global \let \@midlist \empty
115 \@combinefloats

```

オリジナルの \LaTeX は、トップフロート、本文、脚注、ボトムフロートの順番で出力します。一方 $\text{p}\text{\LaTeX}$ は、トップフロート、本文、ボトムフロート、脚注の順番で出力します。ところが、アスキー版のコードは順番を入れ替えるだけでなく、版面全体の垂直位置が（特に縦組で顕著に）ずれてしまっていました。これは補正量 \dp\@outputbox の取得が早すぎたためですので、コミュニティ版 $\text{p}\text{\LaTeX}$ ではこの問題に対処してあります。結果的に、`fnpos` パッケージ (`yafoot`) の `\makeFNbottom` かつ `\makeFNbelow` な状態と完全に等価になりました。

```

116 \let\pltxt@textbottom\@textbottom % save (pLaTeX 2017/02/25)
117 \ifvoid\footins\else % changed (pLaTeX 2017/02/25)
118   \setbox\@outputbox \vbox {%
119     \boxmaxdepth \@maxdepth
120     \unvbox \@outputbox
121     \@textbottom % inserted here (pLaTeX 2017/02/25)
122     \vskip \skip\footins
123     \color@begingroup
124     \normalcolor
125     \footnoterule
126     \unvbox \footins
127     \color@endgroup
128   }%
129   \let\@textbottom\relax % disable temporarily (pLaTeX 2017/02/25)
130 \fi
131 \ifvbox\@kludgeins
132   \@makespecialcolbox
133 \else
134   \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
135 %     \boxmaxdepth \@maxdepth % comment out on LaTeX 1997/12/01
136     \@texttop
137     \dimen@ \dp\@outputbox
138     \unvbox \@outputbox

```

縦組の際に \@outputbox の内容が空のボックスだけの場合に、 \wd\@outputbox が 0pt になってしまい、結果としてフッタの位置がくるってしまっていた。0 の \hskip を発生させると \wd\@outputbox の値が期待したものとなるので、縦組の場合はその方法で対処する。

ただし、0 の \hskip を発生させるとき、水平モードに入ってしまうと、たとえば `longtable` パッケージを使用して表組途中で改ページするときに `\par -> {\vskip}` の無限ループが起きてしまいます。そこで、 \vbox の中で発生させます。

```

139   \iftdir\vbox{\hskip\z@}\fi
140   \vskip -\dimen@

```

```

141      \@textbottom
142    }%
143  \fi
144  \let\@textbottom\pltx@textbottom % restore (pLaTeX 2017/02/25)
145  \global \maxdepth \@maxdepth
146 }
147 \</plcore | platexrelease>
148 \<platexrelease>\plEndIncludeInRelease
149 \<platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\@makecol}{\@makecol}%
150 \<platexrelease>\gdef\@makecol{%
151 \<platexrelease>  \setbox\@outputbox\box\@cclv%
152 \<platexrelease>  \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
153 \<platexrelease>  \global \let \@midlist \@empty
154 \<platexrelease>  \@combinefloats
155 \<platexrelease>  \ifvbox\@kludgeins
156 \<platexrelease>    \@makespecialcolbox
157 \<platexrelease>  \else
158 \<platexrelease>    \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
159 \<platexrelease>%      \boxmaxdepth \@maxdepth    % comment out on LaTeX 1997/12/01
160 \<platexrelease>      \@texttop
161 \<platexrelease>      \dimen@ \dp\@outputbox
162 \<platexrelease>      \unvbox \@outputbox
163 \<platexrelease>      \iftdir\vbox{\hskip\z@}\fi
164 \<platexrelease>      \vskip -\dimen@
165 \<platexrelease>      \@textbottom
166 \<platexrelease>      \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
167 \<platexrelease>        \vskip \skip\footins
168 \<platexrelease>        \color@begingroup
169 \<platexrelease>          \normalcolor
170 \<platexrelease>          \footnoterule
171 \<platexrelease>          \unvbox \footins
172 \<platexrelease>        \color@endgroup
173 \<platexrelease>      \fi
174 \<platexrelease>    }%
175 \<platexrelease>  \fi
176 \<platexrelease>  \global \maxdepth \@maxdepth
177 \<platexrelease>}
178 \<platexrelease>\plEndIncludeInRelease
179 \<platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@makecol}{\@makecol}%
180 \<platexrelease>\gdef\@makecol{%
181 \<platexrelease>  \setbox\@outputbox\box\@cclv%
182 \<platexrelease>  \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
183 \<platexrelease>  \global \let \@midlist \@empty
184 \<platexrelease>  \@combinefloats
185 \<platexrelease>  \ifvbox\@kludgeins
186 \<platexrelease>    \@makespecialcolbox
187 \<platexrelease>  \else
188 \<platexrelease>    \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
189 \<platexrelease>%      \boxmaxdepth \@maxdepth    % comment out on LaTeX 1997/12/01
190 \<platexrelease>      \@texttop

```



```

191 <latexrelease> \dimen@ \dp\@outputbox
192 <latexrelease> \unvbox \@outputbox
193 <latexrelease> \iftdir\hskip\z@\fi
194 <latexrelease> \vskip -\dimen@
195 <latexrelease> \@textbottom
196 <latexrelease> \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
197 <latexrelease> \vskip \skip\footins
198 <latexrelease> \color@begingroup
199 <latexrelease> \normalcolor
200 <latexrelease> \footnoterule
201 <latexrelease> \unvbox \footins
202 <latexrelease> \color@endgroup
203 <latexrelease> \fi
204 <latexrelease> }%
205 <latexrelease> \fi
206 <latexrelease> \global \maxdepth \@maxdepth
207 <latexrelease> }
208 <latexrelease> \plEndIncludeInRelease
209 <latexrelease> \plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@makecol}{\@makecol}%
210 <latexrelease> \gdef\@makecol{%
211 <latexrelease> \setbox\@outputbox\box\@cclv%
212 <latexrelease> \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
213 <latexrelease> \global \let \@midlist \@empty
214 <latexrelease> \@combinefloats
215 <latexrelease> \ifvbox\@kludgeins
216 <latexrelease> \@makespecialcolbox
217 <latexrelease> \else
218 <latexrelease> \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
219 <latexrelease> % \boxmaxdepth \@maxdepth % comment out on LaTeX 1997/12/01
220 <latexrelease> \@texttop
221 <latexrelease> \dimen@ \dp\@outputbox
222 <latexrelease> \unvbox \@outputbox
223 <latexrelease> \iftdir\hskip\z@
224 <latexrelease> \else\vskip -\dimen@\fi
225 <latexrelease> \@textbottom
226 <latexrelease> \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
227 <latexrelease> \vskip \skip\footins
228 <latexrelease> \color@begingroup
229 <latexrelease> \normalcolor
230 <latexrelease> \footnoterule
231 <latexrelease> \unvbox \footins
232 <latexrelease> \color@endgroup
233 <latexrelease> \fi
234 <latexrelease> }%
235 <latexrelease> \fi
236 <latexrelease> \global \maxdepth \@maxdepth
237 <latexrelease> }
238 <latexrelease> \plEndIncludeInRelease

```

\@makespecialcolbox 本文（あるいはボトムフロート）と脚注の間に \@textbottom を入れたいので、

`\@makespecialcolbox` コマンドも修正をします。やはり、`ltoutput.dtx` で定義されているものです。

このマクロは、`\enlargethispage` が使われたときに、`\@makecol` マクロから呼び出されます。

日本語 $T_E X$ 開発コミュニティによる補足 (2017/02/25): 2016/11/29 以前の $pL^A_T E X$ では、`\@makecol` はボトムフロートを挿入した後、すぐに `\@kludgeins` が空かどうか判定し

- 空の場合は、残りすべての処理を `\@makespecialcolbox` に任せる
- 空でない場合は、`\@makecol` 自身で残りすべての処理を行う

としていました。しかし 2017/04/08 以降の $pL^A_T E X$ では、`\@makecol` はボトムフロートと脚注を挿入してから `\@kludgeins` の判定に移るようにしています。したがって、新しい `\@makecol` から以下に記す `\@makespecialcolbox` が呼び出される場合は、`\ifvoid\footins` (二箇所) の判定は常に真となるはずですが、要するに「つぎの部分が $pL^A_T E X$ 用の修正です。」という二箇所のコードは実質的に不要となりました。

しかし、だからといって消してしまうと、古い $pL^A_T E X$ の `\@makecol` をベースに作られた外部パッケージから `\@makespecialcolbox` が呼び出される場合に脚注が消滅するおそれがあります。このため、`\@makespecialcolbox` は従来のコードのまま維持してあります (害はありません)。

```
239 <*plcore | fltrace>
240 \gdef\@makespecialcolbox{%
241 <*trace>
242   \fl@trace{krudgeins ht \the\ht\@kludgeins\space
243             dp \the\dp\@kludgeins\space
244             wd \the\wd\@kludgeins}%
245 </trace>
246   \setbox\@outputbox \vbox {%
247     \texttop
248     \dimen@ \dp\@outputbox
249     \unvbox\@outputbox
250     \vskip-\dimen@
251   }%
252   \@tempdima \@colht
253   \ifdim \wd\@kludgeins>\z@
254     \advance \@tempdima -\ht\@outputbox
255     \advance \@tempdima \pageshrink
256 <*trace>
257   \fl@trace {Natural ht of col: \the\ht\@outputbox}%
258   \fl@trace {\string \@colht: \the\@colht}%
259   \fl@trace {Pageshrink added: \the\pageshrink}%
260   \fl@trace {Hence, space added: \the\@tempdima}%
```

```

261 </trace>
262   \setbox\@outputbox \vbox to \@colht {%
263 %       \boxmaxdepth \maxdepth
264       \unvbox\@outputbox
265       \vskip \@tempdima
266       \@textbottom

```

つぎの部分が pL^AT_EX 用の修正です。

```

267   \ifvoid\footins\else % for pLATEX
268   \vskip\skip\footins
269   \color@begingroup
270       \normalcolor
271       \footnoterule
272       \unvbox \footins
273   \color@endgroup
274   \fi
275   }%
276   \else
277   \advance \@tempdima -\ht\@kludgeins
278 <*trace>
279   \fl@trace {Natural ht of col: \the\ht\@outputbox}%
280   \fl@trace {\string \@colht: \the\@colht}%
281   \fl@trace {Extra size added: -\the \ht \@kludgeins}%
282   \fl@trace {Hence, height of inner box: \the\@tempdima}%
283   \fl@trace {Max? pageshrink available: \the\pageshrink}%
284 </trace>
285   \setbox \@outputbox \vbox to \@colht {%
286       \vbox to \@tempdima {%
287       \unvbox\@outputbox
288       \@textbottom

```

つぎの部分が pL^AT_EX 用の修正です。脚注があれば、ここでそれを出します。

```

289   \ifvoid\footins\else % for pLATEX
290   \vskip\skip\footins
291   \color@begingroup
292       \normalcolor
293       \footnoterule
294       \unvbox \footins
295   \color@endgroup
296   \fi
297   }\vss}%
298   \fi
299   {\setbox \@tempboxa \box \@kludgeins}%
300 <*trace>
301   \fl@trace {kludgeins box made void}%
302 </trace>
303 }
304 </plcore | fltrace>

```

`\@reinserts` このマクロは、`\@specialoutput` マクロから呼び出されます。ボックス `footins` が

組み立てられたモードに合わせて縦モードか横モードで `\unvbox` をします。

```
305 <*plcore>
306 \def\@reinserts{%
307   \ifvoid\footins\else\insert\footins{%
308     \iftbox\footins\tate\else\yoko\fi
309     \unvbox\footins}\fi
310   \ifvbox\@kludgeins\insert\@kludgeins{\unvbox\@kludgeins}\fi
311 }
```

7.5 トンボ

ここではトンボを出力するためのマクロを定義しています。

`\iftombow` `\iftombow` はトンボを出力するかどうか、`\iftombowdate` は DVI を作成した日付をトンボの脇に出力するかどうかを示すために用います。

```
312 \newif\iftombow \tombowfalse
313 \newif\iftombowdate \tombowdatetrue
```

`\@tombowwidth` `\@tombowwidth` には、トンボ用罫線の太さを指定します。デフォルトは 0.1 ポイントです。この値を変更し、`\maketombowbox` コマンドを実行することにより、トンボの罫線太さを変更して出力することができます。通常の使い方では、トンボの罫線を変更する必要はありません。DVI をフィルムに面付け出力するとき、トンボをつけずに位置はそのままにする必要があるときに、この太さをゼロポイントにします。

```
314 \newdimen\@tombowwidth
315 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}
```

トンボ用の罫線を定義します。

`\@TL` `\@TL` と `\@Tl` はページ上部の左側、`\@TC` はページ上部の中央、`\@TR` と `\@Tr` はページ上部の左側のトンボとなるボックスです。

```
\@TC 316 \newbox\@TL\newbox\@Tl
317 \newbox\@TC
\@TR 318 \newbox\@TR\newbox\@Tr
\@Tr
```

`\@BL` `\@BL` と `\@Bl` はページ下部の左側、`\@BC` はページ下部の中央、`\@BR` と `\@Br` はページ下部の左側のトンボとなるボックスです。

```
\@BC 319 \newbox\@BL\newbox\@Bl
320 \newbox\@BC
\@BR 321 \newbox\@BR\newbox\@Br
\@Br
```

`\@CL` `\@CL` はページ左側の中央、`\@CR` はページ右側の中央のトンボとなるボックスです。

```
\@CR 322 \newbox\@CL
323 \newbox\@CR
```

`\@bannertoken` `\@bannertoken` トークンは、トンボの横に出力する文字列を入れます。デフォルト
`\@bannerfont` では何も出力しません。`\@bannerfont` フォントは、その文字列を出力するための
フォントです。9 ポイントのタイプライタ体としています。

```
324 \font\@bannerfont=cmtt9
325 \newtoks\@bannertoken
326 \@bannertoken{}
```

`\maketombowbox` `\maketombow` コマンドは、トンボとなるボックスを作るために用います。このコマ
ンドは、トンボとなるボックスを作るだけで、それらのボックスを出力するのでは
ないことに注意をしてください。

```
327 \def\maketombowbox{%
328   \setbox\@TL\hbox to\z@{\yoko\hss
329     \vrule width13mm height\@tombowwidth depth\z@
330     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@

331     \iftombowdate
332       \raise4pt\hbox to\z@{\hskip5mm\@bannerfont\the\@bannertoken\hss}%
333     \fi}%
334   \setbox\@Tl\hbox to\z@{\yoko\hss
335     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
336     \vrule height13mm width\@tombowwidth depth\z@}%
337   \setbox\@TC\hbox{\yoko
338     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
339     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
340     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@}%
341   \setbox\@TR\hbox to\z@{\yoko
342     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
343     \vrule width13mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
344   \setbox\@Tr\hbox to\z@{\yoko
345     \vrule height13mm width\@tombowwidth depth\z@
346     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
347 %
348   \setbox\@BL\hbox to\z@{\yoko\hss
349     \vrule width13mm depth\@tombowwidth height\z@
350     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@}%
351   \setbox\@Bl\hbox to\z@{\yoko\hss
352     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
353     \vrule depth13mm width\@tombowwidth height\z@}%
354   \setbox\@BC\hbox{\yoko
355     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
356     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
357     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@}%
358   \setbox\@BR\hbox to\z@{\yoko
359     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
360     \vrule width13mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
361   \setbox\@Br\hbox to\z@{\yoko
362     \vrule depth13mm width\@tombowwidth height\z@
363     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
}
```

```

364 %
365 \setbox\@CL\hbox to\z@\{ \yoko\hss
366 \vrule width10mm height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth
367 \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth}%
368 \setbox\@CR\hbox to\z@\{ \yoko
369 \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth
370 \vrule height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth width10mm\hss}%
371 }

```

\@outputtombow \@outputtombow コマンドは、トンボを出力するのに用います。

```

372 </plcore>
373 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@outputtombow}{\@outputtombow}%
374 <*plcore | latexrelease>
375 \def\@outputtombow{%
376 \iftombow
377 \vbox to\z@\{ \kern-13mm\relax
378 \boxmaxdepth\maxdimen%% Added (Apr 1, 2016)
379 \moveleft3mm\vbox to\@paperheight{%
380 \hbox to\@paperwidth{\hskip3mm\relax
381 \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip3mm}%
382 \kern-10mm
383 \hbox to\@paperwidth{\copy\@TL\hfill\copy\@Tr}%
384 \vfill
385 \hbox to\@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
386 \vfill
387 \hbox to\@paperwidth{\copy\@Bl\hfill\copy\@Br}%
388 \kern-10mm
389 \hbox to\@paperwidth{\hskip3mm\relax
390 \copy\@BL\hfill\copy\@BC\hfill\copy\@BR\hskip3mm}%
391 }\vss
392 }%
393 \fi
394 }
395 </plcore | latexrelease>
396 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
397 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@outputtombow}{\@outputtombow}%
398 <latexrelease>\def\@outputtombow{%
399 <latexrelease> \iftombow
400 <latexrelease> \vbox to\z@\{ \kern-13mm\relax
401 <latexrelease> \moveleft3mm\vbox to\@paperheight{%
402 <latexrelease> \hbox to\@paperwidth{\hskip3mm\relax
403 <latexrelease> \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip3mm}%
404 <latexrelease> \kern-10mm
405 <latexrelease> \hbox to\@paperwidth{\copy\@TL\hfill\copy\@Tr}%
406 <latexrelease> \vfill
407 <latexrelease> \hbox to\@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
408 <latexrelease> \vfill
409 <latexrelease> \hbox to\@paperwidth{\copy\@Bl\hfill\copy\@Br}%
410 <latexrelease> \kern-10mm

```

```

411 <latexrelease> \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
412 <latexrelease> \copy\@BL\hfill\copy\@BC\hfill\copy\@BR\hskip3mm}%
413 <latexrelease> }\vss
414 <latexrelease> }%
415 <latexrelease> \fi
416 <latexrelease>}
417 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
418 <*plcore>

```

`\@@paperheight` `\@@pageheight` は、用紙の縦の長さにトンボの長さを加えた長さになります。
`\@@paperwidth` `\@@pagewidth` は、用紙の横の長さにトンボの長さを加えた長さになります。
`\@@topmargin` `\@@topmargin` は、現在のトップマージンに 1 インチ加えた長さになります。

```

419 \newdimen\@@paperheight
420 \newdimen\@@paperwidth
421 \newdimen\@@topmargin

```

`\@shipoutsetup` `\@outputpage` 内に挿入したので削除しました。

`\@outputpage` `\textwidth` と `\textheight` の交換は、`\@shipoutsetup` 内では行ないません。な
 ぜなら、`\@shipoutsetup` マクロが実行されるときは、`\shipout` される vbox の中
 であり、このときは横組モードですので、つねに `\iftdir` は偽と判断され、縦と横
 のサイズを交換できないからです。

なお、この変更をローカルなものにするために、`\begingroup` と `\endgroup` で
 囲みます。

```

422 </plcore>
423 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@outputpage}
424 <latexrelease> {Reset language for hyphenation}%
425 <*plcore| latexrelease>
426 \def\@outputpage{%
427 \begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup
428 \iftdir
429 \dimen\z@\textwidth \textwidth\textheight \textheight\dimen\z@
430 \fi
431 \let \protect \noexpand

```

$\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$ 2017-04-15 では `verbatim` 環境内でハイフネーションが起きないように修
 正されましたが、`verbatim` 環境の途中で改ページが起きた場合にヘッダでハイフ
 ネーションが抑制されるのは正しくないので、`\language` を `\begin{document}` で
 の値にリセットします（参考：`latex2e svn r1407`）。プリアンブルで特別に設定さ
 れればその値、設定されなければ 0 です（万が一 `\document` の定義が古い場合³は
 -1 になりますが、これは 0 と同じはたらきをするので問題は起きません）。

```

432 \language\document@default@language

```

³ $\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$ 2017/01/01 以前を使って $\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$ のフォーマットを作成した場合や、`dinbrief.cls` の
 ように独自の再定義を行うクラスやパッケージを使った場合に起こるかもしれません。

```

433 \resetactivechars
434 \global\let\@if@newlist\if@newlist
435 \global\@newlistfalse
436 \@parboxrestore
437 \shipout\vbox{\yoko
438   \set@typeset@protect
439   \aftergroup\endgroup
440   \aftergroup\set@typeset@protect

```

ここから \shipoutsetup の内容。

```

441 \if@specialpage
442   \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
443 \fi

444 \if@twoside
445   \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
446   \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
447   \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
448   \else \let\@thehead\@evenhead
449   \let\@thefoot\@evenfoot
450   \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
451   \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
452 \fi\fi

```

トンボ出力オプションが指定されている場合、ここで用紙サイズを再設定します。

TeX の加える左と上部の 1 インチは、トンボの内側に入ります。

```

453 \@@topmargin\topmargin
454 \iftombow
455   \@@paperwidth\paperwidth \advance\@@paperwidth 6mm\relax
456   \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 16mm\relax
457   \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
458 \fi
459 \reset@font
460 \normalsize
461 \normalsfcodes
462 \let\label\@gobble
463 \let\index\@gobble
464 \let\glossary\@gobble
465 \baselineskip\z@skip \lineskip\z@skip \lineskiplimit\z@

```

ここまでが \shipoutsetup の内容。

```

466 \@beginndvi
467 \outputtombow
468 \vskip \@@topmargin
469 \moveright\@themargin\vbox{%
470   \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
471     \vfil
472     \color@hbox
473     \normalcolor
474     \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%

```



```

475      \color@endbox
476    }%                               %% 22 Feb 87
477    \dp\@tempboxa \z@
478    \box\@tempboxa
479    \vskip \headsep
480    \box\@outputbox
481    \baselineskip \footskip
482    \color@hbox
483    \normalcolor
484    \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
485    \color@endbox
486  }%
487 }%
488 % \endgroup now inserted by \aftergroup

\if@newlist を初期化。

489 \global\let\if@newlist\@if@newlist
490 \global \colht \textheight
491 \stepcounter{page}%
492 \let\firstmark\botmark
493 }
494 </plcore | latexrelease>
495 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
496 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@outputpage}
497 <latexrelease> {Reset language for hyphenation}%
498 <latexrelease>\def\@outputpage{%
499 <latexrelease>\begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup
500 <latexrelease> \iftdir
501 <latexrelease> \dimen\z@\textwidth \textwidth\textheight \textheight\dimen\z@
502 <latexrelease> \fi
503 <latexrelease> \let \protect \noexpand
504 <latexrelease> \@resetactivechars
505 <latexrelease> \global\let\@if@newlist\if@newlist
506 <latexrelease> \global\@newlistfalse
507 <latexrelease> \@parboxrestore
508 <latexrelease> \shipout\vbox{\yoko
509 <latexrelease> \set@typeset@protect
510 <latexrelease> \aftergroup\endgroup
511 <latexrelease> \aftergroup\set@typeset@protect
512 <latexrelease> \if@specialpage
513 <latexrelease> \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
514 <latexrelease> \fi
515 <latexrelease> \if@twoside
516 <latexrelease> \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
517 <latexrelease> \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
518 <latexrelease> \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
519 <latexrelease> \else \let\@thehead\@evenhead
520 <latexrelease> \let\@thefoot\@evenfoot
521 <latexrelease> \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
522 <latexrelease> \else\let\@themargin\evensidemargin\fi

```

```

523 <latexrelease> \fi\fi
524 <latexrelease> \@@topmargin\topmargin
525 <latexrelease> \iftombow
526 <latexrelease> \@@paperwidth\paperwidth \advance\@@paperwidth 6mm\relax
527 <latexrelease> \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 16mm\relax
528 <latexrelease> \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
529 <latexrelease> \fi
530 <latexrelease> \reset@font
531 <latexrelease> \normalsize
532 <latexrelease> \normalsfcodes
533 <latexrelease> \let\label\@gobble
534 <latexrelease> \let\index\@gobble
535 <latexrelease> \let\glossary\@gobble
536 <latexrelease> \baselineskip\z@skip \lineskip\z@skip \lineskiplimit\z@
537 <latexrelease> \@begindvi
538 <latexrelease> \@outputtombow
539 <latexrelease> \vskip \@@topmargin
540 <latexrelease> \moveright\@themargin\vbox{%
541 <latexrelease> \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
542 <latexrelease> \vfil
543 <latexrelease> \color@hbox
544 <latexrelease> \normalcolor
545 <latexrelease> \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
546 <latexrelease> \color@endbox
547 <latexrelease> }% %% 22 Feb 87
548 <latexrelease> \dp\@tempboxa \z@
549 <latexrelease> \box\@tempboxa
550 <latexrelease> \vskip \headsep
551 <latexrelease> \box\@outputbox
552 <latexrelease> \baselineskip \footskip
553 <latexrelease> \color@hbox
554 <latexrelease> \normalcolor
555 <latexrelease> \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
556 <latexrelease> \color@endbox
557 <latexrelease> }%
558 <latexrelease> }%
559 <latexrelease> \global\let@if@newlist\@if@newlist
560 <latexrelease> \global \colht \textheight
561 <latexrelease> \stepcounter{page}%
562 <latexrelease> \let\firstmark\botmark
563 <latexrelease> }
564 <latexrelease> \plEndIncludeInRelease
565 <plcore>

```

\AtBeginDvi pL^AT_EX の出力ルーチンの \@outputpage では、\shipout する vbox の中身に \yoko を指定しています。このため、\AtBeginDocument{\AtBeginDvi{}}というコードを書くと Incompatible direction list can't be unboxed. というエラーが出てしまいます。

そこで、コミュニティ版 p_LA_TE_X では「\shipout で \yoko が指定されている」ことを根拠として

\@beginvibox は（空でない限り）常に横組でなければならない

と仮定します。この仮定に従い、\AtBeginDvi を再定義します。

```
566 </plcore>
567 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/07/01}{\AtBeginDvi}
568 <latexrelease> {Fix for incompatible direction}%
569 <*plcore | latexrelease>
570 \def \AtBeginDvi #1{%
571   \global \setbox \@beginvibox
572     \vbox{\yoko \unvbox \@beginvibox #1}%
573 }
574 </plcore | latexrelease>
575 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
576 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\AtBeginDvi}
577 <latexrelease> {Fix for incompatible direction}%
578 <latexrelease>\def \AtBeginDvi #1{%
579 <latexrelease>   \global \setbox \@beginvibox
580 <latexrelease>     \vbox{\unvbox \@beginvibox #1}%
581 <latexrelease>}
582 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
583 <*plcore>
```

7.6 脚注マクロ

脚注を組み立てる部分のマクロを再定義します。主な修正点は、縦組モードでの動作の追加です。

これらのマクロは、ltfloat.dtx で定義されていたものです。

\thempfn 本文で使われる脚注記号です。

\@footnotemark で縦横の判断をするようにしたため、削除。

```
584 %\def\thempfn{%
585 % \ifdir\thefootnote\else\hbox{\yoko\thefootnote}\fi}
```

\thempfootnote minipage 環境で使われる脚注記号です。

```
586 %\def\thempfootnote{%
587 % \ifdir\alph{mpfootnote}\else\hbox{\yoko\alph{mpfootnote}}\fi}
```

\@makefnmark 脚注記号を作成するマクロです。

```
588 </plcore>
589 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@makefnmark}
590 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
591 <*plcore | latexrelease>
592 \renewcommand\@makefnmark{%
```

```

593 \ifdir \hbox{}\hbox{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\hbox{%
594 \else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\fi}
595 </plcore | latexrelease>
596 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
597 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@makefnmark}
598 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
599 <latexrelease>\renewcommand\@makefnmark{\hbox{%
600 <latexrelease> \ifdir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
601 <latexrelease> \else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\fi}}
602 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\pltx@foot@penalty` 開き括弧類の直後に `\footnotetext` が続いた場合、`\footnotetext` の前での改行は望ましくありません。このような場合に対処するために、`\pltx@foot@penalty` というカウンタを用意しました。`\footnotetext` の最初で「直前のペナルティ値」としてこのカウンタが初期化されます。`\footnotemark`、`\footnote` では使わないので 0 に設定しています。

```

603 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\pltx@foot@penalty}
604 <latexrelease> {Add new counter \pltx@foot@penalty}%
605 <*plcore | latexrelease>
606 \ifx\@undefined\pltx@foot@penalty \newcount\pltx@foot@penalty \fi
607 \pltx@foot@penalty\z@
608 </plcore | latexrelease>
609 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
610 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@foot@penalty}
611 <latexrelease> {Add new counter \pltx@foot@penalty}%
612 <latexrelease>\let\pltx@foot@penalty\@undefined
613 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\footnotemark` また、合印の前の文字と合印の間は原則ベタ組です（但し、JIS X 4051 には例外有り）。
`\footnote` そのため、合印を出力する `\footnotemark`、`\footnote` の最初で `\inhibitglue` を実行しておくことにします（`\@makefnmark` の中に置いても効力がありません）。

```

614 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\footnote}
615 <latexrelease> {Append \inhibitglue in \footnotemark}%
616 <*plcore | latexrelease>
617 \def\footnote{\inhibitglue
618 \ifnextchar[\@xfootnote{\stepcounter\@mpfn
619 \protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
620 \@footnotemark\@footnotetext}}
621 \def\footnotemark{\inhibitglue
622 \ifnextchar[\@xfootnotemark
623 {\stepcounter{footnote}%
624 \protected@xdef\@thefnmark{\thefootnote}%
625 \@footnotemark}}
626 </plcore | latexrelease>
627 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
628 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\footnote}

```

```

629 <latexrelease> {Append \inhibitglue in \footnotemark}%
630 <latexrelease>\def\footnote{\@ifnextchar[\@xfootnote{\stepcounter\@mpfn
631 <latexrelease> \protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
632 <latexrelease> \@footnotemark\@footnotetext}}
633 <latexrelease>\def\footnotemark{%
634 <latexrelease> \@ifnextchar[\@xfootnotemark
635 <latexrelease> {\stepcounter{footnote}}%
636 <latexrelease> \protected@xdef\@thefnmark{\thefootnote}%
637 <latexrelease> \@footnotemark}}
638 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\footnotetext` `\footnotetext` の直前のペナルティ値を保持します。

```

639 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\footnotetext}
640 <latexrelease> {Preserve penalty before \footnotetext}%
641 <*plcore | latexrelease>

642 \def\footnotetext{%
643 \ifhmode\plt@foot@penalty\lastpenalty\unpenalty\fi%
644 \@ifnextchar [\@xfootnotenext
645 {\protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
646 \@footnotetext}}

647 </plcore | latexrelease>
648 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
649 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\footnotetext}
650 <latexrelease> {Preserve penalty before \footnotetext}%
651 <latexrelease>\def\footnotetext{%
652 <latexrelease> \@ifnextchar [\@xfootnotenext
653 <latexrelease> {\protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
654 <latexrelease> \@footnotetext}}
655 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@footnotetext` インサートボックス `\footins` に脚注のテキストを入れます。コミュニティ版 pL^AT_EX では `\footnotetext`, `\footnote` の直後で改行を可能にします。jsclasses ではこの変更に加え、脚注で `\verb` が使えるように再定義されます。

```

656 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/09/08}{\@footnotetext}
657 <latexrelease> {Allow break after \footnote (more fix)}%
658 <*plcore | latexrelease>

659 \long\def\@footnotetext#1{%
660 \ifydir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
661 \insert\footins{\@tempa%
662 \reset@font\footnotesize
663 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
664 \splittopskip\footnotesep
665 \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
666 \hsize\columnwidth \@parboxrestore
667 \protected@edef\@currentlabel{%
668 \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
669 }%

```

```

670 \color@begingroup
671 \makefnintext{%
672 \rule{z@footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%

```

pTeX では \insert の直後に和文文字が来た場合、そこでの改行は許されないという挙動になっています。このため、従来は脚注番号（合印）の直後の改行が抑制されていました。しかし、\hbox の直後に和文文字が来た場合は、そこでの改行は許されますから、最後に \null を追加します。また、\pltx@foot@penalty の値が 0 でなかった場合、脚注の前にペナルティがあったということですから、復活させておきます。

```

673 \color@endgroup}\ifhmode\null\fi
674 \ifnum\pltx@foot@penalty=z@\else
675 \penalty\pltx@foot@penalty
676 \pltx@foot@penaltyz@
677 \fi}

678 </plcore | platexrelease>
679 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
680 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\@footnotetext}
681 <platexrelease> \{Allow break after \footnote}%
682 <platexrelease>\long\def\@footnotetext#1{%
683 <platexrelease> \ifdir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
684 <platexrelease> \insert\footins{\@tempa%
685 <platexrelease> \reset@font\footnotesize
686 <platexrelease> \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
687 <platexrelease> \splittopskip\footnotesep
688 <platexrelease> \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
689 <platexrelease> \hsize\columnwidth \@parboxrestore
690 <platexrelease> \protected@edef\@currentlabel{%
691 <platexrelease> \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
692 <platexrelease> }%
693 <platexrelease> \color@begingroup
694 <platexrelease> \makefnintext{%
695 <platexrelease> \rule{z@footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
696 <platexrelease> \color@endgroup}\null
697 <platexrelease> \ifnum\pltx@foot@penalty=z@\else
698 <platexrelease> \penalty\pltx@foot@penalty
699 <platexrelease> \pltx@foot@penaltyz@
700 <platexrelease> \fi}
701 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
702 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@footnotetext}
703 <platexrelease> \{Allow break after \footnote}%
704 <platexrelease>\long\def\@footnotetext#1{%
705 <platexrelease> \ifdir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
706 <platexrelease> \insert\footins{\@tempa%
707 <platexrelease> \reset@font\footnotesize
708 <platexrelease> \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
709 <platexrelease> \splittopskip\footnotesep
710 <platexrelease> \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM

```

```

711 <latexrelease> \hsize\columnwidth \@parboxrestore
712 <latexrelease> \protected@edef\@currentlabel{%
713 <latexrelease> \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
714 <latexrelease> }%
715 <latexrelease> \color@begingroup
716 <latexrelease> \makefnmark{%
717 <latexrelease> \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
718 <latexrelease> \color@endgroup}}
719 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
720 <*plcore>

```

`\@footnotemark` 脚注記号を出力します。

```

721 \def\@footnotemark{\leavevmode
722 \ifhmode\edef\x@sf{\the\spacefactor}\nobreak\fi
723 \ifydir\@makefnmark
724 \else\hbox to\z@{\hskip-.25zw\raise.9zh\@makefnmark\hss}\fi
725 \ifhmode\spacefactor\x@sf\fi\relax}

```

7.7 相互参照

`\@setref` `\ref` コマンドや `\pageref` コマンドで参照したとき、これらのコマンドによって出力された番号と続く 2 バイト文字との間に `\xkanjiskip` が入りません。これは、`\null` が `\hbox{}` と定義されているためです。そこで `\null` を取り除きます。このコマンドは、`ltxref.dtx` で定義されているものです。

しかし、単に `\null` を `\relax` に置き換えるだけでは、`\section` のような「動く引数」で `\ref` などを使った場合に、目次で後ろの空白が消えてしまいます。そこで、`\relax` のあとに `{}` を追加しました。従来も `\protect\ref` のように使えば問題ありませんでしたが、`LATEX` では展開されても問題が起きない robust な実装になっていますので、これに従います。

さらに、例えば “see Appendix A.” のような記述が文末にあり、かつ “A” を相互参照で取得した場合のスペースファクターを補正するため、`\spacefactor\@m{}` に修正しました。これで、“A.” の後のスペースが文末として扱われます。「`LATEX 2ε マクロ&クラス プログラミング実践解説`」のコードを参考にしましたが、数式モード内でもエラーにならないように改良しています。

```

726 </plcore>
727 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\@setref}
728 <latexrelease> {Spacing after \ref in moving arguments}%
729 <*plcore|latexrelease>
730 \def\@setref#1#2#3{%
731 \ifx#1\relax
732 \protect\G@refundefinedtrue
733 \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
734 \@latex@warning{Reference ‘#3’ on page \thepage \space
735 undefined}%

```

```

736 \else
737 \expandafter#2#1\protect\@setref@{}% change \null to \protect\@setref@{}
738 \fi}
739 \def\@setref@{\ifmmode\else\spacefactor\@m\fi}
740 \</plcore | platexrelease>
741 \<platexrelease>\plEndIncludeInRelease
742 \<platexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@setref}
743 \<platexrelease> {Spacing after \ref in moving arguments}%
744 \<platexrelease>\def\@setref#1#2#3{%
745 \<platexrelease> \ifx#1\relax
746 \<platexrelease> \protect\G@refundefinedtrue
747 \<platexrelease> \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
748 \<platexrelease> \@latex@warning{Reference ‘#3’ on page \thepage \space
749 \<platexrelease> undefined}%
750 \<platexrelease> \else
751 \<platexrelease> \expandafter#2#1\relax{}% change \null to \relax{}
752 \<platexrelease> \fi}
753 \<platexrelease>\let\@setref@\@undefined
754 \<platexrelease>\plEndIncludeInRelease
755 \<platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@setref}
756 \<platexrelease> {Spacing after \ref in moving arguments}%
757 \<platexrelease>\def\@setref#1#2#3{%
758 \<platexrelease> \ifx#1\relax
759 \<platexrelease> \protect\G@refundefinedtrue
760 \<platexrelease> \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
761 \<platexrelease> \@latex@warning{Reference ‘#3’ on page \thepage \space
762 \<platexrelease> undefined}%
763 \<platexrelease> \else
764 \<platexrelease> \expandafter#2#1\relax% change \null to \relax
765 \<platexrelease> \fi}
766 \<platexrelease>\let\@setref@\@undefined
767 \<platexrelease>\plEndIncludeInRelease
768 \<*plcore>

```

7.8 疑似タイプ入力

`\verb` L^AT_EX の `\verb` コマンドでは、数式モードでないときは、`\leavevmode` で水平モードに入ったあと、`\null` を出力しています。マクロ `\null` は `\hbox{}` として定義されていますので、ここには和欧文間スペース (`\xkanjiskip`) が入りません。

しかし、単に `\null` を除いてしまうと、今度は `\verb+ abc+` のように `\verb` の冒頭に半角空白がある場合にこれが消えてしまいます (TeX.SX 170245)。そこで、pL^AT_EX では `\null` の代わりに

1. 和欧文間スペースの挿入処理は透過する
2. 行分割時に消える (discardable) ノードではない

の両条件を満たすノードを挿入します。ここでは `\vadjust{}` としました。

このマクロは、ltmiscen.dtx で定義されています。

```
769 </plcore>
770 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\verb}
771 <latexrelease>          {Preserve beginning space characters}%
772 <*plcore | latexrelease>
773 \if@compatibility\else
774 \def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\vadjust{}\fi
775   \bgroup
776     \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
777     \verbatim@font\@noligs
```

L^AT_EX 2_ε 2017-04-15 に追隨して、\verb の途中でハイフネーションが起きないように \language を設定します（参考：latex2e svn r1405）。

```
778   \language\l@nohyphenation
779   \@ifstar\@sverb\@verb}
780 \fi
781 </plcore | latexrelease>
782 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
783 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\verb}
784 <latexrelease>          {Disable hyphenation in verb}%
785 <latexrelease>\if@compatibility\else
786 <latexrelease>\def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\fi
787 <latexrelease>   \bgroup
788 <latexrelease>     \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
789 <latexrelease>     \verbatim@font\@noligs
790 <latexrelease>     \language\l@nohyphenation
791 <latexrelease>     \@ifstar\@sverb\@verb}
792 <latexrelease>\fi
793 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
794 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\verb}
795 <latexrelease>          {Disable hyphenation in verb}%
796 <latexrelease>\if@compatibility\else
797 <latexrelease>\def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\fi
798 <latexrelease>   \bgroup
799 <latexrelease>     \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
800 <latexrelease>     \verbatim@font\@noligs
801 <latexrelease>     \@ifstar\@sverb\@verb}
802 <latexrelease>\fi
803 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
804 <*plcore>
```

7.9 tabbing 環境

\@startline tabbing 環境の行で、中身が始め括弧類などで始まる場合、最初の項目だけ JFM グルーが消えない現象に対処します。

```
805 </plcore>
806 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\@startline}
807 <latexrelease>          {Inhibit JFM glue at the beginning}%
```

```

808 <*plcore | latexrelease>
809 \gdef\@startline{%
810     \ifnum \@nxttabmar >\@hightab
811         \@badtab
812         \global\@nxttabmar \@hightab
813     \fi
814     \global\@curtabmar \@nxttabmar
815     \global\@curtab \@curtabmar
816     \global\setbox\@curline \hbox {}%
817     \@startfield
818     \strut\inhibitglue}
819 </plcore | latexrelease>
820 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
821 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@startline}
822 <latexrelease>                {Inhibit JFM glue at the beginning}%
823 <latexrelease>\gdef\@startline{%
824 <latexrelease>    \ifnum \@nxttabmar >\@hightab
825 <latexrelease>        \@badtab
826 <latexrelease>        \global\@nxttabmar \@hightab
827 <latexrelease>    \fi
828 <latexrelease>    \global\@curtabmar \@nxttabmar
829 <latexrelease>    \global\@curtab \@curtabmar
830 <latexrelease>    \global\setbox\@curline \hbox {}%
831 <latexrelease>    \@startfield
832 <latexrelease>    \strut}
833 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
834 <*plcore>

```

`\@stopfield` 相互参照や疑似タイプ入力では、和欧文間スペースが入らないので、`\null` を取り除きましたが、`tabbing` 環境では、逆に `\null` がないため、和欧文間スペースが入ってしまうので、それを追加します。`l1tab.dtx` で定義されているものです。

```
835 \gdef\@stopfield{\null\color@endgroup\egroup}
```

7.10 用語集の出力

L^AT_EX には、なぜか用語集を出力するためのコマンドがありませんので、追加をします。

`\printglossary` `\printglossary` コマンドは、単に拡張子が `gls` のファイルを読み込むだけです。このファイルの生成には、`mendex` などを用います。

```
836 \newcommand\printglossary{\@input@{\jobname.gls}}
```

7.11 時分を示すカウンタ

T_EX には、年月日を示す数値を保持しているカウンタとして、それぞれ `\year`, `\month`, `\day` がプリミティブとして存在します。しかし、時分については、深夜の零

時からの経過時間を示す `\time` カウンタしか存在していません。そこで、 $\mathrm{p}\mathrm{E}\mathrm{T}\mathrm{E}\mathrm{X}$ 2 ϵ では、時分を示すためのカウンタ `\hour` と `\minute` を作成しています。

`\hour` 何時か (`\hour`) を得るには、`\time` を 60 で割った商をそのまま用います。何分か
`\minute` (`\minute`) は、`\hour` に 60 を掛けた値を `\time` から引いて算出します。ここでは
 カウンタを宣言するだけです。実際の計算は、クラスやパッケージの中で行なっています。

```
837 \newcount\hour
838 \newcount\minute
```

7.12 tabular 環境

$\mathrm{E}\mathrm{T}\mathrm{E}\mathrm{X}$ カーネル (`lftab.dtx`) の命令群を修正します。

`\@tabclassz` $\mathrm{E}\mathrm{T}\mathrm{E}\mathrm{X}$ カーネルは、アラインメント文字`&`の周囲に半角空白を書いたかどうかにかかわらず余分なスペースを出力しないように、`\ignorespaces` と `\unskip` を発行しています (`lftab.dtx`)。しかし、これだけでは JFM グルーが消えずに残ってしまうので、 $\mathrm{p}\mathrm{E}\mathrm{T}\mathrm{E}\mathrm{X}$ では追加の対処を入れます。

まず、`l`, `c`, `r` の場合です。セルの要素を `\mbox` に入れ、その最初で `\inhibitglue` を発行します。

```
839 \</plcore>
840 \<latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/09/26}{\@tabclassz}
841 \<latexrelease>          {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
842 \<*plcore | latexrelease>
843 \def\@tabclassz{%
844   \ifcase\@lastchclass
845     \@acolampacol
846   \or
847     \@ampacol
848   \or
849   \or
850   \or
851     \@addamp
852   \or
853     \@acolampacol
854   \or
855     \@firstampfalse\@acol
856   \fi
857   \edef\@preamble{%
858     \@preamble{%
859       \ifcase\@chnum
860         \hfil\mbox{\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % c
861       \or
862         \hskip1sp\mbox{\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % l
863       \or
```

```

864      \hfil\hskip1sp\mbox{\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip}% % r
865      \fi}}
866 \
```

plcore | platexrelease

```

867 \platexrelease\plEndIncludeInRelease
868 \platexrelease\plIncludeInRelease{2017/07/29}{\@tabclassz}
869 \platexrelease      {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
870 \platexrelease\def\@tabclassz{%
871 \platexrelease  \ifcase\@lastchclass
872 \platexrelease    \@acolampacol
873 \platexrelease  \or
874 \platexrelease    \@ampacol
875 \platexrelease  \or
876 \platexrelease  \or
877 \platexrelease  \or
878 \platexrelease    \@addamp
879 \platexrelease  \or
880 \platexrelease    \@acolampacol
881 \platexrelease  \or
882 \platexrelease    \@firstampfalse\@acol
883 \platexrelease  \fi
884 \platexrelease\edef\@preamble{%
885 \platexrelease  \@preamble{%
886 \platexrelease    \ifcase\@chnum
887 \platexrelease      \hfil\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip\unskip\hfil % c
888 \platexrelease    \or
889 \platexrelease      \hskip1sp\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip\unskip\hfil % l
890 \platexrelease    \or
891 \platexrelease      \hfil\hskip1sp\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip\unskip % r
892 \platexrelease    \fi}}
893 \platexrelease\plEndIncludeInRelease
894 \platexrelease\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tabclassz}
895 \platexrelease      {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
896 \platexrelease\def\@tabclassz{%
897 \platexrelease  \ifcase\@lastchclass
898 \platexrelease    \@acolampacol
899 \platexrelease  \or
900 \platexrelease    \@ampacol
901 \platexrelease  \or
902 \platexrelease  \or
903 \platexrelease  \or
904 \platexrelease    \@addamp
905 \platexrelease  \or
906 \platexrelease    \@acolampacol
907 \platexrelease  \or
908 \platexrelease    \@firstampfalse\@acol
909 \platexrelease  \fi
910 \platexrelease\edef\@preamble{%
911 \platexrelease  \@preamble{%
912 \platexrelease    \ifcase\@chnum
913 \platexrelease      \hfil\ignorespaces\@sharp\unskip\hfil

```

```

914 <latexrelease> \or
915 <latexrelease> \hskip1sp\ignorespaces\@sharp\unskip\hfil
916 <latexrelease> \or
917 <latexrelease> \hfil\hskip1sp\ignorespaces\@sharp\unskip
918 <latexrelease> \fi}}
919 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@classv` 次に、`p` の場合です。`\mbox{} \inhibitglue` と `\unskip` を追加しています。

```

920 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2017/07/29}{\@classv}
921 <latexrelease> {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
922 <plcore | latexrelease>
923 \def\@classv{\@addtopreamble{\@startpbox{\@nextchar}\mbox{}\inhibitglue\ignorespaces
924 \@sharp\unskip\@endpbox}}
925 </plcore | latexrelease>
926 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
927 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@classv}
928 <latexrelease> {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
929 <latexrelease>\def\@classv{\@addtopreamble{\@startpbox{\@nextchar}\ignorespaces
930 <latexrelease>\@sharp\@endpbox}}
931 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

8 2013 年以降の新しい pTeX 対応

LaTeX 2_ε のカーネルのコードをそのまま使うと、2013 年以降の pTeX では `\xkanjiskip` 由来のアキが前後に入ってしまうことがありました。そうした命令にパッチをあてます。なお、既に出てきた `\footnote` の内部命令 (`\@makefnmark`) には同様のパッチがもうあててあります。

`\@tabular` tabular 環境の内部命令です。もとは `l1tab.dtx` で定義されています。

```

932 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@tabular}
933 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
934 <plcore | latexrelease>
935 \def\@tabular{\leavevmode \null\hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
936 \let\@classz\@tabclassz
937 \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\@tabarray}
938 </plcore | latexrelease>
939 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
940 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tabular}
941 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
942 <latexrelease>\def\@tabular{\leavevmode \hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
943 <latexrelease> \let\@classz\@tabclassz
944 <latexrelease> \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\@tabarray}
945 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

```

\endtabular
\endtabular* 946 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\endtabular}

```

```

947 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
948 <*plcore | latexrelease>
949 \def\endtabular{\crr\egroup\egroup $\egroup\null}
950 \expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular
951 </plcore | latexrelease>
952 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
953 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\endtabular}
954 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
955 <latexrelease>\def\endtabular{\crr\egroup\egroup $\egroup}
956 <latexrelease>\expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular
957 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

\@iiiparbox \parbox の内部命令です。もとは ltboxes.dtx で定義されています。

```

958 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@iiiparbox}
959 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
960 <*plcore | latexrelease>
961 \let\@parboxto\@empty
962 \long\def\@iiiparbox#1#2[#3]#4#5{%
963   \leavevmode
964   \@pboxswfalse
965   \setlength\@tempdima{#4}%
966   \@begin@tempboxa\vbox{\hsize\@tempdima\@parboxrestore#5\@@par}%
967   \ifx\relax#2\else
968     \setlength\@tempdimb{#2}%
969     \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
970   \fi
971   \if#1b\vbox
972   \else\if #1t\vtop
973   \else\ifmode\vcenter
974   \else\@pboxswtrue\null$\vcenter% !!!
975   \fi\fi\fi
976   \@parboxto{\let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
977     \csname bm@#3\endcsname}%
978   \if@pboxsw \m@th$\null\fi% !!!
979   \@end@tempboxa}
980 </plcore | latexrelease>
981 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
982 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@iiiparbox}
983 <latexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
984 <latexrelease>\let\@parboxto\@empty
985 <latexrelease>\long\def\@iiiparbox#1#2[#3]#4#5{%
986   \leavevmode
987   \@pboxswfalse
988   \setlength\@tempdima{#4}%
989   \@begin@tempboxa\vbox{\hsize\@tempdima\@parboxrestore#5\@@par}%
990   \ifx\relax#2\else
991     \setlength\@tempdimb{#2}%
992     \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
993   \fi

```

```

994 <platexrelease> \if#1b\ vbox
995 <platexrelease> \else\if #1t\ vtop
996 <platexrelease> \else\ifmode\ vcenter
997 <platexrelease> \else\@pboxswtrue $\ vcenter
998 <platexrelease> \fi\fi\fi
999 <platexrelease> \@parboxto{\let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
1000 <platexrelease> \csname bm@#3\endcsname}%
1001 <platexrelease> \if@pboxsw \m@th$\fi
1002 <platexrelease> \@end@tempboxa}
1003 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\underline` 下線を引く命令です。もとは `ltboxes.dtx` で定義されています。

```

1004 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\underline}
1005 <platexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
1006 <*plcore | platexrelease>
1007 \def\underline#1{%
1008 \relax
1009 \ifmode\@@underline{#1}%
1010 \else \leavevmode\null$\@@underline{\hbox{#1}}\m@th$\null\relax\fi}
1011 </plcore | platexrelease>
1012 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
1013 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\underline}
1014 <platexrelease> {Remove extra \xkanjiskip}%
1015 <platexrelease>\def\underline#1{%
1016 <platexrelease> \relax
1017 <platexrelease> \ifmode\@@underline{#1}%
1018 <platexrelease> \else $\@@underline{\hbox{#1}}\m@th$\relax\fi}
1019 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

9 e-pT_EX での FAM256 パッチの利用

`\e@alloc@chardef` L^AT_EX 2_ε 2015/01/01 以降、拡張レジスタがあれば利用するようになっていますの

`\e@alloc@top` で、e-pT_EX の拡張レジスタを利用できるように設定します。

```

1020 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/11/29}%
1021 <platexrelease> {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
1022 <*plcore | platexrelease>
1023 \ifx\omathchar\@undefined
1024 \ifx\widowpenalties\@undefined

```

オリジナルの T_EX の場合（拡張なしのアスキー pT_EX の場合）。

```

1025 \mathchardef\e@alloc@top=255
1026 \let\e@alloc@chardef\chardef
1027 \else

```

e-T_EX 拡張で 2¹⁵ 個のレジスタが利用できます。

```

1028 \mathchardef\e@alloc@top=32767
1029 \let\e@alloc@chardef\mathchardef

```

```

1030 \fi
1031 \else

FAM256 パッチが適用された e-pTeX の場合は、 $2^{16}$  個のレジスタが利用できます。

1032 \ifx\enablecjktoken\@undefined % pTeX
1033 \omathchardef\@alloc@top=65535
1034 \let\@alloc@chardef\omathchardef
1035 \else % upTeX
1036 \chardef\@alloc@top=65535
1037 \let\@alloc@chardef\chardef
1038 \fi
1039 \fi

1040 </plcore | platexrelease>
1041 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
1042 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2015/01/01}%
1043 <platexrelease> {\@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
1044 <platexrelease>\ifx\widowpenalties\@undefined
1045 <platexrelease> \mathchardef\@alloc@top=255
1046 <platexrelease> \let\@alloc@chardef\chardef
1047 <platexrelease>\else
1048 <platexrelease> \mathchardef\@alloc@top=32767
1049 <platexrelease> \let\@alloc@chardef\mathchardef
1050 <platexrelease>\fi
1051 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
1052 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}%
1053 <platexrelease> {\@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
1054 <platexrelease>\let\@alloc@top\@undefined
1055 <platexrelease>\let\@alloc@chardef\@undefined
1056 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

`\@mathgroup@top` 2015/01/01 以降の L^AT_EX 2_ε カーネルは、XeTeX と LuaTeX に対して数式 fam の上限を 16 から 256 に増やしています (`\Umathcode` で判定)。FAM256 パッチが適用された e-pTeX でも同様に上限を 16 から 256 に増やします。これで

! LaTeX Error: Too many math alphabets used in version normal.

が出にくくなるはずです。

```

1057 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2016/11/29}%
1058 <platexrelease> {\@mathgroup@top}{Extended Allocation (FAM256)}%
1059 <*plcore | platexrelease>

1060 \ifx\omathchar\@undefined
1061 \chardef\@mathgroup@top=16 % LaTeX2e kernel standard
1062 \else
1063 \mathchardef\@mathgroup@top=256 % for e-pTeX FAM256 patched
1064 \fi

1065 </plcore | platexrelease>
1066 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
1067 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2015/01/01}%

```



```

1068 <latexrelease>                {\e@mathgroup@top}{Extended Allocation (FAM256)}}%
1069 <latexrelease>\chardef\e@mathgroup@top=16
1070 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease
1071 <latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}%
1072 <latexrelease>                {\e@mathgroup@top}{Extended Allocation (FAM256)}}%
1073 <latexrelease>\let\e@mathgroup@top\@undefined
1074 <latexrelease>\plEndIncludeInRelease

```

File d plext.dtx

10 概要

このパッケージは、以下の項目に関する機能を拡張するものです。

- 表組環境
- フロートとキャプションの出力位置
- 段落ボックス環境
- 作図環境
- 連数字、漢数字、傍点、下線
- 参照番号

このパッケージは縦組用クラス（`tarticle`, `tbook`, `treport`）のときには、自動的に読み込まれます。横組用クラス（`jarticle`, `jbook`, `jreport`）で拡張機能を使いたい場合は、文書ファイルのプリアンブルに以下の一行を記述してください。

```
\usepackage{plext}
```

11 組方向オプションについて

つぎの環境やコマンドは、組方向オプションが追加され、拡張されています。

- `tabular` 環境、`array` 環境
- `\layoutcaption` コマンド
- `minipage` 環境、`\parbox` コマンド、`\pbox` コマンド
- `picture` 環境

組方向オプションは、コマンド名や環境の後ろで`<と>`で囲って、“y”、“t”、“z”のいずれかを指定します。それぞれのオプションの意味はつぎのとおりです。デフォルトの組み方向は、横組のときは“y”、縦組のときは“t”です。

オプション	意味
y	横組で出力（横組モードでは何もしない）
t	縦組で出力（縦組モードでは何もしない）
z	90 度回転して出力（横組モードでは何もしない）

組方向オプションを用いたサンプルを図 1 に示します。左から、“y”, “t”, “z” オプションを指定してあります。

たとえば、これはい たい何、いったいど うなことが世の中 にはたくさんありま す。	たうたいたと くうして、え さんな何、ば あなこ、こ りこと、れ ます世の中 ？にはは	たうたいたと くうして、え さんな何、ば あなこ、こ りこと、れ ます世の中 ？にはは
---	---	---

Figure 1: 組方向オプションの使用例

12 コード

`\if@rotsw` このスイッチは、縦組モードで 90 度回転させるかどうかを示すのに使います。

```
1 {*package}
2 \newif\if@rotsw
```

12.1 表組環境

`tabular` 環境と `array` 環境は、組方向を指定するオプションを追加しました。これらのコマンドは、`ltxtab.dtx` で定義されています。

`\array` `array` 環境と `tabular` 環境を開始するコマンドです。 `tabular` 環境にはアスタリスク
`\tabular` 形式があります。

```
\tabular* 3 \def\array{\let\@acol\@arrayacol \let\@classz\@arrayclassz
4 \let\@classiv\@arrayclassiv
5 \let\@arraycr\let\@halignto\@empty\X@tabarray}
6 %
7 \def\tabular{\let\@halignto\@empty\X@tabular}
8 \@namedef{tabular*}{\@ifnextchar<%>
9 {\@stabular}{\@stabular<Z>}}
```

`\X@tabarray` 組方向オプションを調べます。

```
\X@tabular 10 \def\X@tabarray{\@ifnextchar<%>
```

```

11   {\p@tabarray}{\p@tabarray<Z>}}
12 \def\X@tabular{\@ifnextchar<%>
13   {\p@tabular}{\p@tabular<Z>}}

\@stabular アスタリスク形式の場合は、組方向オプションの後ろに幅を指定します。
\p@tabular 14 \def\@stabular<#1>#2{%
15   \setlength\dimen@{#2}%
16   \edef\@halignto{to\the\dimen@}\p@tabular<#1>}
17 \def\p@tabular<#1>{\leavevmode \null\hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
18   \let\@classz\@tabclassz
19   \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\p@tabarray<#1>}

\p@tabarray 位置オプションを調べます。
20 \def\p@tabarray<#1>{\m@th\@ifnextchar[%]
21   {\p@array<#1>}{\p@array<#1>[c]}}

\p@array tabular 環境と array 環境の内部形式です。
22 \def\p@array<#1>[#2]#3{\setbox\@arstrutbox\hbox{%
23   \iftdir
24     \if #1y\relax\yoko
25       \vrule\@height\arraystretch\ht\strutbox
26       \@depth\arraystretch\dp\strutbox \@width\z@
27     \else\if #1z\relax\@rotswtrue
28       \vrule\@height\arraystretch\ht\zstrutbox
29       \@depth\arraystretch\dp\zstrutbox \@width\z@
30     \else
31       \vrule\@height\arraystretch\ht\tstrutbox
32       \@depth\arraystretch\dp\tstrutbox \@width\z@
33     \fi\fi
34   \else
35     \if #1t\relax\tate
36       \vrule\@height\arraystretch\ht\tstrutbox
37       \@depth\arraystretch\dp\tstrutbox \@width\z@
38     \else
39       \vrule\@height\arraystretch\ht\strutbox
40       \@depth\arraystretch\dp\strutbox \@width\z@
41     \fi
42   \fi}%
43 \fork@array@option<#1>[#2]%
44 \mkpream{#3}\edef\@preamble{\ialign \noexpand\@halignto
45 \bgroup \tabskip\z@skip \@arstrut \@preamble \tabskip\z@skip \cr}%
46 \let\@startpbox\@startpbox \let\@endpbox\@endpbox
47 \let\@tabularnewline\\%

48 \@begin@alignbox\bgroup\box@dir\adjustbaseline
49 \let\par\@empty
50 \let\@sharp#\let\protect\relax
51 \lineskip\z@skip\baselineskip\z@skip\@preamble}

```

`\endarray` array 環境と `tabular` 環境の終了コマンドです。`\@end@alignbox` は `\p@array` から呼び出される `\fork@array@option` によって設定されます。

```
52 \def\endarray{\crr\egroup\egroup\@end@alignbox}
53 \def\endtabular{\crr\egroup\egroup\@end@alignbox $\egroup\null}
54 \expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular
```

`\fork@array@option` array 環境と `tabular` 環境で与えられた第一引数と第二引数の組合せの分岐を行いません。

コミュニティ版では、アスキー版で不自然だった表組（array 環境および `tabular` 環境）と周囲の本文との揃え位置を修正し、以下のように設計しました。

- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<y>, <z>指定の場合
 - － [t] 指定のとき
一行目のベースラインが周囲のそれと一致（罫線の場合は和文ベースラインの位置）
 - － [c] 指定のとき
表組の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - － [b] 指定のとき
最終行のベースラインが周囲のそれと一致（罫線の場合は和文ベースラインの位置）
- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<t>指定の場合
 - － [t] 指定のとき
表組の上端が周囲の和文ベースラインと一致
 - － [c] 指定のとき
表組の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - － [b] 指定のとき
表組の下端が周囲の和文ベースラインと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<y>指定の場合
 - － [t] 指定のとき
表組の上端が周囲の和文ベースラインと一致
 - － [c] 指定のとき
表組の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - － [b] 指定のとき
表組の下端が周囲の和文ベースラインと一致

- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき
一行目のベースラインが周囲のそれと一致（罫線の場合は和文ベースラインの位置）
 - [c] 指定のとき
表組の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - [b] 指定のとき
最終行のベースラインが周囲のそれと一致（罫線の場合は和文ベースラインの位置）
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<z>指定の場合
 - [t] 指定のとき
一行目の欧文ベースラインが周囲のそれと一致
 - [c] 指定のとき
表組の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - [b] 指定のとき
最終行の欧文ベースラインが周囲のそれと一致

```

55 \def\fork@array@option<#1>[#2]{%
56 \@rotswfalse

縦組モードのとき：
57 \iftdir
58 \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
59 \if #2t\relax
60 \def\@begin@alignbox{%
61 \@tempdima=\tbaselineshift
62 \advance\@tempdima-\ybaselineshift
63 \raise\@tempdima\top\bggroup\kern\z@\vtop}%
64 \let\@end@alignbox\egroup
65 \else\if #2b\relax
66 \def\@begin@alignbox{%
67 \@tempdima=\tbaselineshift
68 \advance\@tempdima-\ybaselineshift
69 \raise\@tempdima\box\bggroup\vbox}%
70 \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
71 \else
72 \let\@begin@alignbox\vcenter
73 \let\@end@alignbox\relax
74 \fi\fi
75 \else\if #1z\relax\let\box@dir\relax\@rotswtrue
76 \if #2t\relax

```

```

77 \def\@begin@alignbox{%
78 \@tempdima=\tbaselineshift
79 \advance\@tempdima-\ybaselineshift
80 \advance\@tempdima\ht\tstrutbox
81 \raise\arraystretch\@tempdima\top\bgroup\kern\z@\vtop}%
82 \let\@end@alignbox\egroup
83 \else\if #2b\relax
84 \def\@begin@alignbox{%
85 \@tempdima=\tbaselineshift
86 \advance\@tempdima-\ybaselineshift
87 \advance\@tempdima-\dp\tstrutbox
88 \raise\arraystretch\@tempdima\vbox\bgroup\vbox}%
89 \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
90 \else
91 \let\@begin@alignbox\center
92 \let\@end@alignbox\relax
93 \fi\fi
94 \else\let\box@dir\tate
95 \if #2t\relax
96 \let\@begin@alignbox\vtop
97 \let\@end@alignbox\relax
98 \else\if #2b\relax
99 \let\@begin@alignbox\vbox
100 \let\@end@alignbox\relax
101 \else
102 \let\@begin@alignbox\center
103 \let\@end@alignbox\relax
104 \fi\fi
105 \fi\fi

```

横組モードのとき :

```

106 \else
107 \if #1t\relax\let\box@dir\tate
108 \if #2t\relax
109 \def\@begin@alignbox{\vtop\bgroup\kern\z@\vbox}%
110 \let\@end@alignbox\egroup
111 \else\if #2b\relax
112 \def\@begin@alignbox{\vbox\bgroup\vbox}%
113 \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
114 \else
115 \let\@begin@alignbox\center
116 \let\@end@alignbox\relax
117 \fi\fi
118 \else\let\box@dir\yoko
119 \if #2t\relax
120 \let\@begin@alignbox\vtop
121 \let\@end@alignbox\relax
122 \else\if #2b\relax
123 \let\@begin@alignbox\vbox
124 \let\@end@alignbox\relax

```

```

125 \else
126 \let\@begin@alignbox\center
127 \let\@end@alignbox\relax
128 \fi\fi
129 \fi\fi}

```

12.2 フロートとキャプションの出力位置

キャプションとフロートは、出力位置の指定や大きさの指定などができるように拡張しています。詳細は、『日本語 L^AT_EX 2_ε ブック』を参照してください。

`\layoutfloat` コマンドで作られるボックスです。

```
130 \newbox\@floatbox
```

フロートオブジェクトの幅と高さです。

```
131 \newdimen\floatwidth
```

```
132 \newdimen\floatheight
```

フロートオブジェクトのまわりに引かれる罫線の太さです。

```
133 \newdimen\floatruletick \floatruletick=0.4pt
```

フロートオブジェクトとキャプションの間のアキです。

```
134 \newdimen\captionfloatsep \captionfloatsep=10pt
```

`\caption@dir` には、キャプションを組む方向を示すオプションが格納されます。

`\captiondir` は `\caption@dir` の値と現在の組み方向によって、`\yoko`, `\tate`, `\relax` のいずれかに設定されます。

```
135 \def\caption@dir{Z}
```

```
136 \let\captiondir\relax
```

キャプションの幅です。

```
137 \newdimen\captionwidth \captionwidth\z@
```

キャプションを付ける位置を指定します。

```
138 \def\caption@posa{Z}
```

```
139 \def\caption@posb{Z}
```

組み立てられたキャプションが格納されるボックスです。

```
140 \newbox\@captionbox
```

キャプションに使われる文字です。

```
141 \def\captionfontsetup{\normalfont\normalsize}
```

<pre>\layoutfloat</pre> <pre>\X@layoutfloat</pre> <pre>\@layoutfloat</pre>	<p><code>\layoutfloat</code> は図表類の大きさと位置を指定するのに使います。大きさを省略するか、負の値を指定すると、そのオブジェクトの自然な長さになります。このときは、罫が引かれません。正の大きさを指定すると、<code>\floatruletick</code> の太さの罫で囲まれます。</p>
--	---

位置指定を省略した場合、中央揃えになるようにしています。


```

142 \def\layoutfloat{\@ifnextchar(%)
143   {\X@layoutfloat}{\X@layoutfloat(-5\p@,-5\p@)}}
144 %
145 \def\X@layoutfloat(#1,#2){\@ifnextchar[%]
146   {\@layoutfloat(#1,#2)}{\@layoutfloat(#1,#2)[c]}}
147 %
148 \long\def\@layoutfloat(#1,#2)[#3]#4{%
149   \setbox\z@\hbox{#4}%
150   \floatwidth=#1 \floatheight=#2 \edef\float@pos{#3}%
151   \ifdim\floatwidth<\z@
152     \floatwidth\wd\z@\floatruletick\z@
153   \fi
154   \ifdim\floatheight<\z@
155     \floatheight\ht\z@\advance\floatheight\dp\z@\relax
156     \floatruletick\z@
157   \fi
158   \setbox\@floatbox\vbox to\floatheight{\offinterlineskip
159     \hrule width\floatwidth height\floatruletick depth\z@
160     \vss\hbox to\floatwidth{%
161       \vrule width\floatruletick height\floatheight depth\z@
162       \hss\vbox to\floatheight{\hsize\floatwidth\vss#4\vss}\hss
163       \vrule width\floatruletick height\floatheight depth\z@
164     }\hrule width\floatwidth height\floatruletick depth\z@}}

```

`\DeclareLayoutCaption` `\DeclareLayoutCaption` コマンドは、キャプションの組方向、付ける位置や幅のデフォルトをフロートのタイプごとに設定することができます。このコマンドでデフォルト値が設定されていないと、`\pccaption` コマンドでエラーが発せられます。このコマンドはプリアンブルでのみ、使用できます。

`\DeclareLayoutCaption` `\DeclareLayoutCaption`*<type>*<*dir*><*width*>[*pos1*][*pos2*]
 コマンド引数を省略することはできません。<*dir*>には、‘y’、‘t’、‘z’、‘n’のいずれかを指定します。‘n’と指定をすると、本文の組み方向と同じ方向でキャプションが組まれます。これがデフォルトです。
 <*width*>には、キャプションを折り返す長さを指定します。‘(12zw)’と指定をすると、漢字 12 文字分の長さで折り返されます。‘(\floatwidth)’と指定をすると、キャプションの幅はフロートオブジェクトの幅となります。これがデフォルトです。なお、‘(\floatheight)’と指定をすると、キャプションの幅はフロートオブジェクトの高さとなります。

<*pos1*>と<*pos2*>には、キャプションを出力する位置を指定します。<*pos1*>は、‘c’、‘t’、‘b’のいずれかです。<*pos2*>は、‘u’、‘d’、‘l’、‘r’のいずれかです。デフォルトは、**figure** タイプが‘cd’、**table** タイプは‘cu’です。

```

165 \def\DeclareLayoutCaption#1<#2>(#3)[#4#5]{%
166   \expandafter
167   \ifx\csname #1@layoutcaption\endcsname\relax \else
168     \@latex@info{Redefining capiton layout setting of '1'}%

```

```

169 \fi
170 \expandafter
171 \gdef\csname #1@layoutcaption\endcsname{%
172   \if Z\caption@dir\def\caption@dir{#2}\fi
173   \ifdim\captionwidth=z@ \captionwidth=#3\relax\fi
174   \if Z\caption@posa\def\caption@posa{#4}\fi
175   \if Z\caption@posb\def\caption@posb{#5}\fi}}
176 \onlypreamble\DeclareLayoutCaption

177 \DeclareLayoutCaption{figure}<y>(.8\linewidth)[cd]
178 \DeclareLayoutCaption{table}<y>(.8\linewidth)[cu]

```

`\layoutcaption` `\DeclareLayoutCaption` コマンドで設定をした、デフォルト値とは異なる設定で組みたい場合は、`\layoutcaption` コマンドを使用します。

`\@ilayoutcaption` `\layoutcaption<⟨dir⟩>(⟨width⟩)[⟨pos⟩]`

`\@ilayoutcaption` なお、`\layoutcaption` に組み方向オプションを付けましたので、`\captiondir` で組み方向を指定する必要はありません。また、`\captiondir` で指定をしても、その値は無視されます。

```

179 \def\layoutcaption{\def\caption@dir{Z}\captionwidth=z@
180 \def\caption@posa{Z}\def\caption@posb{Z}%
181 \@ifnextchar<X@layoutcaption{%
182   \@ifnextchar(\@ilayoutcaption{%
183     \@ifnextchar[\@iilayoutcaption\relax]}}
184 %
185 \def\X@layoutcaption<#1>{\def\caption@dir{#1}%
186   \@ifnextchar(\@ilayoutcaption{%
187     \@ifnextchar[\@iilayoutcaption\relax]}}
188 %
189 \def\@ilayoutcaption(#1){\setlength\captionwidth{#1}%
190   \@ifnextchar[{\@iilayoutcaption}{\relax}}
191 %
192 \def\@iilayoutcaption[#1#2]{%
193   \def\caption@posa{#1}\def\caption@posb{#2}}

```

`\pcaption` キャプションを図表類の天地左右の指定箇所に付けるには `\pcaption` コマンドで指定をします。位置の指定は `\layoutcaption` コマンドで行ないます。`\layoutcaption` コマンドが省略された場合は、`\DeclareLayoutCaption` コマンドで設定されているデフォルト値が使われます。

```

194 \def\pcaption{\refstepcounter\@capttype \@dblarg{\pcaption\@capttype}}
195 %
196 \long\def\@pcaption#1[#2]#3{%
197   \addcontentsline{\csname ext@#1\endcsname}{#1}{%
198     \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}{\ignorespaces#2}}%
199   \ifvoid\@floatbox
200     \latex@error{Use with ‘\protect\layoutfloat’.}\@eha
201   \fi

```

```

202 \make@pcaptionbox{#3}%
203 \@pboxswfalse
204 \setbox\@tempboxa\vbox{\hbox to\hsize{\if l\float@pos\else\hss\fi
205   \if l\caption@posb\box\@captionbox\kern\captionfloatsep\fi
206   \if t\caption@posa\vtop
207   \else\if b\caption@posa\vbox
208   \else\ifmmode\vcenter \else\@pboxswtrue $\vcenter \fi\fi\fi
209   {\if u\caption@posb\box\@captionbox\kern\captionfloatsep\fi
210   \unvbox\@floatbox
211   \if d\caption@posb\kern\captionfloatsep\box\@captionbox\fi}%
212   \if r\caption@posb\kern\captionfloatsep\box\@captionbox\fi
213   \if@pboxsw \m@th$\fi \if r\float@pos\else\hss\fi}}%
214 \par\vskip.25\baselineskip
215 \box\@tempboxa}

```

\make@pcaptionbox キャプションを組み立て、\@captionbox を作成します。

```

216 \def\make@pcaptionbox#1{%

```

まず、デフォルトの設定がされているかを確認します。設定されていない場合は、警告メッセージを出力し、現在の組モードでのデフォルト値を使用します。設定されていれば、そのデフォルト値にします。

```

217 \expandafter
218 \ifx\csname\@captype @layoutcaption\endcsname\relax
219   \@latex@warning{Default caption layout of ‘\@captype’ unknown.}%
220   \def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@
221   \def\caption@posa{Z}\def\caption@posb{Z}%
222 \else
223   \csname \@captype @layoutcaption\endcsname
224 \fi

```

次に、組み方向を設定します。基本組の組み方向とキャプションの組み方向を変える場合には、\@tempswa を真とします。文字を回転させるときは \@rotsw を真にします。

```

225 \@rotswfalse \@tempswafalse
226 \iftdir\if y\caption@dir \let\captiondir\yoko \@tempswatrue
227 \else\if z\caption@dir \let\captiondir\relax \@rotswtrue
228 \else\let\captiondir\tate\fi\fi
229 \else\if t\caption@dir\let\captiondir\tate \@tempswatrue
230 \else\let\captiondir\yoko\fi
231 \fi

```

キャプションを組み立てる前に、まず、キャプション文字列がどの程度の長さを持っているのかを確認するために、\hbox に入れます。

```

232 \setbox0\hbox{\if@rotsw $\fi\hbox{\captiondir
233   \captionfontsetup\parindent\z@\inhibitglue
234   \csname fnum@\@captype\endcsname\char\@euc"A1A1\relax#1}%
235   \if@rotsw \m@th$\fi}%

```

キャプションの幅に合わせるため、再び、ボックスを組み立てます。

キャプションを折り返さなくてもよい場合、`\@tempdima` をキャプションの長さにします。ただし、キャプションの組み方向が基本組の組み方向と異なる場合 (`\@tempswa` が真) は、ボックス 0 の幅ではなく、高さに設定をします。`\captionwidth` の値が、キャプションの幅よりも長い場合、折り返さなくてはなりませんので、`\@tempdima` を `\captionwidth` にします。

```
236 \if@tempswa \@tempdima\ht0 \else\@tempdima\wd0 \fi
237 \ifdim\@tempdima>\captionwidth \@tempdima\captionwidth \fi
238 \@pboxswfalse
239 \setbox0\hbox{\if@rotsw\ifmmode\@rotswfalse \else $\fi\fi
240 \if u\caption@posb\vbox
241 \else\if d\caption@posb\vbox
242 \else\if t\caption@posa\vtop
243 \else\if b\caption@posa\vbox
244 \else\ifmmode\vcenter\else\@pboxswtrue $\vcenter\fi
245 \fi\fi\fi\fi
246 {\hsize\@tempdima\kern\z@
247 \vbox{\captiondir\hsize\@tempdima
248 \captionfontsetup\parindent\z@inhibitglue
249 \csname fnum@\@captype\endcsname\char\@euc"A1A1\relax#1}\kern\z@
250 }\if@pboxsw \m@th$\fi \if@rotsw \m@th$\fi}%
```

最後に `\@captionbox` を組み立てます。

位置 2 オプションが 'u' か 'd' の場合、このボックスの幅をフロートオブジェクトの幅と同じ長さにし、位置 1 オプションでの揃えに組み立てます。

位置 2 オプションが 'l' か 'r' の場合は、キャプションの幅です。このときの位置 1 オプションの揃えは、この前の段階で準備をしておき、`\@pcaption` で最終的にフロートオブジェクトと組み合わせるときになされます。

```
251 \let\to@captionboxwidth\relax
252 \if l\caption@posb \else\if r\caption@posb\else
253 \def\to@captionboxwidth{to\floatwidth}\fi\fi
254 \setbox\@captionbox\hbox\to@captionboxwidth{%
255 \if t\caption@posa\else\hss\fi
256 \unhbox0\relax
257 \if b\caption@posa\else\hss\fi}}
```

12.3 段落ボックス環境

`minipage` 環境と `\parbox` コマンドも、`tabular` 環境と同じように、組方向を指定するオプションを追加してあります。これらのコマンドは、`ltboxes.dtx` で定義されています。

`\parbox` コマンドは幅だけでなく高さも指定できるようになっています。新しい `\parbox` コマンドについての詳細は、`usrguide.tex` を参照してください。

minipage 環境

`\minipage` 組方向オプションを調べます。

```
258 \def\minipage{\@ifnextchar<%>
259   {\X@minipage}{\X@minipage<Z>}}
```

`\X@minipage` 位置オプションを調べます。

```
260 \def\X@minipage<#1>{\@ifnextchar[%]
261   {\@iminipage<#1>}{\@iiminipage<#1>{c}\relax[s]}}
```

`\@iminipage` 高さオプションを調べます。

```
262 \def\@iminipage<#1>[#2]{\@ifnextchar[%]
263   {\@iiminipage<#1>{#2}}{\@iiminipage<#1>{#2}\relax[s]}}
```

`\@iiminipage` 内部位置オプションを調べます。

```
264 \def\@iiminipage<#1>#2[#3]{\@ifnextchar[%]
265   {\@iiiminipage<#1>{#2}{#3}}{\@iiiminipage<#1>{#2}{#3}[#2]}}
```

`\@iiiminipage` minipage 環境の内部形式です。 `\leavevmode` の後の `\bgroup` は、回転オプションが指定されたときのフラグ `\if@rotsw` が、このマクロの内部だけで有効になるようにするためです。この括弧は、`\endminipage` コマンドで閉じます。

```
266 \def\@iiiminipage<#1>#2#3[#4]#5{%
267   \leavevmode\bgroup
268   \setlength\@tempdima{#5}%
269   \def\@mpargs{<#1>{#2}{#3}[#4]{#5}}%
270   \@rotswfalse
271   \iftdir
272     \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
273     \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
274     \else\let\box@dir\tate
275     \fi\fi
276   \else
277     \if #1t\relax\let\box@dir\tate
278     \else\let\box@dir\yoko
279     \fi
280   \fi
281   \setbox\@tempboxa\vbox\bgroup\box@dir
282   \if@rotsw \hsize\@tempdima\hbox\bgroup$\vbox\bgroup\fi

283   \adjustbaseline
284   \color@begingroup
285   \hsize\@tempdima
286   \textwidth\hsize \columnwidth\hsize
287   \@parboxrestore
288   \def\@mpfn{mpfootnote}\def\thempfn{\thempfootnote}%
289   \c@mpfootnote\z@
290   \let\@footnotetext\@mpfootnotetext
291   \let\@listdepth\@mplistdepth \@mplistdepth\z@
```

```

292      \@minipagerestore
293      \@setminipage}

\endminipage minipage 環境の終了コマンドです。
294 \def\endminipage{%
295     \par
296     \unskip
297     \ifvoid\@mpfootins\else
298         \vskip\skip\@mpfootins
299         \normalcolor
300         \footnoterule
301         \unvbox\@mpfootins
302     \fi
303     \@minipagefalse    %% added 24 May 89
304     \color@endgroup
305     \if@rotsw \egroup\m@th$\egroup\fi

\@iiminipage で開始したグループを閉じるための \egroup です。
306     \egroup
307     \expandafter\@iiparbox\@mpargs{\unvbox\@tempboxa}\egroup}

\parbox コマンド

\parbox 組方向オプションを調べます。
308 \DeclareRobustCommand\parbox{\@ifnextchar<%>
309     {\X@parbox}{\X@parbox<Z>}}

\X@parbox 位置オプションを調べます。
310 \def\X@parbox<#1>{\@ifnextchar[%]
311     {\@iparbox<#1>}{\@iiparbox<#1>{c}\relax[s]}}

\@iparbox 高さオプションを調べます。
312 \def\@iparbox<#1>[#2]{\@ifnextchar[%]
313     {\@iiparbox<#1>{#2}}{\@iiparbox<#1>{#2}\relax[s]}}

\@iiparbox 内部位置オプションを調べます。
314 \def\@iiparbox<#1>#2[#3]{\@ifnextchar[%]
315     {\@iiiparbox<#1>{#2}{#3}}{\@iiparbox<#1>{#2}{#3}[#2]}}

\@iiiparbox parbox の内部形式です。 minipage 環境と同じようにグルーピングをします。この
括弧と対になるのは、このマクロの最後の \egroup です。
316 \long\def\@iiiparbox<#1>#2#3[#4]#5#6{%
317     \leavevmode\null\bgroup
318     \setlength\@tempdima{#5}%
319     \fork@parbox@option<#1>[#2]%
320     \if@rotsw
321         \@begin@tempboxa\vbox{\box@dir\hsize\@tempdima

```

```

322 \hbox{${\vbox{\@parboxrestore\adjustbaseline#6\@par}\m@th$}}%
323 \else
324 \begin@tempboxa\vbox{\box@dir
325 \hsize\@tempdima\@parboxrestore\adjustbaseline#6\@par}%
326 \fi
327 \ifx\relax#3\relax\else
328 \setlength\@tempdimb{#3}%
329 \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
330 \fi
331 \@begin@parbox\@parboxto{\box@dir\adjustbaseline
332 \let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
333 \csname bm@#4\endcsname}\@end@parbox
334 \@end@tempboxa\egroup\null}

```

`\fork@parbox@option` `\parbox` で与えられた第一引数と第二引数の組合せの分岐を行ないます。
 コミュニティ版では、アスキー版で不自然だった `\parbox` の箱と周囲の本文との
 揃え位置を修正し、以下のように設計しました。

- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<y>, <z>指定の場合
 - － [t] 指定のとき
 - 一行目のベースラインが周囲のそれと一致
 - － [c] 指定のとき
 - 箱の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - － [b] 指定のとき
 - 最終行のベースラインが周囲のそれと一致
- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<t>指定の場合
 - － [t] 指定のとき
 - 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - － [c] 指定のとき
 - 箱の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - － [b] 指定のとき
 - 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<y>指定の場合
 - － [t] 指定のとき
 - 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - － [c] 指定のとき
 - 箱の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）

- [b] 指定のとき
箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき
一行目のベースラインが周囲のそれと一致
 - [c] 指定のとき
箱の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - [b] 指定のとき
最終行のベースラインが周囲のそれと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<z>指定の場合
 - [t] 指定のとき
箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - [c] 指定のとき
箱の中心が周囲の数式軸を通る（欧文ベースラインシフトの影響下）
 - [b] 指定のとき
箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致

```
335 \def\fork@parbox@option<#1>[#2]{%
336 \@rotswfalse
```

縦組モードのとき：

```
337 \iftdir
338 \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
339   \if #2t\relax
340     \def\@begin@parbox{\raise\cht\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
341     \let\@end@parbox\egroup
342   \else\if #2b\relax
343     \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
344     \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
345   \else\ifmmode
346     \let\@begin@parbox\vcenter
347     \let\@end@parbox\relax
348   \else
349     \def\@begin@parbox{\$\vcenter}%
350     \def\@end@parbox{\m@th$}%
351   \fi\fi\fi
352 \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
353   \if #2t\relax
354     \def\@begin@parbox{\raise\cht\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
355     \let\@end@parbox\egroup
```



```

356 \else\if #2b\relax
357   \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
358   \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
359 \else\ifmmode
360   \let\@begin@parbox\vcenter
361   \let\@end@parbox\relax
362 \else
363   \def\@begin@parbox{\$\vcenter}%
364   \def\@end@parbox{\m@th$}%
365 \fi\fi\fi
366 \else\let\box@dir\tate
367 \if #2t\relax
368   \let\@begin@parbox\top
369   \let\@end@parbox\relax
370 \else\if #2b\relax
371   \let\@begin@parbox\vbox
372   \let\@end@parbox\relax
373 \else\ifmmode
374   \let\@begin@parbox\vcenter
375   \let\@end@parbox\relax
376 \else
377   \def\@begin@parbox{\$\vcenter}%
378   \def\@end@parbox{\m@th$}%
379 \fi\fi\fi
380 \fi\fi

```

横組モードのとき：

```

381 \else
382 \if #1t\relax\let\box@dir\tate
383 \if #2t\relax
384   \def\@begin@parbox{\raise\cht\top\bgroup\kern\z@\top}%
385   \let\@end@parbox\egroup
386 \else\if #2b\relax
387   \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
388   \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
389 \else\ifmmode
390   \let\@begin@parbox\vcenter
391   \let\@end@parbox\relax
392 \else
393   \def\@begin@parbox{\$\vcenter}%
394   \def\@end@parbox{\m@th$}%
395 \fi\fi\fi
396 \else\let\box@dir\yoko
397 \if #2t\relax
398   \let\@begin@parbox\top
399   \let\@end@parbox\relax
400 \else\if #2b\relax
401   \let\@begin@parbox\vbox
402   \let\@end@parbox\relax
403 \else\ifmmode

```

```

404      \let\@begin@parbox\vcenter
405      \let\@end@parbox\relax
406    \else
407      \def\@begin@parbox{\$ \vcenter}%
408      \def\@end@parbox{\m@th$}%
409    \fi\fi\fi
410 \fi\fi}

```

\pbox コマンド

\pbox は組み方向を指定できるボックスコマンドです。次のような構文となっています。

```
\pbox<\dir>>[\<width>][\<pos>]{\<obj>}
```

\pbox オプションを調べます。

```
411 \DeclareRobustCommand\pbox{\leavevmode\ifnextchar<\X@makePbox>{\X@makePbox<Z>}}
```

\X@makepbox

```

\@imakepbox 412 \def\X@makePbox<#1>{%
413   \ifnextchar[{\@imakePbox<#1>}{\@imakePbox<#1>[-5\p@]}}
414 %
415 \def\@imakePbox<#1>[#2]{\@ifnextchar[%
416   {\@iimakePbox<#1>[#2]}{\@iimakePbox<#1>[#2][c]}}

```

\@iimakePbox \pbox の内部形式です。

```

417 \def\@iimakePbox<#1>#2[#3]#4{%
418   \bgroup \@rotsfalse \@pboxswfalse
419   \iftdir
420     \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
421   \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
422   \else\let\box@dir\tate
423   \fi\fi
424 \else
425   \if #1t\relax\let\box@dir\tate
426   \else\let\box@dir\yoko
427   \fi
428 \fi
429 \ifmmode\else\if@rotsw\@pboxswtrue\hbox\bgroup$\fi\fi
430   \setlength{\@tempdima}{#2}%
431   \ifdim\@tempdima<\z@ \hbox{\box@dir#4}\else
432   \hb@xt@\@tempdima{\box@dir
433     \if #3l\relax\else\hss\fi
434     #4\relax
435     \if #3r\relax\else\hss\fi}\fi
436   \if@pboxsw \m@th$\egroup\fi\egroup}

```

12.4 作図環境

picture 環境も、組方向を指定するオプションを追加してあります。なお、これらのコマンドは、`ltpictur.dtx` で定義されています。

```
\picture 組方向オプションを調べます。
437 \def\picture{\ifnextchar<%>
438   {\X@picture}{\X@picture<Z>}}

\X@picture 図形領域オプションを調べます。
439 \def\X@picture<#1>(<#2,#3>){\ifnextchar(%)
440   {\@@picture<#1>(<#2,#3>)}{\@@picture<#1>(<#2,#3>)(0,0)}}

\@@picture picture 環境の内部ではベースラインシフトの値をゼロにします。以前に設定されて
いた値は、それぞれ保存され、終了時に、その値に戻されます。
441 \newdimen\save@ybaselineshift
442 \newdimen\save@tbaselineshift
443 \newdimen\@picwd

\picture の内部形式です。3 組目の引数は、原点座標です。
444 \def\@@picture<#1>(<#2,#3>)(<#4,#5>){%
445   \save@ybaselineshift\ybaselineshift
446   \save@tbaselineshift\tbaselineshift
447   \iftdir
448     \if#1y\let\box@dir\yoko
449     \@picwd=#3\unitlength \@picht=#2\unitlength
450     \@tempdima=#5\unitlength \@tempdimb=#4\unitlength
451   \else\let\box@dir\tate
452     \@picwd=#2\unitlength \@picht=#3\unitlength
453     \@tempdima=#4\unitlength \@tempdimb=#5\unitlength
454   \fi
455   \else
456     \if#1t\let\box@dir\tate
457     \@picwd=#3\unitlength \@picht=#2\unitlength
458     \@tempdima=#5\unitlength \@tempdimb=#4\unitlength
459   \else\let\box@dir\yoko
460     \@picwd=#2\unitlength \@picht=#3\unitlength
461     \@tempdima=#4\unitlength \@tempdimb=#5\unitlength
462   \fi
463   \fi
464   \setbox\@picbox\hbox to\@picwd\bgroup\box@dir
465   \hskip-\@tempdima\lower\@tempdimb\hbox\bgroup
466   \ybaselineshift\z@ \tbaselineshift\z@
467   \ignorespaces}

\endpicture 図形領域の幅と高さを指定の大きさにしてから、出力をします。そして、最後にベー
スラインシフトの値を元に戻します。
```

```

468 \def\endpicture{%
469   \egroup\hss\egroup
470   \ht\@picbox\@picht \wd\@picbox\@picwd \dp\@picbox\z@
471   \mbox{\box\@picbox}%
472   \ybaselineshift\save@ybaselineshift
473   \tbaselineshift\save@tbaselineshift}

```

`\put` picture 環境の内部で、フォントサイズ変更コマンドなどが使用された場合、ベースラインシフト量が新たに設定されてしまうため、これらのコマンドがベースラインシフトの影響を受けないように再定義をします。ベースラインシフトを有効にした場合は、`\pbox` コマンドを使用してください。

```

\oval 474 \let\org@put\put
\circle 475 \def\put{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@put}
476 %
477 \let\org@line\line
478 \def\line{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@line}
479 %
480 \let\org@vector\vector
481 \def\vector{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@vector}
482 %
483 \let\org@dashbox\dashbox
484 \def\dashbox{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@dashbox}
485 %
486 \let\org@oval\oval
487 \def\oval{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@oval}
488 %
489 \let\org@circle\circle
490 \def\circle{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@circle}

```

12.5 連数字／漢数字／傍点／下線

ここでは、連数字、漢数字、傍点、下線について説明をしています。

連数字と漢数字、および傍点と下線についての詳細は、『日本語 L^AT_EX 2_ε ブック』を参照してください。なお、傍点に使う文字は `pldefs.ltx` で定義されています。

なお、連数字コマンドは3種類ありましたが、`\rensuji` コマンド一つにまとめました。新しい連数字コマンドは次の構文となります。

```

\rensuji[⟨pos⟩]⟨横に並べる半角文字⟩
\rensuji*[⟨pos⟩]⟨横に並べる半角文字⟩

```

アスタリスク形式の場合は、行間を連数字の幅に合わせて広げません。`⟨pos⟩` は、連数字を揃える位置です。‘c’ (中央揃え)、‘r’ (右寄せ)、‘l’ (左寄せ) を指定できます。デフォルトでは、中央に揃えます。

次のフラグが真の場合には、連数字の幅に合わせて行間を広げません。アスタリスク形式の場合に真になります。

```
491 \newif\ifnot@advanceline
```

`\rensuji` は連数字の前後に入るアキです。デフォルトは、現在の文字の幅の 4 分の 1 を基準にしています。

```
492 \newskip\rensuji
```

```
493 \rensuji=0.25\ch plus.25zw minus.25zw
```

連数字

`\rensuji` `\rensuji` は、*形式かどうかを調べます。`\@rensuji` は、位置オプションを調べます。`\@rensuji` `\@rensuji` が `\rensuji` の内部形式です。

```
\@rensuji 494 \DeclareRobustCommand\rensuji{%
495   \ifstar{\not@advancelinetrue\@rensuji}{\@rensuji}}
496 \def\@rensuji{\ifnextchar[{\@rensuji}{\@rensuji[c]}}
497 \def\@rensuji[#1]#2{%
498   \ifvmode\leavevmode\fi
499   \ifysdir\hbox{#2}\else
500     \hskip\rensuji
501     \ifnot@advanceline\not@advancelinefalse\else
502       \setbox\z@\hbox{\yoko#2}%
503       \@tempdima\ht\z@ \advance\@tempdima\dp\z@
504       \if #1c\relax\vrule\@width\z@ \@height.5\@tempdima \@depth.5\@tempdima
505       \else\if #1r\relax\vrule\@width\z@\@height\z@ \@depth\@tempdima
506       \else\vrule\@width\z@ \@height\@tempdima \@depth\z@
507       \fi\fi
508     \fi
509     \if #1c\relax\hbox to1zw{\yoko\hss#2\hss}%
510     \else\if #1r\relax\vbox{\hbox to1zw{\yoko\hss#2}}%
511     \else\vtop{\hbox to1zw{\yoko#2\hss}}%
512     \fi\fi
513     \hskip\rensuji
514 \fi}
```

`\Rensuji` `\Rensuji` コマンドと `\prensuji` コマンドは、`\rensuji` コマンドで代用できます。

```
\prensuji 515 \let\Rensuji\rensuji
516 \let\prensuji\rensuji
```

漢数字

`\Kanji` `\Kanji` コマンドを定義します。`\Kanji` コマンドは `\Alph` と同じように、カウンタに対してのみ使用することができます。

`\kanji` `\kanji` コマンドは、後続の半角数字を漢数字にします。`\kanji` 1989 のように指定をします。ただし、横組モードのときには、何もしません。つねに漢数字にしたい場合は、`\kansuji` プリミティブを使ってください。

後続の数字まで漢数字になってしまうバグを修正しました (Issue #33)。

```

517 \def\kanji#1{\expandafter\@Kanji\csname c@#1\endcsname}
518 \def\@Kanji#1{\kansuji #1}
519 \def\kanji{\iftdir\expandafter\kansuji\fi}

```

傍点

`\boutenchar` `\bou` は、傍点を付けるコマンドです。

`\bou` 傍点として出力する文字は `\boutenchar` に指定します。この文字は、いつでも、横組用フォントが使われます。デフォルトは、EUC コード A1A2 (、) です。

```

520 \def\boutenchar{\char\eur"A1A2}

521 \def\bou#1{\ifvmode\leavevmode\fi\@bou#1\end}
522 \def\@bou#1{%
523   \ifx#1\end \let\next=\relax
524   \else
525     \iftdir\if@rotsw
526       \hbox to\z@{\vbox to\z@{\boxmaxdepth\maxdimen
527         \vss\moveleft-0.2zw\hbox{\boutenchar}\nointerlineskip
528         \hbox{\char\eur"A1A1}}\hss}\nobreak#1\relax
529     \else
530       \hbox to\z@{\vbox to\z@{\boxmaxdepth\maxdimen
531         \vss\moveleft0.2zw\hbox{\yoko\boutenchar}\nointerlineskip
532         \hbox{\char\eur"A1A1}}\hss}\nobreak#1\relax
533     \fi\else
534       \hbox to\z@{\vbox to\z@{%
535         \vss\moveleft-0.2zw\hbox{\yoko\boutenchar}\nointerlineskip
536         \hbox{\char\eur"A1A1}}\hss}\nobreak#1\relax
537     \fi
538     \let\next=\@bou
539   \fi\next}

```

下線

`\kasen` 下線を引くコマンドです。横組モードのときは、引数を `\underline` に渡します。縦組モードでも、回転モードの `\parbox` などで使われたときには、やはり引数を `\underline` に渡します。これ以外の場合は、引数の上に直線を引きます。

```

540 \def\kasen#1{%
541   \ifydir\underline{#1}%
542   \else\if@rotsw\underline{#1}\else
543     \setbox\z@\hbox{#1}\leavevmode\raise.7zw
544     \hbox to\z@{\vrule\@width\wd\z@ \@depth\z@ \@height.4\p@\hss}%
545     \box\z@
546   \fi\fi}

```

12.6 参照番号

参照番号の類を連数字で出力するように再定義します。itemize 環境などのリスト型のラベルについては、jarticle などのパッケージで定義しています。詳細は、jclasses.dtx を参照してください。

`\@eqnnum` これらは `\equation` コマンドで作成された数式に付加される番号です。ltmath.dtx
`\@thecounter` で定義されています。

```
547 \def\@eqnnum{\reset@font\rmfamily \normalcolor  
548   \iftdir\raise.25zh\hbox{\yoko(\theequation)}}%  
549   \else (\theequation)\fi}}  
550 \def\@thecounter#1{\noexpand\rensuji{\noexpand\arabic{#1}}}
```

`\@thmcounter` `\newtheorem` コマンドで作成した環境で参照されるラベルです。ltthm.dtx で定義されています。

```
551 \def\@thmcounter#1{\noexpand\rensuji{\noexpand\arabic{#1}}}  
552 \</package>
```

File e

pl209.dtx

13 DOCSTRIP 用モジュール

DOCSTRIP で以下のモジュール名を指定することで、対象となる部分を取り出すことができます。

pl209	pl209.def	ファイルを生成
oldfonts	oldfont.sty	を生成
style	jarticle	jarticle.sty ファイルを生成
	jbook	jbook.sty ファイルを生成
	jreport	jreport.sty ファイルを生成
	tarticle	tarticle.sty ファイルを生成
	tbook	tbook.sty ファイルを生成
	treport	treport.sty ファイルを生成

14 2.09 互換マクロ

2.09 用のコマンド定義ファイルがロードされたとき、メッセージを出力します。また、 \LaTeX の 2.09 コマンドマクロ定義をロードします。

```
1 <(*pl209)
2 \typeout{Entering pLaTeX 2.09 compatibility mode.}
3 \input{latex209.def}
4 </pl209>
```

フォント選択コマンドのトレースのために `ptrace` パッケージをロードします。

```
5 <oldfonts>\RequirePackage{oldfont}
6 <pl209 | oldfonts>\RequirePackage{ptrace}
```

`\Rensuji` $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ では、`\Rensuji`, `\prensuji` の動作を `\rensuji` コマンドがカバーしています。

```
7 <(*pl209)
8 \let\Rensuji\rensuji
9 \let\prensuji\rensuji
10 </pl209>
```

`\@footnotemark` 脚注の印を出力するマクロを、組み方向に応じて、脚注の方向が変わるようにします。

`\@makefnmark`

```
11 <(*pl209)
12 \def\@footnotemark{\leavevmode
```



```

13 \ifhmode\edef\x@sf{\the\spacefactor}\fi
14 \ifysdir\@makefnmark
15 \else\hbox to\z@{\hskip-.25zw\raise2\cht\@makefnmark\hss}\fi
16 \ifhmode\spacefactor\x@sf\fi\relax}
17 \def\@makefnmark{\hbox{\ifysdir $\m@th^{\@thefnmark}$
18 \else\hbox{\yoko$\m@th^{\@thefnmark}$}\fi}}
19 </pl209>

20 <*pl209>
21 \fontencoding{JY1}
22 \fontfamily{mc}
23 \fontsize{10}{15}
24 </pl209>

25 <*pl209 | oldfonts>
26 \DeclareSymbolFont{mincho}{JY1}{mc}{m}{n}
27 \DeclareSymbolFont{gothic}{JY1}{gt}{m}{n}
28 \DeclareSymbolFontAlphabet\mathmc{mincho}
29 \DeclareSymbolFontAlphabet\mathgt{gothic}
30 \SetSymbolFont{mincho}{bold}{JY1}{gt}{m}{n}
31 \jfam\symmincho

```

\mc と \gt は、和文フォントを変更しますが、欧文フォントには影響しません。

```

32 \DeclareRobustCommand\mc{%
33 \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
34 \kanjifamily{\mcdefault}%
35 \kanjiserier{\kanjiserierdefault}%
36 \kanjishape{\kanjishapedefault}%
37 \selectfont\mathgroup\symmincho}
38 \DeclareRobustCommand\gt{%
39 \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
40 \kanjifamily{\gtdefault}%
41 \kanjiserier{\kanjiserierdefault}%
42 \kanjishape{\kanjishapedefault}%
43 \selectfont\mathgroup\symgothic}

```

\bf コマンドは、和文フォントをゴシックにし、欧文フォントをボールドにします。

```

44 \DeclareRobustCommand\bf{\normalfont\bfseries\mathgroup\symbol\jfam\symgothic}

```

\rm, \sf, \sl, \sc, \it, \tt の各コマンドを、欧文ファミリだけをデフォルトフォントから属性を変更するようにし、和文フォントは影響を受けないように修正します。

```

45 \DeclareRobustCommand\roman@normal{%
46 \romanencoding{\encodingdefault}%
47 \romanfamily{\familydefault}%
48 \romanseries{\seriesdefault}%
49 \romanshape{\shapedefault}%
50 \selectfont\ignorespaces}
51 \DeclareRobustCommand\rm{\roman@normal\rmfamily\mathgroup\symoperators}
52 \DeclareRobustCommand\sff{\roman@normal\sffamily\mathgroup\symsans}
53 \DeclareRobustCommand\sl{\roman@normal\slshape\mathgroup\symslanted}

```

```

54 \DeclareRobustCommand\sc{\roman@normal\scshape\mathgroup\symsmallcaps}
55 \DeclareRobustCommand\it{\roman@normal\itshape\mathgroup\symitalic}
56 \DeclareRobustCommand\tt{\roman@normal\ttfamily\mathgroup\symtypewriter}

\em \em コマンドで、和文フォントも \gt に切り替えるようにしました。
57 \DeclareRobustCommand\em{%
58   \@nomath\em
59   \ifdim \fontdimen\@ne\font>\z@\mc\rm\else\gt\it\fi}
60 \</pl209 | oldfonts)

61 \<*pl209)
62 \let\mcfam\symmincho
63 \let\gtfam\symgothic
64 \renewcommand\vpt {\edef\f@size{\@vpt}\rm\mc}
65 \renewcommand\vipt {\edef\f@size{\@vipt}\rm\mc}
66 \renewcommand\vipt {\edef\f@size{\@vipt}\rm\mc}
67 \renewcommand\viipt{\edef\f@size{\@viipt}\rm\mc}
68 \renewcommand\ixpt {\edef\f@size{\@ixpt}\rm\mc}
69 \renewcommand\xpt {\edef\f@size{\@xpt}\rm\mc}
70 \renewcommand\xipt {\edef\f@size{\@xipt}\rm\mc}
71 \renewcommand\xiipt {\edef\f@size{\@xiipt}\rm\mc}
72 \renewcommand\xivpt {\edef\f@size{\@xivpt}\rm\mc}
73 \renewcommand\xvipt{\edef\f@size{\@xvipt}\rm\mc}
74 \renewcommand\xxpt {\edef\f@size{\@xxpt}\rm\mc}
75 \renewcommand\xxvpt {\edef\f@size{\@xxvpt}\rm\mc}
76 \</pl209)

そして、最後に pl209.cfg というファイルがあれば、それをロードします。
77 \<pl209)\InputIfFileExists{pl209.cfg}{-}{-}

```

15 スタイルファイル

以下は、pL^AT_EX 2.09 での標準スタイルファイルです。pL^AT_EX 2_ε のクラスファイルをロードするようにしています。

```

78 \<*style)
79 \<*jarticle | jbook | jreport | tarticle | tbook | treport)
80 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
81 \</jarticle | jbook | jreport | tarticle | tbook | treport)
82 \<*jarticle)
83 \@obsoletedefile{jarticle.cls}{jarticle.sty}
84 \LoadClass{jarticle}
85 \</jarticle)
86 \<*tarticle)
87 \@obsoletedefile{tarticle.cls}{tarticle.sty}
88 \LoadClass{tarticle}
89 \</tarticle)
90 \<*jbook)
91 \@obsoletedefile{jbook.cls}{jbook.sty}

```

```

92 \LoadClass{jbook}
93 \</jbook>
94 \<*tbook>
95 \@obsoletedefile{tbook.cls}{tbook.sty}
96 \LoadClass{tbook}
97 \</tbook>
98 \<*jreport>
99 \@obsoletedefile{jreport.cls}{jreport.sty}
100 \LoadClass{jreport}
101 \</jreport>
102 \<*treport>
103 \@obsoletedefile{treport.cls}{treport.sty}
104 \LoadClass{treport}
105 \</treport>
106 \</style>

```

File f

kinsoku.dtx

このファイルは、禁則と文字間スペースの設定について説明をしています。日本語 T_EX の機能についての詳細は、『日本語 T_EX テクニカルブック I』を参照してください。

なお、このファイルのコード部分は、以前のバージョンで配布された kinsoku.tex と同一です。

```
1 <*plcore>
```

16 禁則

ある文字を行頭禁則の対象にするには、`\prebreakpenalty` に正の値を指定します。ある文字を行末禁則の対象にするには、`\postbreakpenalty` に正の値を指定します。数値が大きいほど、行頭、あるいは行末で改行されにくくなります。

16.1 半角文字に対する禁則

ここでは、半角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
2 \prebreakpenalty'!=10000
3 \prebreakpenalty'"=10000
4 \postbreakpenalty'\#=500
5 \postbreakpenalty'\$=500
6 \prebreakpenalty'\%=500
7 \prebreakpenalty'\&=500
8 \postbreakpenalty'\ '=10000
9 \prebreakpenalty'\ '=10000
10 \prebreakpenalty')=10000
11 \postbreakpenalty'('=10000
12 \prebreakpenalty'*=500
13 \prebreakpenalty'+=500
14 \prebreakpenalty'-=10000
15 \prebreakpenalty'.=10000
16 \prebreakpenalty',=10000
17 \prebreakpenalty' /=500
18 \prebreakpenalty';=10000
19 \prebreakpenalty'?=10000
20 \prebreakpenalty':=10000
21 \prebreakpenalty']=10000
22 \postbreakpenalty'[=10000
```

16.2 全角文字に対する禁則

ここでは、全角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
23 \prebreakpenalty‘, =10000
24 \prebreakpenalty‘。 =10000
25 \prebreakpenalty‘, =10000
26 \prebreakpenalty‘. =10000
27 \prebreakpenalty‘・ =10000
28 \prebreakpenalty‘: =10000
29 \prebreakpenalty‘; =10000
30 \prebreakpenalty‘? =10000
31 \prebreakpenalty‘! =10000
32 \prebreakpenalty\jis"212B=10000
33 \prebreakpenalty\jis"212C=10000
34 \prebreakpenalty\jis"212D=10000
35 \postbreakpenalty\jis"212E=10000
36 \prebreakpenalty\jis"2139=10000
37 \prebreakpenalty\jis"2144=250
38 \prebreakpenalty\jis"2145=250
39 \postbreakpenalty\jis"2146=10000
40 \prebreakpenalty\jis"2147=5000
41 \postbreakpenalty\jis"2148=5000
42 \prebreakpenalty\jis"2149=5000
43 \prebreakpenalty‘) =10000
44 \postbreakpenalty‘( =10000
45 \prebreakpenalty‘} =10000
46 \postbreakpenalty‘{ =10000
47 \prebreakpenalty‘] =10000
48 \postbreakpenalty‘[ =10000
49 \postbreakpenalty‘‘ =10000
50 \prebreakpenalty‘’ =10000
51 \postbreakpenalty\jis"214C=10000
52 \prebreakpenalty\jis"214D=10000
53 \postbreakpenalty\jis"2152=10000
54 \prebreakpenalty\jis"2153=10000
55 \postbreakpenalty\jis"2154=10000
56 \prebreakpenalty\jis"2155=10000
57 \postbreakpenalty\jis"2156=10000
58 \prebreakpenalty\jis"2157=10000
59 \postbreakpenalty\jis"2158=10000
60 \prebreakpenalty\jis"2159=10000
61 \postbreakpenalty\jis"215A=10000
62 \prebreakpenalty\jis"215B=10000
63 \prebreakpenalty‘— =10000
64 \prebreakpenalty‘+ =200
65 \prebreakpenalty‘- =200
66 \prebreakpenalty‘= =200
67 \postbreakpenalty‘# =200
68 \postbreakpenalty‘$ =200
```

```

69 \prebreakpenalty'%=200
70 \prebreakpenalty'&=200
71 \prebreakpenalty'ぁ=150
72 \prebreakpenalty'ぃ=150
73 \prebreakpenalty'ぅ=150
74 \prebreakpenalty'ぇ=150
75 \prebreakpenalty'ぉ=150
76 \prebreakpenalty'っ=150
77 \prebreakpenalty'ゃ=150
78 \prebreakpenalty'ゅ=150
79 \prebreakpenalty'ょ=150
80 \prebreakpenalty\jis"246E=150
81 \prebreakpenalty'ア=150
82 \prebreakpenalty'イ=150
83 \prebreakpenalty'ウ=150
84 \prebreakpenalty'エ=150
85 \prebreakpenalty'オ=150
86 \prebreakpenalty'ツ=150
87 \prebreakpenalty'ヤ=150
88 \prebreakpenalty'ユ=150
89 \prebreakpenalty'ヨ=150
90 \prebreakpenalty\jis"256E=150
91 \prebreakpenalty\jis"2575=150
92 \prebreakpenalty\jis"2576=150

```

17 文字間のスペース

ある英字の前後と、その文字に隣合う漢字に挿入されるスペースを制御するには、`\xspace` を用います。

ある漢字の前後と、その文字に隣合う英字に挿入されるスペースを制御するには、`\inhibitxspace` を用います。

17.1 ある英字と前後の漢字の間の制御

ここでは、英字に対する設定を行なっています。

指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の漢字の間での処理を禁止する。
- 1 直前の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 2 直後の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 3 前後の漢字との間でのスペースの挿入を許可する。

```

93 \xspace' (=1
94 \xspace')=2
95 \xspace'[=1
96 \xspace']=2

```

```

97 \xspcode' '=1
98 \xspcode' '=2
99 \xspcode';=2
100 \xspcode',=2
101 \xspcode' .=2

```

T1 などの 8 ビットフォントエンコーディングで 128–255 の文字は欧文文字ですの
で、周囲の和文文字との間に `\xkanjiskip` が挿入される必要があります。そこで、
奥村さんの `jsclasses` や田中さんの `upLATEX` と同等の対処をします。

```

102 \xspcode"80=3
103 \xspcode"81=3
104 \xspcode"82=3
105 \xspcode"83=3
106 \xspcode"84=3
107 \xspcode"85=3
108 \xspcode"86=3
109 \xspcode"87=3
110 \xspcode"88=3
111 \xspcode"89=3
112 \xspcode"8A=3
113 \xspcode"8B=3
114 \xspcode"8C=3
115 \xspcode"8D=3
116 \xspcode"8E=3
117 \xspcode"8F=3
118 \xspcode"90=3
119 \xspcode"91=3
120 \xspcode"92=3
121 \xspcode"93=3
122 \xspcode"94=3
123 \xspcode"95=3
124 \xspcode"96=3
125 \xspcode"97=3
126 \xspcode"98=3
127 \xspcode"99=3
128 \xspcode"9A=3
129 \xspcode"9B=3
130 \xspcode"9C=3
131 \xspcode"9D=3
132 \xspcode"9E=3
133 \xspcode"9F=3
134 \xspcode"A0=3
135 \xspcode"A1=3
136 \xspcode"A2=3
137 \xspcode"A3=3
138 \xspcode"A4=3
139 \xspcode"A5=3
140 \xspcode"A6=3
141 \xspcode"A7=3

```

142 \xspcode"A8=3
143 \xspcode"A9=3
144 \xspcode"AA=3
145 \xspcode"AB=3
146 \xspcode"AC=3
147 \xspcode"AD=3
148 \xspcode"AE=3
149 \xspcode"AF=3
150 \xspcode"B0=3
151 \xspcode"B1=3
152 \xspcode"B2=3
153 \xspcode"B3=3
154 \xspcode"B4=3
155 \xspcode"B5=3
156 \xspcode"B6=3
157 \xspcode"B7=3
158 \xspcode"B8=3
159 \xspcode"B9=3
160 \xspcode"BA=3
161 \xspcode"BB=3
162 \xspcode"BC=3
163 \xspcode"BD=3
164 \xspcode"BE=3
165 \xspcode"BF=3
166 \xspcode"C0=3
167 \xspcode"C1=3
168 \xspcode"C2=3
169 \xspcode"C3=3
170 \xspcode"C4=3
171 \xspcode"C5=3
172 \xspcode"C6=3
173 \xspcode"C7=3
174 \xspcode"C8=3
175 \xspcode"C9=3
176 \xspcode"CA=3
177 \xspcode"CB=3
178 \xspcode"CC=3
179 \xspcode"CD=3
180 \xspcode"CE=3
181 \xspcode"CF=3
182 \xspcode"D0=3
183 \xspcode"D1=3
184 \xspcode"D2=3
185 \xspcode"D3=3
186 \xspcode"D4=3
187 \xspcode"D5=3
188 \xspcode"D6=3
189 \xspcode"D7=3
190 \xspcode"D8=3
191 \xspcode"D9=3


```
192 \xspcode"DA=3
193 \xspcode"DB=3
194 \xspcode"DC=3
195 \xspcode"DD=3
196 \xspcode"DE=3
197 \xspcode"DF=3
198 \xspcode"E0=3
199 \xspcode"E1=3
200 \xspcode"E2=3
201 \xspcode"E3=3
202 \xspcode"E4=3
203 \xspcode"E5=3
204 \xspcode"E6=3
205 \xspcode"E7=3
206 \xspcode"E8=3
207 \xspcode"E9=3
208 \xspcode"EA=3
209 \xspcode"EB=3
210 \xspcode"EC=3
211 \xspcode"ED=3
212 \xspcode"EE=3
213 \xspcode"EF=3
214 \xspcode"F0=3
215 \xspcode"F1=3
216 \xspcode"F2=3
217 \xspcode"F3=3
218 \xspcode"F4=3
219 \xspcode"F5=3
220 \xspcode"F6=3
221 \xspcode"F7=3
222 \xspcode"F8=3
223 \xspcode"F9=3
224 \xspcode"FA=3
225 \xspcode"FB=3
226 \xspcode"FC=3
227 \xspcode"FD=3
228 \xspcode"FE=3
229 \xspcode"FF=3
```

17.2 ある漢字と前後の英字の間の制御

ここでは、漢字に対する設定を行なっています。

指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 1 直前の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 2 直後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 3 前後の英字との間でのスペースの挿入を許可する。

```

230 \inhibitxspcode' \ =1
231 \inhibitxspcode'。 =1
232 \inhibitxspcode' , =1
233 \inhibitxspcode' . =1
234 \inhibitxspcode' ; =1
235 \inhibitxspcode' ? =1
236 \inhibitxspcode' ) =1
237 \inhibitxspcode' ( =2
238 \inhibitxspcode' ] =1
239 \inhibitxspcode' [=2
240 \inhibitxspcode' } =1
241 \inhibitxspcode' { =2
242 \inhibitxspcode' ' =2
243 \inhibitxspcode' ' =1
244 \inhibitxspcode' " =2
245 \inhibitxspcode' " =1
246 \inhibitxspcode' [=2
247 \inhibitxspcode' ] =1
248 \inhibitxspcode' < =2
249 \inhibitxspcode' > =1
250 \inhibitxspcode' 《 =2
251 \inhibitxspcode' 》 =1
252 \inhibitxspcode' 「 =2
253 \inhibitxspcode' 」 =1
254 \inhibitxspcode' 『 =2
255 \inhibitxspcode' 』 =1
256 \inhibitxspcode' [=2
257 \inhibitxspcode' ] =1
258 \inhibitxspcode' — =0
259 \inhibitxspcode' ~ =0
260 \inhibitxspcode' … =0
261 \inhibitxspcode' ¥ =0
262 \inhibitxspcode' ° =1
263 \inhibitxspcode' ' =1
264 \inhibitxspcode' " =1
265 </plcore>

```

File g jclasses.dtx

このファイルは、pL^AT_EX 2_ε の標準クラスファイルです。DOCSTRIP プログラムによって、横組用のクラスファイルと縦組用のクラスファイルを作成することができます。

次に DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示します。

オプション	意味
article	article クラスを生成
report	report クラスを生成
book	book クラスを生成
10pt	10pt サイズの設定を生成
11pt	11pt サイズの設定を生成
12pt	12pt サイズの設定を生成
bk	book クラス用のサイズの設定を生成
tate	縦組用の設定を生成
yoko	横組用の設定を生成

18 オプションスイッチ

ここでは、後ほど使用するいくつかのコマンドやスイッチを定義しています。

- `\c@@paper` 用紙サイズを示すために使います。A4, A5, B4, B5 用紙はそれぞれ、1, 2, 3, 4 として表されます。
- ```
1 <{*article|report|book}>
2 \newcounter{@paper}
```
- `\if@landscape` 用紙を横向きにするかどうかのスイッチです。デフォルトは、縦向きです。
- ```
3 \newif\if@landscape \@landscapefalse
```
- `\@ptsize` 組版をするポイント数の一の位を保存するために使います。0, 1, 2 のいずれかです。
- ```
4 \newcommand{\@ptsize}{}>
```
- `\if@restonecol` 二段組時に用いるテンポラリスイッチです。
- ```
5 \newif\if@restonecol
```
- `\if@titlepage` タイトルページやアブストラクト（概要）を独立したページにするかどうかのスイッチです。report と book スタイルのデフォルトでは、独立したページになります。
- ```
6 \newif\if@titlepage
```

```

7 <article>\@titlepagefalse
8 <report|book>\@titlepagetrue

\if@openright chapter レベルを右ページからはじめるかどうかのスイッチです。横組では奇数ページ、縦組では偶数ページから始まることになります。report クラスのデフォルトは、“no” です。book クラスのデフォルトは、“yes” です。
9 <!article>\newif\if@openright

\if@openleft chapter レベルを左ページからはじめるかどうかのスイッチです。日本語 TEX 開発コミュニティ版で新たに追加されました。横組では偶数ページ、縦組では奇数ページから始まることになります。report クラスと book クラスの両方で、デフォルトは “no” です。
10 <!article>\newif\if@openleft

\if@mainmatter スイッチ \@mainmatter が真の場合、本文を処理しています。このスイッチが偽の場合は、\chapter コマンドは見出し番号を出力しません。
11 <book>\newif\if@mainmatter \@mainmattertrue

\hour
\minute 12 \hour\time \divide\hour by 60\relax
13 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
14 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta

\if@stysize pLATEX 2ε 2.09 互換モードで、スタイルオプションに a4j,a5p などが指定されたときの動作をエミュレートするためのフラグです。
15 \newif\if@stysize \@stysizefalse

\if@enablejfam 日本語ファミリを宣言するために用いるフラグです。
16 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

和欧文両対応の数式文字コマンドを有効にするときに用いるフラグです。マクロの展開順序が複雑になるのを避けるため、デフォルトでは false としてあります。
17 \newif\if@mathrmc \@mathrmcfalse

```

## 19 オプションの宣言

ここでは、クラスオプションの宣言を行なっています。

## 19.1 用紙オプション

用紙サイズを指定するオプションです。

```
18 \DeclareOption{a4paper}{\setcounter{@paper}{1}%
19 \setlength\paperheight {297mm}%
20 \setlength\paperwidth {210mm}}
21 \DeclareOption{a5paper}{\setcounter{@paper}{2}%
22 \setlength\paperheight {210mm}
23 \setlength\paperwidth {148mm}}
24 \DeclareOption{b4paper}{\setcounter{@paper}{3}%
25 \setlength\paperheight {364mm}
26 \setlength\paperwidth {257mm}}
27 \DeclareOption{b5paper}{\setcounter{@paper}{4}%
28 \setlength\paperheight {257mm}
29 \setlength\paperwidth {182mm}}
```

ドキュメントクラスに、以下のオプションを指定すると、通常よりもテキストを組み立てる領域の広いスタイルとすることができます。

```
30 %
31 \DeclareOption{a4j}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue
32 \setlength\paperheight {297mm}%
33 \setlength\paperwidth {210mm}}
34 \DeclareOption{a5j}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
35 \setlength\paperheight {210mm}
36 \setlength\paperwidth {148mm}}
37 \DeclareOption{b4j}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
38 \setlength\paperheight {364mm}
39 \setlength\paperwidth {257mm}}
40 \DeclareOption{b5j}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
41 \setlength\paperheight {257mm}
42 \setlength\paperwidth {182mm}}
43 %
44 \DeclareOption{a4p}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue
45 \setlength\paperheight {297mm}%
46 \setlength\paperwidth {210mm}}
47 \DeclareOption{a5p}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
48 \setlength\paperheight {210mm}
49 \setlength\paperwidth {148mm}}
50 \DeclareOption{b4p}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
51 \setlength\paperheight {364mm}
52 \setlength\paperwidth {257mm}}
53 \DeclareOption{b5p}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
54 \setlength\paperheight {257mm}
55 \setlength\paperwidth {182mm}}
```

## 19.2 サイズオプション

基準となるフォントの大きさを指定するオプションです。

```
56 \if@compatibility
```

```

57 \renewcommand{\@ptsize}{0}
58 \else
59 \DeclareOption{10pt}{\renewcommand{\@ptsize}{0}}
60 \fi
61 \DeclareOption{11pt}{\renewcommand{\@ptsize}{1}}
62 \DeclareOption{12pt}{\renewcommand{\@ptsize}{2}}

```

### 19.3 横置きオプション

このオプションが指定されると、用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```

63 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue
64 \setlength\@tempdima{\paperheight}%
65 \setlength\paperheight{\paperwidth}%
66 \setlength\paperwidth{\@tempdima}}

```

### 19.4 トンボオプション

tombow オプションが指定されると、用紙サイズに合わせてトンボを出力します。このとき、トンボの脇に DVI を作成した日付が出力されます。作成日付の出力を抑制するには、tombow ではなく、tombo と指定をします。

ジョブ情報の書式は元々 filename : 2017/3/5(13:3) のような書式でしたが、jsclasses にあわせて桁数固定の filename (2017-03-05 13:03) に直しました。

```

67 \DeclareOption{tombow}{%
68 \tombowtrue \tombowdatetrue
69 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
70 \@bannertoken{%
71 \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
72 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
73 \maketombowbox}
74 \DeclareOption{tombo}{%
75 \tombowtrue \tombowdatefalse
76 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
77 \maketombowbox}

```

### 19.5 面付けオプション

このオプションが指定されると、トンボオプションを指定したときと同じ位置に文章を出力します。作成した DVI をフィルムに面付け出力する場合などに指定をします。

```

78 \DeclareOption{mentuke}{%
79 \tombowtrue \tombowdatefalse
80 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
81 \maketombowbox}

```

## 19.6 組方向オプション

このオプションが指定されると、縦組で組版をします。

```
82 \DeclareOption{tate}{%
83 \AtBeginDocument{\tate\message{《縦組モード》}%
84 \adjustbaseline}%
85 }
```

## 19.7 両面、片面オプション

twoside オプションが指定されると、両面印字出力に適した整形を行いません。

```
86 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse}
87 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue}
```

## 19.8 二段組オプション

二段組にするかどうかのオプションです。

```
88 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
89 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
```

## 19.9 表題ページオプション

@titlepage が真の場合、表題を独立したページに出力します。

```
90 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
91 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
```

## 19.10 右左起こしオプション

chapter を右ページあるいは左ページからはじめるかどうかを指定するオプションです。openleft オプションは日本語 T<sub>E</sub>X 開発コミュニティによって追加されました。

```
92 \!article\if@compatibility
93 \!book\@openrighttrue
94 \!article\else
95 \!article\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse}
96 \!article\DeclareOption{openleft}{\@openlefttrue\@openrightfalse}
97 \!article\DeclareOption{openany}{\@openrightfalse\@openleftfalse}
98 \!article\fi
```

## 19.11 数式のオプション

leqno を指定すると、数式番号を数式の左側に出力します。fleqn を指定するとディスプレイ数式を左揃えで出力します。

```
99 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
100 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}
```

## 19.12 参考文献のオプション

参考文献一覧を“オープンスタイル”の書式で出力します。これは各ブロックが改行で区切られ、`\bibindent` のインデントが付く書式です。

```
101 \DeclareOption{openbib}{%
```

参考文献環境内の最初のいくつかのフックを満たします。

```
102 \AtEndOfPackage{%
103 \renewcommand\@openbib@code{%
104 \advance\leftmargin\bibindent
105 \itemindent -\bibindent
106 \listparindent \itemindent
107 \parsep \z@
108 }%
```

そして、`\newblock` を再定義します。

```
109 \renewcommand\newblock{\par}}}
```

## 19.13 日本語ファミリー宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字

p<sub>La</sub>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> は、このあと、数式モードで直接、日本語を記述できるように数式ファミリーを宣言します。しかし、T<sub>E</sub>X で扱える数式ファミリーの数が 16 個なので、その他のパッケージと組み合わせた場合、数式ファミリーを宣言する領域を超えてしまう場合があるかもしれません。そのときには、残念ながら、そのパッケージか、数式内に直接、日本語を記述するのか、どちらかを断念しなければなりません。このクラスオプションは、数式内に日本語を記述するのをあきらめる場合に用います。

`disablejfam` オプションを指定しても `\textmc` や `\textgt` などを用いて、数式内に日本語を記述することは可能です。

日本語 T<sub>E</sub>X 開発コミュニティによる補足：コミュニティ版 p<sub>La</sub>T<sub>E</sub>X の 2016/11/29 以降の版では、e-p<sub>La</sub>T<sub>E</sub>X の拡張機能（通称「旧 FAM256 パッチ」）が利用可能な場合に、L<sub>A</sub>T<sub>E</sub>X の機能で宣言できる数式ファミリー（数式アルファベット）の上限を 256 個に増やしています。したがって、新しい環境では `disablejfam` を指定しなくても上限を超えることが起きにくくなっています。

`mathrmmc` オプションは、`\mathrm` と `\mathbf` を和欧文両対応にするためのクラスオプションです。

```
110 \if@compatibility
111 \@mathrmctrue
112 \else
113 \DeclareOption{disablejfam}{\@enablejfamfalse}
114 \DeclareOption{mathrmmc}{\@mathrmctrue}
115 \fi
```



## 19.14 ドラフトオプション

`draft` オプションを指定すると、オーバフルボックスの起きた箇所に、5pt の罫線が引かれます。

```
116 \DeclareOption{draft}{\setlength\overfullrule{5pt}}
117 \DeclareOption{final}{\setlength\overfullrule{0pt}}
118 \</article | report | book>
```

## 19.15 オプションの実行

オプションの実行、およびサイズクラスのロードを行いません。

```
119 <*article | report | book>
120 <*article>
121 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,tate}
122 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final}
123 </article>
124 <*report>
125 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,openany,tate}
126 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,openany}
127 </report>
128 <*book>
129 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright,tate}
130 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright}
131 </book>
132 \ProcessOptions\relax
133 <book & tate>\input{tbk1\@ptsize.clo}
134 <!book & tate>\input{tsize1\@ptsize.clo}
135 <book & yoko>\input{jbk1\@ptsize.clo}
136 <!book & yoko>\input{jsize1\@ptsize.clo}
```

縦組用クラスファイルの場合は、ここで `plext.sty` も読み込みます。

```
137 <tate>\RequirePackage{plext}
138 </article | report | book>
```

## 20 フォント

ここでは、 $\text{\LaTeX}$  のフォントサイズコマンドの定義をしています。フォントサイズコマンドの定義は、次のコマンドを用います。

```
\@setfontsize\size<font-size>\baselineskip
```

**<font-size>** これから使用する、フォントの実際の大きさです。

**<baselineskip>** 選択されるフォントサイズ用の通常の `\baselineskip` の値です（実際は、`\baselinestretch * <baselineskip>` の値です）。

数値コマンドは、次のように  $\text{\LaTeX}$  カーネルで定義されています。

|                      |       |                      |    |                      |      |
|----------------------|-------|----------------------|----|----------------------|------|
| <code>\@vpt</code>   | 5     | <code>\@vipt</code>  | 6  | <code>\@viipt</code> | 7    |
| <code>\@viipt</code> | 8     | <code>\@ixpt</code>  | 9  | <code>\@xpt</code>   | 10   |
| <code>\@xipt</code>  | 10.95 | <code>\@xiipt</code> | 12 | <code>\@xivpt</code> | 14.4 |
| ...                  |       |                      |    |                      |      |

`\normalsize` 基本サイズとするユーザレベルのコマンドは `\normalsize` です。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X の内部では `\@normalsize` `\normalsize` を使用します。

`\normalsize` マクロは、`\abovedisplayskip` と `\abovedisplayshortskip`、および `\belowdisplayshortskip` の値も設定をします。`\belowdisplayskip` は、つねに `\abovedisplayskip` と同値です。

また、リスト環境のトップレベルのパラメータは、つねに `\@listI` で与えられます。

```

139 <*10pt | 11pt | 12pt>
140 \renewcommand{\normalsize}{%
141 <10pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
142 <11pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xipt{15.5}%
143 <12pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xiipt{16.5}%
144 <10pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xpt{17}%
145 <11pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xipt{17}%
146 <12pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xiipt{18}%
147 <*10pt>
148 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
149 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
150 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
151 </10pt>
152 <*11pt>
153 \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
154 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
155 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
156 </11pt>
157 <*12pt>
158 \abovedisplayskip 12\p@ \@plus3\p@ \@minus7\p@
159 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
160 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
161 </12pt>
162 \belowdisplayskip \abovedisplayskip
163 \let\@listi\@listI}

```

ここで、ノーマルフォントを選択し、初期化をします。このとき、縦組モードならば、デフォルトのエンコードを変更します。

```

164 <tate>\def\kanjiencodingdefault{JT1}%
165 <tate>\kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
166 \normalsize

```

`\Cht` 基準となる長さの設定をします。これらのパラメータは `plfonts.dtx` で定義されて

`\Cdp`

`\Cwd` File g: jclasses.dtx

`\Cvs`

`\Chs`

います。基準とする文字を「全角空白」（EUC コード 0xA1A1）から「漢」（JIS コード 0x3441）へ変更しました。

```
167 \setbox0\hbox{\char\jis"3441}%
168 \setlength\Cht{\ht0}
169 \setlength\Cdp{\dp0}
170 \setlength\Cwd{\wd0}
171 \setlength\Cvs{\baselineskip}
172 \setlength\Chs{\wd0}
173 \setbox0=\box\voidb@x
```

`\small` `\small` コマンドの定義は、`\normalsize` に似ています。

```
174 \newcommand{\small}{%
175 (*10pt)
176 \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
177 \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
178 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
179 \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
180 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
181 \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
182 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
183 \itemsep \parsep}%
184 (/10pt)
185 (*11pt)
186 \@setfontsize\small\@xpt\@xipt
187 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
188 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
189 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
190 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
191 \topsep 6\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
192 \parsep 3\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
193 \itemsep \parsep}%
194 (/11pt)
195 (*12pt)
196 \@setfontsize\small\@xipt{13.6}%
197 \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
198 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
199 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
200 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
201 \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
202 \parsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
203 \itemsep \parsep}%
204 (/12pt)
205 \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
```

`\footnotesize` `\footnotesize` コマンドの定義は、`\normalsize` に似ています。

```
206 \newcommand{\footnotesize}{%
207 (*10pt)
208 \@setfontsize\footnotesize\@viipt{9.5}%
```

```

209 \abovedisplayskip 6\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
210 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
211 \belowdisplayshortskip 3\p@ \@plus\p@ \@minus2\p@
212 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
213 \topsep 3\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
214 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
215 \itemsep \parsep}%
216 </10pt>
217 < *11pt>
218 \@setfontsize\footnotesize\@ixpt{11}%
219 \abovedisplayskip 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
220 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
221 \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
222 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
223 \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
224 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
225 \itemsep \parsep}%
226 </11pt>
227 < *12pt>
228 \@setfontsize\footnotesize\@xpt\@xiipt
229 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
230 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
231 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
232 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
233 \topsep 6\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
234 \parsep 3\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
235 \itemsep \parsep}%
236 </12pt>
237 \belowdisplayskip \abovedisplayskip}

```

`\scriptsize` これらは先ほどのマクロよりも簡単です。これらはフォントサイズを変更するだけ

`\tiny` で、リスト環境とディスプレイ数式のパラメータは変更しません。

```

\large 238 < *10pt>
239 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
\Large 240 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
241 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
\LARGE 242 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
243 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
\huge 244 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
245 \newcommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
246 </10pt>
247 < *11pt>
248 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viiipt{9.5}}
249 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vipt\@viipt}
250 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
251 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
252 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
253 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
254 \newcommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}

```

```

255 </11pt>
256 <*12pt>
257 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt{9.5}}
258 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@viipt{8}}
259 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xvpt{21}}
260 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xxpt{25}}
261 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xxxpt{28}}
262 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxvpt{33}}
263 \let\Huge=\huge
264 </12pt>
265 </10pt | 11pt | 12pt>

```

## 21 レイアウト

### 21.1 用紙サイズの決定

`\columnsep` `\columnsep` は、二段組のときの、左右（あるいは上下）の段間の幅です。このスペースの中央に `\columnseprule` の幅の罫線が引かれます。

```

266 <*article | report | book>
267 \if@stysize
268 <tate> \setlength\columnsep{3\Cwd}
269 <yoko> \setlength\columnsep{2\Cwd}
270 \else
271 \setlength\columnsep{10\p@}
272 \fi
273 \setlength\columnseprule{0\p@}

```

### 21.2 段落の形

`\lineskip` これらの値は、行が近付き過ぎたときの  $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  の動作を制御します。

`\normallineskip` 274 `\setlength\lineskip{1\p@}`  
275 `\setlength\normallineskip{1\p@}`

`\baselinestretch` これは、`\baselineskip` の倍率を示すために使います。デフォルトでは、何もしません。このコマンドが “empty” でない場合、`\baselineskip` の指定の plus や minus 部分は無視されることに注意してください。

276 `\renewcommand{\baselinestretch}{}`

`\parskip` `\parskip` は段落間に挿入される、縦方向の追加スペースです。`\parindent` は段落の先頭の字下げ幅です。

277 `\setlength\parskip{0\p@ \@plus \p@}`  
278 `\setlength\parindent{1\Cwd}`

`\smallskipamount` これら 3 つのパラメータの値は、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  カーネルの中で設定されています。これらはおそらく、サイズオプションの指定によって変えるべきです。しかし、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  2.09

`\medskipamount`

`\bigskipamount`

や L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> の以前のリリースの両方との互換性を保つために、これらはまだ同じ値としています。

```
279 <*10pt | 11pt | 12pt>
280 \setlength\smallskipamount{3\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
281 \setlength\medskipamount{6\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
282 \setlength\bigskipamount{12\p@ \@plus 4\p@ \@minus 4\p@}
283 </10pt | 11pt | 12pt>
```

`\@lowpenalty` `\nopagebreak` と `\nolinebreak` コマンドは、これらのコマンドが置かれた場所に、ペナルティを起いて、分割を制御します。置かれるペナルティは、コマンドの引数によって、`\@lowpenalty`, `\@medpenalty`, `\@highpenalty` のいずれかが使われます。

```
284 \@lowpenalty 51
285 \@medpenalty 151
286 \@highpenalty 301
287 </article | report | book>
```

## 21.3 ページレイアウト

### 21.3.1 縦方向のスペース

`\headheight` `\headheight` は、ヘッダが入るボックスの高さです。`\headsep` は、ヘッダの下端と本文領域との間の距離です。`\topskip` は、本文領域の上端と 1 行目のテキストのベースラインとの距離です。

```
288 <*10pt | 11pt | 12pt>
289 \setlength\headheight{12\p@}
290 <*tate>
291 \if@stysize
292 \ifnum\c@paper=2 % A5
293 \setlength\headsep{6mm}
294 \else % A4, B4, B5 and other
295 \setlength\headsep{8mm}
296 \fi
297 \else
298 \setlength\headsep{8mm}
299 \fi
300 </tate>
301 <*yoko>
302 <!bk>\setlength\headsep{25\p@}
303 <10pt & bk>\setlength\headsep{.25in}
304 <11pt & bk>\setlength\headsep{.275in}
305 <12pt & bk>\setlength\headsep{.275in}
306 </yoko>
307 \setlength\topskip{1\ChT}
```

`\footskip` `\footskip` は、本文領域の下端とフッタの下端との距離です。フッタのボックスの高さを示す、`\footheight` は削除されました。

```

308 <tate>\setlength\footskip{14mm}
309 <*yoko>
310 <!bk>\setlength\footskip{30\p@}
311 <10pt & bk>\setlength\footskip{.35in}
312 <11pt & bk>\setlength\footskip{.38in}
313 <12pt & bk>\setlength\footskip{30\p@}
314 </yoko>

```

`\maxdepth`  $\TeX$  のプリミティブレジスタ `\maxdepth` は、`\topskip` と同じような働きをします。`\@maxdepth` レジスタは、つねに `\maxdepth` のコピーでなくてはなりません。これは `\begin{document}` の内部で設定されます。 $\TeX$  と  $\text{\LaTeX}$  2.09 では、`\maxdepth` は 4pt に固定です。 $\text{\LaTeX}$  2<sub>ε</sub> では、`\maxdepth+\topskip` を基本サイズの 1.5 倍にしたいので、`\maxdepth` を `\topskip` の半分の値で設定します。

```

315 \if@compatibility
316 \setlength\maxdepth{4\p@}
317 \else
318 \setlength\maxdepth{.5\topskip}
319 \fi

```

### 21.3.2 本文領域

`\textheight` と `\textwidth` は、本文領域の通常の高さと幅を示します。縦組でも横組でも、“高さ” は行数を、“幅” は字詰めを意味します。後ほど、これらの長さに `\topskip` の値が加えられます。

`\textwidth` 基本組の字詰めです。

互換モードの場合：

```
320 \if@compatibility
```

互換モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：

```

321 \if@stysize
322 \ifnum\c@paper=2 % A5
323 \if@landscape
324 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{47\Cwd}
325 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{42\Cwd}
326 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{40\Cwd}
327 <10pt & tate> \setlength\textwidth{27\Cwd}
328 <11pt & tate> \setlength\textwidth{25\Cwd}
329 <12pt & tate> \setlength\textwidth{23\Cwd}
330 \else
331 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{28\Cwd}
332 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{25\Cwd}
333 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{24\Cwd}
334 <10pt & tate> \setlength\textwidth{46\Cwd}
335 <11pt & tate> \setlength\textwidth{42\Cwd}
336 <12pt & tate> \setlength\textwidth{38\Cwd}

```

```

337 \fi
338 \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
339 \if@landscape
340 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{75\Cwd}
341 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{69\Cwd}
342 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{63\Cwd}
343 <10pt & tate> \setlength\textwidth{53\Cwd}
344 <11pt & tate> \setlength\textwidth{49\Cwd}
345 <12pt & tate> \setlength\textwidth{44\Cwd}
346 \else
347 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{60\Cwd}
348 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{55\Cwd}
349 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{50\Cwd}
350 <10pt & tate> \setlength\textwidth{85\Cwd}
351 <11pt & tate> \setlength\textwidth{76\Cwd}
352 <12pt & tate> \setlength\textwidth{69\Cwd}
353 \fi
354 \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
355 \if@landscape
356 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{60\Cwd}
357 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{55\Cwd}
358 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{50\Cwd}
359 <10pt & tate> \setlength\textwidth{34\Cwd}
360 <11pt & tate> \setlength\textwidth{31\Cwd}
361 <12pt & tate> \setlength\textwidth{28\Cwd}
362 \else
363 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{37\Cwd}
364 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{34\Cwd}
365 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{31\Cwd}
366 <10pt & tate> \setlength\textwidth{55\Cwd}
367 <11pt & tate> \setlength\textwidth{51\Cwd}
368 <12pt & tate> \setlength\textwidth{47\Cwd}
369 \fi
370 \else % A4 ant other
371 \if@landscape
372 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{73\Cwd}
373 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{68\Cwd}
374 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{61\Cwd}
375 <10pt & tate> \setlength\textwidth{41\Cwd}
376 <11pt & tate> \setlength\textwidth{38\Cwd}
377 <12pt & tate> \setlength\textwidth{35\Cwd}
378 \else
379 <10pt & yoko> \setlength\textwidth{47\Cwd}
380 <11pt & yoko> \setlength\textwidth{43\Cwd}
381 <12pt & yoko> \setlength\textwidth{40\Cwd}
382 <10pt & tate> \setlength\textwidth{67\Cwd}
383 <11pt & tate> \setlength\textwidth{61\Cwd}
384 <12pt & tate> \setlength\textwidth{57\Cwd}
385 \fi
386 \fi\fi\fi

```



```
387 \else
```

互換モード：デフォルト設定

```
388 \if@twocolumn
389 \setlength\textwidth{52\Cwd}
390 \else
391 <10pt&!bk & yoko> \setlength\textwidth{327\p@}
392 <11pt&!bk & yoko> \setlength\textwidth{342\p@}
393 <12pt&!bk & yoko> \setlength\textwidth{372\p@}
394 <10pt & bk & yoko> \setlength\textwidth{4.3in}
395 <11pt & bk & yoko> \setlength\textwidth{4.8in}
396 <12pt & bk & yoko> \setlength\textwidth{4.8in}
397 <10pt & tate> \setlength\textwidth{67\Cwd}
398 <11pt & tate> \setlength\textwidth{61\Cwd}
399 <12pt & tate> \setlength\textwidth{57\Cwd}
400 \fi
401 \fi
```

2e モードの場合：

```
402 \else
```

2e モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：二段組では用紙サイズの 8 割、一段組では用紙サイズの 7 割を版面の幅として設定します。

```
403 \if@stysize
404 \if@twocolumn
405 <yoko> \setlength\textwidth{.8\paperwidth}
406 <tate> \setlength\textwidth{.8\paperheight}
407 \else
408 <yoko> \setlength\textwidth{.7\paperwidth}
409 <tate> \setlength\textwidth{.7\paperheight}
410 \fi
411 \else
```

2e モード：デフォルト設定

```
412 <tate> \setlength\@tempdima{\paperheight}
413 <yoko> \setlength\@tempdima{\paperwidth}
414 \addtolength\@tempdima{-2in}
415 <tate> \addtolength\@tempdima{-1.3in}
416 <yoko & 10pt> \setlength\@tempdimb{327\p@}
417 <yoko & 11pt> \setlength\@tempdimb{342\p@}
418 <yoko & 12pt> \setlength\@tempdimb{372\p@}
419 <tate & 10pt> \setlength\@tempdimb{67\Cwd}
420 <tate & 11pt> \setlength\@tempdimb{61\Cwd}
421 <tate & 12pt> \setlength\@tempdimb{57\Cwd}
422 \if@twocolumn
423 \ifdim\@tempdima>2\@tempdimb\relax
424 \setlength\textwidth{2\@tempdimb}
425 \else
426 \setlength\textwidth{\@tempdima}
427 \fi
```

```

428 \else
429 \ifdim\@tempdima>\@tempdimb\relax
430 \setlength\textwidth{\@tempdimb}
431 \else
432 \setlength\textwidth{\@tempdima}
433 \fi
434 \fi
435 \fi
436 \fi
437 \@settopoint\textwidth

```

`\textheight` 基本組の行数です。

互換モードの場合：

```

438 \if@compatibility

```

互換モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：

```

439 \if@stysize
440 \ifnum\c@@paper=2 % A5
441 \if@landscape
442 <10pt & yoko> \setlength\textheight{17\Cvs}
443 <11pt & yoko> \setlength\textheight{17\Cvs}
444 <12pt & yoko> \setlength\textheight{16\Cvs}
445 <10pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
446 <11pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
447 <12pt & tate> \setlength\textheight{25\Cvs}
448 \else
449 <10pt & yoko> \setlength\textheight{28\Cvs}
450 <11pt & yoko> \setlength\textheight{25\Cvs}
451 <12pt & yoko> \setlength\textheight{24\Cvs}
452 <10pt & tate> \setlength\textheight{16\Cvs}
453 <11pt & tate> \setlength\textheight{16\Cvs}
454 <12pt & tate> \setlength\textheight{15\Cvs}
455 \fi
456 \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
457 \if@landscape
458 <10pt & yoko> \setlength\textheight{38\Cvs}
459 <11pt & yoko> \setlength\textheight{36\Cvs}
460 <12pt & yoko> \setlength\textheight{34\Cvs}
461 <10pt & tate> \setlength\textheight{48\Cvs}
462 <11pt & tate> \setlength\textheight{48\Cvs}
463 <12pt & tate> \setlength\textheight{45\Cvs}
464 \else
465 <10pt & yoko> \setlength\textheight{57\Cvs}
466 <11pt & yoko> \setlength\textheight{55\Cvs}
467 <12pt & yoko> \setlength\textheight{52\Cvs}
468 <10pt & tate> \setlength\textheight{33\Cvs}
469 <11pt & tate> \setlength\textheight{33\Cvs}
470 <12pt & tate> \setlength\textheight{31\Cvs}
471 \fi

```

```

472 \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
473 \if@landscape
474 <10pt & yoko> \setlength\textheight{22\Cvs}
475 <11pt & yoko> \setlength\textheight{21\Cvs}
476 <12pt & yoko> \setlength\textheight{20\Cvs}
477 <10pt & tate> \setlength\textheight{34\Cvs}
478 <11pt & tate> \setlength\textheight{34\Cvs}
479 <12pt & tate> \setlength\textheight{32\Cvs}
480 \else
481 <10pt & yoko> \setlength\textheight{35\Cvs}
482 <11pt & yoko> \setlength\textheight{34\Cvs}
483 <12pt & yoko> \setlength\textheight{32\Cvs}
484 <10pt & tate> \setlength\textheight{21\Cvs}
485 <11pt & tate> \setlength\textheight{21\Cvs}
486 <12pt & tate> \setlength\textheight{20\Cvs}
487 \fi
488 \else % A4 and other
489 \if@landscape
490 <10pt & yoko> \setlength\textheight{27\Cvs}
491 <11pt & yoko> \setlength\textheight{26\Cvs}
492 <12pt & yoko> \setlength\textheight{25\Cvs}
493 <10pt & tate> \setlength\textheight{41\Cvs}
494 <11pt & tate> \setlength\textheight{41\Cvs}
495 <12pt & tate> \setlength\textheight{38\Cvs}
496 \else
497 <10pt & yoko> \setlength\textheight{43\Cvs}
498 <11pt & yoko> \setlength\textheight{42\Cvs}
499 <12pt & yoko> \setlength\textheight{39\Cvs}
500 <10pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
501 <11pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
502 <12pt & tate> \setlength\textheight{22\Cvs}
503 \fi
504 \fi\fi\fi
505 <yoko> \addtolength\textheight{\topskip}
506 <bk & yoko> \addtolength\textheight{\baselineskip}
507 <tate> \addtolength\textheight{\Cht}
508 <tate> \addtolength\textheight{\Cdp}

```

互換モード：デフォルト設定

```

509 \else
510 <10pt&!bk & yoko> \setlength\textheight{578\p@}
511 <10pt & bk & yoko> \setlength\textheight{554\p@}
512 <11pt & yoko> \setlength\textheight{580.4\p@}
513 <12pt & yoko> \setlength\textheight{586.5\p@}
514 <10pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
515 <11pt & tate> \setlength\textheight{25\Cvs}
516 <12pt & tate> \setlength\textheight{24\Cvs}
517 \fi

```

2e モードの場合：

```
518 \else
```

2e モード: a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定: 縦組では用紙サイズの 70%(book) か 78%(article,report)、横組では 70%(book) か 75%(article,report) を版面の高さに設定します。

```
519 \if@stysize
520 <tate & bk> \setlength\textheight{.75\paperwidth}
521 <tate&!bk> \setlength\textheight{.78\paperwidth}
522 <yoko & bk> \setlength\textheight{.70\paperheight}
523 <yoko&!bk> \setlength\textheight{.75\paperheight}
```

2e モード: デフォルト値

```
524 \else
525 <tate> \setlength\@tempdima{\paperwidth}
526 <yoko> \setlength\@tempdima{\paperheight}
527 \addtolength\@tempdima{-2in}
528 <yoko> \addtolength\@tempdima{-1.5in}
529 \divide\@tempdima\baselineskip
530 \@tempcnta\@tempdima
531 \setlength\textheight{\@tempcnta\baselineskip}
532 \fi
533 \fi
```

最後に、`\textheight` に `\topskip` の値を加えます。

```
534 \addtolength\textheight{\topskip}
535 \@settopoint\textheight
```

### 21.3.3 マージン

`\topmargin` `\topmargin` は、“印字可能領域”——用紙の上端から 1 インチ内側——の上端からヘッダ部分の上端までの距離です。

2.09 互換モードの場合:

```
536 \if@compatibility
537 <*yoko>
538 \if@stysize
539 \setlength\topmargin{-.3in}
540 \else
541 <!bk> \setlength\topmargin{27\p@}
542 <10pt & bk> \setlength\topmargin{.75in}
543 <11pt & bk> \setlength\topmargin{.73in}
544 <12pt & bk> \setlength\topmargin{.73in}
545 \fi
546 </yoko>
547 <*tate>
548 \if@stysize
549 \ifnum\c@paper=2 % A5
550 \setlength\topmargin{.8in}
551 \else % A4, B4, B5 and other
```

```

552 \setlength\topmargin{32mm}
553 \fi
554 \else
555 \setlength\topmargin{32mm}
556 \fi
557 \addtolength\topmargin{-1in}
558 \addtolength\topmargin{-\headheight}
559 \addtolength\topmargin{-\headsep}
560 </tate>

2e モードの場合：

561 \else
562 \setlength\topmargin{\paperheight}
563 \addtolength\topmargin{-\headheight}
564 \addtolength\topmargin{-\headsep}
565 <tate> \addtolength\topmargin{-\textwidth}
566 <yoko> \addtolength\topmargin{-\textheight}
567 \addtolength\topmargin{-\footskip}

568 \if@stysize
569 \ifnum\c@paper=2 % A5
570 \addtolength\topmargin{-1.3in}
571 \else
572 \addtolength\topmargin{-2.0in}
573 \fi
574 \else
575 <yoko> \addtolength\topmargin{-2.0in}
576 <tate> \addtolength\topmargin{-2.8in}
577 \fi

578 \addtolength\topmargin{-.5\topmargin}
579 \fi
580 \@settopoint\topmargin

```

`\marginparsep` `\marginparsep` は、本文と傍注の間にあけるスペースの幅です。横組では本文の左（右）端と傍注、縦組では本文の下（上）端と傍注の間になります。`\marginparpush` は、傍注と傍注との間のスペースの幅です。

```

581 \if@twocolumn
582 \setlength\marginparsep{10\p@}
583 \else
584 <tate> \setlength\marginparsep{15\p@}
585 <yoko> \setlength\marginparsep{10\p@}
586 \fi
587 <tate> \setlength\marginparpush{7\p@}
588 <*yoko>
589 <10pt> \setlength\marginparpush{5\p@}
590 <11pt> \setlength\marginparpush{5\p@}
591 <12pt> \setlength\marginparpush{7\p@}
592 </yoko>

```

```

\oddsidemargin まず、互換モードでの長さを示します。
\evensidemargin 互換モード、縦組の場合：
\marginparwidth 593 \if@compatibility
 594 <tate> \setlength\oddsidemargin{0\p@}
 595 <tate> \setlength\evensidemargin{0\p@}

 互換モード、横組、book クラスの場合：
 596 <*yoko>
 597 <*bk>
 598 <10pt> \setlength\oddsidemargin {.5in}
 599 <11pt> \setlength\oddsidemargin {.25in}
 600 <12pt> \setlength\oddsidemargin {.25in}
 601 <10pt> \setlength\evensidemargin {1.5in}
 602 <11pt> \setlength\evensidemargin {1.25in}
 603 <12pt> \setlength\evensidemargin {1.25in}
 604 <10pt> \setlength\marginparwidth {1.75in}
 605 <11pt> \setlength\marginparwidth {1in}
 606 <12pt> \setlength\marginparwidth {1in}
 607 </bk>

 互換モード、横組、report と article クラスの場合：
 608 <*!bk>
 609 \if@twoside
 610 <10pt> \setlength\oddsidemargin {44\p@}
 611 <11pt> \setlength\oddsidemargin {36\p@}
 612 <12pt> \setlength\oddsidemargin {21\p@}
 613 <10pt> \setlength\evensidemargin {82\p@}
 614 <11pt> \setlength\evensidemargin {74\p@}
 615 <12pt> \setlength\evensidemargin {59\p@}
 616 <10pt> \setlength\marginparwidth {107\p@}
 617 <11pt> \setlength\marginparwidth {100\p@}
 618 <12pt> \setlength\marginparwidth {85\p@}
 619 \else
 620 <10pt> \setlength\oddsidemargin {60\p@}
 621 <11pt> \setlength\oddsidemargin {54\p@}
 622 <12pt> \setlength\oddsidemargin {39.5\p@}
 623 <10pt> \setlength\evensidemargin {60\p@}
 624 <11pt> \setlength\evensidemargin {54\p@}
 625 <12pt> \setlength\evensidemargin {39.5\p@}
 626 <10pt> \setlength\marginparwidth {90\p@}
 627 <11pt> \setlength\marginparwidth {83\p@}
 628 <12pt> \setlength\marginparwidth {68\p@}
 629 \fi
 630 </!bk>

 互換モード、横組、二段組の場合：
 631 \if@twocolumn
 632 \setlength\oddsidemargin {30\p@}
 633 \setlength\evensidemargin {30\p@}

```

```

634 \setlength\marginparwidth {48\p@}
635 \fi
636 </yoko>

```

縦組、横組にかかわらず、スタイルオプション設定ではゼロです。

```

637 \if@stysize
638 \if@twocolumn\else
639 \setlength\oddsidemargin{0\p@}
640 \setlength\evensidemargin{0\p@}
641 \fi
642 \fi

```

互換モードでない場合：

```

643 \else
644 \setlength\@tempdima{\paperwidth}
645 <tate> \addtolength\@tempdima{-\textheight}
646 <yoko> \addtolength\@tempdima{-\textwidth}

```

\oddsidemargin を計算します。

```

647 \if@twoside
648 <tate> \setlength\oddsidemargin{.6\@tempdima}
649 <yoko> \setlength\oddsidemargin{.4\@tempdima}
650 \else
651 \setlength\oddsidemargin{.5\@tempdima}
652 \fi
653 \addtolength\oddsidemargin{-1in}

```

\evensidemargin を計算します。

```

654 \setlength\evensidemargin{\paperwidth}
655 \addtolength\evensidemargin{-2in}
656 <tate> \addtolength\evensidemargin{-\textheight}
657 <yoko> \addtolength\evensidemargin{-\textwidth}
658 \addtolength\evensidemargin{-\oddsidemargin}
659 \@settopoint\oddsidemargin % 1999.1.6
660 \@settopoint\evensidemargin

```

\marginparwidth を計算します。ここで、\@tempdima の値は、  
\paperwidth - \textwidth です。

```

661 <*yoko>
662 \if@twoside
663 \setlength\marginparwidth{.6\@tempdima}
664 \addtolength\marginparwidth{-.4in}
665 \else
666 \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
667 \addtolength\marginparwidth{-.4in}
668 \fi
669 \ifdim \marginparwidth >2in
670 \setlength\marginparwidth{2in}
671 \fi
672 </yoko>

```

縦組の場合は、少し複雑です。

```
673 <*tate>
674 \setlength\@tempdima{\paperheight}
675 \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
676 \addtolength\@tempdima{-\topmargin}
677 \addtolength\@tempdima{-\headheight}
678 \addtolength\@tempdima{-\headsep}
679 \addtolength\@tempdima{-\footskip}
680 \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
681 </tate>
682 \@settopoint\marginparwidth
683 \fi
```

## 21.4 脚注

`\footnotesep` `\footnotesep` は、それぞれの脚注の先頭に置かれる“支柱”の高さです。このクラスでは、通常の `\footnotesize` の支柱と同じ長さですので、脚注間に余計な空白は入りません。

```
684 <10pt>\setlength\footnotesep{6.65\p@}
685 <11pt>\setlength\footnotesep{7.7\p@}
686 <12pt>\setlength\footnotesep{8.4\p@}
```

`\footins` `\skip\footins` は、本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。

```
687 <10pt>\setlength{\skip\footins}{9\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
688 <11pt>\setlength{\skip\footins}{10\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
689 <12pt>\setlength{\skip\footins}{10.8\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
```

## 21.5 フロート

すべてのフロートパラメータは、 $\text{\LaTeX}$  のカーネルでデフォルトが定義されています。そのため、カウンタ以外のパラメータは `\renewcommand` で設定する必要があります。

### 21.5.1 フロートパラメータ

`\floatsep` フロートオブジェクトが本文のあるページに置かれるとき、フロートとそのページ  
`\textfloatsep` にある別のオブジェクトの距離は、これらのパラメータで制御されます。これらの  
`\intextsep` パラメータは、一段組モードと二段組モードの段抜きでないフロートの両方で使われます。

`\floatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

`\textfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。

`\intextsep` は、本文の途中に出力されるフロートと本文との距離です。

```
690 <*10pt>
```



```

691 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
692 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
693 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
694 </10pt>
695 <*11pt>
696 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
697 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
698 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
699 </11pt>
700 <*12pt>
701 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
702 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
703 \setlength\intextsep {14\p@ \@plus 4\p@ \@minus 4\p@}
704 </12pt>

```

`\dblfloatsep` 二段組モードで、`\textwidth` の幅を持つ、段抜きのフロートオブジェクトが本文と同じページに置かれるとき、本文とフロートとの距離は、`\dblfloatsep` と `\dbltextfloatsep` によって制御されます。

`\dblfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。

`\dbltextfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

```

705 <*10pt>
706 \setlength\dblfloatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
707 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
708 </10pt>
709 <*11pt>
710 \setlength\dblfloatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
711 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
712 </11pt>
713 <*12pt>
714 \setlength\dblfloatsep {14\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
715 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
716 </12pt>

```

`\fptop` フロートオブジェクトが、独立したページに置かれるとき、このページのレイアウトは、次のパラメータで制御されます。これらのパラメータは、一段組モードか、`\fpsep` 二段組モードでの一段出力のフロートオブジェクトに対して使われます。

ページ上部では、`\fptop` の伸縮長が挿入されます。ページ下部では、`\fpbot` の伸縮長が挿入されます。フロート間には `\fpsep` が挿入されます。

なお、そのページを空白で満たすために、`\fptop` と `\fpbot` の少なくともどちらか一方に、`plus ...fil` を含めてください。

```

717 <*10pt>
718 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
719 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
720 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
721 </10pt>

```

```

722 <*11pt>
723 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
724 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
725 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
726 </11pt>
727 <*12pt>
728 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
729 \setlength\@fpsep{10\p@ \@plus 2fil}
730 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
731 </12pt>

```

`\@dblftop` 二段組モードでの二段抜きのフロートに対しては、これらのパラメータが使われます。  
`\@dblpsep`

```

\@dblpbot 732 <*10pt>
733 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
734 \setlength\@dblpsep{8\p@ \@plus 2fil}
735 \setlength\@dblpbot{0\p@ \@plus 1fil}
736 </10pt>
737 <*11pt>
738 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
739 \setlength\@dblpsep{8\p@ \@plus 2fil}
740 \setlength\@dblpbot{0\p@ \@plus 1fil}
741 </11pt>
742 <*12pt>
743 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
744 \setlength\@dblpsep{10\p@ \@plus 2fil}
745 \setlength\@dblpbot{0\p@ \@plus 1fil}
746 </12pt>
747 </10pt | 11pt | 12pt>

```

### 21.5.2 フロートオブジェクトの上限値

`\c@topnumber` *topnumber* は、本文ページの上部に出力できるフロートの最大数です。

```

748 <*article | report | book>
749 \setcounter{topnumber}{2}

```

`\c@bottomnumber` *bottomnumber* は、本文ページの下部に出力できるフロートの最大数です。

```

750 \setcounter{bottomnumber}{1}

```

`\c@totalnumber` *totalnumber* は、本文ページに出力できるフロートの最大数です。

```

751 \setcounter{totalnumber}{3}

```

`\c@dbltopnumber` *dbltopnumber* は、二段組時における、本文ページの上部に出力できる段抜きのフロートの最大数です。

```

752 \setcounter{dbltopnumber}{2}

```

|                                    |                                                                                                                        |
|------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>\topfraction</code>          | これは、本文ページの上部に出力されるフロートが占有できる最大の割り合いです。<br>753 <code>\renewcommand{\topfraction}{.7}</code>                             |
| <code>\bottomfraction</code>       | これは、本文ページの下部に出力されるフロートが占有できる最大の割り合いです。<br>754 <code>\renewcommand{\bottomfraction}{.3}</code>                          |
| <code>\textfraction</code>         | これは、本文ページに最低限、入らなくてはならない本文の割り合いです。<br>755 <code>\renewcommand{\textfraction}{.2}</code>                                |
| <code>\floatpagefraction</code>    | これは、フロートだけのページで最低限、入らなくてはならないフロートの割り合いです。<br>756 <code>\renewcommand{\floatpagefraction}{.5}</code>                    |
| <code>\dbltopfraction</code>       | これは、2 段組時における本文ページに、2 段抜きのフロートが占めることができる最大の割り合いです。<br>757 <code>\renewcommand{\dbltopfraction}{.7}</code>              |
| <code>\dblfloatpagefraction</code> | これは、2 段組時におけるフロートだけのページに最低限、入らなくてはならない 2 段抜きのフロートの割り合いです。<br>758 <code>\renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.5}</code> |

## 22 改ページ（日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ）

`\pltx@cleartorightpage` `\cleardoublepage` 命令は、 $\mathrm{IAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  カーネルでは「奇数ページになるまでページを繰る命令」として定義されています。しかし  $\mathrm{pIAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  カーネルでは、アスキーの方針により「横組では奇数ページになるまで、縦組では偶数ページになるまでページを繰る命令」に再定義されています。すなわち、 $\mathrm{pIAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  では縦組でも横組でも右ページになるまでページを繰ることになります。

$\mathrm{pIAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  標準クラスの `book` は、横組も縦組も `openright` がデフォルトになっていて、これは従来  $\mathrm{pIAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  カーネルで定義された `\cleardoublepage` を利用していました。しかし、縦組で奇数ページ始まりの文書を作りたい場合もあるでしょうから、コミュニティ版クラスでは以下の（非ユーザ向け）命令を追加します。

1. `\pltx@cleartorightpage` : 右ページになるまでページを繰る命令
2. `\pltx@cleartoleftpage` : 左ページになるまでページを繰る命令
3. `\pltx@cleartooddpage` : 奇数ページになるまでページを繰る命令
4. `\pltx@cleartoevenpage` : 偶数ページになるまでページを繰る命令

```

759 \def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
760 \ifodd\c@page
761 \iftdir
762 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
763 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
764 \fi
765 \else
766 \ifydir
767 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
768 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
769 \fi
770 \fi\fi}
771 \def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
772 \ifodd\c@page
773 \ifydir
774 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
775 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
776 \fi
777 \else
778 \iftdir
779 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
780 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
781 \fi
782 \fi\fi}

```

\pltx@cleartooddpage は L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X の \cleardoublepage に似ていますが、上の 2 つに合わせるため \thispagestyle{empty} を追加してあります。

```

783 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
784 \ifodd\c@page\else
785 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
786 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
787 \fi\fi}
788 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
789 \ifodd\c@page
790 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
791 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
792 \fi\fi}

```

\cleardoublepage   そして report と book クラスの場合は、ユーザ向け命令である \cleardoublepage を、openright オプションが指定されている場合は \pltx@cleartorightpage に、openleft オプションが指定されている場合は \pltx@cleartoleftpage に、それぞれ \let します。openany の場合は pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X カーネルの定義のままです。

```

793 <*\article>
794 \if@openleft
795 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
796 \else\if@openright
797 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
798 \fi\fi

```

## 23 ページスタイル

pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> では、つぎの 6 種類のページスタイルを使用できます。empty は `ltpage.dtx` で定義されています。

|                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| <code>empty</code>      | ヘッダにもフッタにも出力しない        |
| <code>plain</code>      | フッタにページ番号のみを出力する       |
| <code>headnombre</code> | ヘッダにページ番号のみを出力する       |
| <code>footnombre</code> | フッタにページ番号のみを出力する       |
| <code>headings</code>   | ヘッダに見出しとページ番号を出力する     |
| <code>bothstyle</code>  | ヘッダに見出し、フッタにページ番号を出力する |

ページスタイル `foo` は、`\ps@foo` コマンドとして定義されます。

`\@evenhead` これらは `\ps@...` から呼び出され、ヘッダとフッタを出力するマクロです。  
`\@oddhead` `\@oddhead` 奇数ページのヘッダを出力  
`\@evenfoot` `\@oddfoot` 奇数ページのフッタを出力  
`\@oddfoot` `\@evenhead` 偶数ページのヘッダを出力  
`\@evenfoot` 偶数ページのフッタを出力  
これらの内容は、横組の場合は `\textwidth` の幅を持つ `\hbox` に入れられ、縦組の場合は `\textheight` の幅を持つ `\hbox` に入れられます。

### 23.1 マークについて

ヘッダに入る章番号や章見出しは、見出しコマンドで実行されるマークコマンドで決定されます。ここでは、実行されるマークコマンドの定義を行なっています。これらのマークコマンドは、T<sub>E</sub>X の `\mark` 機能を用いて、`'left'` と `'right'` の 2 種類のマークを生成するように定義しています。

`\markboth{<LEFT>}{<RIGHT>}`: 両方のマークに追加します。

`\markright{<RIGHT>}`: ‘右’ マークに追加します。

`\leftmark`: `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` マクロで使われ、現在の “左” マークを出力します。`\leftmark` は T<sub>E</sub>X の `\botmark` コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてははいけません。

`\rightmark`: `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` マクロで使われ、現在の “右” マークを出力します。`\rightmark` は T<sub>E</sub>X の `\firstmark` コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてははいけません。

マークコマンドの動作は、左マークの‘範囲内の’右マークのために合理的になっています。たとえば、左マークは`\chapter` コマンドによって変更されます。そして右マークは`\section` コマンドによって変更されます。しかし、同一ページに複数の`\markboth` コマンドが現れたとき、おかしい結果となることがあります。

`\tableofcontents` のようなコマンドは、`\mkboth` コマンドを用いて、あるページスタイルの中でマークを設定しなくてはなりません。`\mkboth` は、`\ps@...` コマンドによって、`\markboth` (ヘッダを設定する) か、`\gobbletwo` (何もしない) に`\let` されます。

## 23.2 plain ページスタイル

`\ps@plain` *jpl@in* に`\let` するために、ここで定義をします。

```
800 \def\ps@plain{\let\mkboth\gobbletwo
801 \let\ps@jpl@in\ps@plain
802 \let\@oddhead\@empty
803 \def\@oddfoot{\reset@font\hfil\thepage\hfil}%
804 \let\@evenhead\@empty
805 \let\@evenfoot\@oddfoot}
```

## 23.3 jpl@in ページスタイル

`\ps@jpl@in` *jpl@in* スタイルは、クラスファイル内部で使用するものです。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X では、book クラスを *headings* としています。しかし、`\tableofcontents` コマンドの内部では *plain* として設定されるため、一つの文書でのページ番号の位置が上下に出力されることになります。

そこで、pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> では、`\tableofcontents` や `\theindex` のページスタイルを *jpl@in* にし、実際に出力される形式は、ほかのページスタイルで`\let` をしています。したがって、*headings* のとき、目次ページのページ番号はヘッダ位置に出力され、*plain* のときには、フッタ位置に出力されます。

ここで、定義をしているのは、その初期値です。

```
806 \let\ps@jpl@in\ps@plain
```

## 23.4 headnombre ページスタイル

`\ps@headnombre` *headnombre* スタイルは、ヘッダにページ番号のみを出力します。

```
807 \def\ps@headnombre{\let\mkboth\gobbletwo
808 \let\ps@jpl@in\ps@headnombre
809 \def\@evenhead{\thepage\hfil}%
810 \def\@oddhead{\hfil\thepage}%
811 \def\@evenhead{\hfil\thepage}%
812 \def\@oddhead{\thepage\hfil}%
813 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty}
```

## 23.5 footnombre ページスタイル

`\ps@footnombre` *footnombre* スタイルは、フッタにページ番号のみを出力します。

```
814 \def\ps@footnombre{\let\mkboth\gobbletwo
815 \let\ps@jpl@in\ps@footnombre
816 <yoko> \def\@evenfoot{\thepage\hfil}%
817 <yoko> \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
818 <tate> \def\@evenfoot{\hfil\thepage}%
819 <tate> \def\@oddfoot{\thepage\hfil}%
820 \let\@oddhead\empty\let\@evenhead\empty}
```

## 23.6 headings スタイル

*headings* スタイルは、ヘッダに見出しとページ番号を出力します。

`\ps@headings` このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

```
821 \if@twoside
```

横組の場合は、奇数ページが右に、偶数ページが左にきます。縦組の場合は、奇数ページが左に、偶数ページが右にきます。

```
822 \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
823 \let\@oddfoot\empty\let\@evenfoot\empty
824 <yoko> \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%
825 <yoko> \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
826 <tate> \def\@evenhead{\leftmark\hfil\thepage}%
827 <tate> \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
828 \let\mkboth\markboth
829 <*article>
830 \def\sectionmark##1{\markboth{%
831 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
832 ##1}{}}%
833 \def\subsectionmark##1{\markright{%
834 \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
835 ##1}}%
836 </article>
837 <*report | book>
838 \def\chaptermark##1{\markboth{%
839 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
840 <book> \if@mainmatter
841 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
842 <book> \fi
843 \fi
844 ##1}{}}%
845 \def\sectionmark##1{\markright{%
846 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
847 ##1}}%
848 </report | book>
849 }
```

片面印刷の場合：

```
850 \else % if not twoside
851 \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
852 \let\@oddfoot\empty
853 \yoko \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
854 \tate \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
855 \let\@mkboth\markboth
856 *article)
857 \def\sectionmark##1{\markright{%
858 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
859 ##1}}%
860 *report | book)
861 \def\chaptermark##1{\markright{%
862 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
863 \if@mainmatter
864 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
865 \fi
866 \fi
867 ##1}}%
868 *report | book)
869 }
870 }
871 \fi
```

## 23.7 bothstyle スタイル

`\ps@bothstyle` *bothstyle* スタイルは、ヘッダに見出しを、フッタにページ番号を出力します。

このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

```
872 \if@twoside
873 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
874 *yoko)
875 \def\@evenhead{\leftmark\hfil}% right page
876 \def\@evenfoot{\thepage\hfil}% right page
877 \def\@oddhead{\hfil\rightmark}% left page
878 \def\@oddfoot{\hfil\thepage}% left page
879 *tate)
880 *yoko)
881 \def\@evenhead{\hfil\leftmark}% right page
882 \def\@evenfoot{\hfil\thepage}% right page
883 \def\@oddhead{\rightmark\hfil}% left page
884 \def\@oddfoot{\thepage\hfil}% left page
885 *tate)
886 \let\@mkboth\markboth
887 *article)
888 \def\sectionmark##1{\markboth{%
889 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
890 ##1}{}}%
891 \def\subsectionmark##1{\markright{%
```



```

892 \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
893 ##1}}}%
894 \end{article}
895 \ifreport|book
896 \def\chaptermark##1{\markboth{%
897 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
898 \ifmainmatter
899 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
900 \book} \fi
901 \fi
902 ##1}}}%
903 \def\sectionmark##1{\markright{%
904 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
905 ##1}}}%
906 \end{report|book}
907 }

908 \else % if one column
909 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
910 \yoko \def\@oddhead{\hfil\rightmark}%
911 \yoko \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
912 \tate \def\@oddhead{\rightmark\hfil}%
913 \tate \def\@oddfoot{\thepage\hfil}%
914 \let\@mkboth\markboth
915 \ifarticle
916 \def\sectionmark##1{\markright{%
917 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
918 ##1}}}%
919 \end{article}
920 \ifreport|book
921 \def\chaptermark##1{\markright{%
922 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
923 \ifmainmatter
924 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
925 \book} \fi
926 \fi
927 ##1}}}%
928 \end{report|book}
929 }
930 \fi

```

## 23.8 myheading スタイル

`\ps@myheadings` *myheadings* ページスタイルは簡潔に定義されています。ユーザがページスタイルを設計するときのヒナ型として使用することができます。

```

931 \def\ps@myheadings{\let\ps@jpl@in\ps@plain%
932 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
933 \yoko \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%
934 \yoko \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%

```

```

935 <tate> \def\@evenhead{\leftmark}\hfil\thepage}%
936 <tate> \def\@oddhead{\thepage}\hfil\rightmark}%
937 \let\@mkboth\@gobbletwo
938 <!article> \let\chaptermark\@gobble
939 \let\sectionmark\@gobble
940 <article> \let\subsectionmark\@gobble
941 }

```

## 24 文書コマンド

### 24.1 表題

`\title` 文書のタイトル、著者、日付の情報のための、これらの3つのコマンドは `ltsect.dtx` で提供されています。これらのコマンドは次のように定義されています。

```

\date 942 %\newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}
943 %\newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}
944 %\newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}

```

`\date` マクロのデフォルトは、今日の日付です。

```
945 %\date{\today}
```

`titlepage` 通常環境では、ページの最初と最後を除き、タイトルページ環境は何もしません。また、ページ番号の出力を抑制します。レポートスタイルでは、ページ番号を1にリセットし、そして最後で1に戻します。互換モードでは、ページ番号はゼロに設定されますが、右起しページ用のページパラメータでは誤った結果になります。二段組スタイルでも一段組のページが作られます。

日本語 *T<sub>E</sub>X* 開発コミュニティによる変更：上にあるのはアスキー版の説明です。改めてアスキー版の挙動を整理すると、以下のようになります。

1. アスキー版では、タイトルページの番号を必ず1にリセットしていましたが、これは正しくありません。これは、タイトルページが奇数ページ目か偶数ページ目かにかかわらず、レイアウトだけ奇数ページ用が適用されてしまうからです。さらに、タイトルの次のページも偶数のページ番号を持つてしまうため、両面印刷で奇数ページと偶数ページが交互に出なくなるという問題もあります。
2. アスキー版 `book` クラスは、タイトルページを必ず `\cleardoublepage` で始めていました。pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X カーネルでの `\cleardoublepage` の定義から、縦組の既定ではタイトルが偶数ページ目に出ることになります。これ自体が正しくないと断定することはできませんが、タイトルのページ番号を1にリセットすることと合わさって、偶数ページに送ったタイトルに奇数ページ用レイアウトが適用されてしまうという結果は正しくありません。

そこで、コミュニティ版ではタイトルのレイアウトが必ず奇数ページ用になるという挙動を支持し、book クラスではタイトルページを奇数ページ目に送ることにしました。これでタイトルページが表紙らしく見えるようになります。また、report クラスのようなタイトルが成り行きに従って出る場合には

- 奇数ページ目に出る場合、ページ番号を 1（奇数）にリセット
- 偶数ページ目に出る場合、ページ番号を 0（偶数）にリセット

としました。

一つめの例を考えます。

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

- 1 ページ目：空白（ページ番号 1 は非表示）
- 2 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 3 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

ですが、仮に最初の空白ページさえなければ

- 1 ページ目：タイトルすなわち表紙（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 2 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

とみなせるため、コミュニティ版では空白ページを発生させないようにしました。

二つめの例を考えます。

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
テスト文章
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

- 1 ページ目：テスト文章（奇数レイアウト、ページ番号 1）
- 2 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 3 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

ですが、これでは奇数と偶数のページ番号が交互になっていないので正しくありません。そこで、コミュニティ版では

- 1 ページ目：テスト文章（奇数レイアウト、ページ番号 1）
- 2 ページ目：空白ページ（ページ番号 2 は非表示）
- 3 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 4 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

と直しました。

なお、pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2.09 互換モードはアスキー版のまま、すなわち「ページ番号をゼロに設定」としてあります。これは、横組の右起こしの挙動としては誤りですが、縦組の右起こしの挙動としては一応正しくなっているといえます。

最初に互換モードの定義を作ります。

```

946 \if@compatibility
947 \newenvironment{titlepage}
948 {%
949 <book> \cleardoublepage
950 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
951 \else\@restonecolfalse\newpage\fi
952 \thispagestyle{empty}%
953 \setcounter{page}\z@
954 }%
955 {\if@restonecol\twocolumn\else\newpage\fi
956 }
```

そして、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ネイティブのための定義です。

```

957 \else
958 \newenvironment{titlepage}
959 {%
960 <book> \pltx@cleartooddpage %% 2017/02/15
961 \if@twocolumn
962 \@restonecoltrue\onecolumn
963 \else
964 \@restonecolfalse\newpage
965 \fi
966 \thispagestyle{empty}%
967 \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017/02/15
968 }%
969 {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
```

両面モードでなければ、タイトルページの直後のページのページ番号も 1 にします。

```

970 \if@twoside\else
971 \setcounter{page}\@ne
972 \fi
973 }
974 \fi
```

`\maketitle` このコマンドは、表題を作成し、出力します。表題ページを独立させるかどうかによって定義が異なります。report と book クラスのデフォルトは独立した表題です。article クラスはオプションで独立させることができます。

`\p@thanks` 縦組のときは、`\thanks` コマンドを `\p@thanks` に `\let` します。このコマンドは `\footnotetext` を使わず、直接、文字を `\@thanks` に格納していきます。

著者名の脇に表示される合印は直立した数字、注釈側は横に寝た数字となっていました。不自然なので `\hbox{\yoko ...}` を追加し、両方とも直立するようにしました。

```

975 \def\p@thanks#1{\footnotemark
976 \protected@xdef\@thanks{\@thanks
977 \protect{\noindent\hbox{\yoko$\m@th^{\thefootnote$}\#1\protect\par}}}}

978 \if@titlepage
979 \newcommand{\maketitle}{\begin{titlepage}%
980 \let\footnotesize\small
981 \let\footnoterule\relax
982 \tate \let\thanks\p@thanks
983 \let\footnote\thanks

984 \vbox to\textheight\bgroup\tate\hsize\textwidth
985 \null\vfil
986 \vskip 60\p@
987 \begin{center}%
988 {\LARGE \@title \par}%
989 \vskip 3em%
990 {\Large
991 \lineskip .75em%
992 \begin{tabular}[t]{c}%
993 \@author
994 \end{tabular}\par}%
995 \vskip 1.5em%
996 {\large \@date \par}% % Set date in \large size.
997 \end{center}\par
998 \tate \vfil{\centering\@thanks}\vfil\null
999 \tate \egroup
1000 \yoko \@thanks\vfil\null
1001 \end{titlepage}%

```

`footnote` カウンタをリセットし、`\thanks` と `\maketitle` コマンドを無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```

1002 \setcounter{footnote}{0}%
1003 \global\let\thanks\relax
1004 \global\let\maketitle\relax
1005 \global\let\p@thanks\relax
1006 \global\let\@thanks\@empty
1007 \global\let\@author\@empty
1008 \global\let\@date\@empty
1009 \global\let\@title\@empty

```

タイトルが組版されたら、`\title` コマンドなどの宣言を無効にできます。`\and` の定義は、`\author` の引数でのみ使用しますので、破棄します。

```

1010 \global\let\title\relax
1011 \global\let\author\relax
1012 \global\let\date\relax
1013 \global\let\and\relax
1014 }%
1015 \else
1016 \newcommand{\maketitle}{\par
1017 \begin{group}
1018 \renewcommand{\thefootnote}{\fnsymbol{footnote}}%
1019 \def\@makefnmark{\hbox{\ifdir $\m@th^{\@thefnmark}$
1020 \else\hbox{\yoko$\m@th^{\@thefnmark}$}\fi}}%
1021 \tate
1022 \long\def\@makefntext##1{\parindent 1zw\noindent
1023 \hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}##1}%
1024 \tate
1025 \yoko
1026 \long\def\@makefntext##1{\parindent 1em\noindent
1027 \hb@xt@ 1.8em{\hss$\m@th^{\@thefnmark}$}##1}%
1028 \yoko
1029 \if@twocolumn
1030 \ifnum \col@number=\@ne \maketitle
1031 \else \twocolumn[\maketitle]%
1032 \fi
1033 \else
1034 \newpage
1035 \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
1036 \maketitle
1037 \fi
1038 \thispagestyle{jpl@in}\@thanks

```

ここでグループを閉じ、*footnote* カウンタをリセットし、`\thanks`、`\maketitle`、`\@maketitle` を無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```

1039 \endgroup
1040 \setcounter{footnote}{0}%
1041 \global\let\thanks\relax
1042 \global\let\maketitle\relax
1043 \global\let\@maketitle\relax
1044 \global\let\p@thanks\relax
1045 \global\let\@thanks\@empty
1046 \global\let\@author\@empty
1047 \global\let\@date\@empty
1048 \global\let\@title\@empty
1049 \global\let\title\relax
1050 \global\let\author\relax
1051 \global\let\date\relax
1052 \global\let\and\relax
1053 }

```

`\@maketitle` 独立した表題ページを作らない場合の、表題の出力形式です。

```
1054 \def\@maketitle{%
1055 \newpage\null
1056 \vskip 2em%
1057 \begin{center}%
1058 \yoko \let\footnote\thanks
1059 \tate \let\footnote\p@thanks
1060 {\LARGE \@title \par}%
1061 \vskip 1.5em%
1062 {\large
1063 \lineskip .5em%
1064 \begin{tabular}[t]{c}%
1065 \@author
1066 \end{tabular}\par}%
1067 \vskip 1em%
1068 {\large \@date}%
1069 \end{center}%
1070 \par\vskip 1.5em}
1071 \fi
```

## 24.2 概要

`abstract` 要約文のための環境です。book クラスでは使えません。report スタイルと、`titlepage` オプションを指定した article スタイルでは、独立したページに出力されます。

```
1072 \if*article|report
1073 \if@titlepage
1074 \newenvironment{abstract}{%
1075 \titlepage
1076 \null\vfil
1077 \@beginparpenalty\@lowpenalty
1078 \begin{center}%
1079 {\bfseries\abstractname}%
1080 \@endparpenalty\@M
1081 \end{center}}%
1082 {\par\vfil\null\endtitlepage}
1083 \else
1084 \newenvironment{abstract}{%
1085 \if@twocolumn
1086 \section*{\abstractname}%
1087 \else
1088 \small
1089 \begin{center}%
1090 {\bfseries\abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z@}}%
1091 \end{center}%
1092 \quotation
1093 \fi}{\if@twocolumn\else\endquotation\fi}
1094 \fi
1095 \if*article|report
```

## 24.3 章見出し

### 24.3.1 マークコマンド

`\chaptermark` `\...mark` コマンドを初期化します。これらのコマンドはページスタイルの定義で使われます (第 23 節参照)。これらのたいていのコマンドは `ltsect.dtx` ですでに定義されています。

`\subsubsectionmark` 1096 `\newcommand*{\chaptermark}[1]{}`  
1097 `%\newcommand*{\sectionmark}[1]{}`  
`\paragraphmark` 1098 `%\newcommand*{\subsectionmark}[1]{}`  
1099 `%\newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{}`  
`\subparagraphmark` 1100 `%\newcommand*{\paragraphmark}[1]{}`  
1101 `%\newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}`

### 24.3.2 カウンタの定義

`\c@secnumdepth` `secnumdepth` には、番号を付ける、見出しコマンドのレベルを設定します。

1102 `\setcounter{secnumdepth}{3}`  
1103 `\setcounter{secnumdepth}{2}`

`\c@chapter` これらのカウンタは見出し番号に使われます。最初の引数は、二番目の引数が増加するたびにリセットされます。二番目のカウンタはすでに定義されているものでなくてはなりません。

`\c@subsection`

1104 `\newcounter{part}`  
`\c@paragraph` 1105 `\newcounter{chapter}`  
1106 `\newcounter{section}`  
`\c@subparagraph` 1107 `\newcounter{subsection}`  
1108 `\newcounter{subsubsection}`  
1109 `\newcounter{paragraph}`  
1110 `\newcounter{subparagraph}`  
1111 `\newcounter{part}`  
1112 `\newcounter{chapter}`  
1113 `\newcounter{section}`  
1114 `\newcounter{subsection}`  
1115 `\newcounter{subsubsection}`  
1116 `\newcounter{paragraph}`  
1117 `\newcounter{subparagraph}`

`\thepart` `\theCTR` が実際に出力される形式の定義です。

`\thechapter` `\arabic{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を算用数字で出力します。

`\thesection` `\roman{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を小文字のローマ数字で出力します。

`\thesubsection` `\Roman{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を大文字のローマ数字で出力します。

`\thesubsubsection` `\alph{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を 1 = a, 2 = b のようにして出力します。

`\theparagraph` `\Alph{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を 1 = A, 2 = B のようにして出力します。

`\thesubparagraph` `\kanji{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を漢数字で出力します。



`\rensuji{<obj>}`は、`<obj>`を横に並べて出力します。したがって、横組のときには、何も影響しません。

```

1114 <*tate>
1115 \renewcommand{\thepart}{\rensuji{\@Roman\c@part}}
1116 <article>\renewcommand{\thesection}{\rensuji{\@arabic\c@section}}
1117 <*report | book>
1118 \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@arabic\c@chapter}}
1119 \renewcommand{\thesection}{\thechapter · \rensuji{\@arabic\c@section}}
1120 </report | book>
1121 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection · \rensuji{\@arabic\c@subsection}}
1122 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
1123 \thesubsection · \rensuji{\@arabic\c@subsubsection}}
1124 \renewcommand{\theparagraph}{%
1125 \thesubsubsection · \rensuji{\@arabic\c@paragraph}}
1126 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
1127 \theparagraph · \rensuji{\@arabic\c@subparagraph}}
1128 </tate>
1129 <*yoko>
1130 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
1131 <article>\renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
1132 <*report | book>
1133 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
1134 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
1135 </report | book>
1136 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\@arabic\c@subsection}
1137 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
1138 \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
1139 \renewcommand{\theparagraph}{%
1140 \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
1141 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
1142 \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
1143 </yoko>

```

`\@chapapp` `\@chapapp` の初期値は `'\prechaptername'` です。

`\@chappos` `\@chappos` の初期値は `'\postchaptername'` です。

`\appendix` コマンドは `\@chapapp` を `'\appendixname'` に、`\@chappos` を空に再定義します。

```

1144 <*report | book>
1145 \newcommand{\@chapapp}{\prechaptername}
1146 \newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
1147 </report | book>

```

### 24.3.3 前付け、本文、後付け

`\frontmatter` 一冊の本は論理的に3つに分割されます。表題や目次や「はじめに」あるいは権利

`\mainmatter` などの前付け、そして本文、それから用語集や索引や奥付けなどの後付けです。

`\backmatter`

日本語  $T_E X$  開発コミュニティによる補足： $L_A T_E X$  の `classes.dtx` は、1996/05/26 (v1.3r) と 1998/05/05 (v1.3y) の計 2 回、`\frontmatter` と `\mainmatter` の定義を修正しています。一回目はこれらの命令を `openany` オプションに応じて切り替え、二回目はそれを元に戻しています。アスキーによる `jclasses.dtx` は、1997/01/15 に一回目の修正に追随しましたが、二回目の修正には追随していません。コミュニティ版では、一旦はアスキーによる仕様を維持しようと考えました (2016/11/22) が、以下の理由により二回目の修正にも追随することにしました (2017/03/05)。

アスキー版での `\frontmatter` と `\mainmatter` の改ページ挙動は

`openright` なら `\cleardoublepage`、`openany` なら `\clearpage` を実行

というものでした。しかし、`\frontmatter` 及び `\mainmatter` はノンブルを 1 にリセットしますから、改ページの結果が偶数ページ目になる場合<sup>4</sup>にノンブルが偶奇逆転してしまいました。このままでは `openany` の場合に両面印刷がうまくいかないため、新しいコミュニティ版では

必ず `\pltx@cleartooddpage` を実行

としました。これは両面印刷 (twoside) の場合は奇数ページに送り、片面印刷 (oneside) の場合は単に改ページとなります。(参考：[latex/2754](#))

```
1148 <*book>
1149 \newcommand{\frontmatter}{%
1150 \pltx@cleartooddpage
1151 \@mainmatterfalse\pagenumbering{roman}}
1152 \newcommand{\mainmatter}{%
1153 \pltx@cleartooddpage
1154 \@mainmattertrue\pagenumbering{arabic}}
1155 \newcommand{\backmatter}{%
1156 \if@openleft \cleardoublepage \else
1157 \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1158 \@mainmatterfalse}
1159 </book>
```

#### 24.3.4 ボックスの組み立て

クラスファイル定義の、この部分では、`\@startsection` と `\secdef` の二つの内部マクロを使います。これらの構文を次に示します。

`\@startsection` マクロは 6 つの引数と 1 つのオプション引数 `*` を取ります。  
`\@startsection<name><level><indent><beforeskip><afterskip><style> optional *`  
`[\<altheading>]<heading>`

それぞれの引数の意味は、次のとおりです。

<sup>4</sup>縦 `tbook` のデフォルト (`openright`) が該当するほか、横 `jbook` と縦 `tbook` の `openany` のときには成り行き次第で該当する可能性があります。

〈*name*〉 レベルコマンドの名前です (例:section)。

〈*level*〉 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。 “〈*level*〉 ≤ カウンタ *secnumdepth* の値” のとき、見出し番号が出力されます。

〈*indent*〉 見出しに対する、左マージンからのインデント量です。

〈*beforeskip*〉 見出しの上に置かれる空白の絶対値です。負の場合は、見出しに続くテキストのインデントを抑制します。

〈*afterskip*〉 正のとき、見出しの後の垂直方向のスペースとなります。負の場合は、見出しの後の水平方向のスペースとなります。

〈*style*〉 見出しのスタイルを設定するコマンドです。

(\*) 見出し番号を付けないとき、対応するカウンタは増加します。

〈*heading*〉 新しい見出しの文字列です。

見出しコマンドは通常、`\@startsection` と 6 つの引数で定義されています。

`\secdef` マクロは、見出しコマンドを `\@startsection` を用いずに定義するときに使います。このマクロは、2 つの引数を持ちます。

```
\secdef<unstarcmds><starcmds>
```

〈*unstarcmds*〉 見出しコマンドの普通の形式で使われます。

〈*starcmds*〉 \* 形式の見出しコマンドで使われます。

`\secdef` は次のようにして使うことができます。

```
\def\chapter {... \secdef \CMDA \CMDB }
\def\CMDA [#1]#2{...} % \chapter[...]{...} の定義
\def\CMDB #1{...} % \chapter*{...} の定義
```

### 24.3.5 part レベル

`\part` このコマンドは、新しいパート (部) をはじめます。

article クラスの場合は、簡単です。

新しい段落を開始し、小さな空白を入れ、段落後のインデントを行い、`\secdef` で作成します。(アスキーによる元のドキュメントには「段落後のインデントをしないようにし」と書かれていましたが、実際のコードでは段落後のインデントを行っていました。そこで日本語  $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$  開発コミュニティは、ドキュメントをコードに合わせて「段落後のインデントを行い」へと修正しました。)

1160 〈*\*article*〉

```

1161 \newcommand{\part}{%
1162 \if@noskipsec \leavevmode \fi
1163 \par\advspace{4ex}%
1164 \@afterindenttrue
1165 \secdef\@part\@spart}
1166 \end{article}

```

report と book スタイルの場合は、少し複雑です。

まず、右ページからはじまるように改ページをします。そして、部扉のページスタイルを `empty` にします。2 段組の場合でも、1 段組で作成しますが、後ほど 2 段組に戻すために、`\@restonecol` スイッチを使います。

```

1167 \report | book}
1168 \newcommand{\part}{%
1169 \if@openleft \cleardoublepage \else
1170 \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1171 \thispagestyle{empty}%
1172 \if@twocolumn\onecolumn\@tempwattrue\else\@tempwafalse\fi
1173 \null\vfil
1174 \secdef\@part\@spart}
1175 \end{report | book}

```

`\@part` このマクロが実際に部レベルの見出しを作成します。このマクロも文書クラスによって定義が異なります。

article クラスの場合は、`secnumdepth` が  $-1$  よりも大きいとき、見出し番号を付けます。このカウンタが  $-1$  以下の場合には付けません。

```

1176 \article}
1177 \def\@part[#1]#2{%
1178 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1179 \refstepcounter{part}%
1180 \addcontentsline{toc}{part}{%
1181 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1zw}#1}%
1182 \else
1183 \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1184 \fi
1185 \markboth{}{}%
1186 {\parindent\z@\raggedright
1187 \interlinepenalty\@M\normalfont
1188 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1189 \Large\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
1190 \par\nobreak
1191 \fi
1192 \huge\bfseries#2\par}%
1193 \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
1194 \end{article}

```

report と book クラスの場合は、`secnumdepth` が  $-2$  よりも大きいときに、見出し番号を付けます。 $-2$  以下では付けません。

```

1195 <*report | book>
1196 \def\@part[#1]#2{%
1197 \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1198 \refstepcounter{part}%
1199 \addcontentsline{toc}{part}{%
1200 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1em}#1}%
1201 \else
1202 \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1203 \fi
1204 \markboth{}{}%
1205 {\centering
1206 \interlinepenalty\@M\normalfont
1207 \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1208 \huge\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
1209 \par\vskip20\p@
1210 \fi
1211 \Huge\bfseries#2\par}%
1212 \@endpart}
1213 </report | book>

```

`\@spart` このマクロは、番号を付けないときの体裁です。

```

1214 <*article>
1215 \def\@spart#1{%
1216 \parindent\z@\raggedright
1217 \interlinepenalty\@M\normalfont
1218 \huge\bfseries#1\par}%
1219 \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
1220 </article>

1221 <*report | book>
1222 \def\@spart#1{%
1223 \centering
1224 \interlinepenalty\@M\normalfont
1225 \Huge\bfseries#1\par}%
1226 \@endpart}
1227 </report | book>

```

`\@endpart` `\@part` と `\@spart` の最後で実行されるマクロです。両面印刷モードのときは、白ページを追加します。二段組モードのときには、これ以降のページを二段組に戻します。2016 年 12 月から、`openany` のときに白ページを追加するのをやめました。このバグは L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X では `classes.dtx` v1.4b (2000/05/19) で修正されていました。(参考: latex/3155、texjporg/jsclasses#48)

```

1228 <*report | book>
1229 \def\@endpart{\vfil\newpage
1230 \if@twoside
1231 \if@openleft %% \if@openleft added (2017/02/15)
1232 \null\thispagestyle{empty}\newpage
1233 \else\if@openright %% \if@openright added (2016/12/18)

```

```

1234 \null\thispagestyle{empty}\newpage
1235 \fi\fi %% added (2016/12/18, 2017/02/15)
1236 \fi

```

二段組文書のとき、スイッチを二段組モードに戻す必要があります。

```

1237 \if@tempswa\twocolumn\fi}
1238 \</report | book>

```

### 24.3.6 chapter レベル

**chapter** 章レベルは、必ずページの先頭から開始します。openright オプションが指定されている場合は、右ページからはじまるように \cleardoublepage を呼び出します。そうでなければ、\clearpage を呼び出します。なお、縦組の場合でも右ページからはじまるように、フォーマットファイルで \clerdoublepage が定義されています。

日本語 *T<sub>E</sub>X* 開発コミュニティによる補足：コミュニティ版の実装では、openright と openleft の場合に \cleardoublepage をクラスファイルの中で再々定義しています。22 を参照してください。

章見出しが出力されるページのスタイルは、jpl@in になります。jpl@in は、headnomble か footnomble のいずれかです。詳細は、第 23 節を参照してください。

また、\@topnum をゼロにして、章見出しの上にトップフロートが置かれないうにしています。

```

1239 \<*report | book>
1240 \newcommand{\chapter}{%
1241 \if@openleft \cleardoublepage \else
1242 \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1243 \thispagestyle{jpl@in}%
1244 \global\@topnum\z@
1245 \afterindenttrue
1246 \secdef\@chapter\@schapter}

```

**\@chapter** このマクロは、章見出しに番号を付けるときに呼び出されます。secnumdepth が -1 よりも大きく、\@mainmatter が真 (book クラスの場合) のときに、番号を出力します。

日本語 *T<sub>E</sub>X* 開発コミュニティによる補足：本家 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X の classes では、二段組のときチャプタータイトルは一段組に戻されますが、アスキーによる jclasses では二段組のままにされています。したがって、チャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るという挙動になっていますが、コミュニティ版でもアスキー版の挙動を維持しています。

```

1247 \def\@chapter[#1]#2{%
1248 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1249 \<book> \if@mainmatter
1250 \refstepcounter{chapter}%

```

```

1251 \typeout{\@chapapp\space\thechapter\space\@chappos}%
1252 \addcontentsline{toc}{chapter}%
1253 {\protect\numberline{\@chapapp\thechapter\@chappos}#1}%
1254 <book> \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
1255 \else
1256 \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
1257 \fi
1258 \chaptermark{#1}%
1259 \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\p@}}%
1260 \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\p@}}%
1261 \@makechapterhead{#2}\@afterheading

```

`\@makechapterhead` このマクロが実際に章見出しを組み立てます。

```

1262 \def\@makechapterhead#1{\hbox{}%
1263 \vskip2\Cvs
1264 {\parindent\z@
1265 \raggedright
1266 \normalfont\huge\bfseries
1267 \leavevmode
1268 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1269 \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1270 <book> \if@mainmatter
1271 \setbox\z@\hbox{\@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw}%
1272 \addtolength\@tempdima{-\wd\z@}%
1273 \unhbox\z@\nobreak
1274 <book> \fi
1275 \vtop{\hsize\@tempdima#1}%
1276 \else
1277 #1\relax
1278 \fi}\nobreak\vskip3\Cvs}

```

`\@schapter` このマクロは、章見出しに番号を付けないときに呼び出されます。

日本語 *T<sub>E</sub>X* 開発コミュニティによる補足：やはり二段組でチャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るといふ挙動を維持してあります。

```

1279 \def\@schapter#1{%
1280 \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
1281 }

```

`\@makeschapterhead` 番号を付けない場合の形式です。

```

1282 \def\@makeschapterhead#1{\hbox{}%
1283 \vskip2\Cvs
1284 {\parindent\z@
1285 \raggedright
1286 \normalfont\huge\bfseries
1287 \leavevmode
1288 \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1289 \vtop{\hsize\@tempdima#1}}\vskip3\Cvs}
1290 </report | book>

```

### 24.3.7 下位レベルの見出し

`\section` 見出しの前後に空白を付け、`\Large\bfseries` で出力をします。

```
1291 \newcommand{\section}{\@startsection{section}{1}{\z@}%
1292 {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%
1293 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%
1294 {\normalfont\Large\bfseries}}
```

`\subsection` 見出しの前後に空白を付け、`\large\bfseries` で出力をします。

```
1295 \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
1296 {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%
1297 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%
1298 {\normalfont\large\bfseries}}
```

`\subsubsection` 見出しの前後に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。

```
1299 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
1300 {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%
1301 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%
1302 {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

`\paragraph` 見出しの前に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。見出しの後ろで改行されません。

```
1303 \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
1304 {3.25ex \@plus 1ex \@minus .2ex}%
1305 {-1em}%
1306 {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

`\subparagraph` 見出しの前に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。見出しの後ろで改行されません。

```
1307 \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
1308 {3.25ex \@plus 1ex \@minus .2ex}%
1309 {-1em}%
1310 {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

### 24.3.8 付録

`\appendix` article クラスの場合、`\appendix` コマンドは次のことを行ないます。

- `section` と `subsection` カウンタをリセットする。
- `\thesection` を英小文字で出力するように再定義する。

```
1311 \<article>
1312 \newcommand{\appendix}{\par
1313 \setcounter{section}{0}%
1314 \setcounter{subsection}{0}%
```



```

1315 <tate> \renewcommand{\thesection}{\rensuji{\@Alph{c@section}}}
1316 <yoko> \renewcommand{\thesection}{\@Alph{c@section}}
1317 </article>

```

report と book クラスの場合、\appendix コマンドは次のことを行ないます。

- chapter と section カウンタをリセットする。
- \@chapapp を \appendixname に設定する。
- \@chappos を空にする。
- \thechapter を英小文字で出力するように再定義する。

```

1318 <*report | book>
1319 \newcommand{\appendix}{\par
1320 \setcounter{chapter}{0}%
1321 \setcounter{section}{0}%
1322 \renewcommand{\@chapapp}{\appendixname}%
1323 \renewcommand{\@chappos}{\space%
1324 <tate> \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@Alph{cchapter}}}
1325 <yoko> \renewcommand{\thechapter}{\@Alph{cchapter}}
1326 </report | book>

```

## 24.4 リスト環境

ここではリスト環境について説明をしています。

リスト環境のデフォルトは次のように設定されます。

まず、\rightmargin, \listparindent, \itemindent をゼロにします。そして、K 番目のレベルのリストは \@listK で示されるマクロが呼び出されます。ここで ‘K’ は小文字のローマ数字で示されます。たとえば、3 番目のレベルのリストとして \@listiii が呼び出されます。 \@listK は \leftmargin を \leftmarginK に設定します。

```

\leftmargin 二段組モードのマージンは少しだけ小さく設定してあります。
\leftmargini 1327 \if@twocolumn
1328 \setlength\leftmargini {2em}
\leftmarginii 1329 \else
1330 \setlength\leftmargini {2.5em}
\leftmarginiii 1331 \fi
\leftmarginiv
\leftmarginv 次の3つの値は、\labelsep とデフォルトラベル (‘(m)’, ‘vii.’, ‘M.’) の幅の合計より
\leftmarginvi りも大きくしてあります。
1332 \setlength\leftmarginii {2.2em}
1333 \setlength\leftmarginiii {1.87em}
1334 \setlength\leftmarginiv {1.7em}

```

```

1335 \if@twocolumn
1336 \setlength\leftmarginv {.5em}
1337 \setlength\leftmarginvi {.5em}
1338 \else
1339 \setlength\leftmarginv {1em}
1340 \setlength\leftmarginvi {1em}
1341 \fi

```

`\labelsep` `\labelsep` はラベルとテキストの項目の間の距離です。`\labelwidth` はラベルの幅です。

```

1342 \setlength \labelsep {.5em}
1343 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
1344 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}

```

`\@beginparpenalty` これらのペナルティは、リストや段落環境の前後に挿入されます。

`\@endparpenalty`  
`\@itempenalty` このペナルティは、リスト項目の間に挿入されます。

```

1345 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
1346 \@endparpenalty -\@lowpenalty
1347 \@itempenalty -\@lowpenalty
1348 </article | report | book>

```

`\partopsep` リスト環境の前に空行がある場合、`\parskip` と `\topsep` に `\partopsep` が加えられた値の縦方向の空白が取られます。

```

1349 <10pt>\setlength\partopsep{2\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
1350 <11pt>\setlength\partopsep{3\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
1351 <12pt>\setlength\partopsep{3\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

```

`\@listi` `\@listi` は、`\leftmargin`, `\parsep`, `\topsep`, `\itemsep` などのトップレベルの定義をします。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます（たとえば、`\small` の中では“小さい” リストパラメータになります）。

このため、`\normalsize` がすべてのパラメータを戻せるように、`\@listI` は `\@listi` のコピーを保存するように定義されています。

```

1352 <*10pt | 11pt | 12pt>
1353 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
1354 <*10pt>
1355 \parsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1356 \topsep 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
1357 \itemsep4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
1358 </10pt>
1359 <*11pt>
1360 \parsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1361 \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
1362 \itemsep4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
1363 </11pt>
1364 <*12pt>

```

```

1365 \parsep 5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@
1366 \topsep 10\p@ \@plus4\p@ \@minus6\p@
1367 \itemsep5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@}
1368 </12pt>
1369 \let\@listI\@listi

```

ここで、パラメータを初期化しますが、厳密には必要ありません。

```

1370 \@listi

```

\@listii 下位レベルのリスト環境のパラメータの設定です。これらは保存用のバージョンを  
\@listiii 持たないことと、フォントサイズコマンドによって変更されないことに注意をして  
\@listiv ください。言い換えれば、このクラスは、本文サイズが\normalsize で現れるリス  
\@listv トの入れ子についてだけ考えています。

```

\@listvi 1371 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
1372 \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
1373 <*10pt>
1374 \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1375 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1376 </10pt>
1377 <*11pt>
1378 \topsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1379 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1380 </11pt>
1381 <*12pt>
1382 \topsep 5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@
1383 \parsep 2.5\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1384 </12pt>
1385 \itemsep\parsep}
1386 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
1387 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
1388 <10pt> \topsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1389 <11pt> \topsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1390 <12pt> \topsep 2.5\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1391 \parsep\z@
1392 \partopsep \p@ \@plus\z@ \@minus\p@
1393 \itemsep\topsep}
1394 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
1395 \labelwidth\leftmarginiv
1396 \advance\labelwidth-\labelsep}
1397 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
1398 \labelwidth\leftmarginv
1399 \advance\labelwidth-\labelsep}
1400 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
1401 \labelwidth\leftmarginvi
1402 \advance\labelwidth-\labelsep}
1403 </10pt | 11pt | 12pt>

```

### 24.4.1 enumerate 環境

enumerate 環境は、カウンタ `enumi`, `enumii`, `enumiii`, `enumiv` を使います。 `enumN` は N 番目のレベルの番号を制御します。

`\theenumi` 出力する番号の書式を設定します。これらは、すでに `ltlists.dtx` で定義されています。  
`\theenumii` ます。

```
\theenumiii 1404 <*article | report | book>
\theenumiv 1405 <*tate>
1406 \renewcommand{\theenumi}{\rensuji{\@arabic\c@enumi}}
1407 \renewcommand{\theenumii}{\rensuji{\@alph\c@enumii}}
1408 \renewcommand{\theenumiii}{\rensuji{\@roman\c@enumiii}}
1409 \renewcommand{\theenumiv}{\rensuji{\@Alph\c@enumiv}}
1410 </tate>
1411 <*yoko>
1412 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
1413 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
1414 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
1415 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
1416 </yoko>
```

`\labelenumi` enumerate 環境のそれぞれの項目のラベルは、`\labelenumi` ... `\labelenumiv` で生成されます。

```
\labelenumiii 1417 <*tate>
\labelenumiv 1418 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi}
1419 \newcommand{\labelenumii}{\theenumii}
1420 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii}
1421 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv}
1422 </tate>
1423 <*yoko>
1424 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
1425 \newcommand{\labelenumii}{(\theenumii)}
1426 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
1427 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
1428 </yoko>
```

`\p@enumii` `\ref` コマンドによって、enumerate 環境の N 番目のリスト項目が参照されるとき  
`\p@enumiii` の書式です。

```
\p@enumiv 1429 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
1430 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi(\theenumii)}
1431 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

`enumerate` トップレベルで使われたときに、最初と最後に平行分のスペースを開けるように、変更します。この環境は、`ltlists.dtx` で定義されています。

```
1432 \renewenvironment{enumerate}
1433 {\ifnum \@enumdepth >\thr@@\@toodeep\else
```

```

1434 \advance\@enumdepth\@ne
1435 \edef\@enumctr{enum\romannumeral\the\@enumdepth}%
1436 \expandafter \list \csname label\@enumctr\endcsname{%
1437 \iftdir
1438 \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1439 \else\topsep\z@\fi
1440 \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1441 \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1442 \ifnum \@enumdepth=\@ne \leftmargin1zw\relax
1443 \else\leftmargin\leftskip\fi
1444 \advance\leftmargin 1zw
1445 \fi
1446 \usecounter{\@enumctr}%
1447 \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%
1448 \fi}{\endlist}

```

#### 24.4.2 itemize 環境

`\labelitemi` itemize 環境のそれぞれの項目のラベルは、`\labelenumi ... \labelenumiv` で生成されます。

```

\labelitemiii 1449 \newcommand{\labelitemi}{\textbullet}
\labelitemii 1450 \newcommand{\labelitemii}{%
1451 \iftdir
1452 {\textcircled{~}}
1453 \else
1454 {\normalfont\bfseries\textendash}
1455 \fi
1456 }
1457 \newcommand{\labelitemiii}{\textasteriskcentered}
1458 \newcommand{\labelitemiv}{\textperiodcentered}

```

`itemize` トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、変更します。この環境は、`ltlists.dtx` で定義されています。

```

1459 \renewenvironment{itemize}
1460 {\ifnum \@itemdepth >\thr@@\@toodeep\else
1461 \advance\@itemdepth\@ne
1462 \edef\@itemitem{labelitem\romannumeral\the\@itemdepth}%
1463 \expandafter \list \csname \@itemitem\endcsname{%
1464 \iftdir
1465 \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1466 \else\topsep\z@\fi
1467 \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1468 \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1469 \ifnum \@itemdepth =\@ne \leftmargin1zw\relax
1470 \else\leftmargin\leftskip\fi
1471 \advance\leftmargin 1zw
1472 \fi
1473 \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%

```

```
1474 \fi}{\endlist}
```

### 24.4.3 description 環境

**description** description 環境を定義します。縦組時には、インデントが3字分だけ深くなります。

```
1475 \newenvironment{description}
1476 {\list{}{\labelwidth\z@ \itemindent-\leftmargin
1477 \iftdir
1478 \leftmargin\leftskip \advance\leftmargin3\Cwd
1479 \rightmargin\rightskip
1480 \labelsep=1zw \itemsep\z@
1481 \listparindent\z@ \topskip\z@ \parskip\z@ \partopsep\z@
1482 \fi
1483 \let\makelabel\descriptionlabel}}{\endlist}
```

**\descriptionlabel** ラベルの形式を変更する必要がある場合は、**\descriptionlabel** を再定義してください。

```
1484 \newcommand{\descriptionlabel}[1]{%
1485 \hspace\labelsep\normalfont\bfseries #1}
```

### 24.4.4 verse 環境

**verse** verse 環境は、リスト環境のパラメータを使って定義されています。改行をするには **\\** を用います。**\\** は **\@centercr** に **\let** されています。

```
1486 \newenvironment{verse}
1487 {\let\\ \@centercr
1488 \list{}{\itemsep\z@ \itemindent -1.5em%
1489 \listparindent\itemindent
1490 \rightmargin\leftmargin \advance\leftmargin 1.5em}%
1491 \item\relax}{\endlist}
```

### 24.4.5 quotation 環境

**quotation** quotation 環境もまた、list 環境のパラメータを使用して定義されています。この環境の各行は、**\textwidth** よりも小さく設定されています。この環境における、段落の最初の行はインデントされます。

```
1492 \newenvironment{quotation}
1493 {\list{}{\listparindent 1.5em%
1494 \itemindent\listparindent
1495 \rightmargin\leftmargin
1496 \parsep\z@ \@plus\p@}%
1497 \item\relax}{\endlist}
```

#### 24.4.6 quote 環境

`quote` `quote` 環境は、段落がインデントされないことを除き、`quotation` 環境と同じです。

```
1498 \newenvironment{quote}
1499 {\list{}{\rightmargin\leftmargin}%
1500 \item\relax}{\endlist}
```

### 24.5 フロート

`ltfloat.dtx` では、フロートオブジェクトを操作するためのツールしか定義していません。タイプが `TYPE` のフロートオブジェクトを扱うマクロを定義するには、次の変数が必要です。

`\fps@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートを置くデフォルトの位置です。

`\ftype@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートの番号です。各 `TYPE` には、一意な、2 の倍数の `TYPE` 番号を割り当てます。たとえば、図が番号 1 ならば、表は 2 です。次のタイプは 4 となります。

`\ext@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートの目次を出力するファイルの拡張子です。たとえば、`\ext@figure` は `'lot'` です。

`\fnum@TYPE` キャプション用の図番号を生成するマクロです。たとえば、`\fnum@figure` は `'図 \thefigure'` を作ります。

#### 24.5.1 figure 環境

ここでは、`figure` 環境を実装しています。

`\c@figure` 図番号です。

```
\thefigure 1501 <article>\newcounter{figure}
1502 <report | book>\newcounter{figure}[chapter]
1503 <*tate>
1504 <article>\renewcommand{\thefigure}{\rensuji{\@arabic\c@figure}}
1505 <*report | book>
1506 \renewcommand{\thefigure}{%
1507 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{}\cdot\fi\rensuji{\@arabic\c@figure}}
1508 </report | book>
1509 </tate>
1510 <*yoko>
1511 <article>\renewcommand{\thefigure}{\@arabic\c@figure}
1512 <*report | book>
1513 \renewcommand{\thefigure}{%
1514 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi\@arabic\c@figure}
1515 </report | book>
1516 </yoko>
```

`\fps@figure` フロートオブジェクトタイプ “figure” のためのパラメータです。

```

\ftype@figure 1517 \def\fps@figure{tbp}
\ext@figure 1518 \def\ftype@figure{1}
1519 \def\ext@figure{lof}
\fnun@figure 1520 \tate\def\fnun@figure{\figurename\thefigure}
1521 \yoko\def\fnun@figure{\figurename~\thefigure}

```

`figure` \*形式は 2 段抜きのフロートとなります。

```

figure* 1522 \newenvironment{figure}
1523 {\@float{figure}}
1524 {\end@float}
1525 \newenvironment{figure*}
1526 {\@dblfloat{figure}}
1527 {\end@dblfloat}

```

## 24.5.2 table 環境

ここでは、table 環境を実装しています。

`\c@table` 表番号です。

```

\thetable 1528 \article\newcounter{table}
1529 \report|book\newcounter{table}[chapter]
1530 *tate
1531 \article\renewcommand{\thetable}{\rensujif{\@arabic\c@table}}
1532 *report|book
1533 \renewcommand{\thetable}{%
1534 \ifnum\c@chapter>z\thechapter}\fi\rensujif{\@arabic\c@table}}
1535 \report|book
1536 \tate
1537 *yoko
1538 \article\renewcommand{\thetable}{\@arabic\c@table}
1539 *report|book
1540 \renewcommand{\thetable}{%
1541 \ifnum\c@chapter>z\thechapter.\fi\@arabic\c@table}
1542 \report|book
1543 \yoko

```

`\fps@table` フロートオブジェクトタイプ “table” のためのパラメータです。

```

\ftype@table 1544 \def\fps@table{tbp}
1545 \def\ftype@table{2}
\ext@table 1546 \def\ext@table{lot}
\fnun@table 1547 \tate\def\fnun@table{\tablename\thetable}
1548 \yoko\def\fnun@table{\tablename~\thetable}

```

`table` \*形式は 2 段抜きのフロートとなります。

```

table* 1549 \newenvironment{table}
1550 {\@float{table}}

```



```

1551 {\end@float}
1552 \newenvironment{table*}
1553 {\@dblfloat{table}}
1554 {\end@dblfloat}

```

## 24.6 キャプション

`\makecaption` `\caption` コマンドは、キャプションを組み立てるために `\mkcaption` を呼出します。このコマンドは二つの引数を取ります。一つは、 $\langle number \rangle$  で、フロートオブジェクトの番号です。もう一つは、 $\langle text \rangle$  でキャプション文字列です。 $\langle number \rangle$  には通常、‘図 3.2’ のような文字列が入っています。このマクロは、`\parbox` の中で呼び出されます。書体は `\normalsize` です。

`\abovecaptionskip` これらの長さはキャプションの前後に挿入されるスペースです。

```

\belowcaptionskip 1555 \newlength\abovecaptionskip
1556 \newlength\belowcaptionskip
1557 \setlength\abovecaptionskip{10\p@}
1558 \setlength\belowcaptionskip{0\p@}

```

キャプション内で複数の段落を作成することができるように、このマクロは `\long` で定義をします。

```

1559 \long\def\makecaption#1#2{%
1560 \vskip\abovecaptionskip
1561 \iftdir\sbox\@tempboxa{#1\hskip1zw#2}%
1562 \else\sbox\@tempboxa{#1: #2}%
1563 \fi
1564 \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
1565 \iftdir #1\hskip1zw#2\relax\par
1566 \else #1: #2\relax\par\fi
1567 \else
1568 \global \@minipagefalse
1569 \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1570 \fi
1571 \vskip\belowcaptionskip}

```

## 24.7 コマンドパラメータの設定

### 24.7.1 array と tabular 環境

`\arraycolsep` array 環境のカラムは `2\arraycolsep` で分離されます。

```

1572 \setlength\arraycolsep{5\p@}

```

`\tabcolsep` tabular 環境のカラムは `2\tabcolsep` で分離されます。

```

1573 \setlength\tabcolsep{6\p@}

```

`\arrayrulewidth` `array` と `tabular` 環境内の罫線の幅です。

```
1574 \setlength\arrayrulewidth{.4\p@}
```

`\doublerulesep` `array` と `tabular` 環境内の罫線間を調整する空白です。

```
1575 \setlength\doublerulesep{2\p@}
```

### 24.7.2 tabbing 環境

`\tabbingsep` `\'` コマンドで置かれるスペースを制御します。

```
1576 \setlength\tabbingsep{\labelsep}
```

### 24.7.3 minipage 環境

`\@mpfootins` `minipage` にも脚注を付けることができます。`\skip\@mpfootins` は、通常の `\skip\footins` と同じような動作をします。

```
1577 \skip\@mpfootins = \skip\footins
```

### 24.7.4 framebox 環境

`\fboxsep` `\fboxsep` は、`\fbox` と `\framebox` での、テキストとボックスの間に入る空白です。

`\fboxrule` `\fboxrule` は `\fbox` と `\framebox` で作成される罫線の幅です。

```
1578 \setlength\fboxsep{3\p@}
```

```
1579 \setlength\fboxrule{.4\p@}
```

### 24.7.5 equation と eqnarray 環境

`\theequation` `equation` カウンタは、新しい章の開始でリセットされます。また、`equation` 番号には、章番号が付きます。

このコードは `\chapter` 定義の後、より正確には `chapter` カウンタの定義の後、でなくてはなりません。

```
1580 <article>\renewcommand{\theequation}{\@arabic\c@equation}
```

```
1581 <*report | book>
```

```
1582 \@addtoreset{equation}{chapter}
```

```
1583 \renewcommand{\theequation}{%
```

```
1584 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi \@arabic\c@equation}
```

```
1585 </report | book>
```

## 25 フォントコマンド

`disablejfam` オプションが指定されていない場合には、以下の設定がなされます。

まず、数式内に日本語を直接、記述するために数式記号用文字に “`JY1/mc/m/n`” を登録します。数式バージョンが `bold` の場合は、“`JY1/gt/m/n`” を用います。これ

らは、`\mathmc`、`\mathgt` として登録されます。また、日本語数式ファミリーとして `\symmincho` がこの段階で設定されます。`mathrmmc` オプションが指定されていた場合には、これに引き続き `\mathrm` と `\mathbf` を和欧文両対応にするための作業がなされます。この際、他のマクロとの衝突を避けるため `\AtBeginDocument` を用いて展開順序を遅らせる必要があります。

`disablejfam` オプションが指定されていた場合には、`\mathmc` と `\mathgt` に対してエラーを出すだけのダミーの定義を与える設定のみが行われます。

### 変更

p<sub>La</sub>T<sub>E</sub>X 2.09 compatibility mode では和文数式フォント fam が 2 重定義されていたので、その部分を変更しました。

```

1586 \if@enablejfam
1587 \if@compatibility\else
1588 \DeclareSymbolFont{mincho}{JY1}{mc}{m}{n}
1589 \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
1590 \SetSymbolFont{mincho}{bold}{JY1}{gt}{m}{n}
1591 \jfam\symmincho
1592 \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{JY1}{gt}{m}{n}
1593 \fi
1594 \if@mathrmmc
1595 \AtBeginDocument{%
1596 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}
1597 \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathgt}
1598 }%
1599 \fi
1600 \else
1601 \DeclareRobustCommand{\mathmc}{%
1602 \@latex@error{Command \noexpand\mathmc invalid with\space
1603 'disablejfam' class option.}\@eha
1604 }
1605 \DeclareRobustCommand{\mathgt}{%
1606 \@latex@error{Command \noexpand\mathgt invalid with\space
1607 'disablejfam' class option.}\@eha
1608 }
1609 \fi

```

ここでは L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2.09 で一般的に使われていたコマンドを定義しています。これらのコマンドはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のために提供をしますが、できるだけ `\text...` と `\math...` を使うようにしてください。

`\mc` これらのコマンドはフォントファミリーを変更します。互換モードの同名コマンドと  
`\gt` 異なり、すべてのコマンドがデフォルトフォントにリセットしてから、対応する属  
`\rm` 性を変更することに注意してください。  
`\sf` 1610 `\DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}`  
`\tt`

```

1611 \DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathgt}
1612 \DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
1613 \DeclareOldFontCommand{\sf}{\normalfont\sffamily}{\mathsf}
1614 \DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}

```

`\bf` このコマンドはボールド書体にします。ノーマル書体に変更するには、`\mdseries` と指定をします。

```

1615 \DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mathbf}

```

`\it` これらのコマンドはフォントシェイプを切替えます。スラント体とスモールキャップ  
`\sl` プの数式アルファベットはありませんので、数式モードでは何もしませんが、警告  
`\sc` メッセージを出力します。`\upshape` コマンドで通常のシェイプにすることができ  
ます。

```

1616 \DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit}
1617 \DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\@nomath\sl}
1618 \DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}

```

`\cal` これらのコマンドは数式モードでだけ使うことができます。数式モード以外では何  
`\mit` もしません。現在の NFSS は、これらのコマンドが警告を生成するように定義して  
いますので、‘手ずから’定義する必要があります。

```

1619 \DeclareRobustCommand*\cal{\@fontswitch\relax\mathcal}
1620 \DeclareRobustCommand*\mit{\@fontswitch\relax\mathnormal}

```

## 26 相互参照

### 26.1 目次

`\section` コマンドは、`.toc` ファイルに、次のような行を出力します。

```
\contentsline{section}{\langle title \rangle}{\langle page \rangle}
```

`\langle title \rangle` には項目が、`\langle page \rangle` にはページ番号が入ります。`\section` に見出し番号  
が付く場合は、`\langle title \rangle` は、`\numberline{\langle num \rangle}{\langle heading \rangle}` となります。`\langle num \rangle` は  
`\thesection` コマンドで生成された見出し番号です。`\langle heading \rangle` は見出し文字列で  
す。この他の見出しコマンドも同様です。

figure 環境での `\caption` コマンドは、`.lof` ファイルに、次のような行を出力し  
ます。

```
\contentsline{figure}{\numberline{\langle num \rangle}{\langle caption \rangle}}{\langle page \rangle}
```

`\langle num \rangle` は、`\thefigure` コマンドで生成された図番号です。`\langle caption \rangle` は、キャプ  
ション文字列です。table 環境も同様です。

`\contentsline{\langle name \rangle}` コマンドは、`\l@{\langle name \rangle}` に展開されます。したがって、  
目次の体裁を記述するには、`\l@chapter`, `\l@section` などを定義します。図目次

のためには `\l@figure` です。これらの多くのコマンドは `\@dottedtocline` コマンドで定義されています。このコマンドは次のような書式となっています。

`\@dottedtocline{<level>}{<indent>}{<numwidth>}{<title>}{<page>}`

`<level>` “`<level> <= tocdepth`” のときにだけ、生成されます。`\chapter` はレベル 0、`\section` はレベル 1、... です。

`<indent>` 一番外側からの左マージンです。

`<numwidth>` 見出し番号 (`\numberline` コマンドの `<num>`) が入るボックスの幅です。

`\c@tocdepth` `tocdepth` は、目次ページに出力をする見出しレベルです。

```
1621 <article>\setcounter{tocdepth}{3}
1622 <!article>\setcounter{tocdepth}{2}
```

また、目次を生成するために次のパラメータも使います。

`\@pnumwidth` ページ番号の入るボックスの幅です。

```
1623 \newcommand{\@pnumwidth}{1.55em}
```

`\@tocmarg` 複数行にわたる場合の右マージンです。

```
1624 \newcommand{\@tocmarg}{2.55em}
```

`\@dotsep` ドットの間隔 ( $\mu$  単位) です。2 や 1.7 のように指定をします。

```
1625 \newcommand{\@dotsep}{4.5}
```

`\toclineskip` この長さ変数は、目次項目の間に入るスペースの長さです。デフォルトはゼロとなっています。縦組のとき、スペースを少し広げます。

```
1626 \newdimen\toclineskip
1627 <yoko>\setlength\toclineskip{z@}
1628 <tate>\setlength\toclineskip{2\p@}
```

`\numberline` `\numberline` マクロの定義を示します。オリジナルの定義では、ボックスの幅を `\@lnumwidth` `\@tempdima` にしていますが、この変数はいろいろな箇所で使われますので、期待した値が入らない場合があります。

フォント選択コマンドの後、あるいは `\numberline` マクロの中でフォントを切替えてもよいのですが、一時変数を意識したくないので、見出し番号の入るボックスを `\@lnumwidth` 変数を用いて組み立てるように `\numberline` マクロを再定義します。

```
1629 \newdimen\@lnumwidth
1630 \def\numberline#1{\hb@xt@\@lnumwidth{#1\hfil}}
```

`\@dottedtocline` 目次の各行間に `\toclineskip` を入れるように変更します。このマクロは `ltsect.dtx` で定義されています。

```

1631 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{%
1632 \ifnum #1>\c@tocdepth \else
1633 \vskip\toclineskip \@plus.2\p@
1634 {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
1635 \parindent #2\relax\@afterindenttrue
1636 \interlinepenalty\@M
1637 \leavevmode
1638 \@lnumwidth #3\relax
1639 \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
1640 {#4}\nobreak
1641 \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu.\mkern \@dotsep mu$}%
1642 \hfill\nobreak
1643 \hb@xt@\@pnumwidth{\hss\normalfont \normalcolor #5}%
1644 \par}%
1645 \fi}

```

`\addcontentsline` 縦組の場合にページ番号を `\rensuji` で囲むように変更します。  
このマクロは `ltsect.dtx` で定義されています。

```

1646 \def\addcontentsline#1#2#3{%
1647 \protected@write\@auxout
1648 {\let\label\@gobble \let\index\@gobble \let\glossary\@gobble
1649 <tate>\@temptokena{\rensuji{\thepage}}}%
1650 <yoko>\@temptokena{\thepage}}%
1651 {\string\@writefile{#1}%
1652 {\protect\contentsline{#2}{#3}{\the\@temptokena}}}%
1653 }

```

### 26.1.1 本文目次

`\tableofcontents` 目次を生成します。

```

1654 \newcommand{\tableofcontents}{%
1655 <*report | book>
1656 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1657 \else\@restonecolfalse\fi
1658 </report | book>
1659 <article> \section*{\contentsname
1660 <!article> \chapter*{\contentsname

```

`\tableofcontents` では、`\@mkboth` は heading の中に入れてあります。ほかの命令 (`\listoffigures` など) については、`\@mkboth` は heading の外に出してあります。これは `LATEX` の `classes.dtx` に合わせています。

```

1661 \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
1662 }\@starttoc{toc}%
1663 <report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1664 }

```

`\l@part` part レベルの目次です。

```
1665 \newcommand*{\l@part}[2]{%
1666 \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
1667 <article> \addpenalty{\@secpenalty}%
1668 <!article> \addpenalty{-\@highpenalty}%
1669 \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
1670 \begingroup
1671 \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth
1672 \parfillskip-\@pnumwidth
1673 {\leavevmode\large\bfseries
1674 \setlength{\@lnumwidth}{4zw}%
1675 #1\hfil\nobreak
1676 \hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}}\par
1677 \nobreak
1678 <article> \if@compatibility
1679 \global\@nobreaktrue
1680 \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
1681 <article> \fi
1682 \endgroup
1683 \fi}
```

`\l@chapter` chapter レベルの目次です。

```
1684 <*report | book>
1685 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
1686 \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
1687 \addpenalty{-\@highpenalty}%
1688 \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
1689 \begingroup
1690 \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
1691 \leavevmode\bfseries
1692 \setlength{\@lnumwidth}{4zw}%
1693 \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
1694 #1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}\par
1695 \penalty\@highpenalty
1696 \endgroup
1697 \fi}
1698 </report | book>
```

`\l@section` section レベルの目次です。

```
1699 <*article>
1700 \newcommand*{\l@section}[2]{%
1701 \ifnum \c@tocdepth >\z@
1702 \addpenalty{\@secpenalty}%
1703 \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
1704 \begingroup
1705 \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
1706 \leavevmode\bfseries
1707 \setlength{\@lnumwidth}{1.5em}%
1708 \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
```

```

1709 #1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}\par
1710 \endgroup
1711 \fi}
1712 </article>

1713 <*report | book>
1714 <tate>\newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
1715 <yoko>\newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
1716 </report | book>

\l@section 下位レベルの目次項目の体裁です。
\l@subsubsection 1717 <*tate>
\l@paragraph 1718 <*article>
\l@subparagraph 1719 \newcommand*{\l@subsection}{\@dottedtocline{2}{1zw}{4zw}}
1720 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2zw}{6zw}}
1721 \newcommand*{\l@paragraph}{\@dottedtocline{4}{3zw}{8zw}}
1722 \newcommand*{\l@subparagraph}{\@dottedtocline{5}{4zw}{9zw}}
1723 </article>
1724 <*report | book>
1725 \newcommand*{\l@subsection}{\@dottedtocline{2}{2zw}{6zw}}
1726 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3zw}{8zw}}
1727 \newcommand*{\l@paragraph}{\@dottedtocline{4}{4zw}{9zw}}
1728 \newcommand*{\l@subparagraph}{\@dottedtocline{5}{5zw}{10zw}}
1729 </report | book>
1730 </tate>
1731 <*yoko>
1732 <*article>
1733 \newcommand*{\l@subsection}{\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
1734 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
1735 \newcommand*{\l@paragraph}{\@dottedtocline{4}{7.0em}{4.1em}}
1736 \newcommand*{\l@subparagraph}{\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
1737 </article>
1738 <*report | book>
1739 \newcommand*{\l@subsection}{\@dottedtocline{2}{3.8em}{3.2em}}
1740 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
1741 \newcommand*{\l@paragraph}{\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
1742 \newcommand*{\l@subparagraph}{\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
1743 </report | book>
1744 </yoko>

```

### 26.1.2 図目次と表目次

```

\listoffigures 図の一覧を作成します。
1745 \newcommand{\listoffigures}{%
1746 <*report | book>
1747 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1748 \else\@restonecolfalse\fi
1749 \chapter*{\listfigurename}%
1750 </report | book>

```



```

1751 <article> \section*{\listfigurename}%
1752 \mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
1753 \starttoc{lof}%
1754 <report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1755 }

```

`\l@figure` 図目次の体裁です。

```

1756 <tate> \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
1757 <yoko> \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}

```

`\listoftables` 表の一覧を作成します。

```

1758 \newcommand{\listoftables}{%
1759 <*report | book>
1760 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1761 \else\@restonecolfalse\fi
1762 \chapter*{\listtablename}%
1763 </report | book>
1764 <article> \section*{\listtablename}%
1765 \mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
1766 \starttoc{lot}%
1767 <report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1768 }

```

`\l@table` 表目次の体裁は、図目次と同じにします。

```

1769 \let\l@table\l@figure

```

## 26.2 参考文献

`\bibindent` オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。

```

1770 \newdimen\bibindent
1771 \setlength\bibindent{1.5em}

```

`\newblock` `\newblock` のデフォルト定義は、小さなスペースを生成します。

```

1772 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}

```

`thebibliography` 参考文献や関連図書のリストを作成します。

```

1773 \newenvironment{thebibliography}[1]
1774 <article>{\section*{\refname}\mkboth{\refname}{\refname}%
1775 <report | book>{\chapter*{\bibname}\mkboth{\bibname}{\bibname}%
1776 \list{\@biblabel{\@arabic{c@enumiv}}}%
1777 {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
1778 \leftmargin\labelwidth
1779 \advance\leftmargin\labelsep
1780 \openbib@code
1781 \usecounter{enumiv}%
1782 \let\p@enumiv\@empty
1783 \renewcommand\theenumiv{\@arabic{c@enumiv}}}%
1784 \sloppy

```

```

1785 \clubpenalty4000
1786 \@clubpenalty\clubpenalty
1787 \widowpenalty4000%
1788 \sfcode'\.\@m}
1789 {\def\@noitemerr
1790 {\@latex@warning{Empty 'thebibliography' environment}}}%
1791 \endlist}

```

`\@openbib@code` `\@openbib@code` のデフォルト定義は何もしません。この定義は、`openbib` オプションによって変更されます。

```
1792 \let\@openbib@code\@empty
```

`\@biblabel` The label for a `\bibitem[...]` command is produced by this macro. The default from `latex.dtx` is used.

```
1793 % \renewcommand*{\@biblabel}[1]{[#1]\hfill}
```

`\@cite` The output of the `\cite` command is produced by this macro. The default from `ltxbibl.dtx` is used.

```
1794 % \renewcommand*{\@cite}[1]{[#1]}
```

## 26.3 索引

`theindex` 2 段組の索引を作成します。索引の先頭のページのスタイルは `jpl@in` とします。したがって、`headings` と `bothstyle` に適した位置に出力されます。

```

1795 \newenvironment{theindex}
1796 {\if@twocolumn\@restonecolfalse\else\@restonecoltrue\fi
1797 <article> \twocolumn[\section*{\indexname}]}%
1798 <report|book> \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}]}%
1799 \mkboth{\indexname}{\indexname}%
1800 \thispagestyle{jpl@in}\parindent\z@

```

パラメータ `\columnseprule` と `\columnsep` の変更は、`\twocolumn` が実行された後でなければなりません。そうしないと、索引の前のページにも影響してしまうためです。

```

1801 \parskip\z@ \@plus .3\p@\relax
1802 \columnseprule\z@ \columnsep 35\p@
1803 \let\item\@idxitem}
1804 {\if@restonecol\onecolumn\else\clearpage\fi}

```

`\@idxitem` 索引項目の字下げ幅です。 `\@idxitem` は `\item` の項目の字下げ幅です。

```

\subitem 1805 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 40\p@}
1806 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{20\p@}}
\subsubitem 1807 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{30\p@}}

```

`\indexspace` 索引の “文字” 見出しの前に入るスペースです。

```
1808 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@ \@plus5\p@ \@minus3\p@\relax}
```

## 26.4 脚注

`\footnoterule` 本文と脚注の間に引かれる罫線です。

```
1809 \renewcommand{\footnoterule}{%
1810 \kern-3\p@
1811 \hrule\@width.4\columnwidth
1812 \kern2.6\p@}
```

`\c@footnote` report と book クラスでは、chapter レベルでリセットされます。

```
1813 \<article>\@addtoreset{footnote}{chapter}
```

`\@makefnmark` このマクロにしたがって脚注が組まれます。

`\@makefnmark` は脚注記号を組み立てるマクロです。

```
1814 \<*tate>
1815 \newcommand\@makefnmark[1]{\parindent 1zw
1816 \noindent\hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}#1}
1817 \</tate>
1818 \<*yoko>
1819 \newcommand\@makefnmark[1]{\parindent 1em
1820 \noindent\hb@xt@ 1.8em{\hss\@makefnmark}#1}
1821 \</yoko>
```

## 27 今日の日付

組版時における現在の日付を出力します。

`\if 西暦` `\today` コマンドの‘年’を、西暦か和暦のどちらで出力するかを指定するコマンド

`\ 西暦` です。

```
1822 \newif\if 西暦 \ 西暦 false
1823 \def\ 西暦{\ 西暦 true}
1824 \def\ 和暦{\ 西暦 false}
```

`\heisei` `\today` コマンドを `\rightmark` で指定したとき、`\rightmark` を出力する部分で和暦のための計算ができないので、クラスファイルを読み込む時点で計算しておきます。

```
1825 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
```

`\today` 縦組の場合は、漢数字で出力します。

```
1826 \def\today{%
1827 \iftdir
1828 \if 西暦
1829 \kansuji\number\year 年
1830 \kansuji\number\month 月
1831 \kansuji\number\day 日
1832 \else
```

```

1833 平成 \ifnum\heisei=1 元年 \else\kansuji\number\heisei 年 \fi
1834 \kansuji\number\month 月
1835 \kansuji\number\day 日
1836 \fi
1837 \else
1838 \if 西暦
1839 \number\year~年
1840 \number\month~月
1841 \number\day~日
1842 \else
1843 平成 \ifnum\heisei=1 元年 \else\number\heisei~年 \fi
1844 \number\month~月
1845 \number\day~日
1846 \fi
1847 \fi}}

```

## 28 初期設定

```

\prepartname
\postpartname 1848 \newcommand{\prepartname}{第}
\prechaptername 1849 \newcommand{\postpartname}{部}
\postchaptername 1850 <report | book> \newcommand{\prechaptername}{第}
1851 <report | book> \newcommand{\postchaptername}{章}

\contentsname
\listfigurename 1852 \newcommand{\contentsname}{目 次}
\listtablename 1853 \newcommand{\listfigurename}{図 目 次}
1854 \newcommand{\listtablename}{表 目 次}

\refname
\bibname 1855 <article> \newcommand{\refname}{参考文献}
\indexname 1856 <report | book> \newcommand{\bibname}{関連図書}
1857 \newcommand{\indexname}{索 引}

\figurename
\tablename 1858 \newcommand{\figurename}{図}
1859 \newcommand{\tablename}{表}

\appendixname
\abstractname 1860 \newcommand{\appendixname}{付 録}
1861 <article | report> \newcommand{\abstractname}{概 要}

1862 <book> \pagestyle{headings}
1863 <!book> \pagestyle{plain}
1864 \pagenumbering{arabic}
1865 \raggedbottom

```

```

1866 \if@twocolumn
1867 \twocolumn
1868 \sloppy
1869 \else
1870 \onecolumn
1871 \fi

```

`\@mparswitch` は傍注を左右（縦組では上下）どちらのマージンに出力するかの指定です。偽の場合、傍注は一方の側にしか出力されません。このスイッチを真とすると、とくに縦組の場合、奇数ページでは本文の上に、偶数ページでは本文の下に傍注が出力されますので、おかしいことになります。

また、縦組のときには、傍注を本文の下に出すようにしています。`\reversemarginpar` とすると本文の上側に出力されます。ただし、二段組の場合は、つねに隣接するテキスト側のマージンに出力されます。

```

1872 <*tate>
1873 \normalmarginpar
1874 \@mparswitchfalse
1875 </tate>
1876 <*yoko>
1877 \if@twoside
1878 \@mparswitchtrue
1879 \else
1880 \@mparswitchfalse
1881 \fi
1882 </yoko>
1883 </article | report | book>

```

## File h

# jltxdoc.dtx

jltxdoc クラスは、ltxdoc をテンプレートにして、日本語用の修正を加えています。

```
1 {*class}
2 \DeclareOption*{\PassOptionsToClass{\CurrentOption}{ltxdoc}}
3 \ProcessOptions
4 \LoadClass{ltxdoc}
```

`\normalsize` ltxdoc からロードされる article クラスでの行間などの設定値で、日本語の文章を組版すると、行間が狭いように思われるので、多少広くするように再設定します。

`\small`

`\parindent` また、段落先頭での字下げ量を全角一文字分とします。

```
5 \renewcommand{\normalsize}{%
6 \setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
7 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
8 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
9 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
10 \belowdisplayskip \abovedisplayskip
11 \let\@listi\@listI}
12 \renewcommand{\small}{%
13 \setfontsize\small\@ixpt{11}%
14 \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
15 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
16 \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
17 \def\@listi{\leftmargin\leftmarginI
18 \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
19 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
20 \itemsep \parsep}%
21 \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
22 \normalsize
23 \setlength\parindent{1zw}
```

`\file` `\file` マクロは、ファイル名を示すのに用います。

```
24 \providecommand*\file}[1]{\texttt{#1}}
```

`\pstyle` `\pstyle` マクロは、ページスタイル名を示すのに用います。

```
25 \providecommand*\pstyle}[1]{\textsl{#1}}
```

`\Lcount` `\Lcount` マクロは、カウンタ名を示すのに用います。

```
26 \providecommand*\Lcount}[1]{\textsl{\small#1}}
```

`\Lopt` `\Lopt` マクロは、クラスオプションやパッケージオプションを示すのに用います。

```
27 \providecommand*\Lopt}[1]{\textsf{#1}}
```

`\dst` `\dst` マクロは、“DOCSTRIP” を出力する。

```
28 \providecommand\dst{\normalfont\scshape docstrip}}
```

`\NFSS` `\NFSS` マクロは、“NFSS” を出力します。

```
29 \providecommand\NFSS{\textsf{NFSS}}
```

`\c@clinen` `\mlineplus` マクロは、その時点でのマクロコードの行番号に、引数に指定された  
`\mlineplus` 行数だけを加えた数値を出力します。たとえば `\mlineplus{3}` とすれば、直前のマ  
マクロコードの行番号 (29) に 3 を加えた数、“32” が出力されます。

```
30 \newcounter{clinen}
31 \def\mlineplus#1{\setcounter{clinen}{\arabic{CodelineNo}}}%
32 \addtocounter{clinen}{#1}\arabic{clinen}}
```

`tsample` `tsample` 環境は、環境内に指定された内容を罫線で囲って出力をします。第一引数  
は、出力するボックスの高さです。plext.dtx の中で使用しています。このマクロ  
内では縦組になることに注意してください。

```
33 \def\tsample#1{%
34 \hbox to\linewidth\bgroup\vrule width.1pt\hss
35 \vbox\bgroup\hrule height.1pt
36 \vskip.5\baselineskip
37 \vbox to\linewidth\bgroup\tate\hsize=#1\relax\vss}
38 \def\endtsample{%
39 \vss\egroup
40 \vskip.5\baselineskip
41 \hrule height.1pt\egroup
42 \hss\vrule width.1pt\egroup}
```

`\DisableCrossrefs` `jclasses.dtx` を処理するときに、`\if` 西暦の部分でエラーになるため、一時的に  
`\EnableCrossrefs` クロスリファレンスの機能をオフにします。しかし、デフォルトの定義では完全に  
制御できないので、ここで再定義をします。

```
43 \def\DisableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedfalse\@esphack}
44 \def\EnableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedtrue
45 \def\DisableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedfalse\@esphack}\@esphack}
```

`\verb` `pLATEX` では、`\verb` コマンドを修正して直前に `\xkanjiskip` が入るようにしてい  
ます。しかし、`ltxdoc.cls` が読み込む `doc.sty` が上書きしてしまいますので、こ  
れを再々定義します。`doc.sty` での定義は

```
\def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\null\fi
\bggroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list
\ttfamily \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
\@ifstar{\@sverb}{\@vobeyspaces \frenchspacing \@sverb}}
```

となっていますので、`plcore.dtx` と同様に `\null` を外して `\adjust{}` を入れます。

```

46 \def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\vadjust{}\fi
47 \bgroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list
48 \ttfamily \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
49 \@ifstar{\@sverb}{\@vobeyspaces \frenchspacing \@sverb}}

```

`\xspcode` コマンド名の `\` と 16 進数を示すための `"` の前にもスペースが入るよう、これらの `\xspcode` の値を変更します。

```

50 \xspcode"5C=3 %% \
51 \xspcode"22=3 %% "
52 \end{class}

```



# 変更履歴

|                                                                                        |                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 1992/02/04 jclasses.dtx v1.1d                                                          | 1995/08/11 plect.dtx v1.1c                                             |
| General: disablejfam の判断を間違えてたのを修正 . . . . . 114                                       | \X@tabular: \tabarray のタイプミス修正 . . . . . 77                            |
| 1995/02/05 plcore.dtx v1.1c                                                            | 1995/08/22 plfonts.dtx v1.0c                                           |
| \@outputpage: \oddsidemargin と \evensidemargin が逆だったのを修正 . . . . . 58                  | \@kenc@update: 縦横用エンコードの保存 . . . . . 28                                |
| 1995/03/28 plfonts.dtx v1.1b                                                           | \selectfont: 縦横両方のフォントを切り替えるようにした . . . . . 22                         |
| \ktenc@list: リストの初期値を変更 9                                                              | 1995/08/23 jclasses.dtx v1.0d                                          |
| \notffam@list: リストの初期値を変更 . . . . . 10                                                 | \ps@bothstyle: 横組の evenfoot が中央揃えになっていたのを修正 138                        |
| 1995/04/05 plcore.dtx v1.1b                                                            | \ps@myheadings: 横組モードの左右が逆であったのを修正 . . . . . 139                       |
| \verb: 互換モードのときは、pl209.def の定義を使う . . . . . 66                                         | 1995/08/24 plfonts.dtx v1.1c                                           |
| 1995/04/07 plcore.dtx v1.0a                                                            | \strut: “\centerling \strut” の幅がゼロになってしまうのを修正 11                       |
| \@footnotetext: 組方向の判定をボックスの外でするようにした 63                                               | 1995/08/25 plcore.dtx v1.1c                                            |
| 1995/04/12 plcore.dtx v1.0a                                                            | \@gnewline: 行頭禁則文字の直前で<br>の改行での不具合の修正 . . . . . 46                     |
| \@footnotemark: 脚注記号の出力位置の調整 . . . . . 65                                              | 1995/08/30 jclasses.dtx v1.0a                                          |
| \@makefnmark: 縦組でも上付き数字を使うように修正 . . . . . 61                                           | General: 柱の書体がノンブルに影響するバグの修正 . . . . . 136                             |
| \thempfn: Removed \thempfn . . 61                                                      | 1995/08/30 plvers.dtx v1.0a                                            |
| \thempfootnote: Removed                                                                | General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1995/06/01>版用に修正 . . . . . 1 |
| \thempfootnote . . . . . 61                                                            | 1995/08/31 plfonts.dtx v1.0c                                           |
| 1995/04/12 plfonts.dtx v1.1b                                                           | \adjustbaseline: 欧文書体の基準を ‘M’ から ‘/’ に変更 . . . . . 25                  |
| \textunderscore: 下線マクロを追加 . . . . . 32                                                 | 1995/09/07 plcore.dtx v1.1c                                            |
| 1995/04/26 plfonts.dtx v1.1b                                                           | \@setref: change \null to \relax in \@setref. . . . . 65               |
| \selectfont: ベースラインの調整をサイズ変更時に行なうようにした . . . . . 23                                    | 1995/09/11 plect.dtx v1.1c                                             |
| 1995/05/10 plfonts.dtx v1.1b                                                           | \@iiiminipage: Add                                                     |
| \fontfamily: \notkfam@list に、エンコードごとに登録されてしまふのを修正した。欧文についても同様。 . . . . . 30            | \adjustbaseline. . . . . 87                                            |
| \ktenc@list: リスト内の空白を削除 9                                                              | \@iiiparbox: Add                                                       |
| \notffam@list: リスト内の空白を削除 . . . . . 10                                                 | \adjustbaseline. . . . . 88                                            |
| 1995/05/16 plvers.dtx v1.0                                                             | \p@array: Add \adjustbaseline. 78                                      |
| General: pL <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X 2 <sub>ε</sub> 用に ltvers.dtx を修正 . . . . . 1 | 1995/09/12 plfonts.dtx v1.1c                                           |
|                                                                                        | General: \xkanjiskip のデフォルト値 . . . . . 41                              |
|                                                                                        | 1995/09/26 jclasses.dtx v1.0a                                          |
|                                                                                        | General: Change b4paper width/height 352x250 to 364x257 . . . . . 111  |

|                                                                                                                                                   |     |                                                                                                                                               |     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| Change b5paper width/height<br>250x176 to 257x182 . . . . .                                                                                       | 111 | 1996/01/12 plect.dtx v1.1g<br><code>\@iiiminipage:</code><br>Grouping <code>\@iiiminipage</code> . . .                                        | 87  |
| 1995/10/24 plect.dtx v1.1c<br><code>\@iiiparbox:</code><br>typo <code>\adjustbaesline.</code> . . . . .                                           | 88  | <code>\@iiiparbox:</code><br>Grouping <code>\@iiiparbox</code> . . . . .                                                                      | 88  |
| 1995/11/09 plfonts.dtx v1.2<br><code>\DeclareFixedFont:</code><br><code>\DeclareFixedFont</code> の日本語化                                            | 17  | 1996/01/26 plcore.dtx v1.1b<br><code>\@makefnmark:</code> 脚注マークの後ろに<br>余計なスペースが入るのを修正                                                         | 61  |
| 1995/11/10 plcore.dtx v1.1a<br><code>\@outputpage:</code> <code>\topmargin</code> が反映<br>されないバグを修正 . . . . .                                      | 58  | 1996/01/31 plvers.dtx v1.0b<br>General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1995/12/01>版用<br>に修正 . . . . .                                       | 1   |
| 1995/11/10 plect.dtx v1.1d<br><code>\p@array:</code> <code>\@array to \p@array</code> .                                                           | 78  | 1996/02/17 plcore.dtx v1.1e<br>General: <code>\printglossary</code> を追加 .                                                                     | 68  |
| <code>\p@tabarray:</code> <code>\@tabarray to</code><br><code>\p@tabarray</code> . . . . .                                                        | 78  | 1996/02/29 jclasses.dtx v1.0d<br>General: article と report のデフォ<br>ルトを <i>plain</i> に修正 . . . . .                                             | 174 |
| <code>\p@tabular:</code> <code>\@tabular to</code><br><code>\p@tabular</code> . . . . .                                                           | 78  | <code>\ps@jpl@in:</code> <i>jpl@in</i> の初期値を定<br>義 . . . . .                                                                                  | 136 |
| <code>\X@tabular:</code> <code>\@tabarray to</code><br><code>\p@tabarray</code> . . . . .                                                         | 77  | 1996/03/05 jclasses.dtx v1.0d<br><code>\ps@bothstyle:</code> 横組で偶数ページ<br>と奇数ページの設定が逆なのを<br>修正 . . . . .                                       | 138 |
| <code>\@tabular to \p@tabular</code> . . . . .                                                                                                    | 77  | 1996/03/06 plfonts.dtx v1.1c<br><code>\notffam@list:</code> <code>\notkfam@list</code> と<br><code>\notffam@list</code> の初期値を変更                | 10  |
| 1995/11/21 plect.dtx v1.1d<br><code>\prensui:</code> <code>\Rensui</code> , <code>\prensui</code><br>を作成 . . . . .                                | 95  | 1996/03/12 plcore.dtx v1.1d<br><code>\@stopfield:</code> <code>\=</code> の後ろに和欧文間<br>スペースが入るのを修正 . . . . .                                    | 68  |
| 1995/11/21 plfonts.dtx v1.2<br><code>\@notffam:</code> <code>\fontfamily</code> コマンド<br>用のフラグ追加 . . . . .                                         | 28  | 1996/03/13 plect.dtx v1.0h<br><code>\DeclareLayoutCaption:</code> キャプ<br>ション出力位置の初期値を設定                                                       | 84  |
| <code>\adjustbaseline:</code> 縦組時のみ調整<br>するようにした . . . . .                                                                                        | 25  | <code>\kanji:</code> <code>\@Kanji</code> を追加。英語版と<br>同様にした。 . . . . .                                                                        | 95  |
| <code>\fontfamily:</code> 代用フォントが使わ<br>れないバグを修正 . . . . .                                                                                         | 29  | 1996/03/13 plect.dtx v1.1h<br><code>\make@pcaptionbox:</code> typo:<br><code>\@latex@warning.</code> . . . . .                                | 85  |
| 1995/11/22 plfonts.dtx v1.2<br><code>\selectfont:</code> エラーフォントに対<br>応した . . . . .                                                               | 22  | 1996/03/14 jclasses.dtx v1.0e<br><code>description:</code> <code>\topskip</code> や <code>\parkip</code><br>などの値を縦組時のみに設定す<br>るようにした . . . . . | 160 |
| 1995/11/24 jclasses.dtx v1.1d<br><code>\marginparwidth:</code><br>typo: <code>\marginmarwidth to</code><br><code>\marginparwidth</code> . . . . . | 129 | <code>itemize:</code> 縦組時のみに設定するよう<br>にした . . . . .                                                                                           | 159 |
| 1995/11/24 plfonts.dtx v1.2<br>General: it, sl, sc の宣言を外した                                                                                        | 42  | 1996/03/21 jclasses.dtx v1.0e<br>General: <code>\usepackage to</code><br><code>\RequirePackage</code> . . . . .                               | 115 |
| 1995/12/25 jclasses.dtx v1.0c<br>General: Macro <code>\if@openbib</code><br>removed . . . . .                                                     | 110 | 1996/07/10 jclasses.dtx v1.0f<br>General: 面付けオプションを追加                                                                                         | 112 |
| openbib オプションを再実装 . .                                                                                                                             | 114 | 1996/07/10 plcore.dtx v1.0f<br><code>\maketombowbox:</code> トンボの横に DVI<br>ファイルの作成日を出力するよ                                                      |     |
| 1995/12/25 jclasses.dtx v1.1c<br><code>\maxdepth:</code> <code>\@maxdepth</code> の設定を除<br>外した . . . . .                                           | 121 |                                                                                                                                               |     |
| 1995/12/28 jclasses.dtx v1.0c<br><code>\listoftables:</code> fix the<br><code>\listoftable</code> typo. . . . .                                   | 171 |                                                                                                                                               |     |

|                                                                          |     |                                                                        |     |
|--------------------------------------------------------------------------|-----|------------------------------------------------------------------------|-----|
| うにした。 . . . . .                                                          | 55  | 1997/01/25 jclasses.dtx v1.1a                                          |     |
| 1996/09/03 jclasses.dtx v1.0g                                            |     | <code>\if@stysize</code> : Add <code>\if@stysize</code> .              | 110 |
| General: Add to <code>\@bannertoken</code> .                             | 112 | <code>\textheight</code> : Add paper option                            |     |
| 1996/09/03 plcore.dtx v1.1f                                              |     | with compatibility mode. . . .                                         | 124 |
| <code>\@bannerfont</code> : Add <code>\@bannerbox</code> .               | 55  | <code>\textwidth</code> : Add paper option                             |     |
| 1996/12/17 jclasses.dtx v1.0h                                            |     | with compatibility mode. . . .                                         | 121 |
| <code>\和暦</code> : Typo:和歴 to 和暦 . . . . .                               | 173 | 1997/01/25 plfonts.dtx v1.1                                            |     |
| 1997/01/11 plvers.dtx v1.0c                                              |     | <code>\ktenc@list</code> : Add TS1 encoding                            |     |
| General: $\text{\LaTeX}$ <1996/06/01>版用                                  |     | to the starting member of                                              |     |
| に修正 . . . . .                                                            | 1   | <code>\fenc@list</code> . . . . .                                      | 9   |
| 1997/01/15 jclasses.dtx v1.1                                             |     | 1997/01/28 jclasses.dtx v1.1a                                          |     |
| <code>\backmatter</code> : <code>\frontmatter</code> ,                   |     | <code>\labelitemiv</code> : Bug fix:                                   |     |
| <code>\mainmatter</code> , <code>\backmatter</code> を                    |     | <code>\labelitemii</code> . . . . .                                    | 159 |
| $\text{\LaTeX}$ の定義に修正 . . . . .                                         | 147 | 1997/01/28 jclasses.dtx v1.1b                                          |     |
| <code>\part</code> : <code>\part</code> を $\text{\LaTeX}$ の定義に修          |     | <code>\if@enablejfam</code> :                                          |     |
| 正 . . . . .                                                              | 150 | Add <code>\if@enablejfam</code> . . . . .                              | 110 |
| 1997/01/16 plcore.dtx v1.1g                                              |     | 1997/01/28 plfonts.dtx v1.3b                                           |     |
| <code>\verb</code> : <code>\verb</code> コマンドを $\text{\LaTeX}$            |     | <code>\textgt</code> : <code>\textmc</code> , <code>\textgt</code> の動作 |     |
| <1996/06/01>に合わせて修正 . . . .                                              | 66  | 修正 . . . . .                                                           | 39  |
| 1997/01/23 jclasses.dtx v1.1a                                            |     | 1997/01/29 pl209.dtx v1.0e                                             |     |
| General: 日付出力オプション . . . .                                               | 112 | General: 二文字書体変更コマンドの                                                  |     |
| <code>thebibliography</code> :                                           |     | 動作を旧版と同等にした. . . . .                                                   | 99  |
| $\text{\LaTeX}$ <1996/12/01>に合わせて                                        |     | 1997/01/29 plfonts.dtx v1.3b                                           |     |
| 修正 . . . . .                                                             | 172 | General: フォント定義ファイルのサ                                                  |     |
| 1997/01/23 jltxdoc.dtx v1.0a                                             |     | イズ指定の調整 . . . . .                                                      | 42  |
| <code>\parindent</code> : <code>\normalsize</code> , <code>\small</code> |     | 1997/01/30 plfonts.dtx v1.0                                            |     |
| などの再定義 . . . . .                                                         | 176 | <code>\reDeclareMathAlphabet</code> :                                  |     |
| 1997/01/23 plcore.dtx v1.0g                                              |     | <code>\reDeclareMathAlphabet</code> を追                                 |     |
| <code>\maketombowbox</code> : 作成日の出力をす                                   |     | 加。ありがとう、ymt さん. . .                                                    | 18  |
| るかどうかをフラグで指定する                                                           |     | 1997/01/30 plfonts.dtx v1.3b                                           |     |
| ようにした. . . . .                                                           | 55  | General: 数式用フォントの宣言をク                                                  |     |
| 1997/01/23 plvers.dtx v1.0d                                              |     | ラスファイルに移動した . . . . .                                                  | 40  |
| General: $\text{\LaTeX}$ <1996/12/01>版用                                  |     | 1997/02/05 jclasses.dtx v1.1d                                          |     |
| に修正 . . . . .                                                            | 1   | General: 開始ページがおかしくなる                                                  |     |
| 1997/01/24 plfonts.dtx v1.3                                              |     | のを修正 . . . . .                                                         | 113 |
| General: Rename font definition                                          |     | <code>\topmargin</code> : <code>\tmargin</code> を半分に                   |     |
| filename. . . . .                                                        | 39  | するのはアキ領域の計算後 . .                                                       | 127 |
| Rename provided font definition                                          |     | 1997/02/12 jclasses.dtx v1.1d                                          |     |
| filename. . . . .                                                        | 42  | <code>\maketitle</code> : 縦組クラスの表紙を縦                                   |     |
| 1997/01/25 jclasses.dtx v1.0g                                            |     | 書きにするようにした . . . . .                                                   | 143 |
| General: Insert <code>\hbox</code> , to switch                           |     | 1997/02/14 jclasses.dtx v1.1d                                          |     |
| tate-mode. . . . .                                                       | 113 | <code>\thefigure</code> : <code>\ifnum</code> 文の構文エ                    |     |
| <code>\columnseprule</code> : <code>\columnsep</code> :                  |     | ラーを訂正. . . . .                                                         | 161 |
| 10pt to 3\Cwd or 2\Cwd. . . . .                                          | 119 | 1997/02/14 plcore.dtx v1.1g                                            |     |
| <code>\marginparwidth</code> :                                           |     | <code>\@footnotemark</code> : 縦組時の位置調整                                 |     |
| <code>\oddsidemargin</code> ,                                            |     | を 2\ch から .9zh に変更 . . . .                                             | 65  |
| <code>\evensidemargin</code> : Opt if                                    |     | <code>\@makefnmark</code> : 縦組時に脚注マーク                                  |     |
| specified papersize at                                                   |     | の書体が正しくないのを修正 . .                                                      | 61  |
| <code>\documentstyle</code> option. . . .                                | 129 |                                                                        |     |

|                                                                                     |     |
|-------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 1997/02/20 pl209.dtx v1.0e                                                          |     |
| General: Typemiss:oldfont from oldfonts . . . . .                                   | 98  |
| 1997/03/11 plfonts.dtx v1.3b                                                        |     |
| General: すべてのサイズをロード可能にした . . . . .                                                 | 42  |
| 1997/04/08 jclasses.dtx v1.1e                                                       |     |
| \topmargin: 横組クラスでの調整量を-2.4 インチから-2.0 インチにした。 . . . .                               | 127 |
| 1997/04/08 plfonts.dtx v1.3c                                                        |     |
| \DeclareTateKanjiEncoding@: 和文エンコード宣言コマンドを縦組用と横組用で分けるようにした。 . . . .                 | 14  |
| 1997/04/09 plfonts.dtx v1.3c                                                        |     |
| \DeclareFixedFont: 縦横エンコード・リストの分離による拡張 . . . .                                      | 17  |
| 1997/04/24 plfonts.dtx v1.3c                                                        |     |
| \fontfamily: フォント定義ファイル名を小文字に変換してから探すようにした。 . . . .                                 | 30  |
| 1997/06/25 pl209.dtx v1.0f                                                          |     |
| \em: \em で和文を強調書体に . . . .                                                          | 100 |
| 1997/06/25 plcore.dtx v1.1h                                                         |     |
| \@gnewline: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X の改行マクロの変更に対応。ありがとう、奥村さん。 . . . .        | 46  |
| 1997/06/25 plfonts.dtx v1.3d                                                        |     |
| \emminnershape: \em, \emph で和文を強調書体に . . . . .                                      | 39  |
| 1997/07/02 plvers.dtx v1.0e                                                         |     |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1997/06/01>版用に修正 . . . . .                | 1   |
| 1997/07/08 jclasses.dtx v1.1f                                                       |     |
| General: 縦組時にベースラインがおかしくなるのを修正 . . . . .                                            | 113 |
| 1997/07/10 plfonts.dtx v1.3e                                                        |     |
| \fontfamily: fd ファイル名の小文字化が効いていなかったのを修正 . . . .                                     | 30  |
| fd ファイル名の小文字化が効いていなかったのを修正。ありがとう、大岩さん . . . . .                                     | 30  |
| 1997/07/29 jltxdoc.dtx v1.0b                                                        |     |
| \xspcode: \ と " の \xspcode を変更 . . . . .                                            | 178 |
| 1997/08/25 jclasses.dtx v1.1g                                                       |     |
| \ps@bothstyle: 片面印刷のとき、section レベルが出力されないのを修正 . . . . .                             | 139 |
| \ps@headings: 片面印刷のとき、section レベルが出力されないのを修正 . . . . .                              | 138 |
| 1997/09/03 jclasses.dtx v1.1f                                                       |     |
| \textheight: landscape での指定を追加 . . . . .                                            | 124 |
| 1997/09/03 jclasses.dtx v1.1h                                                       |     |
| General: landscape オプションを互換モードでも有効に . . . . .                                       | 112 |
| オプションの処理時に縦横の値を交換 . . . . .                                                         | 112 |
| \textwidth: landscape での指定を追加 . . . . .                                             | 121 |
| 1997/12/12 jclasses.dtx v1.1i                                                       |     |
| \ps@bothstyle: report, book クラスで片面印刷時に、bothstyle スタイルにすると、コンパイルエラーになるのを修正 . . . . . | 139 |
| 1998/02/03 jclasses.dtx v1.1j                                                       |     |
| \topmargin: 互換モード時の a5p のトップマージンを 0.7in 増加 . . . .                                  | 127 |
| 1998/02/03 plcore.dtx v1.1g                                                         |     |
| \@outputpage: \@shipoutsetup を \@outputpage 内に入れた . . . .                           | 58  |
| 1998/02/03 plcore.dtx v1.1i                                                         |     |
| \@shipoutsetup: Command removed . . . . .                                           | 57  |
| 1998/02/17 plvers.dtx v1.0f                                                         |     |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1997/12/01>版用に修正 . . . . .                | 1   |
| 1998/03/23 jclasses.dtx v1.1k                                                       |     |
| \@spart: report と book クラスで番号を付けない見出しのペナルティが \MQ だったのを \QM に修正 . . . .              | 151 |
| 1998/04/07 jclasses.dtx v1.1m                                                       |     |
| \heisei: \today の計算手順を変更 . . . .                                                    | 173 |
| 1998/08/10 plfonts.dtx v1.3f                                                        |     |
| \DeclareFixedFont: プリアンブル・コマンドにしてしまっていたのを解除 . . . . .                               | 17  |
| 1998/09/01 plvers.dtx v1.0g                                                         |     |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1998/06/01>版用に修正 . . . . .                | 1   |
| 1998/10/13 jclasses.dtx v1.1n                                                       |     |
| General: 動作していなかったのを修正。ありがとう、刀祢さん . . . .                                           | 112 |
| \thetable: report, book クラスで chapter カウンタを考慮していなかったのを修正。ありがとう、平川@慶應大さん。 . . . .     | 162 |

|                                                         |                |
|---------------------------------------------------------|----------------|
| 1998/12/24 jclasses.dtx v1.1o                           |                |
| \@makechapterhead: secnumdepth                          |                |
| カウンタを -1 以下にすると、                                        |                |
| 見出し文字列も消えてしまうの                                          |                |
| を修正                                                     | 153            |
| 1999/04/05 plcore.dtx v1.1j                             |                |
| \@gnewline: オプションを付けた場                                  |                |
| 合に、余計な空白が入ってしま                                          |                |
| うのを修正。ありがとう、鈴木                                          |                |
| 隆志@京都大学さん。                                              | 46             |
| 1999/04/05 plfonts.dtx v1.3g                            |                |
| \process@table: plpatch.ltx の内                          |                |
| 容を反映。ありがとう、山本さ                                          |                |
| ん。                                                      | 32             |
| 1999/04/05 plvers.dtx v1.0h                             |                |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1998/12/01>版用 |                |
| に修正                                                     | 1              |
| 1999/05/18 jclasses.dtx v1.1q                           |                |
| enumerate: 縦組時のみに設定するよ                                  |                |
| うにした                                                    | 158            |
| 1999/08/09 jclasses.dtx v1.1r                           |                |
| \topmargin: \if@stysize フラグに                            |                |
| 限らず半分にする                                                | 127            |
| 1999/08/09 plfonts.dtx v1.3h                            |                |
| \strut: 縦組のとき、幅のあるボッ                                    |                |
| クスになってしまうのを修正                                           | 11             |
| 1999/08/09 plvers.dtx v1.0i                             |                |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1999/06/01>版用 |                |
| に修正                                                     | 1              |
| 1999/1/6 jclasses.dtx v1.1p                             |                |
| \marginparwidth: \oddsidemargin                         |                |
| のポイントへの変換を後ろに                                           | 129            |
| 2000/02/29 plvers.dtx v1.0j                             |                |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <1999/12/01>版用 |                |
| に修正                                                     | 1              |
| 2000/07/13 plfonts.dtx v1.3i                            |                |
| \check@nocorr@: \text... コマンド                           |                |
| の左側に \xkanjiskip が入らな                                   |                |
| いのを修正（ありがとう、乙部                                          |                |
| @東大さん）                                                  | 37             |
| 2000/10/24 plfonts.dtx v1.3j                            |                |
| \adjustbaseline: 文頭に鉤括弧な                                |                |
| どがあるときに余計なアキがで                                          |                |
| る問題に対処                                                  | 25             |
| 2000/11/03 plvers.dtx v1.0k                             |                |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2000/06/01>版用 |                |
| に修正                                                     | 1              |
| 2001/05/10 plcore.dtx v1.1j                             |                |
| \@makecol: \@makecol で組み立て                              |                |
| られる \@outputbox の大きさ                                    |                |
|                                                         | が、縦組で中身が空のボックス |
|                                                         | だけの場合も適正になるように |
|                                                         | 修正             |
| 2001/05/10 plect.dtx v1.1i                              | 49             |
| \@iimakePbox: 縦組で z を指定する                               |                |
| とエラーになるのを修正。                                            | 92             |
| 2001/05/10 plfonts.dtx v1.3k                            |                |
| \adjustbaseline: 欧文書体の基準                                |                |
| を再び ‘/’ から ‘M’ に変更                                      | 25             |
| 2001/09/04 jclasses.dtx v1.2                            |                |
| \@makechapterhead: \chapter の                           |                |
| 出力位置がアスタリスク形式と                                          |                |
| そうでないときと違うのを修正                                          |                |
| （ありがとう、鈴木@津さん）                                          | 153            |
| \@makeschapterhead: \chapter の                          |                |
| 出力位置がアスタリスク形式と                                          |                |
| そうでないときと違うのを修正                                          |                |
| （ありがとう、鈴木@津さん）                                          | 153            |
| 2001/09/04 plcore.dtx v1.2                              |                |
| \@makespecialcolbox: 本文と                                |                |
| \footnoterule が重なってしま                                   |                |
| うのを修正                                                   | 53             |
| 2001/09/04 plvers.dtx v1.0l                             |                |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2001/06/01>版用 |                |
| に修正                                                     | 1              |
| 2001/09/26 plcore.dtx v1.2a                             |                |
| \@outputpage: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X           |                |
| <2001/06/01>に対応                                         | 57             |
| 2001/10/04 jclasses.dtx v1.3                            |                |
| \@dottedtocline: 第 5 引数の書体                              |                |
| を \rmfamily から \normalfont                              |                |
| に変更                                                     | 168            |
| 2002/04/05 plfonts.dtx v1.3l                            |                |
| \adjustbaseline:                                        |                |
| \adjustbaseline でフォントの                                  |                |
| 基準値が縦書き以外では設定さ                                          |                |
| れないのを修正                                                 | 25             |
| 2002/04/09 jclasses.dtx v1.4                            |                |
| General: 縦組スタイルで                                        |                |
| \flushbottom しないようにし                                    |                |
| た                                                       | 174            |
| 2004/06/14 plfonts.dtx v1.3m                            |                |
| \@notffam: \fontfamily コマンド                             |                |
| 内部フラグ変更                                                 | 29             |
| \fontfamily: \fontfamily コマン                            |                |
| ド内部フラグ変更                                                | 29             |
| 2004/08/10 plfonts.dtx v1.3n                            |                |
| \@changed@kcmd: 和文エンコーディ                                |                |
| ングの切り替えを有効化                                             | 28             |

|                                                                                                          |     |                                                                                                                            |    |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| \KanjiEncodingPair: 和文エンコーディングの切り替えを有効化 . . .                                                            | 23  | \plEndIncludeInRelease を新設. . . . .                                                                                        | 4  |
| \selectfont: 和文エンコーディングの切り替えを有効化 . . . . .                                                               | 22  | 2016/02/28 plcore.dtx v1.2c                                                                                                |    |
| 2004/08/10 plvers.dtx v1.0m                                                                              |     | \@iiiparbox: 1.2b と同様の修正を \parbox 命令にも行った . . . . .                                                                        | 72 |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2003/12/01>版対応確認 . . . . .                                     | 1   | \@tabular: 1.2b と同様の修正を tabular 環境にも行った . . . . .                                                                          | 71 |
| 2005/01/04 plfonts.dtx v1.3o                                                                             |     | \underline: 1.2b と同様の修正を \underline 命令にも行った . . .                                                                          | 73 |
| \fontfamily: \fontfamily 中のフラグ修正 . . . . .                                                               | 29  | 2016/04/01 plcore.dtx v1.2d                                                                                                |    |
| 2006/01/04 plfonts.dtx v1.3p                                                                             |     | \@outputtombow: multicol パッケージを使うとトンボの下端が縮む問題を修正 . . . . .                                                                 | 56 |
| \DeclareFontEncoding@:<br>\DeclareFontEncoding@中で<br>\LastDeclaredEncoding の再定義が抜けていたので追加 . . . . .      | 13  | 2016/04/01 plfonts.dtx v1.6a                                                                                               |    |
| 2006/06/27 jclasses.dtx v1.6                                                                             |     | \@text@composite: ベースライン補正量が 0 でないときに \AA など一部の合成文字がおかしくなることに対応するため再定義 . . .                                               | 34 |
| General: フォントコマンドを修正。ありがとう、ymt さん。 . . . .                                                               | 165 | \@text@composite@x: ベースライン補正量が 0 でないときに \AA など一部の合成文字がおかしくなることへの対応。 . . . . .                                              | 34 |
| 2006/06/27 plfonts.dtx v1.4                                                                              |     | 2016/04/17 plvers.dtx v1.0u                                                                                                |    |
| \reDeclareMathAlphabet:<br>\reDeclareMathAlphabet を修正。ありがとう、ymt さん。 . .                                  | 18  | General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2016/03/31>版対応確認 . . . . .                                                       | 1  |
| 2006/11/10 plfonts.dtx v1.5                                                                              |     | 2016/04/30 plfonts.dtx v1.6b                                                                                               |    |
| \reDeclareMathAlphabet:<br>\reDeclareMathAlphabet を修正。ありがとう、ymt さん。 . .                                  | 18  | General: ptrace.sty の冒頭で tracefnt.sty を \RequirePackageWithOptions するようにした . . . . .                                       | 7  |
| 2016/01/26 plcore.dtx v1.2b                                                                              |     | 2016/05/07 plvers.dtx v1.0v                                                                                                |    |
| \@makecol: \@outputbox の深さが他のものの位置に影響を与えないようにする<br>\vskip -\dimen@が縦組モードでは無効になっていたので修正                   | 49  | General: パッチファイルを読み切るのをやめた。 . . . . .                                                                                      | 1  |
| \@makefnmark: 2013 年以降の pT <sub>E</sub> X (r28720) で脚注番号の前後の和文文字との間に xkanjiskip が入ってしまう問題に対応 . . . . .   | 61  | \everyjob: 起動時の文字列を最新の L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X に合わせた。 . . . . .                                                    | 2  |
| 2016/02/01 plfonts.dtx v1.6                                                                              |     | 2016/05/12 plvers.dtx v1.0w                                                                                                |    |
| \eminnershape: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2015/01/01>での \em の定義変更に対応。 \eminnershape を追加。 . . . . . | 39  | \everyjob: 起動時の文字列に入れる L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X のバージョンを元の L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X のバナーから引き継ぐように改良 . . . . . | 2  |
| 2016/02/01 plvers.dtx v1.0s                                                                              |     | 起動時の文字列に入れる Babel のバージョンを元の L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X のバナーから取得するコードを platex.ini から取り入れた . . .                        | 3  |
| General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2015/01/01>版用に修正 . . . . .                                     | 1   | 2016/05/20 plcore.dtx v1.2e                                                                                                |    |
| latexrelease 利用時に警告を出すようにした . . . . .                                                                    | 4   | General: fltrace パッケージの pL <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X 版として pfltrace パッケージを新設 . . . . .                                  | 48 |
| 2016/02/03 plvers.dtx v1.0t                                                                              |     |                                                                                                                            |    |
| \plIncludeInRelease:<br>\plIncludeInRelease と                                                            |     |                                                                                                                            |    |

|                                                                                                                             |                                                                                                                                    |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2016/06/06 plfonts.dtx v1.6c                                                                                                | \footnotetext: 閉じ括弧類の直後に<br>\footnotetext が続く場合に<br>改行が起きることがある問題に<br>対処 . . . . . 63                                              |
| \@text@composite: v1.6a での誤っ<br>た再定義を削除 (forum:1941) . 34                                                                   | \pltx@foot@penalty: カウンタ<br>\pltx@foot@penalty を追加 . . 62                                                                          |
| \@text@composite@x: v1.6a での修<br>正で é など全てのアクセント付<br>き文字で周囲に \xkanjiskip が<br>入らなくなっていたのを修正。 . 34                           | 2016/08/26 plvers.dtx v1.0z<br>General: platex.cfg の読み込みを<br>plcore.ltx から platex.ltx へ<br>移動 . . . . . 3                          |
| \g@tlastchart@: マクロ追加 . . . . 33                                                                                            | 2016/09/01 plcore.dtx v1.2h<br>\@makecol: 縦組で longtable パッ<br>ケージを使って表組の途中で改<br>ページするとき無限ループが起<br>こる問題に対処 (Issue 21) . . . 49      |
| \pltx@isletter: マクロ追加 . . . . 33                                                                                            | 2016/09/08 plcore.dtx v1.2i<br>\@footnotetext: v1.2g の修正で入<br>れた \null がまずかったので水<br>平モードのときだけ発行するこ<br>とにした (Issue 23) . . . . . 64 |
| 2016/06/08 kinsoku.dtx v1.0a<br>General: T1 などの 8 ビットフォ<br>ントエンコーディングのために<br>128-256 の文字を \xspcode=3<br>に設定 . . . . . 105   | 2016/09/14 plvers.dtx v1.1<br>\everyjob: 起動時のバナーを取得す<br>るコードを改良 . . . . . 2                                                        |
| 2016/06/19 plfonts.dtx v1.6d<br>\pltx@isletter: アクセント付き文<br>字をさらに修正 (forum:1951) . 33                                       | 2016/11/07 plect.dtx v1.2b<br>\@@rensuj: 横組で段落の頭に<br>\rensuj を使えるように<br>\leavevmode を追加して修正 . 95                                   |
| 2016/06/19 plvers.dtx v1.0x<br>\ppatch@level: パッチレベルを<br>plvers.dtx で設定 . . . . . 1                                         | 2016/11/09 plcore.dtx v1.2j<br>\e@alloc@top: FAM256 パッチ適用<br>e-pTeX に対応 . . . . . 73                                               |
| 2016/06/26 plfonts.dtx v1.6e<br>\@text@composite@x: v1.6a 以降の<br>修正で全てのアクセント付き文<br>字でトラブルが相次いだため、<br>いったんパッチを除去。 . . . . 34 | \e@mathgroup@top: FAM256 パッ<br>チ適用 e-pTeX に対応 . . . . . 74                                                                         |
| 2016/06/27 plvers.dtx v1.0y<br>General: platex.cfg の読み込みを<br>追加 . . . . . 3                                                 | 2016/11/12 jclasses.dtx v1.7<br>\@makefntext: Replaced all \hbox<br>to by \hb@xt@ (sync with<br>classes.dtx v1.3a) . . . . . 173   |
| 2016/06/30 plcore.dtx v1.2f<br>\@AtBeginDvi: \@begindivibox を常<br>に横組に . . . . . 61                                         | \footnoterule: use \@width (sync<br>with classes.dtx v1.3a) . . . . 173                                                            |
| 2016/07/25 jltxdoc.dtx v1.0c<br>\verb: doc パッケージが上書きする<br>\verb を再々定義 . . . . . 177                                         | thebibliography: Moved<br>\@mkboth out of heading arg<br>(sync with classes.dtx v1.4c) 171                                         |
| 2016/08/20 plect.dtx v1.2a<br>\@iiiparbox: \parbox 前後の余分<br>な \xkanjiskip を削除 . . . . . 88                                  | theindex: \columnsep と<br>\columnseprule の変更を後ろ<br>に移動 (sync with classes.dtx<br>v1.4f) . . . . . 172                              |
| \endtabular: tabular 環境後の余分<br>な \xkanjiskip を削除 . . . . . 79                                                               | \listoffigures: Moved \@mkboth<br>out of heading arg (sync with<br>classes.dtx v1.4c) . . . . . 170                                |
| \p@array: 横組で<t>を指定した場<br>合に \@arstrutbox を余計に<br>\hbox に入れていたのを修正 . . 78                                                   | \listoftables: Moved \@mkboth<br>out of heading arg (sync with                                                                     |
| \p@tabular: tabular 環境前の余分<br>な \xkanjiskip を削除 . . . . . 78                                                                |                                                                                                                                    |
| 2016/08/25 plcore.dtx v1.2g<br>\@footnotetext: 脚注の合印直後で<br>の改行が禁止されてしまう問題<br>に対処 . . . . . 64                               |                                                                                                                                    |
| \footnote: 合印の前の文字と合印の<br>間をベタ組に . . . . . 62                                                                               |                                                                                                                                    |

|                                                                                                                                                                                  |     |                                                                                                                                                                                  |     |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| classes.dtx v1.4c) . . . . .                                                                                                                                                     | 171 | Changed <code>\endgraf</code> to <code>\@par</code><br>(sync with <code>ltboxes.dtx v1.0y</code> ) . . . . .                                                                     | 88  |
| <code>\maketitle</code> : ドキュメントに反して<br><code>\@maketitle</code> が空になってい<br>なかったのを修正 . . . . .                                                                                   | 144 | Ensure <code>\@parboxto</code> holds the<br>value of <code>\@tempdimb</code> not the<br>register itself (pr/3867) (sync<br>with <code>ltboxes.dtx v1.1g</code> ) . . . . .       | 88  |
| 2016/11/16 jclasses.dtx v1.7a<br><code>\@dottedtocline</code> : Added<br><code>\nobreak</code> for latex/2343 (sync<br>with <code>ltsect.dtx v1.0z</code> ) . . . . .            | 168 | <code>\@iminipage</code> : Changed <code>\@empty</code> to<br><code>\relax</code> as flag for natural<br>width: pr/2975 (sync with<br><code>ltboxes.dtx v1.1f</code> ) . . . . . | 87  |
| <code>\@makechapterhead</code> : replace<br><code>\reset@font</code> with <code>\normalfont</code><br>(sync with <code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                      | 153 | <code>\@iparbox</code> : Changed <code>\@empty</code> to<br><code>\relax</code> as flag for natural<br>width: pr/2975 (sync with<br><code>ltboxes.dtx v1.1f</code> ) . . . . .   | 88  |
| <code>\@makeschapterhead</code> : replace<br><code>\reset@font</code> with <code>\normalfont</code><br>(sync with <code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                     | 153 | <code>\endminipage</code> : put <code>\global</code> into<br>definition of <code>\@minipagefalse</code><br>(sync with <code>ltboxes v1.0z</code> ) . . . . .                     | 88  |
| <code>\@part</code> : replace <code>\reset@font</code> with<br><code>\normalfont</code> (sync with<br><code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                                 | 150 | <code>\p@tabular</code> : Use <code>\setlength</code> , so<br>that calc extensions apply<br>(sync with <code>ltablex.dtx v1.1j</code> ) . . . . .                                | 78  |
| <code>\@spart</code> : replace <code>\reset@font</code><br>with <code>\normalfont</code> (sync with<br><code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                                | 151 | <code>\X@minipage</code> : Changed <code>\@empty</code> to<br><code>\relax</code> as flag for natural<br>width: pr/2975 (sync with<br><code>ltboxes.dtx v1.1f</code> ) . . . . . | 87  |
| <code>enumerate</code> : Use <code>\expandafter</code><br>(sync with <code>ltlists.dtx v1.0j</code> ) . . . . .                                                                  | 158 | <code>\X@parbox</code> : Changed <code>\@empty</code> to<br><code>\relax</code> as flag for natural<br>width: pr/2975 (sync with<br><code>ltboxes.dtx v1.1f</code> ) . . . . .   | 88  |
| <code>\paragraph</code> : replace <code>\reset@font</code><br>with <code>\normalfont</code> (sync with<br><code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                             | 154 | 2016/11/22 jclasses.dtx v1.7b<br><code>\backmatter</code> : 補足ドキュメントを<br>追加 . . . . .                                                                                            | 148 |
| <code>\part</code> : Check <code>\noskipsec</code> switch<br>and possibly force horizontal<br>mode (sync with <code>classes.dtx</code><br><code>v1.4a</code> ) . . . . .         | 149 | 2016/12/18 jclasses.dtx v1.7c<br><code>\@endpart</code> : Only add empty page<br>after part if twoside and<br>openright (sync with<br><code>classes.dtx v1.4b</code> ) . . . . . | 151 |
| <code>\section</code> : replace <code>\reset@font</code><br>with <code>\normalfont</code> (sync with<br><code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                               | 154 | <code>\@schapter</code> : 奇妙な article ガード<br>とコードを削除してドキュメン<br>トを追加 . . . . .                                                                                                    | 153 |
| <code>\subparagraph</code> : replace<br><code>\reset@font</code> with <code>\normalfont</code><br>(sync with <code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                          | 154 | 2017/02/04 plect.dtx v1.2d<br><code>\kanji</code> : <code>\Kanji</code> の引数だけでなく後<br>に連続する数字も漢数字になっ<br>てしまうバグを修正 . . . . .                                                       | 95  |
| <code>\subsection</code> : replace <code>\reset@font</code><br>with <code>\normalfont</code> (sync with<br><code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                            | 154 | 2017/02/15 jclasses.dtx v1.7d<br>General: openleft オプション追加 . . . . .                                                                                                             | 113 |
| <code>\subsubsection</code> : replace<br><code>\reset@font</code> with <code>\normalfont</code><br>(sync with <code>classes.dtx v1.3c</code> ) . . . . .                         | 154 | <code>\if@openleft</code> : <code>\if@openleft</code> ス<br>イッチ追加 . . . . .                                                                                                       | 110 |
| <code>itemize</code> : Use <code>\expandafter</code> (sync<br>with <code>ltlists.dtx v1.0j</code> ) . . . . .                                                                    | 159 | <code>titlepage</code> : book クラスで <code>titlepage</code><br>を必ず奇数ページに送るように<br>変更 . . . . .                                                                                      | 142 |
| 2016/11/19 plect.dtx v1.2c<br><code>\@iiiminipage</code> : Use <code>\@setminpage</code><br>(sync with <code>ltboxes v1.1a</code> ) . . . . .                                    | 87  |                                                                                                                                                                                  |     |
| <code>\@iiiparbox</code> : Changed <code>\@empty</code> to<br><code>\relax</code> as flag for natural<br>width: pr/2975 (sync with<br><code>ltboxes.dtx v1.1f</code> ) . . . . . | 88  |                                                                                                                                                                                  |     |



|                                                                                                 |     |                                                                                                                                      |          |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| titlepage のページ番号を奇数ならば 1 に、偶数ならば 0 にリセットするように変更                                                 | 142 | 2017/03/10 v1.3c)                                                                                                                    | 57       |
| \p@thanks: 縦組クラスの所属表示の番号を直立にした                                                                  | 143 | \verb: \verb の途中でハイフネーションが起きないように                                                                                                    |          |
| \pltx@cleartoevenpage:<br>\cleardoublepage の代用となる命令群を追加                                         | 134 | \language を設定 (sync with ltmiscen.dtx 2017/03/09 v1.1m)                                                                              | 67       |
| 2017/02/20 plcore.dtx v1.2k<br>\@setref: 目次で \ref を使った場合に後ろの空白が消える現象に対処するため、\relax のあとに {} を追加  | 65  | 2017/03/19 plvers.dtx v1.1b<br>\document@default@language:<br>\document@default@language の定義を保証 (sync with ltfinal 2017/03/09 v2.0t) | 3        |
| 2017/02/20 plfonts.dtx v1.6f<br>\set@fontsize: \ystrutbox を組み立てるように                             | 23  | \l@nohyphenation:<br>\l@nohyphenation の定義を保証 (sync with ltfinal 2017/03/09 v2.0t)                                                    | 3        |
| \strut: \strutbox の代わりに \ystrutbox を使用                                                          | 11  | 2017/03/28 plect.dtx v1.2f<br>\fork@array@option: 表と周囲との揃え位置を修正                                                                      | 80       |
| \strutbox: \strutbox を縦横両対応に                                                                    | 11  | \fork@parbox@option: 段落の箱と周囲との揃え位置を修正                                                                                                | 90       |
| \ystrut: \ystrut を追加                                                                            | 12  | 2017/04/23 plcore.dtx v1.2n<br>\@gnewline: ドキュメントの追加                                                                                 | 46       |
| \ystrutbox: \ystrutbox を追加                                                                      | 11  | 2017/04/23 plvers.dtx v1.1c<br>General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2017/04/15>版対応確認                                            | 1        |
| 2017/02/20 plvers.dtx v1.1a<br>General: L <sup>A</sup> T <sub>E</sub> X <2017/01/01>版対応確認       | 1   | 2017/05/03 plcore.dtx v1.2o<br>\@no@lnbk: 行頭禁則文字の直前でも改行するようにした                                                                       | 47       |
| 2017/02/25 plcore.dtx v1.2l<br>\@makecol: 脚注とボトムフロートの順序を入れ替えたことで版面全体の垂直位置がずれていたのを修正 (Issue 32)  | 49  | 2017/05/04 plect.dtx v1.2g<br>\@iimakePbox: Use \setlength, so that calc extensions apply                                            | 92       |
| \@makespecialcolbox: \@makecol を変更したのに<br>\@makespecialcolbox を変更しない、という判断について明文化               | 52  | \pbox: Make \pbox Robust                                                                                                             | 92       |
| 2017/03/02 plect.dtx v1.2e<br>\parbox: Make \parbox Robust (sync with ltboxes 2015/01/08 v1.1h) | 88  | 2017/07/21 plcore.dtx v1.2p<br>\@classv: tabular 環境のセル内の JFM グルーを削除                                                                  | 71       |
| 2017/03/05 jclasses.dtx v1.7e<br>General: トンボに表示するジョブ情報の書式を変更                                   | 112 | \@tabclassz: tabular 環境のセル内の JFM グルーを削除                                                                                              | 69       |
| \backmatter: \frontmatter と \mainmatter を奇数ページに送るように変更                                          | 148 | 2017/07/21 plect.dtx v1.2h<br>\fork@array@option: 表と周囲との揃え位置をさらに修正                                                                   | 80       |
| 2017/03/07 plfonts.dtx v1.6g<br>\textunderscore: ベースライン補正量を修正                                   | 32  | 2017/08/05 kinsoku.dtx v1.0b<br>General: %, &, %, & の禁則ペナルティが誤っていたのを修正 (post → pre)                                                  | 102      |
| 2017/03/19 plcore.dtx v1.2m<br>\@outputpage: \language をリセット (sync with ltoutput.dtx            |     | 2017/08/05 plfonts.dtx v1.6h<br>\adjustbaseline: trace のコードの % 忘れを修正<br>和文書体の基準を全角空白から「漢」に変更                                         | 26<br>25 |

|                                     |                                 |
|-------------------------------------|---------------------------------|
| 2017/08/25 plcore.dtx v1.2q         | 2017/09/24 plvers.dtx v1.1d     |
| \@no@lnbk: \nolinebreak の場合に        | \everyjob: パッチレベルが負の数の          |
| \<x>kanjiskip がいらなくなっ               | 場合を pre-release 扱いへ . . . . . 2 |
| ていたのを修正 . . . . . 47                | 2017/09/26 plcore.dtx v1.2r     |
| 2017/08/31 jclasses.dtx v1.7f       | \@tabclassz: tabular 環境の右揃え     |
| \Chs: 和文書体の基準を全角空白か                 | (r) で罫線がずれるようになって               |
| ら「漢」に変更 . . . . . 117               | いたバグを修正 . . . . . 69            |
| 2017/09/19 jclasses.dtx v1.7g       | 2017/09/27 plcore.dtx v1.2s     |
| \Chs: 内部処理で使ったボックス 0                | \@setref: 相互参照のスペースファ           |
| を空にした . . . . . 117                 | クターを補正 . . . . . 65             |
| 2017/09/24 jltxdoc.dtx v1.0d        | \@startline: tabbing 環境の行冒頭     |
| \verb: \vadjust{} を追加 . . . . . 177 | の JFM グルーを削除 . . . . . 67       |
| 2017/09/24 plfonts.dtx v1.6i        | \verb: \verb の冒頭の半角空白を保         |
| \<: \<が段落頭でも効くようにした . . . . . 41    | 持 . . . . . 67                  |
| \check@nocorr@: 2010 年の pTeX        | 2017/10/31 plcore.dtx v1.2t     |
| 本体の修正により、v1.3i で入れ                  | \@setref: v1.2s の変更に伴い、         |
| た対処が不要になっていたので                      | \ref が数式モードでエラーに                |
| 削除 . . . . . 38                     | なっていたのを修正 . . . . . 65          |

## 索引

イタリック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。

| Symbols                     |                                            |
|-----------------------------|--------------------------------------------|
| \_ . . . . .                | h50                                        |
| \# . . . . .                | f4                                         |
| \\$ . . . . .               | f5                                         |
| \% . . . . .                | f6                                         |
| \& . . . . .                | f7                                         |
| \. . . . .                  | g1788                                      |
| \< . . . . .                | <u>b1062</u>                               |
| \@enc@update . . . . .      | b584                                       |
| \@end . . . . .             | a38, a50, b1056                            |
| \@endpbox . . . . .         | d46                                        |
| \@if@newlist . . . . .      | c434, c489, c505, c559                     |
| \@kenc@update . . . . .     | b596, <u>b605</u>                          |
| \@paperheight . . . . .     |                                            |
| . . . . .                   | c379, c401, <u>c419</u> , c456, c527       |
| \@paperwidth . . . . .      | c380, c383,                                |
| . . . . .                   | c385, c387, c389, c402, c405,              |
| . . . . .                   | c407, c409, c411, <u>c419</u> , c455, c526 |
| \@par . . . . .             | c966, c989, d322, d325                     |
| \@picture . . . . .         | d440, <u>d441</u>                          |
| \@rensuji . . . . .         | <u>d494</u>                                |
| \@startpbox . . . . .       | d46                                        |
| \@topmargin . . . . .       | <u>c419</u> ,                              |
| . . . . .                   | c453, c457, c468, c524, c528, c539         |
| \@underline . . . . .       | c1009, c1010, c1017, c1018                 |
| \acol . . . . .             | c855,                                      |
| . . . . .                   | c882, c908, c935, c942, d3, d17            |
| \acolampacol . . . . .      |                                            |
| . . . . .                   | c845, c853, c872, c880, c898, c906         |
| \@addamp . . . . .          | c851, c878, c904                           |
| \@addtopreamble . . . . .   | c923, c929                                 |
| \@addtoreset . . . . .      | g1582, g1813                               |
| \@afterheading . . . . .    |                                            |
| . . . . .                   | g1193, g1219, g1261, g1280                 |
| \@afterindenttrue . . . . . | g1164, g1245, g1635                        |
| \@Alpha . . . . .           | g1315,                                     |
| . . . . .                   | g1316, g1324, g1325, g1409, g1415          |
| \@alpha . . . . .           | g1407, g1413                               |
| \@ampacol . . . . .         | c847, c874, c900                           |
| \@arabic . . . . .          | g1116, g1118, g1119,                       |
| . . . . .                   | g1121, g1123, g1125, g1127,                |
| . . . . .                   | g1131, g1133, g1134, g1136,                |
| . . . . .                   | g1138, g1140, g1142, g1406,                |
| . . . . .                   | g1412, g1504, g1507, g1511,                |
| . . . . .                   | g1514, g1531, g1534, g1538,                |
| . . . . .                   | g1541, g1580, g1584, g1776, g1783          |
| \@arrayacol . . . . .       | d3                                         |
| \@arrayclassiv . . . . .    | d4                                         |
| \@arrayclassz . . . . .     | d3                                         |
| \@arraycr . . . . .         | d5                                         |
| \@arstrut . . . . .         | d45                                        |
| \@arstrutbox . . . . .      | d22                                        |
| \@author . . . . .          | g943, g993, g1007, g1046, g1065            |
| \@auxout . . . . .          | g1647                                      |
| \@badtab . . . . .          | c811, c825                                 |
| \@bannerfont . . . . .      | <u>c324</u> , c332                         |
| \@bannertoken . . . . .     | <u>c324</u> , c332, g70                    |
| \@BC . . . . .              | <u>c319</u> , c354, c390, c412             |
| \@begin@alignbox . . . . .  | d48, d60, d66, d72,                        |
| . . . . .                   | d77, d84, d91, d96, d99, d102,             |
| . . . . .                   | d109, d112, d115, d120, d123, d126         |
| \@begin@parbox . . . . .    |                                            |
| . . . . .                   | d331, d340, d343, d346, d349,              |
| . . . . .                   | d354, d357, d360, d363, d368,              |
| . . . . .                   | d371, d374, d377, d384, d387,              |
| . . . . .                   | d390, d393, d398, d401, d404, d407         |
| \@begin@tempboxa . . . . .  | c966, c989, d321, d324                     |
| \@begindvi . . . . .        | c466, c537                                 |
| \@begindvibox . . . . .     | c571, c572, c579, c580                     |
| \@beginparpenalty . . . . . | g1077, <u>g1345</u>                        |
| \@biblabel . . . . .        | g1776, g1777, <u>g1793</u>                 |
| \@BL . . . . .              | <u>c319</u> , c348, c390, c412             |
| \@B1 . . . . .              | <u>c319</u> , c351, c387, c409             |
| \@bou . . . . .             | d521, d522, d538                           |
| \@BR . . . . .              | <u>c319</u> , c358, c390, c412             |
| \@Br . . . . .              | <u>c319</u> , c361, c387, c409             |
| \@bsphack . . . . .         | h43, h44, h45                              |
| \@captionbox . . . . .      |                                            |
| . . . . .                   | d140, d205, d209, d211, d212, d254         |
| \@captype . . . . .         |                                            |
| . . . . .                   | d194, d218, d219, d223, d234, d249         |
| \@cclv . . . . .            | c111, c151, c181, c211                     |

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

`\@ccclvi` ..... b864, b867, b868, b876  
`\@centercr` ..... g1487  
`\@changed@cmd` ..... b119  
`\@changed@kcmd` b153, b177, b606, b627  
`\@chapapp` . g841, g865, g899, g924,  
           g1144, g1251, g1253, g1271, g1322  
`\@chappos` . g841, g865, g899, g924,  
           g1144, g1251, g1253, g1271, g1323  
`\@chapter` ..... g1246, g1247  
`\@chnum` ..... c859, c886, c912  
`\@cite` ..... g1794  
`\@CL` ..... c322, c365, c385, c407  
`\@classiv` ..... c937, c944, d4, d19  
`\@classv` ..... c920  
`\@classz` ..... c936, c943, d3, d18  
`\@clubpenalty` ..... g1786  
`\@colht` c134, c158, c188, c218, c252,  
           c258, c262, c280, c285, c490, c560  
`\@combinefloats` c115, c154, c184, c214  
`\@CR` ..... c322, c368, c385, c407  
`\@curline` ..... c816, c830  
`\@current@cmd` ..... b607  
`\@currentlabel` ..... c667, c690, c712  
`\@currname` ..... a105, a112  
`\@curtab` ..... c815, c829  
`\@curtabmar` .... c814, c815, c828, c829  
`\@date` . g944, g996, g1008, g1047, g1068  
`\@dblarg` ..... d194  
`\@dblfloat` ..... g1526, g1553  
`\@dblfpbot` ..... g732  
`\@dblfpsep` ..... g732  
`\@dblfpstop` ..... g732  
`\@defaultunits` b447, b449, b485, b487  
`\@depth` ..... b460, b463, b466,  
           b498, b501, b504, d26, d29, d32,  
           d37, d40, d504, d505, d506, d544  
`\@dotsep` ..... g1625, g1641  
`\@dottedtocline` .....  
     .. g1631, g1714, g1715, g1719,  
        g1720, g1721, g1722, g1725,  
        g1726, g1727, g1728, g1733,  
        g1734, g1735, g1736, g1739,  
        g1740, g1741, g1742, g1756, g1757  
`\@eha` . b211, b230, b249, b399, b578,  
           b590, b622, d200, g1603, g1607  
`\@ehd` ..... c15  
`\@elt` ..... c112  
`\@enablejfamfalse` ..... g113  
`\@enablejfamtrue` ..... g16  
`\@end@alignbox` .....  
     .... d52, d53, d64, d70, d73,  
           d82, d89, d92, d97, d100, d103,  
           d110, d113, d116, d121, d124, d127  
`\@end@parbox` .....  
     d333, d341, d344, d347, d350,  
     d355, d358, d361, d364, d369,  
     d372, d375, d378, d385, d388,  
     d391, d394, d399, d402, d405, d408  
`\@end@tempboxa` .... c979, c1002, d334  
`\@endparpenalty` ..... g1080, g1345  
`\@endpart` ..... g1212, g1226, g1228  
`\@endpbox` ..... c924, c930, d46  
`\@enumctr` ..... g1435, g1436, g1446  
`\@enumdepth` g1433, g1434, g1435, g1442  
`\@eqnum` ..... d547  
`\@esphack` ..... h43, h45  
`\@evenfoot` .....  
     . c449, c520, g800, g805, g813,  
        g816, g818, g823, g876, g882, g932  
`\@evenhead` ..... c448, c519,  
           g800, g804, g809, g811, g820,  
           g824, g826, g875, g881, g933, g935  
`\@finalstrut` ..... c672, c695, c717  
`\@firstampfalse` .... c855, c882, c908  
`\@firstoftwo` ..... b345,  
           b788, b792, b801, b836, b893, b916  
`\@float` ..... g1523, g1550  
`\@floatbox` ... d130, d158, d199, d210  
`\@font@info` ..... b123, b158,  
           b182, b196, b202, b432, b474, b512  
`\@fontswitch` .... b350, g1619, g1620  
`\@footnotemark` .....  
     . c620, c625, c632, c637, c721, e11  
`\@footnotetext` .....  
     c620, c632, c646, c654, c656, d290  
`\@fpbot` ..... g717  
`\@fpsep` ..... g717  
`\@fptop` ..... g717  
`\@freelist` .... c113, c152, c182, c212  
`\@getpen` ..... c62, c79, c95  
`\@gnewline` ..... c45  
`\@gobble` ..... b314, b315, b316,  
           b322, c462, c463, c464, c533,  
           c534, c535, g938, g939, g940, g1648  
`\@gobble@plIncludeInRelease` ....  
     ..... a109, a116, a119  
`\@gobbletwo` ..... b317,  
           b319, b320, g800, g807, g814, g937

**File Key:** a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plex.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

`\@halignto` ..... d5, d7, d16, d44  
`\@height` ..... b460, b463, b466,  
           b498, b501, b504, d25, d28, d31,  
           d36, d39, d504, d505, d506, d544  
`\@highpenalty` g284, g1668, g1687, g1695  
`\@hightab` ..... c810, c812, c824, c826  
`\@idxitem` ..... g1803, g1805  
`\@ifl@t@r` ..... c23  
`\@ifnextchar` ..... c20,  
           c618, c622, c630, c634, c644,  
           c652, d8, d10, d12, d20, d142,  
           d145, d181, d182, d183, d186,  
           d187, d190, d258, d260, d262,  
           d264, d308, d310, d312, d314,  
           d411, d413, d415, d437, d439, d496  
`\@ifpackageloaded` ..... a124, a125  
`\@ifstar` .. c779, c791, c801, h49, d495  
`\@ifundefined` ..... b210, b229  
`\@iiiminipage` . d261, d263, d265, d266  
`\@iiiparbox` .....  
           c958, d307, d311, d313, d315, d316  
`\@iilayoutcaption` ..... d179  
`\@iimakePbox` ..... d416, d417  
`\@iiminipage` ..... d263, d264  
`\@iiparbox` ..... d313, d314  
`\@ilayoutcaption` ..... d179  
`\@imakePbox` ..... d413, d415  
`\@imakepbox` ..... d412  
`\@iminipage` ..... d261, d262  
`\@inmathwarn` ..... b629  
`\@input@` ..... c836  
`\@iparbox` ..... d311, d312  
`\@itemdepth` g1460, g1461, g1462, g1469  
`\@itemitem` ..... g1462, g1463  
`\@itempenalty` ..... g1345  
`\@ixpt` ..... h13, e68, g176, g218  
`\@Kanji` ..... d517  
`\@kludgeins` ..... c131,  
           c155, c185, c215, c242, c243,  
           c244, c253, c277, c281, c299, c310  
`\@knjcmdfalse` ..... b415  
`\@knjcmdtrue` ..... b380  
`\@landscapefalse` ..... g3  
`\@landscapepetrue` ..... g63  
`\@lastchclass` ..... c844, c871, c897  
`\@latex@error` .....  
           ..... b211, b230, b249, b399,  
           b578, b590, b622, c10, g1602, g1606  
`\@latex@info` ..... d168  
`\@latex@warning` .....  
           b130, c734, c748, c761, d219, g1790  
`\@latex@warning@no@line` .. a126, c24  
`\@layoutfloat` ..... d142  
`\@listdepth` ..... d291, g1438, g1465  
`\@listI` ..... h11, g163, g1352  
`\@listi` ..... h11, h17, g163, g180,  
           g190, g200, g212, g222, g232, g1352  
`\@listiii` ..... g1371  
`\@listiiii` ..... g1371  
`\@listiv` ..... g1371  
`\@listv` ..... g1371  
`\@listvi` ..... g1371  
`\@lnumwidth` .. g1629, g1638, g1639,  
           g1674, g1692, g1693, g1707, g1708  
`\@lowpenalty` .....  
           . g284, g1077, g1345, g1346, g1347  
`\@M` ..... g1080,  
           g1187, g1206, g1217, g1224, g1636  
`\@m` ..... c739, g1788  
`\@mainmatterfalse` ..... g1151, g1158  
`\@mainmattertrue` ..... g11, g1154  
`\@makecaption` ..... g1555  
`\@makechapterhead` ..... g1261, g1262  
`\@makecol` ..... c108  
`\@makefnmark` .... c588, c723, c724,  
           e11, g1019, g1023, g1816, g1820  
`\@makefntext` ..... c671,  
           c694, c716, g1022, g1026, g1814  
`\@makeother` ..... c776, c788, c799, h48  
`\@makeschapterhead` g1280, g1282, g1798  
`\@makespecialcolbox` .....  
           ..... c132, c156, c186, c216, c239  
`\@maketitle` .....  
           g1030, g1031, g1036, g1043, g1054  
`\@mathrmcmfalse` ..... g17  
`\@mathrmcmtrue` ..... g111, g114  
`\@maxdepth` ..... c119, c135, c145,  
           c159, c176, c189, c206, c219, c236  
`\@medpenalty` ..... g284  
`\@midlist` ..... c113, c114,  
           c152, c153, c182, c183, c212, c213  
`\@minipagefalse` ..... d303, g1568  
`\@minipagerestore` ..... d292  
`\@mkboth` .. g800, g807, g814, g828,  
           g855, g886, g914, g937, g1661,  
           g1752, g1765, g1774, g1775, g1799  
`\@mkpream` ..... d44

**File Key:** a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

|                         |                                       |                            |                                    |
|-------------------------|---------------------------------------|----------------------------|------------------------------------|
| \@MM .....              | c665, c688, c710                      | \@openlefttrue .....       | g96                                |
| \@mpargs .....          | d269, d307                            | \@openrightfalse .....     | g96, g97                           |
| \@mparswitchfalse ..... | g1874, g1880                          | \@openrighttrue .....      | g93, g95                           |
| \@mparswitchtrue .....  | g1878                                 | \@outputbox .              | c111, c118, c120, c134,            |
| \@mpfn .....            | c618, c630, d288                      |                            | c137, c138, c151, c158, c161,      |
| \@mpfootins ...         | d297, d298, d301, <u>g1577</u>        |                            | c162, c181, c188, c191, c192,      |
| \@mpfootnotetext .....  | d290                                  |                            | c211, c218, c221, c222, c246,      |
| \@mplistdepth .....     | d291                                  |                            | c248, c249, c254, c257, c262,      |
| \@namedef .....         | b125, b126, b160,                     |                            | c264, c279, c285, c287, c480, c551 |
|                         | b161, b184, b185, b264, b440, d8      | \@outputpage .....         | <u>c422</u>                        |
| \@nameuse .....         | c442, c513                            | \@outputtombow .....       | <u>c372</u> , c467, <u>c538</u>    |
| \@needsformat .....     | c8                                    | \@parboxrestore .....      |                                    |
| \@needsPf@rmat .....    | <u>c2</u>                             |                            | c436, c507, c666, c689,            |
| \@needsPformat .....    | <u>c2</u>                             |                            | c711, c966, c989, d287, d322, d325 |
| \@newlistfalse .....    | c435, c506                            | \@parboxto .....           | c961, c969,                        |
| \@nextchar .....        | c923, c929                            |                            | c976, c984, c992, c999, d329, d331 |
| \@nil ....              | a106, a107, b273, b933, b956          | \@parse@version .....      | a106, a107                         |
| \@nnil .....            | b447, b449, b485, b487                | \@part .....               | g1165, g1174, <u>g1176</u>         |
| \@no@lnbk .....         | <u>c53</u>                            | \@pboxswfalse .....        |                                    |
| \@nobreakfalse .....    | g1680                                 |                            | c964, c987, d203, d238, d418       |
| \@nobreaktrue .....     | g1679                                 | \@pboxswtrue .....         |                                    |
| \@noitemerr .....       | g1789                                 |                            | c974, c997, d208, d244, d429       |
| \@noligs .....          | c777, c789, c800                      | \@pcaption .....           | <u>d194</u>                        |
| \@nolnerr .....         | c47, c58, c75, c91                    | \@picbox .....             | d464, d470, d471                   |
| \@nomath .....          | b1003,                                | \@picht ..                 | d449, d452, d457, d460, d470       |
|                         | b1010, b1016, e58, g1617, g1618       | \@picwd .....              | d443,                              |
| \@normalsize .....      | <u>g139</u>                           |                            | d449, d452, d457, d460, d464, d470 |
| \@notffam .....         | <u>b645</u>                           | \@plIncludeInRelease ..... | a102, a103                         |
| \@notffamfalse .....    | b653                                  | \@plIncludeInRelease ..... | a100, a101, a102                   |
| \@notffamtrue .....     | b682, b694                            | \@pnumwidth .....          |                                    |
| \@notkfam .....         | <u>b645</u>                           |                            | g1623, g1643, g1671, g1672,        |
| \@notkfamfalse .....    | b652                                  |                            | g1676, g1690, g1694, g1705, g1709  |
| \@notkfamtrue .....     | b660, b673                            | \@preamble .....           | c857, c858, c884,                  |
| \@nxttabmar .....       |                                       |                            | c885, c910, c911, d44, d45, d51    |
|                         | c810, c812, c814, c824, c826, c828    | \@ptsize .....             | g4, g57, g59,                      |
| \@obsoletefile .....    |                                       |                            | g61, g62, g133, g134, g135, g136   |
|                         | e83, e87, e91, e95, e99, e103         | \@reinserts .....          | <u>c305</u>                        |
| \@oddfoot ..            | c445, c516, g800, g803,               | \@rensuji .....            | <u>d494</u>                        |
|                         | g805, g813, g817, g819, g823,         | \@resetactivechars .....   | c433, c504                         |
|                         | g852, g878, g884, g911, g913, g932    | \@restonecolfalse .....    | g951,                              |
| \@oddhead .....         | c445,                                 |                            | g964, g1657, g1748, g1761, g1796   |
|                         | c516, <u>g800</u> , g802, g810, g812, | \@restonecoltrue .....     | g950,                              |
|                         | g820, <u>g825</u> , g827, g853, g854, |                            | g962, g1656, g1747, g1760, g1796   |
|                         | g877, g883, g910, g912, g934, g936    | \@Roman .....              | g1115, g1130                       |
| \@onlypreamble ..       | b188, b189, b190,                     | \@roman .....              | g1408, g1414                       |
|                         | b191, b192, b208, b283, b284,         | \@rotswfalse .....         |                                    |
|                         | b328, b749, b750, c28, c29, d176      |                            | d56, d225, d239, d270, d336, d418  |
| \@openbib@code ...      | g103, g1780, <u>g1792</u>             | \@rotswtrue .....          |                                    |
| \@openleftfalse .....   | g95, g97                              |                            | d27, d75, d227, d273, d352, d421   |
|                         |                                       | \@schapter .....           | g1246, <u>g1279</u>                |

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

\@secondoftwo ..... b788,  
b797, b801, b802, b834, b891, b914  
\@secpentalty ..... g1667, g1702  
\@setfontsize ..... h6, h13, g141,  
g142, g143, g144, g145, g146,  
g176, g186, g196, g208, g218,  
g228, g239, g240, g241, g242,  
g243, g244, g245, g248, g249,  
g250, g251, g252, g253, g254,  
g257, g258, g259, g260, g261, g262  
\@setminipage ..... d293  
\@setref ..... c726  
\@setref@ ..... c737, c739, c753, c766  
\@settopoint .....  
g437, g535, g580, g659, g660, g682  
\@sharp ..... c860,  
c862, c864, c887, c889, c891,  
c913, c915, c917, c924, c930, d50  
\@shipoutsetup ..... c422  
\@spart ..... g1165, g1174, g1214  
\@specialpagefalse ..... c442, c513  
\@specialstyle ..... c442, c513  
\@stabular ..... d9, d14  
\@startfield ..... c817, c831  
\@startline ..... c805  
\@startpbox ..... c923, c929, d46  
\@startsection .....  
g1291, g1295, g1299, g1303, g1307  
\@starttoc ..... g1662, g1753, g1766  
\@stopfield ..... c835  
\@stysizefalse ..... g15  
\@stysizetrue ..... g31,  
g34, g37, g40, g44, g47, g50, g53  
\@sverb ..... c779, c791, c801, h49  
\@tabacol ..... c935, c942, d17  
\@tabarray ..... c937, c944  
\@tabclassiv ..... c937, c944, d19  
\@tabclassz ..... c839, c936, c943, d18  
\@tabular ..... c932  
\@tabularcr ..... c937, c944, d19  
\@TC ..... c316, c337, c381, c403  
\@tempa ... b315, b318, b319, b324,  
c660, c661, c683, c684, c705, c706  
\@tempb ..... b316, b320, b325  
\@tempboxa .....  
. c299, c470, c477, c478, c541,  
c548, c549, d204, d215, d281,  
d307, g1561, g1562, g1564, g1569  
\@tempc ..... b317, b318  
\@tempcnta ..... g13, g14, g530, g531  
\@tempcntb ..... b850, b851, b854,  
b864, b867, b868, b869, b876, b877  
\@tempdima .....  
b855, b865, b880, b881, c252,  
c254, c255, c260, c265, c277,  
c282, c286, c965, c966, c988,  
c989, d61, d62, d63, d67, d68,  
d69, d78, d79, d80, d81, d85,  
d86, d87, d88, g64, g66, d236,  
d237, d246, d247, d268, d282,  
d285, d318, d321, d325, g412,  
g413, g414, g415, g423, g426,  
g429, d430, d431, g432, d432,  
d450, d453, d458, d461, d465,  
d503, d504, d505, d506, g525,  
g526, g527, g528, g529, g530,  
g644, g645, g646, g648, g649,  
g651, g663, g666, g674, g675,  
g676, g677, g678, g679, g680,  
g1269, g1272, g1275, g1288, g1289  
\@tempdimb b447, b448, b485, b486,  
c968, c969, c991, c992, d328,  
d329, g416, g417, g418, g419,  
g420, g421, g423, g424, g429,  
g430, d450, d453, d458, d461, d465  
\@tempskipa .....  
. b449, b450, b487, b488, c60,  
c64, c65, c77, c81, c82, c93, c96, c97  
\@tempswafalse ..... d225, g1172  
\@tempswatrue ..... d226, d229, g1172  
\@tempswzfalse ..... b662, b683  
\@tempswztrue ..... b667, b688  
\@temptokena .... g1649, g1650, g1652  
\@text@composite ..... b809  
\@text@composite@x .....  
..... b812, b821, b827, b830  
\@textbottom c116, c121, c129, c141,  
c144, c165, c195, c225, c266, c288  
\@textsuperscript c593, c594, c600, c601  
\@texttop . c136, c160, c190, c220, c247  
\@thanks ..... g976,  
g998, g1000, g1006, g1038, g1045  
\@thecounter ..... d547  
\@thefnmark ..... c593, c594,  
c600, c601, c619, c624, c631,  
c636, c645, c653, c668, c691,  
c713, e17, e18, g1019, g1020, g1027  
\@thefoot .....  
c445, c449, c484, c516, c520, c555

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- \@thehead ..... c445, c448, c474, c516, c519, c545
  - \@themargin ..... c447, c450, c451, c457, c469, c517, c518, c521, c522, c528, c540
  - \@thmcounter ..... d551
  - \@title g942, g988, g1009, g1048, g1060
  - \@titlepagefalse ..... g7, g91
  - \@titlepagetrue ..... g8, g90
  - \@TL ..... c316, c328, c381, c403
  - \@Tl ..... c316, c334, c383, c405
  - \@tocmarg ..... g1624
  - \@tocrmarg ..... g1624, g1634
  - \@tombowwidth c314, c329, c330, c335, c336, c338, c339, c340, c342, c343, c345, c346, c349, c350, c352, c353, c355, c356, c357, c359, c360, c362, c363, c366, c367, c369, c370, g69, g76, g80
  - \@toodeep ..... g1433, g1460
  - \@topnum ..... g1035, g1244
  - \@TR ..... c316, c341, c381, c403
  - \@Tr ..... c316, c344, c383, c405
  - \@twocolumnfalse ..... g88
  - \@twocolumntrue ..... g89
  - \@twosidefalse ..... g86
  - \@twosidetrue ..... g87
  - \@typeset@protect ..... b628
  - \@undefined ..... a29, a54, a56, a84, a91, a94, b56, b103, b775, b780, b807, b872, b1018, b1066, c606, c612, c753, c766, c1023, c1024, c1032, c1044, c1054, c1055, c1060, c1073
  - \@verb ..... c779, c791, c801
  - \@viipt .. e67, g208, g239, g248, g257
  - \@viipt ..... e66, g239, g249, g258
  - \@vipt ..... e65, g240, g249, g258
  - \@vobeyspaces ..... h49
  - \@vpt ..... e64, g240
  - \@width ..... b459, b462, b465, b497, b500, b503, b760, b768, d26, d29, d32, d37, d40, d504, d505, d506, d544, g1811
  - \@writefile ..... g1651
  - \@x@sf ..... c722, c725, e13, e16
  - \@xfootnote ..... c618, c630
  - \@xfootnotemark ..... c622, c634
  - \@xfootnotenext ..... c644, c652
  - \@xiipt ..... e71, g143, g146, g186, g228, g241, g250
  - \@xipt ..... e70, g142, g145, g196
  - \@xivpt ..... e72, g242, g251, g259
  - \@xpt .. h6, e69, g141, g144, g186, g228
  - \@xvipt ..... e73, g243, g252, g260
  - \@xxpt ..... e74, g244, g253, g261
  - \@xxvpt ..... e75, g245, g254, g262
  - \\ .... c937, c944, d5, d19, d47, g1487
  - \' ..... f8
- A**
- \abovecaptionskip ..... g1555, g1560
  - \abovedisplayskip ..... h8, h15, g149, g154, g159, g178, g188, g198, g210, g220, g230
  - \abovedisplayskip ..... h7, h10, h14, h21, g148, g153, g158, g162, g177, g187, g197, g205, g209, g219, g229, g237
  - abstract (environment) ..... g1072
  - \abstractname ..... g1079, g1086, g1090, g1860
  - \addcontentsline ..... d197, g1180, g1183, g1199, g1202, g1252, g1254, g1256, g1646
  - \addpenalty g1667, g1668, g1687, g1702
  - \addto@hook ..... b257, b259
  - \addtocontents ..... g1259, g1260
  - \addtocounter ..... h32
  - \addvspace ..... g1163, g1259, g1260, g1669, g1688, g1703
  - \adjust@box ..... b520, b527, b528, b529, b530, b535, b536, b537, b541, b552, b553, b554, b555, b560, b561, b562, b566
  - \adjust@dimen ..... b521, b536, b537, b538, b539, b540, b541, b542, b561, b562, b563, b564, b565, b566, b567
  - \adjustbaseline ..... b457, b495, b520, b730, d48, g84, d283, d322, d325, d331
  - \afont .... b28, b287, b305, b309, b427
  - \aftergroup ..... b476, b514, b852, b935, b958, c427, c439, c440, c488, c499, c510, c511
  - \all@shape ..... b352
  - \alph ..... c587
  - \and ..... g1013, g1052

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx, f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx



**File Key:** a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plxt.dtx, e=pl209.dtx, f=kinsoku.dtx, g=iclasss.dtx, h=iltxdoc.dtx

**File Key:** a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plxt.dtx, e=pl209.dtx, f=kinsoku.dtx, g=iclasss.dtx, h=iltxdoc.dtx

g382, g383, g384, g389, g397,  
g398, g399, g419, g420, g421, g1478  
\c wd . . . . . [b21](#), b530, b532, b555, b557  
\cy@encoding [b7](#), b390, b397, b408, b616

## D

\dashbox . . . . . [d474](#)  
\date . . . . . [g942](#), g1012, g1051  
\day . . . g71, g1831, g1835, g1841, g1845  
\dblfloatpagefraction . . . . . [g758](#)  
\dblfloatsep . . . . . [g705](#)  
\dbltextfloatsep . . . . . [g705](#)  
\dbltopfraction . . . . . [g757](#)  
\DeclareErrorKanjiFont . . [b247](#), b979  
\DeclareFixedFont . . . . . [b285](#)  
\DeclareFontEncoding . . . . . [b106](#)  
\DeclareFontEncoding@ . . . . . [b106](#)  
\DeclareFontFamily . . . . . [b209](#)  
\DeclareFontShape . . . . .  
. . . . . b1088, b1092, b1098,  
b1102, b1107, b1111, b1116, b1120  
\DeclareKanjiEncoding . . . . . [b129](#)  
\DeclareKanjiEncodingDefaults . .  
. . . . . [b193](#), b978  
\DeclareKanjiFamily . . . . .  
b228, b1085, b1095, b1105, b1114  
\DeclareKanjiSubstitution . . . . .  
. . . . . [b247](#), b981, b983  
\DeclareLayoutCaption . . . . . [d165](#), 83  
\DeclareMathAlphabet . . . . . g1592  
\DeclareOldFontCommand . . . . .  
. . . g1610, g1611, g1612, g1613,  
g1614, g1615, g1616, g1617, g1618  
\DeclareOption . . . . . h2,  
g18, g21, g24, g27, g31, g34,  
g37, g40, g44, g47, g50, g53,  
g59, g61, g62, g63, g67, g74,  
g78, g82, g86, g87, g88, g89,  
g90, g91, g95, g96, g97, g99,  
g100, g101, g113, g114, g116, g117  
\DeclarePreloadSizes . . . . .  
. . . . . b1022, b1023, b1024,  
b1025, b1028, b1029, b1030,  
b1031, b1034, b1035, b1036,  
b1037, b1040, b1042, b1044, b1046  
\DeclareRelationFont [b352](#), b1086,  
b1087, b1096, b1097, b1106, b1115  
\DeclareRobustCommand . . . . .  
b383, b576, b588, b600, b648,

b649, b650, b701, b702, b703,  
b704, b705, b706, b720, b732,  
b735, b1002, b1009, b1015, e32,  
e38, e44, e45, e51, e52, e53,  
e54, e55, e56, e57, d308, d411,  
d494, g1601, g1605, g1619, g1620  
\DeclareSymbolFont . . . e26, e27, g1588  
\DeclareSymbolFontAlphabet . . . . .  
. . . . . e28, e29, g1589  
\DeclareTateKanjiEncoding [b129](#), b982  
\DeclareTateKanjiEncoding@ . . . . [b129](#)  
\DeclareTextCommandDefault b755, b765  
\DeclareTextFontCommand . . b997, b998  
\DeclareYokoKanjiEncoding [b129](#), b980  
\DeclareYokoKanjiEncoding@ . . . . [b129](#)  
\default@family . . . . . b117, b264  
\default@k@family . . . . .  
. . . . . b151, b175, b274, b277  
\default@k@series . . . . .  
. . . . . b151, b175, b275, b278  
\default@k@shape b152, b176, b276, b279  
\default@KM b161, b185, b201, b204, b207  
\default@KT . . . b195, b198, b206, b608  
\default@M . . . . . b126  
\default@series . . . . . b117, b265  
\default@shape . . . . . b118, b266  
description (environment) . . . . . [g1475](#)  
\descriptionlabel . . . . . [g1483](#), [g1484](#)  
\dimen@ . . . . . c137,  
c140, c161, c164, c191, c194,  
c221, c224, c248, c250, d15, d16  
\DisableCrossrefs . . . . . [h43](#)  
\DLMfontsw@oldfont . . . . . b338, b351  
\DLMfontsw@oldstyle . . . . . b335, b350  
\DLMfontsw@standard . . b332, b340, b349  
\do . . . . . c776, c788, c799, h47, h48  
\do@noligs . . . . . h47  
\document@default@language [a94](#), c432  
\documentclass . . . . . c32  
\documentstyle . . . . . [c30](#)  
\dospecials . . . . . c776, c788, c799, h48  
\doublerulesep . . . . . [g1575](#)  
\dst . . . . . h28  
\DualLang@mathalph@bet . . b323, b329  
\DualLang@Mfontsw . . . . .  
b332, b335, b338, b340, b345, b347

## E

\e@alloc@chardef . . . . . [c1020](#)

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plex.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

F

**File Key:** a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx, f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- `\floatsep` ..... g690  
`\floatwidth` ..... d131, d150, d151,  
                   d152, d159, d160, d162, d164, d253  
`\fmtname` ..... a2, c7  
`\fmtversion` ..... a3  
`\fnsymbol` ..... g1018  
`\fnum@figure` ..... g1517  
`\fnum@table` ..... g1544  
`\font` . b28, b287, b296, b302, b305,  
           b308, b309, b402, b407, b427,  
           b1003, b1010, b1016, c324, e59  
`\font@name` ..... b404,  
           b406, b409, b411, b428, b430, b432  
`\fontdimen` .. b1003, b1010, b1016, e59  
`\fontencoding` .. b576, b995, b996, e21  
`\fontfamily` ..... b648, e22  
`\fontseries` ..... b701  
`\fontshape` ..... b704  
`\fontsize` ..... b290, e23  
`\footins` c117, c122, c126, c166, c167,  
           c171, c196, c197, c201, c226,  
           c227, c231, c267, c268, c272,  
           c289, c290, c294, c307, c308,  
           c309, c661, c684, c706, g687, g1577  
`\footnote` ..... c614, c657,  
           c681, c703, g983, g1058, g1059  
`\footnotemark` ..... c614, g975  
`\footnoterule` ... c125, c170, c200,  
           c230, c271, c293, d300, g981, g1809  
`\footnotesep` ..... c664,  
           c672, c687, c695, c709, c717, g684  
`\footnotesize` .....  
           .... c662, c685, c707, g206, g980  
`\footnotetext` ..... c639  
`\footskip` c481, c552, g308, g567, g679  
`\fork@array@option` ..... d43, d55  
`\fork@parbox@option` ..... d319, d335  
`\fps@figure` ..... g1517  
`\fps@table` ..... g1544  
`\frenchspacing` ..... h49  
`\frontmatter` ..... g1148  
`\ftype@figure` ..... g1517  
`\ftype@table` ..... g1544
- G**
- `\G@refundefinedtrue` . c732, c746, c759  
`\g@tlastchart@` ..... b771, b850  
`\GenericInfo` ..... a108, a111, a115
- `\glossary` ..... c464, c535, g1648  
`\gt` ..... e38, e59, g1610  
`\gtdefault` ..... b737, b985, e40  
`\gtfam` ..... e63  
`\gtfamily` ..... b732,  
           b998, b1004, b1011, b1017, g1611
- H**
- `\hangindent` ..... g1805  
`\hb@xt@` ..... c474,  
           c484, c545, c555, d432, g1023,  
           g1027, g1569, g1630, g1643,  
           g1676, g1694, g1709, g1816, g1820  
`\headheight` .....  
           c470, c541, g288, g558, g563, g677  
`\headsep` .....  
           c479, c550, g288, g559, g564, g678  
`\heisei` ..... g1825, g1833, g1843  
`\hour` ..... c837, g12, g72  
`\hrule` ..... b760,  
           b768, d159, d164, h35, h41, g1811  
`\hspace` g1181, g1200, g1485, g1806, g1807  
`\Huge` ..... g238, g1211, g1225  
`\huge` ..... g238,  
           g1192, g1208, g1218, g1266, g1286
- I**
- `\ialign` ..... d44  
`\if@compatibility` .....  
           ..... c773, c785, c796, g56,  
           g92, g110, g315, g320, g438,  
           g536, g593, g946, g1587, g1678  
`\if@enablejfam` ..... g16, g1586  
`\if@knjcmd` ..... b379, b415  
`\if@landscape` .... g3, g323, g339,  
           g355, g371, g441, g457, g473, g489  
`\if@mainmatter` ..... g11, g840,  
           g864, g898, g923, g1249, g1270  
`\if@mathrmc` ..... g17, g1594  
`\if@newlist` .... c434, c489, c505, c559  
`\if@noskipsec` ..... g1162  
`\if@notffam` ..... b646, b698  
`\if@notkfam` ..... b645, b698  
`\if@openleft` ..... g10,  
           g794, g1156, g1169, g1231, g1241  
`\if@openright` ..... g9,  
           g796, g1157, g1170, g1233, g1242  
`\if@pboxsw` c978, c1001, d213, d250, d436

|                                       |                                    |                                          |
|---------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------------|
| \if@restonecol .....                  | g5, g955,                          | c887, c889, c891, c913, c915,            |
|                                       | g969, g1663, g1754, g1767, g1804   | c917, c923, c929, e50, d198, d467        |
| \if@rotsw d1, d232, d235, d239, d250, |                                    | \in@ .....                               |
|                                       | d282, d305, d320, d429, d525, d542 | b31, b32                                 |
| \if@specialpage .....                 | c441, c512                         | \in@@ .....                              |
| \if@stysize .....                     |                                    | b30, b32                                 |
|                                       | .. g15, g267, g291, g321, g403,    | \in@false .....                          |
|                                       | g439, g519, g538, g548, g568, g637 | b31                                      |
| \if@tempswa .....                     | d236, g1237                        | \in@true .....                           |
| \if@tempswz .....                     | b647, b670, b691                   | b31                                      |
| \if@titlepage .....                   | g6, g978, g1073                    | \index .....                             |
| \if@twocolumn .....                   | c37, c42, g388,                    | c463, c534, g1648                        |
|                                       | g404, g422, g581, g631, g638,      | \indexname .....                         |
|                                       | g763, g768, g775, g780, g786,      | g1797, g1798, g1799, g1855               |
|                                       | g791, g950, g961, g1029, g1085,    | \indexspace .....                        |
|                                       | g1093, g1172, g1327, g1335,        | g1808                                    |
|                                       | g1656, g1747, g1760, g1796, g1866  | \inhibitglue .....                       |
| \if@twoside .....                     |                                    | b1064, b1067, b1069,                     |
|                                       | .. c33, c444, c515, g609, g647,    | b1074, b1075, c615, c617, c621,          |
|                                       | g662, g759, g771, g783, g788,      | c629, c818, c860, c862, c864,            |
|                                       | g821, g872, g970, g1230, g1877     | c887, c889, c891, c923, d233, d248       |
| \IfFileExists .....                   | a22, b666, b687                    | \inhibitxspcode .....                    |
| \ifin@ .....                          | b215, b234, b294,                  | .. f230, f231, f232, f233, f234,         |
|                                       | b300, b389, b395, b604, b616,      | f235, f236, f237, f238, f239, f240,      |
|                                       | b620, b656, b660, b679, b682, b717 | f241, f242, f243, f244, f245, f246,      |
| \ifmdir .....                         | b757, b856, b899                   | f247, f248, f249, f250, f251, f252,      |
| \ifnot@advanceline .....              | d491, d501                         | f253, f254, f255, f256, f257, f258,      |
| \ifodd .....                          | b869, c34, c445,                   | f259, f260, f261, f262, f263, f264       |
|                                       | c516, g760, g772, g784, g789, g967 | \inlist@ ...                             |
| \iftbox .....                         | c308                               | b29, b214, b233, b293,                   |
| \iftdir .....                         | b61, b534,                         | b299, b388, b394, b603, b615,            |
|                                       | b559, b757, b767, b855, b898,      | b619, b655, b659, b678, b681, b716       |
|                                       | c35, c139, c163, c193, c223,       | \input .....                             |
|                                       | c428, c446, c450, c500, c517,      | a27, b925,                               |
|                                       | c521, d23, d57, d226, d271,        | b991, b992, b993, b994, c31, e3,         |
|                                       | d337, d419, d447, d519, d525,      | g99, g100, g133, g134, g135, g136        |
|                                       | d548, g761, g778, g1437, g1451,    | \InputIfFileExists .....                 |
|                                       | g1464, g1477, g1561, g1565, g1827  | b921, b1049, e77                         |
| \iftombow .....                       | c312, c376, c399, c454, c525       | \insert ...                              |
| \iftombowdate .....                   | c312, c331                         | c307, c310, c661, c684, c706             |
| \ifvbox ...                           | c131, c155, c185, c215, c310       | \interfootnotelinepenalty .....          |
| \ifydir .....                         | b72,                               | ..... c663, c686, c708                   |
|                                       | b82, c40, c585, c587, c593, c600,  | \interlinepenalty .....                  |
|                                       | c660, c683, c705, c723, e14,       | c663, c686, c708,                        |
|                                       | e17, d499, d541, g766, g773, g1019 | g1187, g1206, g1217, g1224, g1636        |
| \if 西曆 .....                          | g1822                              | \intextsep .....                         |
| \ignorespaces .....                   | b709, b712,                        | g690                                     |
|                                       | b729, c50, c66, c83, c98, c672,    | \it .....                                |
|                                       | c695, c717, c860, c862, c864,      | e55, e59, g1616                          |
|                                       |                                    | \item .....                              |
|                                       |                                    | g1491, g1497, g1500, g1803               |
|                                       |                                    | \itemindent .....                        |
|                                       |                                    | g105,                                    |
|                                       |                                    | g106, g1476, g1488, g1489, g1494         |
|                                       |                                    | itemize (environment) .....              |
|                                       |                                    | g1459                                    |
|                                       |                                    | \itemsep .....                           |
|                                       |                                    | h20, g183,                               |
|                                       |                                    | g193, g203, g215, g225, g235,            |
|                                       |                                    | g1357, g1362, g1367, g1385,              |
|                                       |                                    | g1393, g1440, g1467, g1480, g1488        |
|                                       |                                    | \itshape b1004, b1011, b1017, e55, g1616 |
|                                       |                                    | \ixpt .....                              |
|                                       |                                    | e68                                      |
|                                       |                                    | <b>J</b>                                 |
|                                       |                                    | \jcharwidowpenalty .....                 |
|                                       |                                    | b1061                                    |
|                                       |                                    | \jfam .....                              |
|                                       |                                    | e31, e44, g1591                          |
|                                       |                                    | \jfont .....                             |
|                                       |                                    | b296, b407                               |

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

|                                    |                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>\jis</code>                  | b527, f32, f33, f34, f35, f36, f37, f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59, f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g167                                        |
| <b>K</b>                           |                                                                                                                                                                                          |
| <code>\k@encoding</code>           | ... <u>b7</u> , b15, b386, b390, b391, b396, b397, b399, b403, b408, b412, b417, b419, b421, b424, b592, b593, b607, b609, b610, b612, b613, b616, b620, b622                            |
| <code>\k@family</code>             | <u>b12</u> , b15, b277, b417, b419, b421, b424, b649, b656, b671, b699                                                                                                                   |
| <code>\k@series</code>             | ... <u>b13</u> , b15, b278, b417, b419, b421, b424, b702                                                                                                                                 |
| <code>\k@shape</code>              | <u>b14</u> , b15, b279, b417, b424, b705                                                                                                                                                 |
| <code>\kanji</code>                | ... <u>d517</u>                                                                                                                                                                          |
| <code>\kanji</code>                | ... <u>d517</u>                                                                                                                                                                          |
| <code>\kanjiencoding</code>        | ... <u>b576</u> , b708, b721, b740, b990, e33, e39, g165                                                                                                                                 |
| <code>\kanjiencodingdefault</code> | ... b721, b740, b986, e33, e39, g164, g165                                                                                                                                               |
| <code>\kanjiEncodingPair</code>    | ... <u>b440</u>                                                                                                                                                                          |
| <code>\kanjifamily</code>          | ... <u>b648</u> , b708, b722, b734, b737, b741, e34, e40                                                                                                                                 |
| <code>\kanjifamilydefault</code>   | . b722, b741, b987                                                                                                                                                                       |
| <code>\kanjiprocess@table</code>   | ... <u>b738</u>                                                                                                                                                                          |
| <code>\kanjiserie</code>           | ... <u>b701</u> , b708, b723, b742, e35, e41                                                                                                                                             |
| <code>\kanjiserie</code>           | ... <u>b701</u> , b708, b723, b742, e35, e41                                                                                                                                             |
| <code>\kanjiserie</code>           | ... <u>b701</u> , b708, b723, b742, e35, e41                                                                                                                                             |
| <code>\kanjishape</code>           | ... <u>b704</u> , b708, b724, b743, e36, e42                                                                                                                                             |
| <code>\kanjishapedefault</code>    | ... <u>b704</u> , b708, b724, b743, e36, e42                                                                                                                                             |
| <code>\kanjishape</code>           | ... <u>b704</u> , b708, b724, b743, e36, e42                                                                                                                                             |
| <code>\kanjishapedefault</code>    | ... <u>b704</u> , b708, b724, b743, e36, e42                                                                                                                                             |
| <code>\kanjiskip</code>            | ... b1057                                                                                                                                                                                |
| <code>\kansuji</code>              | ... d518, d519, g1829, g1830, g1831, g1833, g1834, g1835                                                                                                                                 |
| <code>\kasen</code>                | ... <u>d540</u>                                                                                                                                                                          |
| <code>\kenc@list</code>            | ... <u>b35</u> , b156, b180, b603, b668, b716                                                                                                                                            |
| <code>\kenc@update</code>          | ... b413, b594, b596, b611, b626                                                                                                                                                         |
| <code>\kernel@ifnextchar</code>    | ... a99                                                                                                                                                                                  |
| <code>\kfam@list</code>            | ... <u>b40</u> , b233, b236, b655                                                                                                                                                        |
| <code>\ktenc@list</code>           | <u>b35</u> , b179, b299, b394, b619                                                                                                                                                      |
| <code>\kyenc@list</code>           | <u>b35</u> , b155, b293, b388, b615                                                                                                                                                      |
| <b>L</b>                           |                                                                                                                                                                                          |
| <code>\l@chapter</code>            | ... <u>g1684</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@figure</code>             | ... <u>g1756</u> , g1769                                                                                                                                                                 |
| <code>\l@nohyphenation</code>      | ... <u>a90</u> , c778, c790                                                                                                                                                              |
| <code>\l@paragraph</code>          | ... <u>g1717</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@part</code>               | ... <u>g1665</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@section</code>            | ... <u>g1699</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@subparagraph</code>       | ... <u>g1717</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@subsection</code>         | ... <u>g1717</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@subsubsection</code>      | ... <u>g1717</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\l@table</code>              | ... <u>g1769</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\label</code>                | ... c462, c533, g1648                                                                                                                                                                    |
| <code>\labelenumi</code>           | ... <u>g1417</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelenumii</code>          | ... <u>g1417</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelenumiii</code>         | ... <u>g1417</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelenumiv</code>          | ... <u>g1417</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelitemi</code>           | ... <u>g1449</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelitemii</code>          | ... <u>g1449</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelitemiii</code>         | ... <u>g1449</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelitemiv</code>          | ... <u>g1449</u>                                                                                                                                                                         |
| <code>\labelsep</code>             | ... <u>g1342</u> , g1372, g1387, g1396, g1399, g1402, g1441, g1468, g1480, g1485, g1576, g1779                                                                                           |
| <code>\labelwidth</code>           | ... <u>g1342</u> , g1372, g1387, g1395, g1396, g1398, g1399, g1401, g1402, g1441, g1468, g1476, g1777, g1778                                                                             |
| <code>\language</code>             | ... c432, c778, c790                                                                                                                                                                     |
| <code>\LARGE</code>                | ... <u>g238</u> , g988, g1060                                                                                                                                                            |
| <code>\Large</code>                | ... <u>g238</u> , g990, g1189, g1294                                                                                                                                                     |
| <code>\large</code>                | ... <u>g238</u> , g996, g1062, g1068, g1298, g1673                                                                                                                                       |
| <code>\LastDeclaredEncoding</code> | ... b127                                                                                                                                                                                 |
| <code>\lastnodechar</code>         | ... b775                                                                                                                                                                                 |
| <code>\lastpenalty</code>          | ... c643                                                                                                                                                                                 |
| <code>\lastskip</code>             | ... c60, c77, c93                                                                                                                                                                        |
| <code>\latex@error</code>          | ... d200                                                                                                                                                                                 |
| <code>\latexreleaseversion</code>  | ... a5                                                                                                                                                                                   |
| <code>\layoutcaption</code>        | ... <u>d179</u>                                                                                                                                                                          |
| <code>\layoutfloat</code>          | ... <u>d142</u> , d200                                                                                                                                                                   |
| <code>\Lcount</code>               | ... h26                                                                                                                                                                                  |
| <code>\leaders</code>              | ... g1641                                                                                                                                                                                |
| <code>\leavevmode</code>           | b756, b766, b869, b896, b1069, c721, c774, c786, c797, c935, c942, c963, c986, c1010, d17, e12, h46, d267, d317, d411, d498, d521, d543, g1162, g1267, g1287, g1637, g1673, g1691, g1706 |

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx, f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- $\backslash$ leftmargin ..... h17, g104,  
           g180, g190, g200, g212, g222,  
           g232, g1327, g1353, g1371,  
           g1386, g1394, g1397, g1400,  
           g1442, g1443, g1444, g1469,  
           g1470, g1471, g1476, g1478,  
           g1490, g1495, g1499, g1778, g1779  
 $\backslash$ leftmargini .....  
           . h17, g180, g190, g200, g212,  
           g222, g232, g1327, g1343, g1353  
 $\backslash$ leftmarginii ... g1327, g1371, g1372  
 $\backslash$ leftmarginiii .. g1327, g1386, g1387  
 $\backslash$ leftmarginiv ... g1327, g1394, g1395  
 $\backslash$ leftmarginv .... g1327, g1397, g1398  
 $\backslash$ leftmarginvi ... g1327, g1400, g1401  
 $\backslash$ leftmark .....  
           g824, g826, g875, g881, g933, g935  
 $\backslash$ leftskip ..... g1443, g1470,  
           g1478, g1634, g1639, g1693, g1708  
 $\backslash$ line ..... d474  
 $\backslash$ lineskip .....  
           c465, c536, d51, g274, g991, g1063  
 $\backslash$ lineskiplimit ..... c465, c536  
 $\backslash$ linewidth .....  
           h34, h37, d177, d178, g1269, g1288  
 $\backslash$ list ..... g1436, g1463,  
           g1476, g1488, g1493, g1499, g1776  
 $\backslash$ listfigurename .....  
           ..... g1749, g1751, g1752, g1852  
 $\backslash$ listoffigures ..... g1745  
 $\backslash$ listoftables ..... g1758  
 $\backslash$ listparindent .....  
           . g106, g1481, g1489, g1493, g1494  
 $\backslash$ listtablename .....  
           ..... g1762, g1764, g1765, g1852  
 $\backslash$ llap ..... g1447, g1473  
 $\backslash$ LoadClass .....  
           . h4, e84, e88, e92, e96, e100, e104  
 $\backslash$ Lopt ..... h27  
 $\backslash$ lower b881, b897, d343, d357, d387, d465  
 $\backslash$ lowercase ..... b666, b687
- M**
- $\backslash$ m@th ..... c978, c1001, c1010,  
           c1018, d20, e17, e18, d213,  
           d235, d250, d305, d322, d350,  
           d364, d378, d394, d408, d436,  
           g977, g1019, g1020, g1027, g1641  
 $\backslash$ mainmatter ..... g1148
- $\backslash$ make@pcaptionbox ..... d202, d216  
 $\backslash$ makeatletter ..... c31  
 $\backslash$ makeatother ..... c31  
 $\backslash$ makelabel ..... g1447, g1473, g1483  
 $\backslash$ maketitle ..... g975  
 $\backslash$ maketombowbox ... c327, g73, g77, g81  
 $\backslash$ marginparpush ..... g581  
 $\backslash$ marginparsep ..... g581  
 $\backslash$ marginparwidth ..... g593  
 $\backslash$ markboth .....  
           . g828, g830, g838, g855, g886,  
           g888, g896, g914, g1185, g1204  
 $\backslash$ markright ..... g833, g845,  
           g857, g862, g891, g903, g916, g921  
 $\backslash$ math@bgroup ..... b331, b334, b337  
 $\backslash$ math@fontsfalse ..... b288  
 $\backslash$ mathbf ..... g1597, g1615  
 $\backslash$ mathcal ..... g1619  
 $\backslash$ mathchardef ..... c1025, c1028,  
           c1029, c1045, c1048, c1049, c1063  
 $\backslash$ mathgroup ..... e37,  
           e43, e44, e51, e52, e53, e54, e55, e56  
 $\backslash$ mathgt ..... b736, e29,  
           g1592, g1597, g1605, g1606, g1611  
 $\backslash$ mathit ..... g1616  
 $\backslash$ mathmc ..... b733, e28,  
           g1589, g1596, g1601, g1602, g1610  
 $\backslash$ mathnormal ..... g1620  
 $\backslash$ mathrm b331, b334, b337, g1596, g1612  
 $\backslash$ mathsf ..... g1613  
 $\backslash$ mathsurround ..... b871  
 $\backslash$ mathtt ..... g1614  
 $\backslash$ maxdepth .....  
           c145, c176, c206, c236, c263, g315  
 $\backslash$ maxdimen ..... c378, d526, d530  
 $\backslash$ maybe@ic .... b934, b935, b957, b958  
 $\backslash$ mbox ..... c860, c862, c864, c923, d471  
 $\backslash$ mc ..... e32,  
           e59, e64, e65, e66, e67, e68, e69,  
           e70, e71, e72, e73, e74, e75, g1610  
 $\backslash$ mcdefault .... b734, b984, b987, e34  
 $\backslash$ mcfam ..... e62  
 $\backslash$ mcfamily ..... b732,  
           b997, b1005, b1011, b1017, g1610  
 $\backslash$ mddefault ..... b988  
 $\backslash$ medskipamount ..... g279  
 $\backslash$ MessageBreak ... a127, a128, a129,  
           b132, b134, b136, c11, c13, c15, c25  
 $\backslash$ minipage ..... d258

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx



- `\minute` ..... [c837](#), [g12](#), [g72](#)  
`\mit` ..... [g1619](#)  
`\mkern` ..... [g1641](#)  
`\mlineplus` ..... [h30](#)  
`\month` . [g71](#), [g1830](#), [g1834](#), [g1840](#), [g1844](#)  
`\moveleft` [c379](#), [c401](#), [d527](#), [d531](#), [d535](#)  
`\moveright` ..... [c469](#), [c540](#)
- N**
- `\NeedsTeXFormat` .... [b2](#), [c2](#), [c103](#), [e80](#)  
`\newblock` ..... [g109](#), [g1772](#)  
`\newbox` ..... [b45](#), [b46](#), [b51](#), [b66](#),  
                   [b520](#), [c316](#), [c317](#), [c318](#), [c319](#),  
                   [c320](#), [c321](#), [c322](#), [c323](#), [d130](#), [d140](#)  
`\newcount` .... [c606](#), [c837](#), [c838](#), [g1825](#)  
`\newcounter` .....  
       . [g2](#), [h30](#), [g1104](#), [g1106](#), [g1107](#),  
       [g1109](#), [g1110](#), [g1111](#), [g1112](#),  
       [g1113](#), [g1501](#), [g1502](#), [g1528](#), [g1529](#)  
`\newdimen` .....  
       . [b17](#), [b18](#), [b19](#), [b20](#), [b21](#), [b22](#),  
       [b23](#), [b24](#), [b25](#), [b26](#), [b27](#), [b521](#),  
       [c314](#), [c419](#), [c420](#), [c421](#), [d131](#),  
       [d132](#), [d133](#), [d134](#), [d137](#), [d441](#),  
       [d442](#), [d443](#), [g1626](#), [g1629](#), [g1770](#)  
`\newenvironment` ..... [g947](#),  
                   [g958](#), [g1074](#), [g1084](#), [g1475](#),  
                   [g1486](#), [g1492](#), [g1498](#), [g1522](#),  
                   [g1525](#), [g1549](#), [g1552](#), [g1773](#), [g1795](#)  
`\newif` ..... [b379](#), [b645](#), [b646](#),  
                   [b647](#), [c312](#), [c313](#), [d2](#), [g3](#), [g5](#), [g6](#),  
                   [g9](#), [g10](#), [g11](#), [g15](#), [g16](#), [g17](#), [d491](#)  
`\newlanguage` ..... [a92](#)  
`\newlength` ..... [g1555](#), [g1556](#)  
`\newpage` .. [c36](#), [c37](#), [c41](#), [c42](#), [g762](#),  
                   [g763](#), [g767](#), [g768](#), [g774](#), [g775](#),  
                   [g779](#), [g780](#), [g785](#), [g786](#), [g790](#),  
                   [g791](#), [g951](#), [g955](#), [g964](#), [g969](#),  
                   [g1034](#), [g1055](#), [g1229](#), [g1232](#), [g1234](#)  
`\newskip` ..... [d492](#)  
`\newtoks` ..... [c325](#)  
`\next` ..... [d523](#), [d538](#), [d539](#)  
`\NFSS` ..... [h29](#)  
`\nfss@catcodes` .... [b108](#), [b142](#), [b166](#)  
`\nfss@text` ..... [c733](#), [c747](#), [c760](#)  
`\nobreak` ... [c49](#), [c722](#), [d528](#), [d532](#),  
                   [d536](#), [g1190](#), [g1193](#), [g1219](#),  
                   [g1273](#), [g1278](#), [g1639](#), [g1640](#),  
                   [g1642](#), [g1675](#), [g1677](#), [g1694](#), [g1709](#)
- `\nocorr` ..... [b933](#), [b936](#), [b956](#), [b959](#)  
`\noindent` .....  
       . [g977](#), [g1022](#), [g1026](#), [g1816](#), [g1820](#)  
`\nointerlineskip` ... [d527](#), [d531](#), [d535](#)  
`\normalbaselineskip` ..... [b456](#),  
                   [b494](#), [b531](#), [b556](#), [g1438](#), [g1465](#)  
`\normalcolor` ..... [c124](#), [c169](#),  
                   [c199](#), [c229](#), [c270](#), [c292](#), [c473](#),  
                   [c483](#), [c544](#), [c554](#), [d299](#), [d547](#), [g1643](#)  
`\normalfont` .....  
       . [b720](#), [c593](#), [c594](#), [c600](#), [c601](#),  
       [d141](#), [h28](#), [e44](#), [g1187](#), [g1206](#),  
       [g1217](#), [g1224](#), [g1266](#), [g1286](#),  
       [g1294](#), [g1298](#), [g1302](#), [g1306](#),  
       [g1310](#), [g1454](#), [g1485](#), [g1610](#),  
       [g1611](#), [g1612](#), [g1613](#), [g1614](#),  
       [g1615](#), [g1616](#), [g1617](#), [g1618](#), [g1643](#)  
`\normallineskip` ..... [g274](#)  
`\normalmarginpar` ..... [g1873](#)  
`\normalsfcodes` ..... [c461](#), [c532](#)  
`\normalsize` ..... [c460](#), [c531](#),  
                   [d141](#), [h5](#), [g139](#), [g1302](#), [g1306](#), [g1310](#)  
`\not@advancelinefalse` ..... [d501](#)  
`\not@advancelinetrue` ..... [d495](#)  
`\not@math@alphabet` ..... [b733](#), [b736](#)  
`\notffam@list` ..... [b40](#), [b681](#), [b695](#)  
`\notkfam@list` ..... [b40](#), [b659](#), [b674](#)  
`\null` ..... [c49](#), [c673](#),  
                   [c696](#), [c737](#), [c751](#), [c764](#), [c835](#),  
                   [c935](#), [c949](#), [c974](#), [c978](#), [c1010](#),  
                   [d17](#), [d53](#), [d317](#), [d334](#), [g985](#),  
                   [g998](#), [g1000](#), [g1055](#), [g1076](#),  
                   [g1082](#), [g1173](#), [g1232](#), [g1234](#), [g1639](#)  
`\number` .. [g71](#), [g1829](#), [g1830](#), [g1831](#),  
                   [g1833](#), [g1834](#), [g1835](#), [g1839](#),  
                   [g1840](#), [g1841](#), [g1843](#), [g1844](#), [g1845](#)  
`\numberline` ..... [d198](#), [g1253](#), [g1629](#)
- O**
- `\oddsidemargin` .....  
       .... [c447](#), [c450](#), [c518](#), [c521](#), [g593](#)  
`\offinterlineskip` ..... [d158](#)  
`\omathchar` ..... [c1023](#), [c1060](#)  
`\omathchardef` ..... [c1033](#), [c1034](#)  
`\onecolumn` .... [g950](#), [g962](#), [g1172](#),  
                   [g1656](#), [g1747](#), [g1760](#), [g1804](#), [g1870](#)  
`\org@circle` ..... [d489](#), [d490](#)  
`\org@dashbox` ..... [d483](#), [d484](#)  
`\org@line` ..... [d477](#), [d478](#)

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- `\org@oval` ..... d486, d487  
`\org@put` ..... d474, d475  
`\org@vector` ..... d480, d481  
`\oval` ..... d474  
`\overfullrule` ..... g116, g117
- P**
- `\p@array` ..... d21, d22  
`\p@enumii` ..... g1429  
`\p@enumiii` ..... g1429  
`\p@enumiv` ..... g1429, g1782  
`\p@known@latexreleaseversion` ... a6  
`\p@tabarray` ..... d11, d19, d20  
`\p@tabular` ..... d13, d14  
`\p@thanks` g975, g982, g1005, g1044, g1059  
`\pagenumbering` .. g1151, g1154, g1864  
`\pageshrink` ..... c255, c259, c283  
`\pagestyle` ..... g1862, g1863  
`\paperheight` .....  
     c456, c527, g19, g22, g25, g28,  
     g32, g35, g38, g41, g45, g48,  
     g51, g54, g64, g65, g406, g409,  
     g412, g522, g523, g526, g562, g674  
`\paperwidth` .....  
     c455, c526, g20, g23, g26, g29,  
     g33, g36, g39, g42, g46, g49,  
     g52, g55, g65, g66, g405, g408,  
     g413, g520, g521, g525, g644, g654  
`\par` ... d49, g109, d214, d295, g977,  
     g988, g994, g996, g997, g1016,  
     g1060, g1066, g1070, g1082,  
     g1163, g1190, g1192, g1209,  
     g1211, g1218, g1225, g1312,  
     g1319, g1565, g1566, g1644,  
     g1676, g1694, g1709, g1805, g1808  
`\paragraph` ..... g1303  
`\paragraphmark` ..... g1096  
`\parbox` ..... d308  
`\parfillskip` g1634, g1672, g1690, g1705  
`\parindent` .. h5, d233, d248, g277,  
     g1022, g1026, g1186, g1216,  
     g1264, g1284, g1635, g1671,  
     g1690, g1705, g1800, g1815, g1819  
`\parse@BANNER` .....  
     ..... a59, a64, a68, a72, a78, a80  
`\parsep` ..... h19, h20,  
     g107, g182, g183, g192, g193,  
     g202, g203, g214, g215, g224,  
     g225, g234, g235, g1355, g1360,  
     g1365, g1375, g1379, g1383,  
     g1385, g1391, g1440, g1467, g1496  
`\parskip` g277, g1440, g1467, g1481, g1801  
`\part` ..... g1160  
`\partopsep` ..... g1349, g1392, g1481  
`\PassOptionsToClass` ..... h2  
`\patch@level` ..... a54, a55  
`\pbox` ..... d411  
`\pcaption` ..... d194  
`\penalty` ..... c62,  
     c63, c79, c95, c675, c698, g1695  
`\pfmtname` .. a10, a63, a67, a71, c4, c11  
`\pfmtversion` ..... a10, a28, a33,  
     a44, a63, a67, a71, a107, c23, c26  
`\pfmtversion@topatch` .....  
     ..... a26, a28, a32, a43, a52  
`\pickup@font` ..... b405, b410, b429  
`\picture` ..... d437  
`\platexBANNER` . a64, a68, a72, a80, a84  
`\platexreleaseversion` ..... a14  
`\platexTMP` a60, a76, a79, a82, a83, a88  
`\plEndIncludeInRelease` .....  
     ... a119, a120, b53, b57, b63,  
     b67, b78, b87, b100, b104, b481,  
     b518, b548, b574, b762, b769,  
     b777, b781, b804, b808, b814,  
     b823, b829, b839, b886, b909,  
     b919, b953, b976, b1007, b1013,  
     b1019, b1072, b1076, c70, c86,  
     c101, c148, c178, c208, c238,  
     c396, c417, c495, c564, c575,  
     c582, c596, c602, c609, c613,  
     c627, c638, c648, c655, c679,  
     c701, c719, c741, c754, c767,  
     c782, c793, c803, c820, c833,  
     c867, c893, c919, c926, c931,  
     c939, c945, c952, c957, c981,  
     c1003, c1012, c1019, c1041,  
     c1051, c1056, c1066, c1070, c1074  
`\plIncludeInRelease` a98, b48, b54,  
     b58, b64, b68, b79, b94, b101,  
     b443, b482, b523, b549, b752,  
     b763, b772, b778, b782, b805,  
     b809, b815, b824, b830, b840,  
     b887, b910, b931, b954, b1000,  
     b1008, b1014, b1063, b1073,  
     c53, c71, c87, c108, c149, c179,  
     c209, c373, c397, c423, c496,  
     c567, c576, c589, c597, c603,

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- c610, c614, c628, c639, c649,  
c656, c680, c702, c727, c742,  
c755, c770, c783, c794, c806,  
c821, c840, c868, c894, c920,  
c927, c932, c940, c946, c953,  
c958, c982, c1004, c1013, c1020,  
c1042, c1052, c1057, c1067, c1071  
`\pltx@cleartoevenpage` ..... [g759](#)  
`\pltx@cleartoleftpage` ... [g759](#), [g795](#)  
`\pltx@cleartooddpage` .....  
..... [g759](#), [g960](#), [g1150](#), [g1153](#)  
`\pltx@cleartorightpage` .. [g759](#), [g797](#)  
`\pltx@composite@temp` .... [b851](#), [b852](#)  
`\pltx@cond` [b787](#), [b792](#), [b795](#), [b799](#), [b800](#)  
`\pltx@foot@penalty` ... [c603](#), [c643](#),  
[c674](#), [c675](#), [c676](#), [c697](#), [c698](#), [c699](#)  
`\pltx@isletter` ..... [b782](#), [b845](#)  
`\pltx@isletter@i` ..... [b790](#), [b791](#)  
`\pltx@isletter@ii` ..... [b793](#), [b794](#)  
`\pltx@isletter@iii` ..... [b796](#), [b797](#)  
`\pltx@isletter@iv` ..... [b796](#), [b798](#)  
`\pltx@mark` ..... [b785](#),  
[b792](#), [b793](#), [b795](#), [b797](#), [b798](#), [b799](#)  
`\pltx@mark@` ..... [b785](#)  
`\pltx@scanstop` .....  
... [b786](#), [b790](#), [b791](#), [b793](#), [b794](#)  
`\pltx@textbottom` ..... [c116](#), [c144](#)  
`\postbreakpenalty` [f4](#), [f5](#), [f8](#), [f11](#), [f22](#),  
[f35](#), [f39](#), [f41](#), [f44](#), [f46](#), [f48](#), [f49](#),  
[f51](#), [f53](#), [f55](#), [f57](#), [f59](#), [f61](#), [f67](#), [f68](#)  
`\postchaptername` ..... [g1146](#), [g1848](#)  
`\postpartname` .....  
[g1181](#), [g1189](#), [g1200](#), [g1208](#), [g1848](#)  
`\ppatch@level` ..... [a10](#),  
[a29](#), [a56](#), [a57](#), [a61](#), [a65](#), [a67](#), [a71](#)  
`\prebreakpenalty` .....  
.... [f2](#), [f3](#), [f6](#), [f7](#), [f9](#), [f10](#), [f12](#),  
[f13](#), [f14](#), [f15](#), [f16](#), [f17](#), [f18](#), [f19](#),  
[f20](#), [f21](#), [f23](#), [f24](#), [f25](#), [f26](#), [f27](#),  
[f28](#), [f29](#), [f30](#), [f31](#), [f32](#), [f33](#), [f34](#),  
[f36](#), [f37](#), [f38](#), [f40](#), [f42](#), [f43](#), [f45](#),  
[f47](#), [f50](#), [f52](#), [f54](#), [f56](#), [f58](#), [f60](#),  
[f62](#), [f63](#), [f64](#), [f65](#), [f66](#), [f69](#), [f70](#),  
[f71](#), [f72](#), [f73](#), [f74](#), [f75](#), [f76](#), [f77](#),  
[f78](#), [f79](#), [f80](#), [f81](#), [f82](#), [f83](#), [f84](#),  
[f85](#), [f86](#), [f87](#), [f88](#), [f89](#), [f90](#), [f91](#), [f92](#)  
`\prechaptername` ..... [g1145](#), [g1848](#)  
`\prensui` ..... [e7](#), [d515](#)  
`\prepartname` .....  
[g1181](#), [g1189](#), [g1200](#), [g1208](#), [g1848](#)  
`\printglossary` ..... [c836](#)  
`\process@table` ..... [b738](#)  
`\ProcessOptions` ..... [h3](#), [g132](#)  
`\protect` ..... [b313](#),  
[b628](#), [c431](#), [c503](#), [c732](#), [c737](#),  
[c746](#), [c759](#), [d50](#), [d198](#), [d200](#),  
[g977](#), [g1253](#), [g1259](#), [g1260](#), [g1652](#)  
`\protected` ..... [b1066](#), [b1069](#)  
`\protected@edef` .... [c667](#), [c690](#), [c712](#)  
`\protected@write` ..... [g1647](#)  
`\protected@xdef` ..... [c619](#),  
[c624](#), [c631](#), [c636](#), [c645](#), [c653](#), [g976](#)  
`\providecommand` .....  
.... [h24](#), [h25](#), [h26](#), [h27](#), [h28](#), [h29](#)  
`\ProvidesFile` .....  
[b928](#), [b1079](#), [b1080](#), [b1081](#), [b1082](#)  
`\ProvidesPackage` ..... [b3](#), [c104](#)  
`\ps@bothstyle` ..... [g872](#)  
`\ps@footnombre` ..... [g814](#), [g873](#), [g909](#)  
`\ps@headings` ..... [g821](#)  
`\ps@headnombre` ..... [g807](#), [g822](#), [g851](#)  
`\ps@jpl@in` ..... [g801](#), [g806](#), [g808](#),  
[g815](#), [g822](#), [g851](#), [g873](#), [g909](#), [g931](#)  
`\ps@myheadings` ..... [g931](#)  
`\ps@plain` ..... [g800](#), [g806](#), [g931](#)  
`\pstyle` ..... [h25](#)  
`\put` ..... [d474](#)
- ## Q
- `\quotation` ..... [g1092](#)  
`quotation (environment)` ..... [g1492](#)  
`quote (environment)` ..... [g1498](#)
- ## R
- `\raggedbottom` ..... [g1865](#)  
`\raggedright` [g1186](#), [g1216](#), [g1265](#), [g1285](#)  
`\raise` ..... [b757](#), [b767](#),  
[c332](#), [c724](#), [d63](#), [d69](#), [d81](#), [d88](#),  
[e15](#), [d340](#), [d354](#), [d384](#), [d543](#), [d548](#)  
`\reDeclareMathAlphabet` .....  
..... [b312](#), [g1596](#), [g1597](#)  
`\ref` ..... [c728](#), [c743](#), [c756](#)  
`\refname` ..... [g1774](#), [g1855](#)  
`\refstepcounter` .....  
..... [d194](#), [g1179](#), [g1198](#), [g1250](#)  
`\rel@fontshape` ..... [b16](#)  
`\rel@shape` ... [b354](#), [b355](#), [b368](#), [b369](#)

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- \renewenvironment ..... g1432, g1459  
 \Rensuji ..... e7, d515  
 \rensuji ..... e8, e9, d494, d515,  
     d516, d550, d551, g1115, g1116,  
     g1118, g1119, g1121, g1123,  
     g1125, g1127, g1315, g1324,  
     g1406, g1407, g1408, g1409,  
     g1504, g1507, g1531, g1534, g1649  
 \rensuji skip .. d492, d493, d500, d513  
 \RequirePackage ..... e5, e6, g137  
 \RequirePackageWithOptions . b5, c106  
 \reserved@a b219, b222, b224, b238,  
     b241, b243, b252, b256, b470,  
     b472, b475, b508, b510, b513,  
     b666, b667, b687, b688, b936,  
     b939, b959, b962, c3, c4, c7, c10  
 \reserved@b .....  
     b255, b256, b937, b939, b960, b962  
 \reserved@c .....  
     b938, b940, b947, b961, b963, b970  
 \reserved@e ..... c49  
 \reserved@f ..... c49  
 \reset@font .....  
     . b731, c459, c530, c662, c685,  
     c707, c733, c747, c760, d547, g803  
 \rightmargin g1479, g1490, g1495, g1499  
 \rightmark g825, g827, g853, g854,  
     g877, g883, g910, g912, g934, g936  
 \rightskip .....  
     g1479, g1634, g1671, g1690, g1705  
 \rm ..... b334, e51,  
     e59, e64, e65, e66, e67, e68, e69,  
     e70, e71, e72, e73, e74, e75, g1610  
 \rmfamily ..... e51, d547, g1612  
 \roman@normal .....  
     . e45, e51, e52, e53, e54, e55, e56  
 \romanencoding ..... b358, b363,  
     b371, b375, b576, b711, b725, e46  
 \romanfamily ..... b358, b363,  
     b371, b375, b648, b711, b726, e47  
 \romannumeral ..... g1435, g1462  
 \romanprocess@table ..... b738  
 \romanseries ..... b359, b364,  
     b372, b376, b701, b711, b727, e48  
 \romanshape .....  
     b364, b376, b704, b711, b728, e49  
 \rule ..... c672, c695, c717  
  
 S  
 \save@tbaselineshift d442, d446, d473  
 \save@ybaselineshift d441, d445, d472  
 \sbox ..... g1561, g1562  
 \sc ..... e54, g1616  
 \scan@allowedfalse ..... h43, h45  
 \scan@allowedtrue ..... h44  
 \scriptsize ..... g238  
 \scshape ..... h28, e54, g1618  
 \secdef ..... g1165, g1174, g1246  
 \section ..... g1086, g1291,  
     g1659, g1751, g1764, g1774, g1797  
 \sectionmark ..... g830, g845,  
     g857, g888, g903, g916, g939, g1096  
 \selectfont .....  
     **b381**, b709, b712, b729, b734,  
     b737, b995, b996, e37, e43, e50  
 \seriesdefault ..... b727, e48  
 \set@fontsize ..... b435, b442  
 \set@typeset@protect .....  
     ..... c438, c440, c509, c511  
 \setcounter .... g18, g21, g24, g27,  
     g31, h31, g34, g37, g40, g44,  
     g47, g50, g53, g749, g750, g751,  
     g752, g953, g967, g971, g1002,  
     g1040, g1102, g1103, g1313,  
     g1314, g1320, g1321, g1621, g1622  
 \SetRelationFont ..... b352  
 \SetSymbolFont ..... e30, g1590  
 \settowidth ..... g1777  
 \sf ..... e52, g1610  
 \sfcode ..... g1788  
 \sffamily ..... e52, g1613  
 \shapedefault ..... b728, e49  
 \shipout ..... c437, c508  
 \size@update .....  
     ... b437, b453, b479, b491, b517  
 \skip .. c122, c167, c197, c227, c268,  
     c290, d298, g687, g688, g689, g1577  
 \sl ..... e53, g1616  
 \sloppy ..... g1784, g1868  
 \slshape ..... e53, g1617  
 \small ..... h5, h26, g174, g980, g1088  
 \smallskipamount ..... g279  
 \spacefactor c722, c725, c739, e13, e16  
 \split@name ..... b271  
 \splitmaxdepth ..... c665, c688, c710  
 \splittopskip ..... c664, c687, c709  
 \stepcounter .....  
     c491, c561, c618, c623, c630, c635  
 \strip@pt ..... b448, b486

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- `\strut` ..... [b68](#), [c818](#), [c832](#)  
`\strutbox` ..... [b58](#),  
[b83](#), [b496](#), [c665](#), [c672](#), [c688](#),  
[c695](#), [c710](#), [c717](#), [d25](#), [d26](#), [d39](#), [d40](#)  
`\subitem` ..... [g1805](#)  
`\subparagraph` ..... [g1307](#)  
`\subparagraphmark` ..... [g1096](#)  
`\subsection` ..... [g1295](#)  
`\subsectionmark` [g833](#), [g891](#), [g940](#), [g1096](#)  
`\subsubitem` ..... [g1805](#)  
`\subsubsection` ..... [g1299](#)  
`\subsubsectionmark` ..... [g1096](#)  
`\symbol` ..... [e44](#)  
`\symgothic` ..... [e43](#), [e44](#), [e63](#)  
`\symitalic` ..... [e55](#)  
`\symmincho` ..... [e31](#), [e37](#), [e62](#), [g1591](#)  
`\symoperators` ..... [e51](#)  
`\symsans` ..... [e52](#)  
`\symslanted` ..... [e53](#)  
`\symsmallcaps` ..... [e54](#)  
`\symtypewriter` ..... [e56](#)
- T**
- `\tabbingsep` ..... [g1576](#)  
`\tabcolsep` ..... [g1573](#)  
`table` (environment) ..... [g1549](#)  
`table*` (environment) ..... [g1549](#)  
`\tablename` ..... [g1547](#), [g1548](#), [g1858](#)  
`\tableofcontents` ..... [g1654](#)  
`\tabskip` ..... [d45](#)  
`\tabular` ..... [d3](#)  
`\tabular*` ..... [d3](#)  
`\tabularnewline` ..... [d47](#)  
`\tate` ..... [b89](#), [b91](#), [b461](#), [b464](#),  
[b499](#), [b502](#), [c308](#), [c660](#), [c683](#),  
[c705](#), [d35](#), [d94](#), [d107](#), [h37](#), [g83](#),  
[d228](#), [d229](#), [d274](#), [d277](#), [d366](#),  
[d382](#), [d422](#), [d425](#), [d451](#), [d456](#), [g984](#)  
`\tbaselineshift` ..... [b535](#),  
[b542](#), [b544](#), [b560](#), [b567](#), [b570](#),  
[b758](#), [b767](#), [b820](#), [b848](#), [b857](#),  
[b859](#), [b880](#), [b900](#), [b902](#), [d61](#),  
[d67](#), [d78](#), [d85](#), [d446](#), [d466](#), [d473](#),  
[d475](#), [d478](#), [d481](#), [d484](#), [d487](#), [d490](#)  
`\textasteriskcentered` ..... [g1457](#)  
`\textbaselineshiftfactor` . [b872](#), [b873](#)  
`\textbullet` ..... [g1449](#)  
`\textcircled` ..... [g1452](#)  
`\textendash` ..... [g1454](#)  
`\textfloatsep` ..... [g690](#)  
`\textfraction` ..... [g755](#)  
`\textgt` ..... [b997](#)  
`\textheight` ..... [c429](#), [c490](#), [c501](#),  
[c560](#), [g438](#), [g566](#), [g645](#), [g656](#), [g984](#)  
`\textmc` ..... [b997](#)  
`\textperiodcentered` ..... [g1458](#)  
`\textsf` ..... [h27](#), [h29](#)  
`\textsl` ..... [h25](#), [h26](#)  
`\TextSymbolUnavailable` ..... [b633](#)  
`\texttt` ..... [b932](#), [b955](#)  
`\textttt` ..... [h24](#)  
`\textunderscore` ..... [b751](#)  
`\textwidth` ..... [c429](#), [c474](#),  
[c484](#), [c501](#), [c545](#), [c555](#), [d286](#),  
[g320](#), [g565](#), [g646](#), [g657](#), [g675](#), [g984](#)  
`\tfont` ..... [b302](#), [b402](#)  
`\thanks` [g982](#), [g983](#), [g1003](#), [g1041](#), [g1058](#)  
`thebibliography` (environment) . [g1773](#)  
`\thechapter` ..... [g841](#),  
[g865](#), [g899](#), [g924](#), [g1114](#), [g1251](#),  
[g1253](#), [g1271](#), [g1324](#), [g1325](#),  
[g1507](#), [g1514](#), [g1534](#), [g1541](#), [g1584](#)  
`\theenumi` .....  
[g1404](#), [g1418](#), [g1424](#), [g1429](#), [g1430](#)  
`\theenumii` [g1404](#), [g1419](#), [g1425](#), [g1430](#)  
`\theenumiii` [g1404](#), [g1420](#), [g1426](#), [g1431](#)  
`\theenumiv` [g1404](#), [g1421](#), [g1427](#), [g1783](#)  
`\theequation` ..... [d548](#), [d549](#), [g1580](#)  
`\thefigure` ..... [g1501](#), [g1520](#), [g1521](#)  
`\thefootnote` .....  
... [c585](#), [c624](#), [c636](#), [g977](#), [g1018](#)  
`theindex` (environment) ..... [g1795](#)  
`\thempfn` .....  
[c584](#), [c619](#), [c631](#), [c645](#), [c653](#), [d288](#)  
`\thempfootnote` ..... [c586](#), [d288](#)  
`\thepage` [c734](#), [c748](#), [c761](#), [g803](#), [g809](#),  
[g810](#), [g811](#), [g812](#), [g816](#), [g817](#),  
[g818](#), [g819](#), [g824](#), [g825](#), [g826](#),  
[g827](#), [g853](#), [g854](#), [g876](#), [g878](#),  
[g882](#), [g884](#), [g911](#), [g913](#), [g933](#),  
[g934](#), [g935](#), [g936](#), [g1649](#), [g1650](#)  
`\theparagraph` ..... [g1114](#)  
`\thepart` .....  
[g1114](#), [g1181](#), [g1189](#), [g1200](#), [g1208](#)  
`\thesection` [g831](#), [g846](#), [g858](#), [g889](#),  
[g904](#), [g917](#), [g1114](#), [g1315](#), [g1316](#)

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plext.dtx, e=pl209.dtx,  
f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

- `\thesubparagraph` ..... g1114  
`\thesubsection` .... g834, g892, g1114  
`\thesubsubsection` ..... g1114  
`\thetable` ..... g1528, g1547, g1548  
`\thispagestyle` ..... c36,  
     c41, g762, g767, g774, g779,  
     g785, g790, g952, g966, g1038,  
     g1171, g1232, g1234, g1243, g1800  
`\thr@@` ..... g1433, g1460  
`\time` ..... g12, g14  
`\tiny` ..... g238  
`\title` ..... g942, g1010, g1049  
`\titlepage` ..... g1075  
`titlepage (environment)` ..... g946  
`\tmp@error@fontshape` .... b384, b414  
`\tmp@item` ..... b212, b214,  
     b231, b233, b291, b293, b299,  
     b386, b388, b394, b412, b601,  
     b603, b613, b615, b619, b651,  
     b655, b659, b678, b681, b714, b716  
`\to@captionboxwidth` . d251, d253, d254  
`\toclineskip` ..... g1626, g1633  
`\today` ..... g945, g1826  
`\toks@` ..... a104, a108,  
     a111, a115, b253, b257, b259, b262  
`\tombowdatefalse` ..... g75, g79  
`\tombowdatetrue` ..... c313, g68  
`\tombowfalse` ..... c312  
`\tombowtrue` ..... g68, g75, g79  
`\topfraction` ..... g753  
`\topmargin` .... c453, c524, g536, g676  
`\topsep` ..... h18, g181, g191,  
     g201, g213, g223, g233, g1356,  
     g1361, g1366, g1374, g1378,  
     g1382, g1388, g1389, g1390,  
     g1393, g1438, g1439, g1465, g1466  
`\topskip` g288, g318, g505, g534, g1481  
`\tracingfonts` .....  
     ... b431, b468, b506, b543, b569  
`\tsample` ..... h33  
`tsample (environment)` ..... h33  
`\tstrut` ..... b89  
`\tstrutbox` .....  
     b45, b61, b75, b85, b90, b461,  
     b499, d31, d32, d36, d37, d80, d87  
`\tt` ..... e56, g1610  
`\ttfamily` ..... h48, e56, g1614  
`\two@digits` ..... g71, g72  
`\twocolumn` ..... g955,  
     g969, g1031, g1237, g1663,  
     g1754, g1767, g1797, g1798, g1867  
`\type@restoreinfo` ..... b476, b514  
`\typeout` ..... a23, a30,  
     a41, a59, a62, a66, a70, a78,  
     a80, b544, b570, b922, e2, g1251
- ## U
- `\underline` ..... c1004, d541, d542  
`\unhcopy` b73, b75, b83, b85, b90, b92, b98  
`\unitlength` ..... d449, d450,  
     d452, d453, d457, d458, d460, d461  
`\unpenalty` ..... c643  
`\updefault` ..... b989  
`\upshape` .. b1005, b1011, b1012, b1017  
`\usecounter` ..... g1446, g1781  
`\usefont` ..... b707  
`\usekanji` ..... b295, b301, b707  
`\userelfont` ..... b379  
`\useroman` ..... b304, b707
- ## V
- `\vadjust` ..... c774, h46  
`\vector` ..... d474  
`\verb` ..... c769, h46  
`\verb@eol@error` . c776, c788, c799, h48  
`\verbatim@font` .... c777, c789, c800  
`\verbatim@nolig@list` ..... h47  
`verse (environment)` ..... g1486  
`\vfil` ..... c471, c542, g985, g998,  
     g1000, g1076, g1082, g1173, g1229  
`\vfill` ..... c384, c386, c406, c408  
`\viipt` ..... e67  
`\vipt` ..... e66  
`\vipt` ..... e65  
`\voidb@x` ..... g173  
`\vpt` ..... e64  
`\vrule` ..... b459, b462, b465,  
     b497, b500, b503, c329, c330,  
     c335, c336, c338, c339, c340,  
     c342, c343, c345, c346, c349,  
     c350, c352, c353, c355, c356,  
     c357, c359, c360, c362, c363,  
     c366, c367, c369, c370, d25,  
     d28, d31, d36, d39, d161, d163,  
     h34, h42, d504, d505, d506, d544  
`\vspace` ..... g1090

File Key: a=plvers.dtx, b=plfonts.dtx, c=plcore.dtx, d=plex.dtx, e=pl209.dtx,  
 f=kinsoku.dtx, g=jclasses.dtx, h=jltxdoc.dtx

## W

\widowpenalties ..... c1024, c1044  
 \widowpenalty ..... g1787

## X

\X@layoutcaption ..... d179  
 \X@layoutfloat ..... d142  
 \X@makePbox ..... d411, d412  
 \X@makepbox ..... d412  
 \X@minipage ..... d259, d260  
 \X@parbox ..... d309, d310  
 \X@picture ..... d438, d439  
 \X@tabarray ..... d5, d10  
 \X@tabular ..... d7, d10  
 \xiipt ..... e71  
 \xipt ..... e70  
 \xivpt ..... e72  
 \xkanjiskip .....  
     b1059, c590, c598, c933, c941,  
     c947, c954, c959, c983, c1005, c1014  
 \xpt ..... e69  
 \xspcode ..... b869,  
     b877, h50, f93, f94, f95, f96, f97,  
     f98, f99, f100, f101, f102, f103,  
     f104, f105, f106, f107, f108, f109,  
     f110, f111, f112, f113, f114, f115,  
     f116, f117, f118, f119, f120, f121,  
     f122, f123, f124, f125, f126, f127,  
     f128, f129, f130, f131, f132, f133,  
     f134, f135, f136, f137, f138, f139,  
     f140, f141, f142, f143, f144, f145,  
     f146, f147, f148, f149, f150, f151,  
     f152, f153, f154, f155, f156, f157,  
     f158, f159, f160, f161, f162, f163,  
     f164, f165, f166, f167, f168, f169,  
     f170, f171, f172, f173, f174, f175,  
     f176, f177, f178, f179, f180, f181,  
     f182, f183, f184, f185, f186, f187,  
     f188, f189, f190, f191, f192, f193,

f194, f195, f196, f197, f198, f199,  
 f200, f201, f202, f203, f204, f205,  
 f206, f207, f208, f209, f210, f211,  
 f212, f213, f214, f215, f216, f217,  
 f218, f219, f220, f221, f222, f223,  
 f224, f225, f226, f227, f228, f229

\xvipt ..... e73  
 \xxpt ..... e74  
 \xxvpt ..... e75

## Y

\ybaselineshift .....  
     b757, b759, b820, b848, b857,  
     b862, b880, b900, b905, d62,  
     d68, d79, d86, d445, d466, d472,  
     d475, d478, d481, d484, d487, d490  
 \year ..... g71, g1825, g1829, g1839  
 \yoko ..... b97, b458,  
     b496, c308, c328, c334, c337,  
     c341, c344, c348, c351, c354,  
     c358, c361, c365, c368, c437,  
     c508, c572, c585, c587, c594,  
     c601, c660, c683, c705, d24, d58,  
     d118, e18, d226, d230, d272,  
     d278, d338, d396, d420, d426,  
     d448, d459, d502, d509, d510,  
     d511, d531, d535, d548, g977, g1020  
 \ystrut ..... b93  
 \ystrutbox ..... b47, b61, b69,  
     b73, b80, b98, b444, b458, b483

## Z

\zstrut ..... b89  
 \zstrutbox b45, b92, b464, b502, d28, d29

## セ

\西暦 ..... g1822

## ワ

\和暦 ..... g1822